

仙台市震災復興関係遺跡発掘調査報告Ⅱ

平成24～26年度震災復興民間文化財 発掘調査助成事業に伴う発掘調査報告書

押口遺跡第4次、今泉遺跡第10・11次、郡山遺跡第235次・237次・
245～248次・250次、元袋遺跡第9次、大野田官衙遺跡第19次、
山口遺跡第19次、洞ノ口遺跡第22次、中在家南遺跡第7次、
鴻ノ巣遺跡第19次、小鶴城跡第10次、南小泉遺跡第76次

2016年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市は「杜の都・仙台」という愛称で広く親しまれ、四季折々の豊かな自然にあふれています。この仙台の風景は、私たち市民の誇りであり、将来へ守り伝えていくべきものです。

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災により、東北地方の沿岸部は多くの被害が発生しました。震災の後は復興に伴う個人住宅や共同住宅等を再建する事業の増加により、発掘調査の件数は例年をはるかに上回るものとなりました。遺跡の保存もさることながら、速やかな復旧・復興のための発掘調査も急務であります。

本報告書は、震災後に創設された東日本大震災復興交付金により仙台市教育委員会が行った「震災復興民間文化財発掘調査助成事業」における発掘調査の成果をまとめた 2 冊目の報告書です。

平成 24 ~ 26 年度に本発掘調査を実施した、押口遺跡、今泉遺跡、郡山遺跡、元袋遺跡、大野田官衙遺跡、山口遺跡、洞ノ口遺跡、中在家南遺跡、鴻ノ巣遺跡、小鶴城跡、南小泉遺跡の調査成果を収録しています。

文化財は、地域の歴史を伝えるために将来へ守るべき大切な財産です。先人たちの遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たちの責務であります。地域が育んだ文化を語る上で、歴史や文化資源がその根底をなしているからです。つきましては、本報告書が、学術研究のみならず学校教育や生涯学習などのあらゆる場面で活用され、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書刊行に際しまして、ご協力、ご助言をいただきました多くの方々に、心より感謝申し上げます。

平成 28 年 3 月

仙台市教育委員会
教育長 大越裕光

例 言

- 本書は、「東日本大震災復興特別区域法」に基づき仙台市が作成した「復興交付金事業計画」に対し復興庁が交付した「東日本大震災復興交付金」により、平成 24 ~ 26 年度に本市教育委員会が行った「震災復興民間文化財発掘調査助成事業」による個人住宅及び中小企業等の補助対象事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 本書は、押口遺跡第 4 次、今泉遺跡第 10・11 次、郡山遺跡第 235・237 次、元袋遺跡第 9 次、大野田官衙遺跡第 19 次、山口遺跡第 19 次（以上平成 24 年度）、洞ノ口遺跡第 22 次、中在家南遺跡第 7 次、郡山遺跡第 245 ~ 248・250 次（以上平成 25 年度）、鴻ノ果遺跡第 19 次、小鶴城跡第 10 次、南小泉遺跡第 76 次（以上平成 26 年度）の、各発掘調査報告を合本にしたものである。本書の内容は、すでに公開されている遺跡見学会資料や、各種の発表会資料に優先する。
- 本書の本文執筆・挿図・表・写真図版の作成等については以下のように分担し、編集は鈴木隆が行った。

第 1 章 - 平間亮輔	第 2 章 第 1 ~ 5 節 - 佐藤洋	第 2 章 第 6 節 - 鈴木隆	第 3 章 第 1 ~ 3 節 I・II - 佐藤洋
第 3 章 第 3 節 III - 鈴木隆	第 3 章 第 3 節 IV - 佐藤洋	第 3 章 第 3 節 V・VI - 鈴木隆	第 4・5 章 - 鈴木隆
遺物の基礎整理～実測図作成 - 佐藤洋、向田整理室作業員		遺物観察表作成 - 佐藤洋	
遺物図・遺構図デジタルトース - 向田整理室作業員		遺構記表作成 - 各担当職員	
遺物写真撮影・図版作成 - 小林航、鈴木隆		遺構写真図版作成 - 鈴木隆	
- 本書に係る出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

- 文中および図中の方位は概ね北を示している。
- 図中の標高を測定した基準点のデータは平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災以前に測定したものとそのまま使用している。
- 遺構の略称は以下の通りで、遺構番号は各調査別の通し№である。

SB : 捩立柱建物跡	SD : 溝跡	SE : 井戸跡	SI : 竪穴住居跡	SK : 土坑	SX : 性格不明遺構
P : ピット					
- 遺物の略称は以下のとおりである。

A : 繩文土器	B : 弥生土器	C : 土師器（非クロクロ調整）	D : 土師器（クロクロ調整）・赤焼土器			
E : 須恵器	F : 丸瓦	G : 平瓦	H : その他の瓦	I : 陶器	J : 磁器	K : 石器・石製品
L : 木製品	N : 金属製品	P : 土製品				
- 土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原 1999）を使用した。
- 土師器実測図中の網点は黒色処理を示している。
- 遺物観察表の（ ）がついた数値は図上復元した推定値である。
- 本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田 1980）はこれまでの仙台市域の調査報告や東北地方中北部の研究から、「十和田 a 火山灰（To-a）」と考えられている。降下年代は西暦 915 年と推定されている。
庄子貞雄・山田一郎 1980 「宮城県に分布する灰白色火山灰」について『多賀城跡・昭和 54 年度発掘調査概報』
宮城県多賀城跡調査研究所
仙台市教育委員会 2000 「沼尚遺跡 第 1 ~ 3 次発掘調査」仙台市文化財調査報告書第 241 集
- 小口雅史 2003 「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題—十和田 a と白頭山（長白山）を中心に」『日本律令制の展開』吉川弘文館

目 次

第1章 調査計画と実績	1
I 調査体制	1
II 調査計画	1
III 調査実績	1
第2章 平成24年度の調査	4
第1節 押口遺跡	4
I 遺跡の概要	4
II 第4次調査	4
第2節 今泉遺跡	14
I 遺跡の概要	14
II 第10次調査	14
III 第11次調査	18
第3節 郡山遺跡	25
I 遺跡の概要	25
II 第235次調査	25
III 第237次調査	30
第4節 元袋遺跡	36
I 遺跡の概要	36
II 第9次調査	36
第5節 大野田官衙遺跡	47
I 遺跡の概要	47
II 第19次調査	47
第6節 山口遺跡	52
I 遺跡の概要	52
II 第19次調査	52
第3章 平成25年度の調査	60
第1節 洞ノ口遺跡	60
I 遺跡の概要	60
II 第22次調査	60
第2節 中在家南遺跡	72
I 遺跡の概要	72
II 第7次調査	72
第3節 郡山遺跡	88
I 第245次調査	88
II 第246次調査	114
III 第247次調査	126
IV 第248次調査	135
V 第250次調査	138
第4章 平成26年度の調査	141

第1節 鴻ノ果遺跡	141
I 遺跡の概要	141
II 第19次調査	141
第2節 小鶴城跡	147
I 遺跡の概要	147
II 第10次調査	147
第3節 南小泉遺跡	153
I 遺跡の概要	153
II 第76次調査	153
第5章 総括	164

挿図目次

第1図 押口遺跡の位置と周辺の遺跡	4
第2図 第4次調査区位置図	5
第3図 第4次調査区設定図	5
第4図 第4次調査区平面図・断面図	6
第5図 第4次調査出土遺物(1)	8
第6図 第4次調査出土遺物(2)	9
第7図 今泉遺跡の位置と周辺の遺跡	14
第8図 第10・11次調査区位置図	15
第9図 第10次調査区設定図	15
第10図 第10次調査区平面図・断面図	16
第11図 第11次調査区設定図	18
第12図 第11次調査区平面図・断面図	19
第13図 第11次調査出土遺物(1)	21
第14図 第11次調査出土遺物(2)	22
第15図 郡山遺跡の位置と周辺の遺跡	25
第16図 郡山遺跡 第235・237・245～248・250次 調査区位置図	26
第17図 第235次調査区設定図	27
第18図 第235次調査区平面図・断面図	28
第19図 第237次調査区設定図	30
第20図 第237次調査区平面図・断面図	32
第21図 第237次調査出土遺物	33
第22図 元袋遺跡の位置と周辺の遺跡	36
第23図 第9次調査区位置図	37
第24図 第9次調査区設定図	37
第25図 第9次調査区平面図・断面図(1)	38
第26図 第9次調査区平面図・断面図(2)	39
第27図 第9次調査区平面図・断面図(3)	40
第28図 第9次調査出土遺物	41
第29図 大野田官衙遺跡の位置と周辺の遺跡	47
第30図 第19次調査区位置図	48
第31図 第19次調査区設定図	48
第32図 第19次調査区平面図・断面図	49
第33図 第19次調査出土遺物	50
第34図 山口遺跡の位置と周辺の遺跡	52
第35図 第19次調査区位置図	53
第36図 第19次調査区設定図	53
第37図 第19次調査区平面図・断面図	54
第38図 第19次調査区平面図(1)	56
第39図 第19次調査区平面図(2)	57
第40図 洞ノ口遺跡の位置と周辺の遺跡	60
第41図 第22次調査区位置図	61
第42図 第22次調査区設定図	61
第43図 第22次調査区平面図・断面図(1)	62
第44図 第22次調査区平面図・断面図(2)	63
第45図 第22次調査出土遺物	65
第46図 中在家南遺跡の位置と周辺の遺跡	72
第47図 第7次調査区位置図	73
第48図 第7次調査区設定図	73
第49図 第7次調査区平面図・断面図(1)	75
第50図 第7次調査区平面図・断面図(2)	76
第51図 第7次調査出土遺物(1)	77

第 52 図	第 7 次調査出土遺物 (2)	78
第 53 図	第 7 次調査出土遺物 (3)	79
第 54 図	第 7 次調査出土遺物 (4)	80
第 55 図	第 245 次調査区設定図	88
第 56 図	第 245 次調査区平面図(1)・断面図(1)	89
第 57 図	第 245 次調査区断面図 (2)	90
第 58 図	第 245 次調査区平面図 (2)	91
第 59 図	第 245 次調査 SX2338 遺物出土状況	92
第 60 図	第 245 次調査出土遺物 (1)	94
第 61 図	第 245 次調査出土遺物 (2)	95
第 62 図	第 245 次調査出土遺物 (3)	96
第 63 図	第 245 次調査出土遺物 (4)	97
第 64 図	第 245 次調査出土遺物 (5)	98
第 65 図	第 245 次調査出土遺物 (6)	99
第 66 図	第 245 次調査出土遺物 (7)	100
第 67 図	第 245 次調査出土遺物 (8)	101
第 68 図	第 246 次調査区設定図	114
第 69 図	第 246 次調査区平面図	116
第 70 図	第 246 次調査区断面図 (1)	117
第 71 図	第 246 次調査区断面図 (2)	118
第 72 図	第 246 次調査出土遺物 (1)	119
第 73 図	第 246 次調査出土遺物 (2)	120
第 74 図	第 247 次調査区設定図	126
第 75 図	第 247 次調査区平面図・断面図	127
第 76 図	第 247 次調査出土遺物 (1)	128
第 77 図	第 247 次調査出土遺物 (2)	129
第 78 図	第 248 次調査区設定図	135
第 79 図	第 248 次調査区平面図・断面図	136
第 80 図	第 250 次調査区設定図	138
第 81 図	第 250 次調査区平面図・断面図	139
第 82 図	第 250 次調査区出土遺物	139
第 83 図	鴻ノ巣遺跡の位置と周辺の遺跡	141
第 84 図	第 19 次調査区位置図	142
第 85 図	第 19 次調査区設定図	142
第 86 図	第 19 次調査区平面図・断面図	143
第 87 図	第 19 次調査区出土遺物	144
第 88 図	小鶴城跡の位置と周辺の遺跡	147
第 89 図	第 10 次調査区位置図	148
第 90 図	第 10 次調査区設定図	148
第 91 図	第 10 次調査区平面図・断面図	150
第 92 図	第 10 次調査区出土遺物	151
第 93 図	南小泉遺跡の位置と周辺の遺跡	153
第 94 図	第 76 次調査区位置図	154
第 95 図	第 76 次調査区設定図	154
第 96 図	第 76 次調査区平面図・断面図	155
第 97 図	第 76 次調査区出土遺物 (1)	157
第 98 図	第 76 次調査区出土遺物 (2)	158

挿表目次

第 1 表	平成 24 ~ 26 年度 調査一覧表	2・3
-------	---------------------------	-----

写真図版目次

写真図版 1	第 4 次調査 (1)	10
写真図版 2	第 4 次調査 (2)	11
写真図版 3	第 4 次調査出土遺物 (1)	12
写真図版 4	第 4 次調査出土遺物 (2)	13
写真図版 5	第 10 次調査	17
写真図版 6	第 11 次調査	22
写真図版 7	第 11 次調査出土遺物 (1)	23
写真図版 8	第 11 次調査出土遺物 (2)	24
写真図版 9	第 235 次調査	29
写真図版 10	第 237 次調査	34
写真図版 11	第 237 次調査出土遺物	35
写真図版 12	第 9 次調査 (1)	43
写真図版 13	第 9 次調査 (2)	44
写真図版 14	第 9 次調査 (3)	45
写真図版 15	第 9 次調査出土遺物	46
写真図版 16	第 19 次調査	50

写真図版 17	第 19 次調査出土遺物	51	写真図版 42	第 245 次調査出土遺物 (7)	112
写真図版 18	第 19 次調査 (1)	58	写真図版 43	第 245 次調査出土遺物 (8)	113
写真図版 19	第 19 次調査 (2)	59	写真図版 44	第 246 次調査 (1)	121
写真図版 20	第 19 次調査出土遺物	59	写真図版 45	第 246 次調査 (2)	122
写真図版 21	第 22 次調査 (1)	68	写真図版 46	第 246 次調査 (3)	123
写真図版 22	第 22 次調査 (2)	69	写真図版 47	第 246 次調査出土遺物 (1)	124
写真図版 23	第 22 次調査 (3)	70	写真図版 48	第 246 次調査出土遺物 (2)	125
写真図版 24	第 22 次調査出土遺物	71	写真図版 49	第 247 次調査 (1)	131
写真図版 25	第 7 次調査 (1)	81	写真図版 50	第 247 次調査 (2)	132
写真図版 26	第 7 次調査 (2)	82	写真図版 51	第 247 次調査出土遺物 (1)	133
写真図版 27	第 7 次調査 (3)	83	写真図版 52	第 247 次調査出土遺物 (2)	134
写真図版 28	第 7 次調査出土遺物 (1)	84	写真図版 53	第 248 次調査	137
写真図版 29	第 7 次調査出土遺物 (2)	85	写真図版 54	第 250 次調査	140
写真図版 30	第 7 次調査出土遺物 (3)	86	写真図版 55	第 250 次調査出土遺物	140
写真図版 31	第 7 次調査出土遺物 (4)	87	写真図版 56	第 19 次調査	145
写真図版 32	第 245 次調査 (1)	102	写真図版 57	第 19 次調査出土遺物	146
写真図版 33	第 245 次調査 (2)	103	写真図版 58	第 10 次調査 (1)	151
写真図版 34	第 245 次調査 (3)	104	写真図版 59	第 10 次調査 (2)	152
写真図版 35	第 245 次調査 (4)	105	写真図版 60	第 10 次調査出土遺物	152
写真図版 36	第 245 次調査出土遺物 (1)	106	写真図版 61	第 76 次調査 (1)	159
写真図版 37	第 245 次調査出土遺物 (2)	107	写真図版 62	第 76 次調査 (2)	160
写真図版 38	第 245 次調査出土遺物 (3)	108	写真図版 63	第 76 次調査 (3)	161
写真図版 39	第 245 次調査出土遺物 (4)	109	写真図版 64	第 76 次調査出土遺物 (1)	162
写真図版 40	第 245 次調査出土遺物 (5)	110	写真図版 65	第 76 次調査出土遺物 (2)	163
写真図版 41	第 245 次調査出土遺物 (6)	111			

第1章 調査計画と実績

I. 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会 調査担当 文化財課

平成 24 年度

課長 吉岡恭平 主幹 佐藤甲二

【調査調整係】 係長 斎野裕彦 主査 佐藤 洋 平間亮輔 主任 村上とよ子
 主事 小泉博明 鈴木 隆 水野一夫 及川謙作 関根章義
 文化財教諭 伊藤翔太 千葉 悟 佐藤高陽 橋本勇人 専門員 結城慎一
 【整備活用係】 係長 長島栄一 主任 斎藤克巳 主事 大久保弥生
 文化財教諭 石山智之 鈴木健弘

平成 25 年度

課長 吉岡恭平

【調査調整係】 係長 斎野裕彦 主査 平間亮輔 主任 村上とよ子
 主事 小泉博明 鈴木 隆 黒田智章
 文化財教諭 佐藤高陽 早坂純一 千葉 悟 千葉靖彦
 専門員 篠原信彦 佐藤 洋

【整備活用係】 主幹兼係長 長島栄一 主任 斎藤克巳 主事 及川謙作
 文化財教諭 石山智之 伊藤翔太 橋本勇人 専門員 木村浩二

平成 26 年度

課長 吉岡恭平

【調査調整係】 係長 斎野裕彦 主査 平間亮輔 主任 村上とよ子 鈴木 隆
 主事 小泉博明 黒田智章 小林 航
 文化財教諭 早坂純一 千葉 悟 千葉靖彦 小山紘明 専門員 佐藤 洋
 【整備活用係】 主幹兼係長 長島栄一 主任 斎藤克巳 主事 及川謙作
 文化財教諭 石山智之 伊藤翔太 橋本勇人 専門員 木村浩二

II. 調査計画

震災復興民間文化財発掘調査助成事業（個人住宅・中小企業等補助事業）を、仙台市域を対象として平成 24～26 年度に行った。各年度の事業費は以下のとおりである。

平成 24 年度は総事業費 26,885 千円（交付金額 19,747 千円）、平成 25 年度は総事業費 44,285 千円（交付金額 43,298 千円）、平成 26 年度は総事業費 33,143 千円（交付金額 32,649 千円）の各予算で計画した。

III. 調査実績

本報告書で扱う調査は、平成 24 年 10 月 31 日から平成 26 年 11 月 7 日までの間に実施された調査である。それらの震災復興事業に係る個人住宅建設・中小企業等の事業に伴う全調査を表 1 に示した。実施された調査は、平成 24 年度が 38 件（個人住宅 31、中小企業等 7）、平成 25 年度が 14 件（個人住宅 13、中小企業等 1）、平成 26 年度が 8 件（個人住宅 8）である。なお、平成 24 年度の前半に実施した調査については、「仙台市震災復興関係遺跡発掘調査報告 1」（仙台市文化財調査報告書第 416 集）で報告している。

平成24年度 個人住宅の震災復興事業に伴う発掘調査一覧(平成24年10月30日～平成25年3月29日) 調査面積262.7m²

No.	調査No.	遺跡名	所在地	対象面積	調査面積	調査期間	遺構・遺物	届出等No.	報告書
1	H24-64	今泉遺跡	若林区今泉 2 丁目	69.0	241	10月 30 ~ 31 日	溝跡	H24 122-229	10次
2	H24-61	押口遺跡	若林区荒井	69.6	350	10月 31 日 ~ 11月 16 日	木製品、弥生土器、土師器	H24 122-228	4次
3	H24-65	南小泉遺跡	若林区遠見塚 2 丁目	79.5	245	11月 5 日	溝跡、ピット、土師器	H24 122-226	—
4	H24-74	小鶴城跡	宮城野区新田 3 丁目	124.3	301	11月 26 日	ピット	H24 122-264	—
5	H24-73	郡山遺跡	太白区郡山 2 丁目	79.5	185	12月 3 日	土坑	H24 122-278	235次
6	H24-72	南小泉遺跡	若林区遠見塚 1 丁目	91.9	304	12月 3 日	ピット、溝跡、土師器	H24 122-259	—
7	H24-79	大野田官衙遺跡	太白区大野田字袋前	85.3	84	12月 10 ~ 13 日	溝跡	H24 122-289	19次
8	H24-83	南小泉遺跡	若林区南小泉 2 丁目	61.5	147	1月 16 日	溝跡、土坑、ピット	H24 122-312	—
9	H24-85	神機遺跡	若林区沖野 2 丁目	88.6	170	1月 23 日	溝跡	H24 122-334	—
10	H24-91	郡山遺跡	太白区郡山 6 丁目	68.5	200	2月 4 ~ 7 日	溝跡、土坑、柱跡	H24 122-360	237次
11	H24-87	元袋遺跡	太白区大野田字元袋	84.0	400	3月 7 ~ 25 日	堅穴住居、土坑、小溝	H24 122-372	9次

平成24年度 中小企業等の震災復興事業に伴う発掘調査一覧(平成24年1月15日～平成25年3月29日) 調査面積229.7m²

No.	調査No.	遺跡名	所在地	対象面積	調査面積	調査期間	遺構・遺物	届出等No.	報告書
1	H24-48	山口遺跡	太白区泉崎 1 丁目	289.0	510	1月 15 日 ~ 2 月 18 日	水田跡	H24 129-46	19次
2	H24-93	富沢遺跡	太白区泉崎 2 丁目	538.3	1123	3月 4 ~ 12 日	河原跡	H24 122-316	—
3	H24-102	今泉遺跡	若林区今泉 3 丁目	170.0	664	3月 25 ~ 27 日	溝跡、陶器、磁器、漆器	H24 129-66	12次

平成25年度 個人住宅の震災復興事業に伴う発掘調査一覧(平成25年4月8日～平成26年3月31日) 調査面積443.2m²

No.	調査No.	遺跡名	所在地	対象面積	調査面積	調査期間	遺構・遺物	届出等No.	報告書
1	H25-1	陸奥国分尼寺跡	若林区白蘋町	187.8	855	4月 8 ~ 17 日	ピット、瓦、土師器	H24 122-364	—
2	H25-6	富沢館跡	太白区富沢字館	130.3	93	4月 15 日	遺構・遺物なし	H24 122-461	—
3	H25-4	大野田古墳群	太白区大野田字千刈田	76.1	166	4月 17 日	小溝	H24 122-339	—
4	H25-7	六反田遺跡	太白区大野田字六反田	82.0	150	5月 8 日	小溝	H25 123-22	—
5	H25-12	剣ノ口遺跡	宮城野区岩切字剣ノ口	97.7	482	3月 21 日 ~ 6月 4 日	溝跡、土坑、遺物多	H25 123-74	22次
6	H25-57	郡山遺跡	太白区郡山	79.5	400	11月 13 ~ 28 日	SI	H25 123-161	245次
7	H25-61	郡山遺跡	太白区郡山	63.3	625	11月 28 日 ~ 12月 13 日	北辺材木列	H25 123-320	246次
8	H25-63	郡山遺跡	太白区郡山	58.0	469	12月 11 ~ 18 日	溝跡	H25 123-323	247次
9	H25-66	郡山遺跡	太白区郡山	83.7	220	12月 17 ~ 18 日	遺構無、遺物僅少	H25 123-332	248次
10	H25-78	郡山遺跡	太白区郡山 5 丁目	72.9	150	2月 18 ~ 19 日	遺構無、土師器、須恵器	H25 123-358	250次
11	H25-79	南小泉遺跡	若林区遠見塚 2 丁目	108.5	160	2月 24 日	土坑、ピット、土師器	H25 123-394	—
12	H25-84	中在山南遺跡	若林区薦田字南	109.3	402	3月 12 ~ 26 日	溝跡、ピット、弥生土器	H25 123-393	7次
13	H25-89	南小泉遺跡	若林区南小泉 2 丁目	319.0	260	3月 19 ~ 25 日	溝跡、ピット、土師器	H25 123-460	—

平成25年度 中小企業等の震災復興事業に伴う発掘調査一覧(平成25年4月1日～平成26年3月31日) 調査面積20.0m²

No.	調査No.	遺跡名	所在地	対象面積	調査面積	調査期間	遺構・遺物	届出等No.	報告書
1	H25-10	鴻ノ巣遺跡	宮城野区岩切字鴻巣	72.6	200	5月 13 日	遺構無、土師器	H25 129-77	—

平成26年度 個人住宅の震災復興事業に伴う発掘調査一覧(平成26年4月1日～平成27年3月31日) 調査面積20.0m²

No	調査No	遺跡名	所在地	対象面積	調査面積	調査期間	遺構・遺物	届出等No	調査次数
1	H26-3	南小泉遺跡	若林区遠見塚2丁目	68.1	21.7	4月10～18日	堅穴住居、溝跡、土師器	H25 123-446	76次
2	H26-8	六反田遺跡	太白区大野田字六反田	91.5	28.0	5月8～16日	堅穴住居、土師器	H26 106-24	—
3	H26-17	大野田古墳群	太白区大野田字竹松	92.5	17.7	6月18日	ピット	H26 106-104	—
4	H26-19	鴻ノ巣遺跡	宮城野区岩切字三所北	81.6	16.0	7月7～9日	溝跡、土師器、須恵器	H26 106-66	19次
5	H26-20	荒井広瀬遺跡	若林区荒井字広瀬	64.6	14.9	7月14～15日	地割れ跡	H26 106-105	—
6	H26-30	長喜城跡	若林区長喜城字星敷	138.7	20.0	8月25日	遺構・遺物なし	H26 106-161	—
7	H26-47	小鶴城跡	宮城野区新田3丁目	148.7	27.2	11月6～7日	溝跡、ピット、土師器	H26 106-284	10次
8	H26-48	陸奥国分尼寺跡	若林区白糸町	264.2	16.0	11月19日	遺構・遺物なし	H26 106-255	—

第1表 平成24～26年度 調査一覧表

第2章 平成24年度の調査

第1節 押口遺跡

I. 遺跡の概要

本遺跡は仙台市の東部、JR仙台駅の南東5.5kmの沖積地の自然堤防上に立地する弥生時代から近世の複合遺跡である。これまでの調査で、溝跡・土坑・河川跡（水田跡）などが検出されている。河川跡は1段低く、近世には水田として利用されていたが、より下層から弥生～中世の木製品が出土している。特に、弥生～古墳時代の農耕具は、隣接する中在家遺跡の農耕具と合わせて、東北地方の古代の木製農耕具の地域性や変遷を考える際の貴重な資料となっている。

II. 第4次調査

1. 調査要項

遺跡名 押口遺跡（宮城県遺跡登録番号 01312）

調査地点 仙台市若林区荒井字大場伝16-14B、1-1L、1-2L

調査期間 平成24年10月31日～11月16日

調査対象面積 建築面積 69.6m²

調査面積 35.0m²

調査原因 個人住宅建築工事

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課

調査調整係

担当職員	主事 水野 一夫	文化財教諭 佐藤 高陽 文化財教諭 千葉 悟 文化財教諭 伊藤 翔太
	文化財教諭 佐藤 高陽 文化財教諭 千葉 悟 文化財教諭 伊藤 翔太	



第1図 押口遺跡の位置と周辺の遺跡

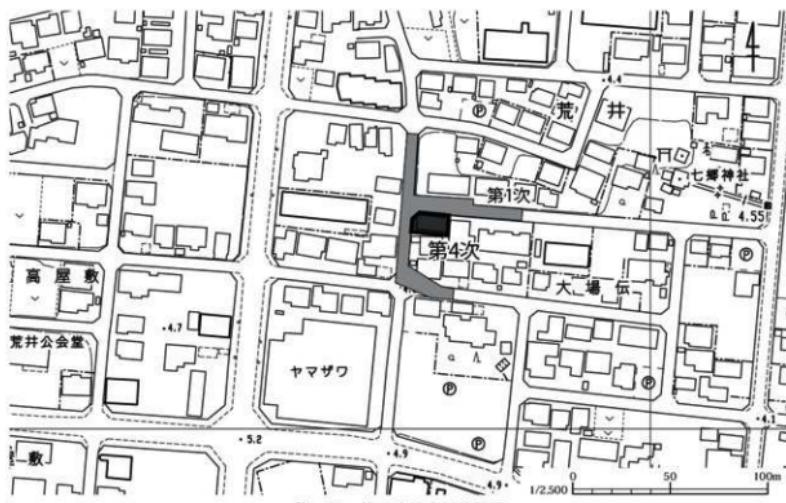
2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は申請者より平成24年9月18日付で提出された、「埋蔵文化財発掘の届出について」（平成24年9月24日付H24教生文第122-228号で回答）に基づき、宅地建築に伴う申請地の取り扱いについて協議し、事前の確認調査を実施した。

平成24年10月26日午前、実施に先立ち申請者側代理人と打ち合わせを行い、調査計画について計画図を用いて説明した。今回の調査は「仙台市文化財調査報告書第213次 中在家南遺跡他」の第1分冊81頁からの報告で押口遺跡の調査が報告されている（以下過年度と表記した場合この報告をさす）が、そのⅡ区の南側隣接地であり、予測される成果を説明し、その内容について代理人から建主に説明いただき、調査計画について了承を得た。

確認調査は平成24年10月31日に着手した。申請者側で設定した住宅建築範囲内が、提出された図面と相違ないことを確認し、北東角を基準として1mあけ南北5m、東西7mの調査区を設定し、重機による段掘りを行った。

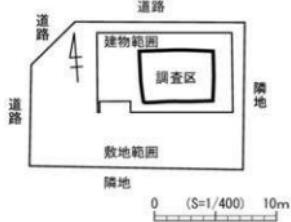
1段目は南北5m、東西7m、深さ約5cmで山砂を除去した。2段目は南北約4m、東西約6m、深さ1.2mの



第2図 第4次調査区位置図

規模の調査区とし、2a層上面（旧水田面）で新しいピット1基と細く浅い溝跡1条を検出した。2a層以下は河川堆積土で、南北2m、東西3.5m、深さ1mで、手掘りとした。調査は河川跡堆積土12層まで行った。

調査では必要に応じて、平面図・断面図を作成し、デジタルカメラ等を使用し記録写真を撮影した。調査終了時に碎石を入れ、ローラーにより締め固めを行い、地耐力の回復に配慮し埋め戻しを行った。



第3図 第4次調査区設定図

基本層序は、1990年度の第1次調査のⅡ区南側に隣接する調査区であることから、第1次調査のⅡ区の層序と対比し、分層した。基本的には、そのⅡ区と同じ層序だが、土色、混入物、層細分の数などに異なる部分もある。

4. 発見遺構と出土遺物

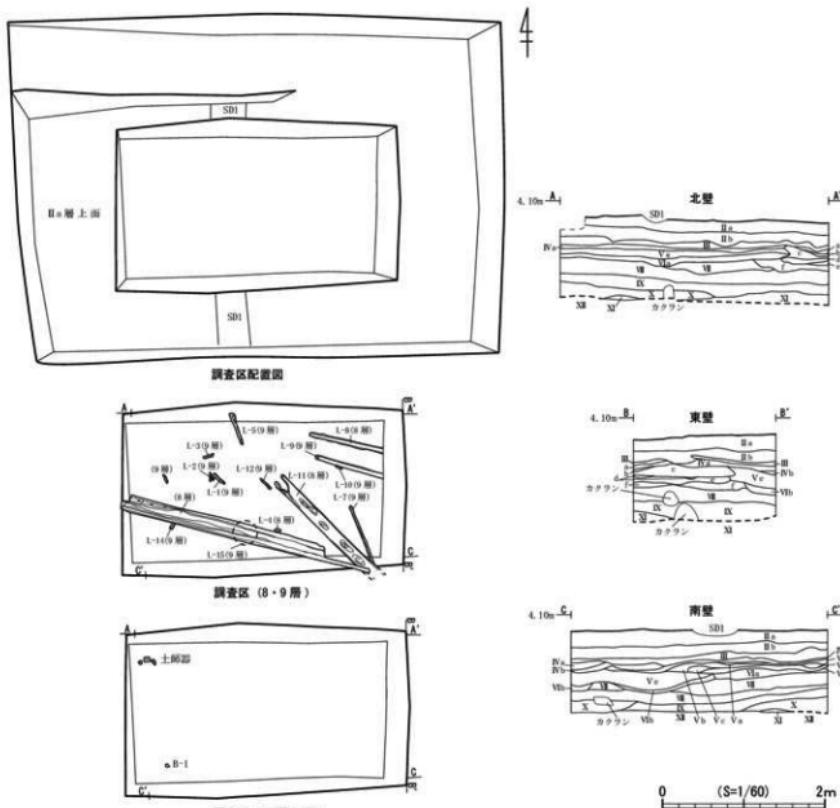
調査区は河川跡内部にあり、河川堆積土を検出した。なお、2a層上面で検出した溝跡1条とピット1基は、極めて新しいもので、ここでは扱わない。

(1) 河川跡

SR1 河川跡

河川跡は、これまでの調査で規模が分かっている部分では、上幅約20m、深さ約2.7mで船底状を呈している。堆積土は大別15層に分けられ、今次調査では古墳時代の12層まで確認できた。注記表参照。

遺物は6b層、8層、9層、12層で出土し、木製品が多数を占める（第5・6図）。



剖位	色調	土質	備考
1	10YR4/2 灰青褐色	シルト	旧田舎作土
2a	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	一部グリアイ化、鉄分凝着
2b	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	
3	10YR2/1 黒色	シルト	植物遺体を少量含む
4a	10YR6/6 明黄褐色	火山灰	灰白色火山灰
4b	10YR2/2 黑褐色	シルト	未分解の植物遺体を含む
4c	10YR6/6 明黄褐色	火山灰	灰白色火山灰
5a	10YR3/1 黒褐色	シルト	
5b	10YR2/2 黑褐色	シルト	未分解の植物遺体を含む
5c	10YR2/1 黑色	泥炭質粘土	未分解の植物遺体を多量含む
5d	10YR2/2 黑褐色	泥炭質粘土	未分解の植物遺体を多量含む
5e	10YR2/3 黑褐色	泥炭質粘土	未分解の植物遺体を多量含む
6a	10YR2/2 黑褐色	シルト	未分解の植物遺体、ヒシの実多量含む
6b	7.5YR4/3 黑褐色	泥炭質粘土	未分解の植物遺体を多量含む ヒシ実含む

剖位	色調	土質	備考
7	5YR6/1 黄褐色	シルト	
8	10YR2/1 黑褐色	泥炭質粘土	にぶい黄褐色シルト粒を含む
9	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色シルトを多量含む
10	10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	黒色粘土粒を斑状に含む
11	5YR2/2 オリーブ褐色	泥炭質粘土	オリーブ褐色シルト粒を含む
12	10YR2/2 黑褐色	泥炭質粘土	(本層上面まで確認)
a	5YR6/1 黄褐色	泥炭質粘土	
b	10YR1/1 黑褐色	泥炭質粘土	未分解の植物遺体を多量含む
c	7.5YR2/1 黑色	泥炭質粘土	未分解の植物遺体を多量含む 灰白色ブロックを含む
d	10YR7/2 にぶい黄褐色	火山灰	二次的堆積か?
e	10YR2/2 黑褐色	泥炭質粘土	未分解の植物遺体を多量含む 保木
f	10YR1/1 黑褐色	泥炭質粘土	未分解の植物遺体を多量含む

第4図 第4次調査区平面図・断面図 (S=1/60)

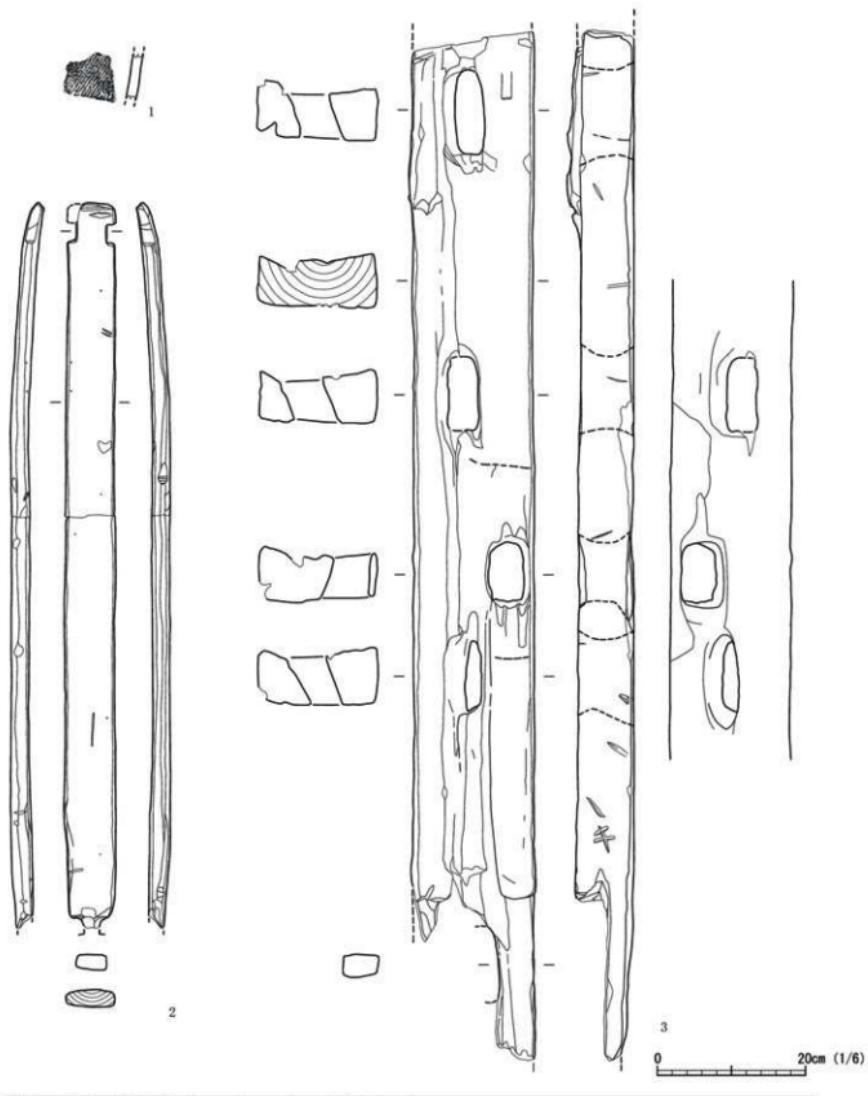
6b層でワラ状の葉の束が南壁際の窪みで、東西約40cm、南北約20cmの範囲で検出され、さらに調査区外に続いている。また、本層および6a層中で多数のヒシの実が出土している。これらは、河川跡出土である点で、人の手が加わったものか判断し難い。8層では杭あるいは農耕具の一部と見られる丸材2点（第6図10・11）、四ヶ所に穴のある有孔建築部材（分割材）1点が出土している（第5図3）。9層では、斧柄1点（第6図1）、両端に抉りの加工を施した部材（板状）1点が出土した（第5図2）。これは単独のものか他の部材と組むものか、用途などは不明である。端部に抉りや穿孔のある類例は、当遺跡や隣接する中在家遺跡第1次調査河川跡出土例がある（II区10層第173図2、VI区14層第354図1）。いずれも欠損品で両端が確認できないが、器具部材か代焼き用の均し具の可能性も考えられる（秋山浩三：2008）。今後、検討をする事例である。他に、丸杭や杭あるいは農耕具の一部と考えられる丸材合わせて8点出土している（第6図2～9）。12層では調査区北西部で土師器片3点、南西部で弥生土器壺片1点（第5図1）が出土している。土師器は図示できなかったが、細かなハケメ調整のある壺片で、古墳時代前期頃のものと考えられる。

5.まとめ

今回の調査は、調査面積が狭く河川跡内部の調査となった。堆積土はこれまでの調査で大別15層あることが分かっており、各層の形成時期も判明している。今回はこのうち12層まで確認した。これまでの調査と同様に、火山灰層、ヒシの実を多く含む層が確認できた。平安時代と考えられている8層、古墳時代中期頃と考えられている9層で木製品が多く出土した。12層では古墳時代前期頃の土師器が出土し、この層の年代観と矛盾しないことが分かった。

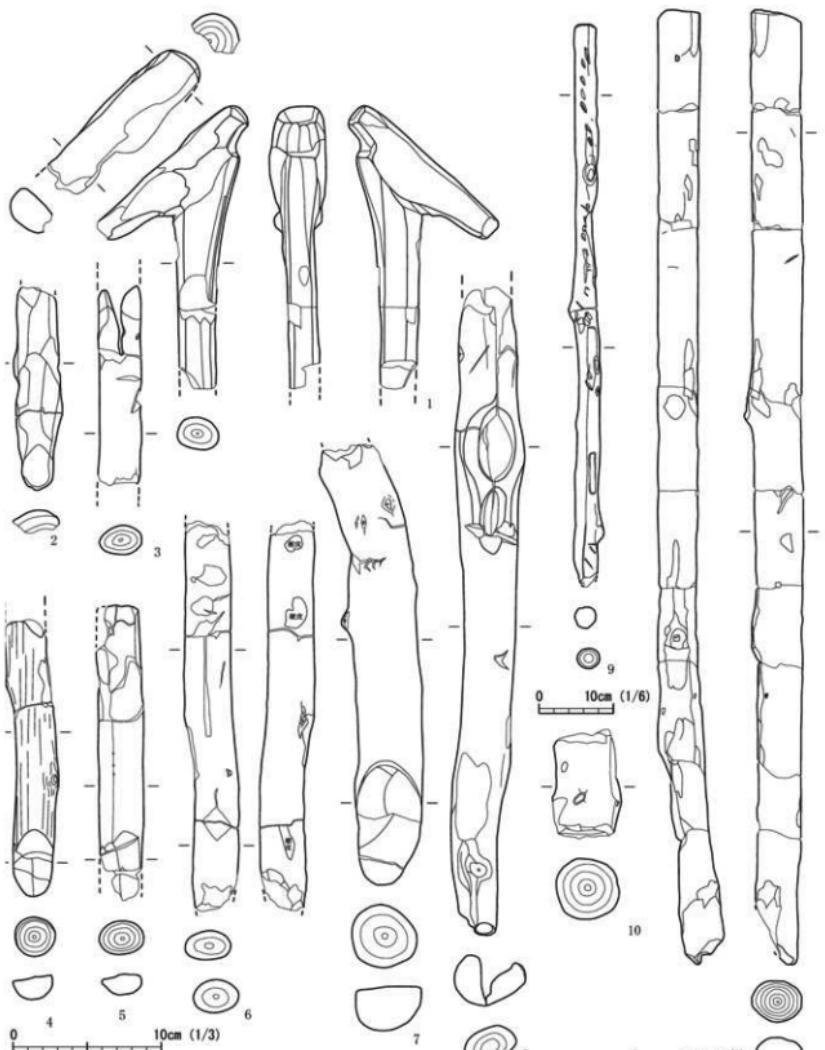
参考文献

- 仙台市教育委員会 1996 「第5部押口遺跡発掘調査報告」「中在家南遺跡他」仙台市文化財調査報告書第213集
 仙台市教育委員会 2002 「中在家南遺跡第3・4次 押口遺跡第3次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第255集
 秋山浩三 2008 「田下駄・「大足」と関連木製品」『季刊 考古学』104号 （株）雄山閣



第5図 第4次調査出土遺物（1）

掲載 番号	写真 図版	登録 番号	出土 遺機	出土 層位	種別	器種	法量(cm)			特徴・備考
							長さ	幅	厚さ	
1 3-1	B-1		瓦刀削	泥付土器	素					体部破片
2 3-2	L-9		鍬削	木製品	農耕具?	88.9	6.4	2.6		木取り・花無し・分削材・先端加工有り
3 3-3	L-11		鍬削	木製品	建築材	(130.0)	15.4	8.2		芯無し・分削材・穴4ヶ所有り・柄材



番号	写真 番号	復元 寸法	出土 場所	出土 年份	種類	器種	法量 [㎤]			特微・備考
							長さ	幅	厚さ	
1	44	L1	直削	木製品	芦葦柄	17.3	9.2	3.5	原台長11.5外側幅3.5舌子厚3.0 柄部長10.5側幅2.5舌子3.6	
2	44	L2	直削	木製品	丸?	12.5	2.9	1.4	木取り 芦の平丸材 破片	
3	45	L3	直削	木製品	丸?	12.2	2.8	1.8	木取り 芦の丸材 破片	
4	42	L-10	直削	木製品	丸材	17.1	2.7	2.5	毛刷加工 一端 木取り 芦の丸材 頭部欠損	
5	47	L-15	直削	木製品	丸?	18.1	2.8	2.1	木取り 芦丸材	

番号	写真 番号	復元 寸法	出土 場所	出土 年份	種類	器種	法量 [㎤]			特微・備考
							長さ	幅	厚さ	
6	47	L-14	直削	木製品	丸材?	23.9	25.0	2.0	芯持 丸材	
7	48	L-12	直削	木製品	丸材?	27.0	4.6	4.0	芯持 一端 木取り 芦持 丸材	
8	49	L-5	直削	木製品	丸材?	39.8	4.5	3.1	芯持 一端 丸材 直角な少々の曲がり 木取り 芦持 丸材 全長にわたって たとうな割れあり	
9	43	L-7	直削	木製品	丸材	68.1	4.3	4.3	木取り 芦持 大材 有機質切削加工	
10	46	L-4	直削	木製品	丸材?	65.3	4.3	3.7	木取り 芦持 大材 有機質切削加工	
11	441	L-8	直削	木製品	丸材	117.2	6.9	5.5	木取り 芦持 丸材	

第6図 第4次調査出土遺物(2)



1. 調査区全景（北から）



2. 調査区全景（西から）



3. 調査区全景（東から）



4. 調査区南壁断面（北から）



5. 調査区西壁断面（東から）

写真図版 1 第4次調査（1）



1. 木製品出土状況（北から）



2. 木製品出土状況（東から）



3. 木製品（L-11：中央）出土状況（西から）



4. 木製品（L-9：手前）出土状況（南から）

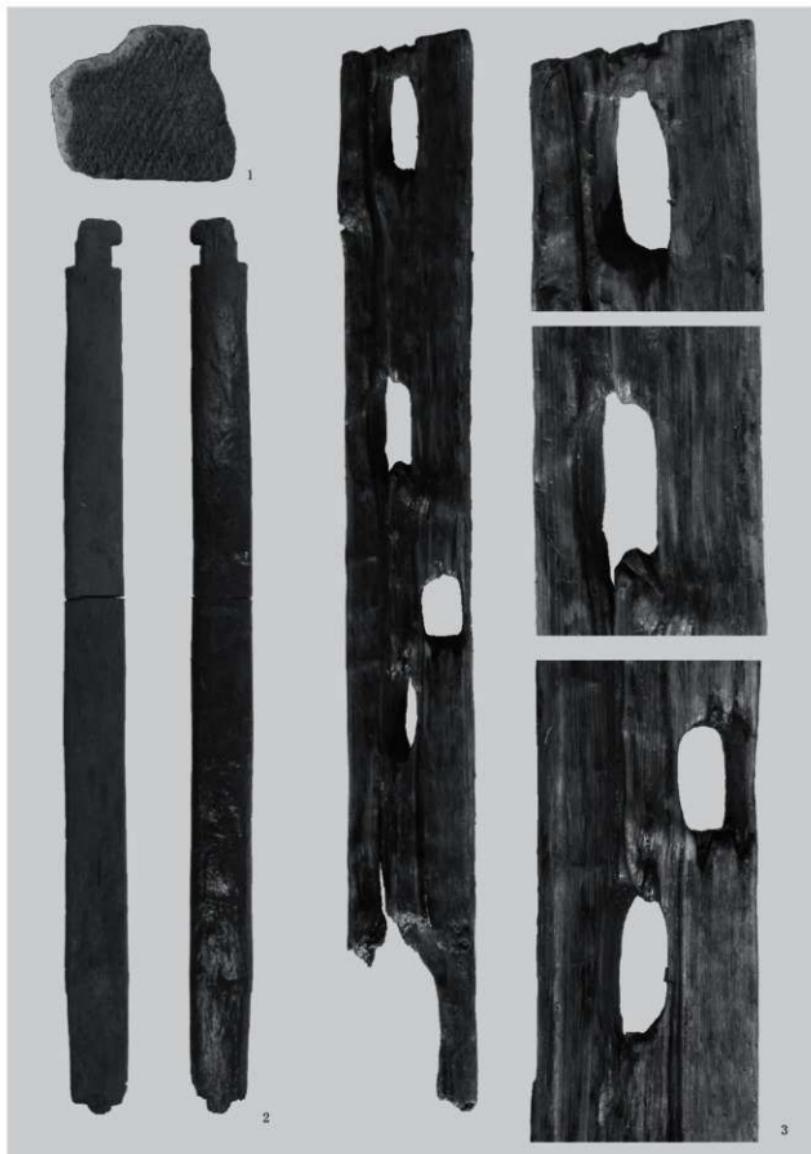


5. 木製品（L-12）出土状況（西から）



6. 木製品（L-10）出土状況（南から）

写真図版2 第4次調査（2）



写真図版 3 第4次調査出土遺物 (1)



写真図版4 第4次調査出土遺物(2)

第2節 今泉遺跡

I. 遺跡の概要

本遺跡は仙台市の南東部、JR仙台駅の南東約6.5kmの若林区今泉二丁目に所在し、名取川と広瀬川の合流地点の東側約1.7km、標高3m台の自然堤防上に立地している。

これまでの調査により、縄文時代後期から江戸時代の複合遺跡であることが知られ、大きな堀跡で囲まれた中世城館跡が主体の遺跡である。文献記録では、今泉村には「今泉城」があり「須田玄蕃」という城主の居所と伝えている（「仙台領古城書立之覚」）。

II. 第10次調査

1. 調査要項

遺跡名	今泉遺跡（宮城県遺跡登録番号 01235）
調査地点	仙台市若林区今泉二丁目48番2
調査期間	平成24年10月30日～31日
調査対象面積	建築面積 69.0m ²
調査面積	24.1m ²
調査原因	個人住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課 調査調整係
担当職員	主事 小泉 博明 文化財教諭 伊藤 翔太 文化財教諭 佐藤 高陽



第7図 今泉遺跡の位置と周辺の遺跡

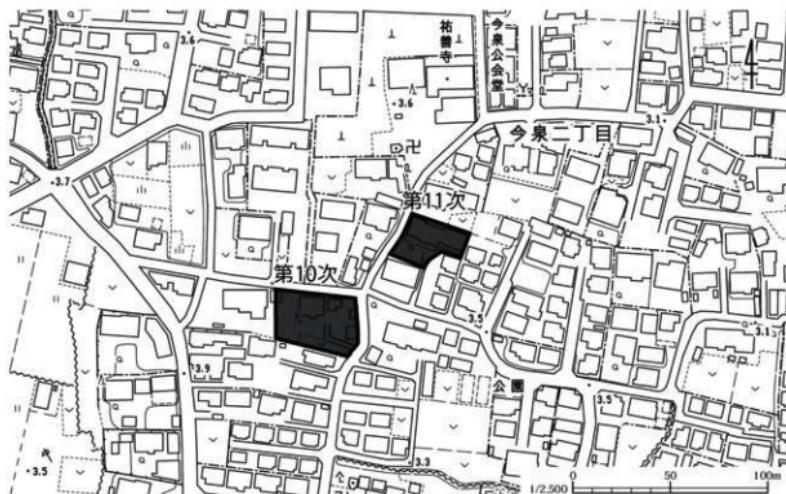
2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は申請者より提出された、「埋蔵文化財発掘の届出について」（平成24年9月24日付H24教生文第122-229号で回答）に基づき実施した。調査地点は遺跡中央部西側で、中世の今泉城跡の外側に位置し、城館の推定外堀位置の西側に隣接する。昭和56年度の調査時に、筆者は地元の方より子供の頃堀で泳いだ記憶があるとの話を伺う機会があった。つまり、場所は明らかでないが、堀跡が開口し漏水している所がかつてあったことを示し、今回発見の溝跡との関連が注目される。調査は平成24年10月30日より開始し、住宅建設予定地内で、重機により盛土および基本層IV層まで掘り下げ、つづくV層上面で人力による遺構検出作業を行った。その結果、溝跡2条を検出した。調査区の制約などから溝跡は部分的な精査に留まった。

調査時には必要に応じて、平面図・断面図を作成し、デジタルカメラを使用し記録写真を撮影した。調査終了時には、重機により締め固めながら埋め戻し作業を行った。

3. 基本層序

盛土等の厚さは約0.4～0.8mで、その下に基本層を5層確認した。今回の調査における遺構検出面である基本層V層上面の深度は約1.2mであるが、本来、遺構が確認できる基本層II層上面までの深度は約0.75mである。



第8図 第10・11次調査区位置図

I層：25Y4/3 オリーブ褐色シルト。

層厚約0.3m 宅地化以前の耕作土。

II層：10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。

層厚約0.35m 溝跡検出面である。

III層：10YR2/3 黒褐色粘土。層厚約0.1m IV層ブロックを含む。

IV層：10YR5/2 灰黄褐色粘土。層厚約0.07m 黒褐色粘土ブロックを含む。

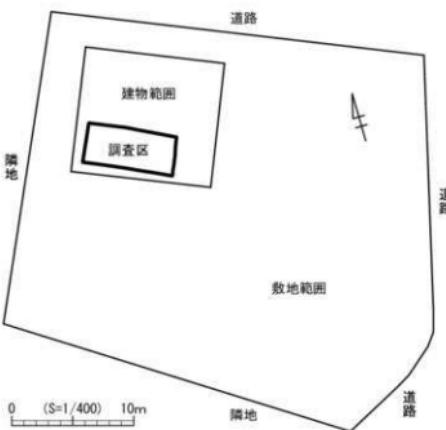
V層：10YR5/4 にぶい黄褐色粘土。調査時の遺構確認面 地山か。

4. 発見遺構と出土遺物
溝跡2条を検出した。遺物は出土していない。

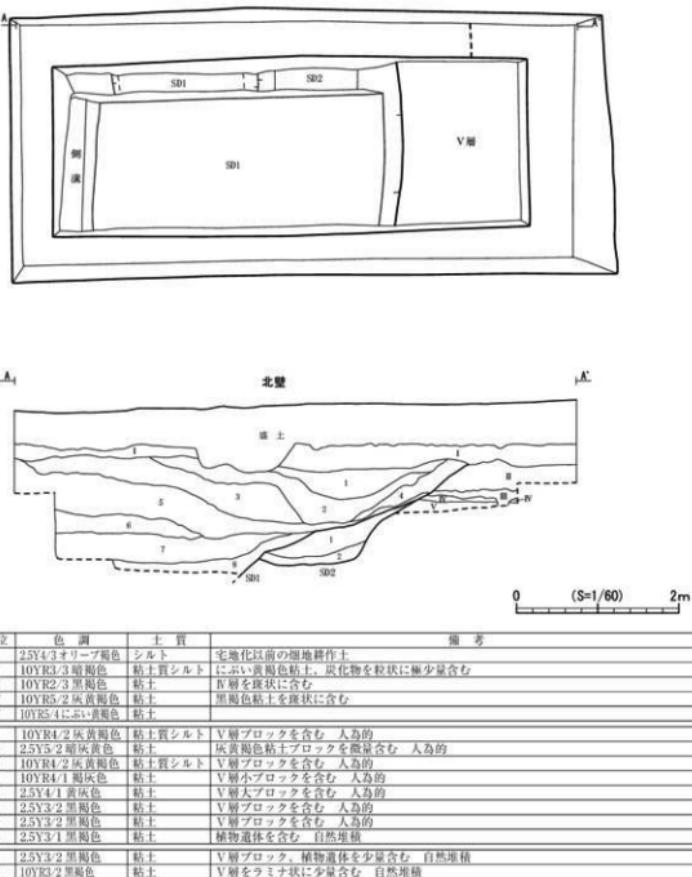
(1) 溝跡

SD1 溝跡

調査区東寄りで検出した、南北方向の溝跡である。この溝跡は、隣接する既存の南北道路の下へ続くと推定される。規模は調査区壁面で上幅5.6m以上、検出長約2.0m、深さ約1.4mである。本来の規模は不明であるが、大溝



第9図 第10次調査区設定図



第10図 第10次調査平面図・断面図

になる可能性が高い。堆積土は8層確認したが、このうち1・2層は異なる溝跡の可能性がある。3～5層は人為的堆積層で、埋め立てによるものと考えられる。6～8層は水の影響によるものと考えられ、ほぼ水平な堆積を示し、8層は植物遺体を含む自然堆積層である。遺物は出土していない。溝跡は時期が明確ではないが、城館跡の外堀の可能性がある。

SD2 溝跡

調査区中央で検出した南北方向の溝跡である。この溝跡はSD1溝跡より古く、溝上部が失われている。残存部の規模は、調査区壁面で溝幅192 m以上、検出長約2.0 m、深さ0.78 mで、断面形状は逆台形に近い形状である。

堆積土は2層確認できた。いずれも黒褐色粘土の自然堆積層でしまりがなく、上層には植物遺体を含んでいる。遺物は出土していない。

5.まとめ

調査地点は中世城館跡の西辺外堀に近い場所である。昭和56年度の第2次調査時に想定した外堀の位置は、今回の調査区の東側に隣接する南北道路の下であった。想定時は、宅地や畠地より道路が低い地形的特徴がみられる地点、等高線の特徴、土地の区画で細長い場所、古写真などから堀跡を想定した。今回その想定場所に極めて近い場所から埋め立てを作った大溝の発見がなされた。想定より西側にずれたが、この大溝は外堀の可能性がある。

参考文献

仙台市教育委員会 1983 「今泉城跡」 仙台市文化財調査報告書第58集（第2次）



1. 調査区全景（南東から）



2. SD1・2断面（南西から）

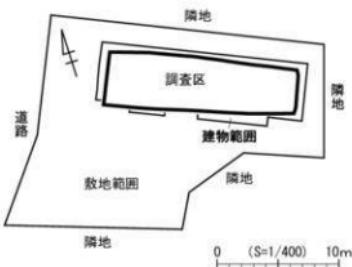


3. SD1・2重複部断面（南から）

III. 第11次調査

1. 調査要項

遺跡名	今泉遺跡（宮城県遺跡登録番号01235）
調査地点	仙台市若林区今泉二丁目60-1の一部
調査期間	平成25年3月25日～27日
調査対象面積	建築面積 169.95m ²
調査面積	66.4m ²
調査原因	個人住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課 調査調整係
担当職員	主事 水野一夫 文化財教諭 千葉悟 文化財教諭 佐藤高陽



第11図 第11次調査区設定図

2. 調査に至る経過と調査方法

調査は申請者より平成25年2月1日付で提出された、「埋蔵文化財の取り扱いについて(協議)」(平成25年2月1日付H24教生文第129-66号で回答)に基づき実施した。調査は平成25年3月25日に開始した。住宅建設予定地内に東西約16m、南北約4mの調査区を設定し、重機により表土掘削を行った。遺構確認面まで0.9mの深度であった。調査地は遺跡中央部で、想定される城館跡の北西部部分に当たり、確認作業の結果、溝跡5条を検出した。

調査では必要に応じて、平面図・断面図を作成し、デジタルカメラを使用し記録写真を撮影した。調査終了時には、重機により締め固めながら埋め戻しを行った。

3. 基本層序

調査区内の盛土などは0.4～0.8mで、その下に基本層を5層確認した。今回の調査における遺構検出面である基本層V層上面の深度は約1.2mである。

I層：10YR4/4褐色シルト。宅地化以前の畑地耕作土である。層厚は約0.3mである。

II層：黒褐色を呈する粘土質シルトである。a、bの2層に細別される。I層シルトを斑状に含む。層厚は約0.2mである。人為的な埋め立て土であると推定される。

III層：明褐色を呈する砂質シルトである。a、b、cの3層に細別される。褐色の粘土を斑状に含む。I層との重なりから宅地造成前の埋め立て土と考えられる。

IV層：褐色～褐灰色を呈するシルト～粘土質シルトである。a、bの2層に細別される。黒褐色のシルトを粒状に含む。

V層：10YR2/2黒褐色砂質シルト。均質である。今回の調査における遺構検出面である。

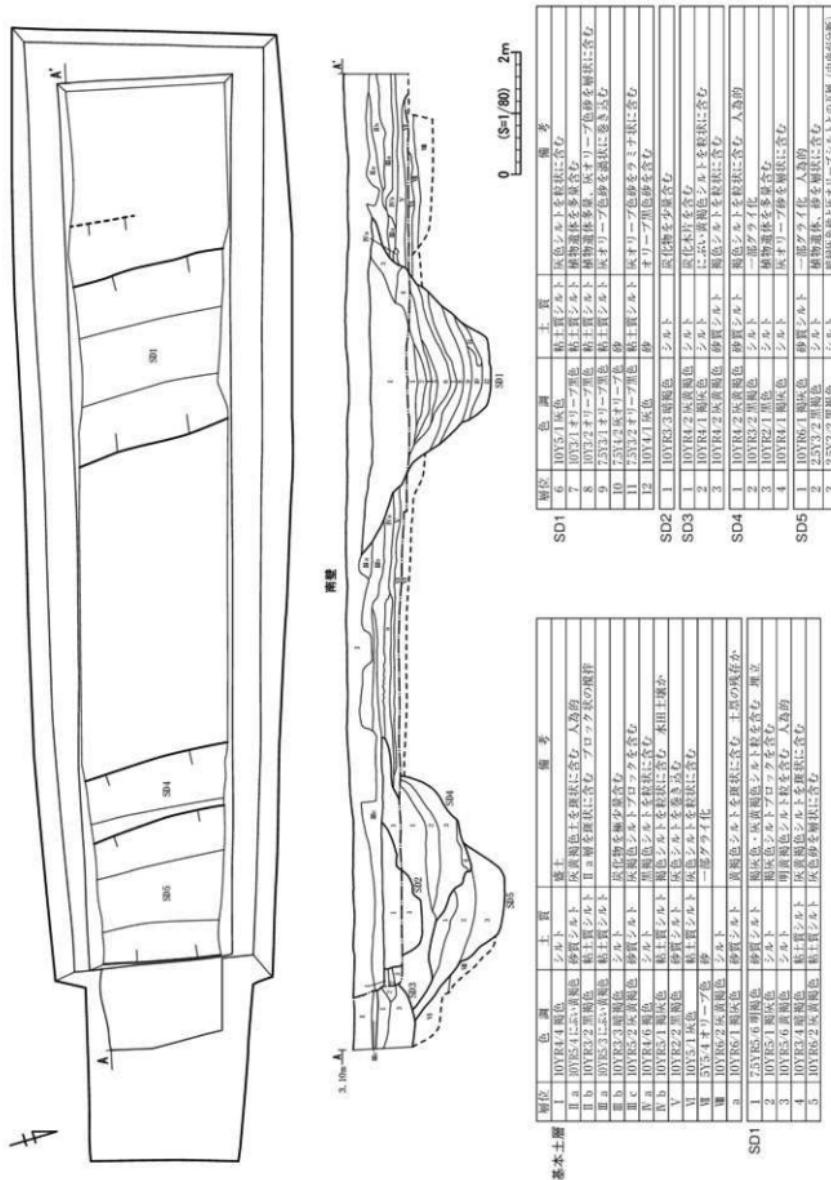
4. 発見遺構と出土遺物

遺構確認作業はV層で行い、溝跡5条を検出した。

(1) 溝跡

SD1 溝跡

調査区西部で検出した南北方向の溝跡で、掘り込み面はIIa層(西側)とIII層(東側)である。溝跡両側にあるIIa層、



第12図 第11次調査区平面図・断面図

Ⅲ層はいずれもブロック状を示す人為的な堆積層で、最初の溝掘削時の掘り込み面が特定しにくい。規模は上端幅5.5 m、底面幅1.1 m、深さは東側（城館内側）2.1 m、西側で1.95 mを測る。断面形状は、下半部は逆台形で、上半部は大きく開き緩斜面になっている。堆積土は12層確認され、下層（9～12層）が砂を含み、中層（2～8層）は粘土質で、植物遺体を含む層がある。上層（1層）はブロック土で、人為的に埋められている。

遺物が出土していないため、使用時期および埋め立て時期の詳細は不明である。溝跡の開削時期が、中世まで遡るか明らかでない。溝跡脇の堆積土については、浚渫し、溝脇に土を積み上げていた可能性が考えられる。

SD2 溝跡

調査区東部でIV層上面より検出した南北方向の溝跡で、SD3・4溝跡より新しい。規模は上端幅約2.36 m、下端幅約0.6 m、深さ0.64 mで、断面形状は不定形である。堆積土は、単層である。遺物は、磁器7点、陶器35点、瓦質土器1点、弥生土器1点、砥石1点が出土した。このうち、磁器3点（第14図2、3）、陶器15点（第13図2～16）、弥生土器1点（第13図1）、砥石（第14図5）を図示した。陶磁器は17世紀代1点を除けば、他は18～19世紀中葉頃（江戸後期から幕末頃主体）のものである。溝跡の時期は、江戸時代である。

SD3 溝跡

調査区東端に位置し、IV層下で一部を検出した南北方向の溝跡である。SD2溝跡より古く、SD4・5溝跡より新しい。一部の検出に留まったため、規模は不明である。確認できたのは幅約1 m以上、深さ約0.44 mである。堆積土は3層で、いずれも灰黄褐色系の人為的堆積層とみられる。遺物は出土していない。時期は、近世と考えられる。

SD4 溝跡

調査区東部でIV層上面より検出した南北方向の溝跡で、SD2・3溝跡より古く、SD5溝跡より新しい。規模は上端幅約3.8 m、下端幅は不規則であるが約1 m、深さ1.14 m、断面形状は不定形で、東側は階段状に浅くなる。堆積土は4層確認され、1層は人為的堆積層、2～4層は自然堆積層である。SD5溝跡を掘り直して拡幅し、使用後に埋め立て（1層）られた可能性が考えられる。出土遺物は漆器椀の蓋1点がある。この蓋（第14図4）は内外面赤色塗装りで、口唇部と摘み部骨付が黒色塗装りである。時期は掘り直しを考慮して、中世から近世と考えられる。

SD5 溝跡

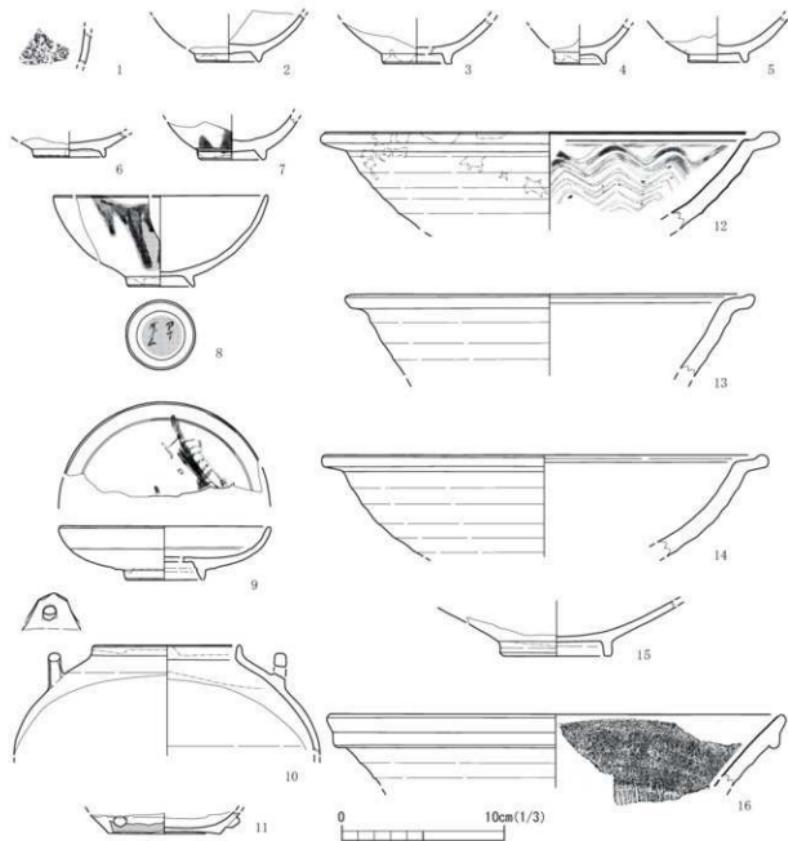
調査区東部で検出した南北方向の溝跡で、SD3・4溝跡に切られ、溝掘り込み面が何層か確認できない。規模は上端幅2.9 m以上、下端幅約0.9 m、深さ1.68 m、形状は逆台形状である。堆積土は3層確認され、1層は人為的堆積層、2・3層は黒褐色シルトの自然堆積層（水成）である。下層より、クルミ1点が出土した。時期は、中世と考えられる。

（2）遺構外出土遺物

表探資料として、磁器1点（第14図1）がある。

5.まとめ

溝跡を5条検出した。SD1溝跡の時期は不明だが、かなり長期間使用されていた。SD2～5溝跡はほぼ同じ位置と方向（SD2溝跡は方向が若干異なる）で、中世から近世にかけて繰り返し掘削されたことが明らかになった。この溝跡の位置が、何らかの境界を示している可能性がある。これまでの調査で検出されている溝跡とどう関わるのか検討課題である。



掲載番号	写真 図版 番号	出土地 名	出土 層位	種別	器種	残存	法量(cm)			特徴・備考
							器高	口径	底径	
1	7-1	B-1		陶土器	类型?	全体片	—	—	—	
2	7-2	I-1		陶器	碗	底延片(2.9)	—	4.0		大崩相馬 白湯釉 18C後半以降
3	7-3	I-2		陶器	碗	底延片(2.7)	—	4.2		大崩相馬 白湯釉 18C後半以降
4	7-4	I-3		陶器	小环	底部破片(2.4)	—	3.2		大崩相馬 18C後半以降 外面船舶 内面白湯釉
5	7-5	I-4		陶器	碗	底部破片(2.9)	—	3.7		大崩相馬 灰釉 18C
6	7-7	I-9		陶器	碗	底部破片(1.9)	—	4.4		大崩相馬 灰釉削輪流し 18C
7	7-6	I-6		陶器	碗	底延片(2.3)	—	4.2		大崩相馬 灰釉削輪流し 18C
8	7-10	I-5		陶器	碗	口~底1/4	5.6	(13.1)	4.2	大崩相馬 灰釉削輪流し 高台内墨書きあり「アナ□□□」18C
9	7-11	I-10		陶器	皿	1/3	3.3	12.0	4.8	大崩相馬 呂須絵 19C初~前葉 目録1
10	7-9	I-11		陶器	土瓶	口~体2.5	(6.7)	(9.2)	—	大崩相馬 緑釉 大型 19C前~中葉
11	7-8	I-12		陶器	土瓶	底部破片(1.2)	—	7.0		大崩相馬 回転ヘラナデ ススキ着 18C末~19C中葉
12	7-14	I-14		陶器	折縁鉢	口~体1.5	(6.0)	(28.2)	—	产地不明 刷毛目文 長石釉? 着色悪い 17C?
13	7-12	I-15		陶器	折縁鉢	下手(5.0)	(25.2)	—	—	产地不明 鉄釉 赤褐色砂粒 17C? 鉄釉色悪い
14	7-15	I-16		陶器	折縁鉢	下手1/5	(6.2)	(27.4)	—	产地不明 鉄釉 茶土赤褐色砂粒 17C? (114-15と類似)
15	8-2	I-17		陶器	片口鉢	底延2.3	(3.4)	—	7.0	大崩相馬 灰釉 灰釉削輪流し? 18C後半?
16	7-13	I-13		陶器	縫鉢	口縫片1.6	(4.4)	(28.2)	—	鉄釉 在手? 19C前?

第13図 第11次調査出土遺物(1)

撮影番号	写真番号	登録番号	出土場所	出土種別	種類	器種	残存	法量(cm)	特徴・備考
1	8-10	J-1	表孫	磁器	碗	2/3	6.7	10.2	4.4 肥前染付菊文若松文4単位柄草文19C中盤以降
2	8-11	J-2	表孫	磁器	碗	1/2	6.0	6.8	3.4 波文見兩點染付菊形菊花文格子文18C末~19C
3	8-12	J-3	表孫	磁器	碗	下部1/2	4.9	—	波佐見兩點染付菊形18C末~19C初 菊花文星梅鉢文格子文
4	8-14	L-1	SD3	磁器	碗蓋	ほぼ完好	29	10.2	つまみ足14cm波つまみ部費付赤色漆
5	8-13	K-1	石製品	砾石	—	5.8	7.6	1.9	折れた面を再使用 砥面5面
—	8-1	1-32	陶器	片持	口縁部破片	—	—	—	在地 朝日文 黑釉 白口 18C~
—	8-3	1-18	陶器	破瓶	底部破片	—	—	—	大堀相馬 桂分灰釉 黑釉 18C~
—	8-4	1-34	瓦質土器	灰蒸し	口-底1/4	—	—	瓦質 口縁部破片灰 江戸時代	
—	8-5	1-23	陶器	碗	底部破片1/5	—	—	在地 緑色物 白色雲い 18C~	
—	8-6	1-35	陶器	罐	底部1/4	—	—	尾張系 黒釉 17C 底窓系 黑釉	
—	8-7	1-41	陶器	香炉	口-底1/5	—	—	大堀相馬 底窓大堀相馬 黑釉	
—	8-8	1-37	陶器	注次?	体部1/5	—	—	大堀相馬 白南無 注口部あり 18C後半~	
—	8-9	1-42	陶器	施利	肩部1/4	—	—	大堀相馬 黑釉 19C前葉	

第14図 第11次調査出土遺物（2）



1. 調査区全景（北東から）



2. SD1溝跡完堀（南東から）

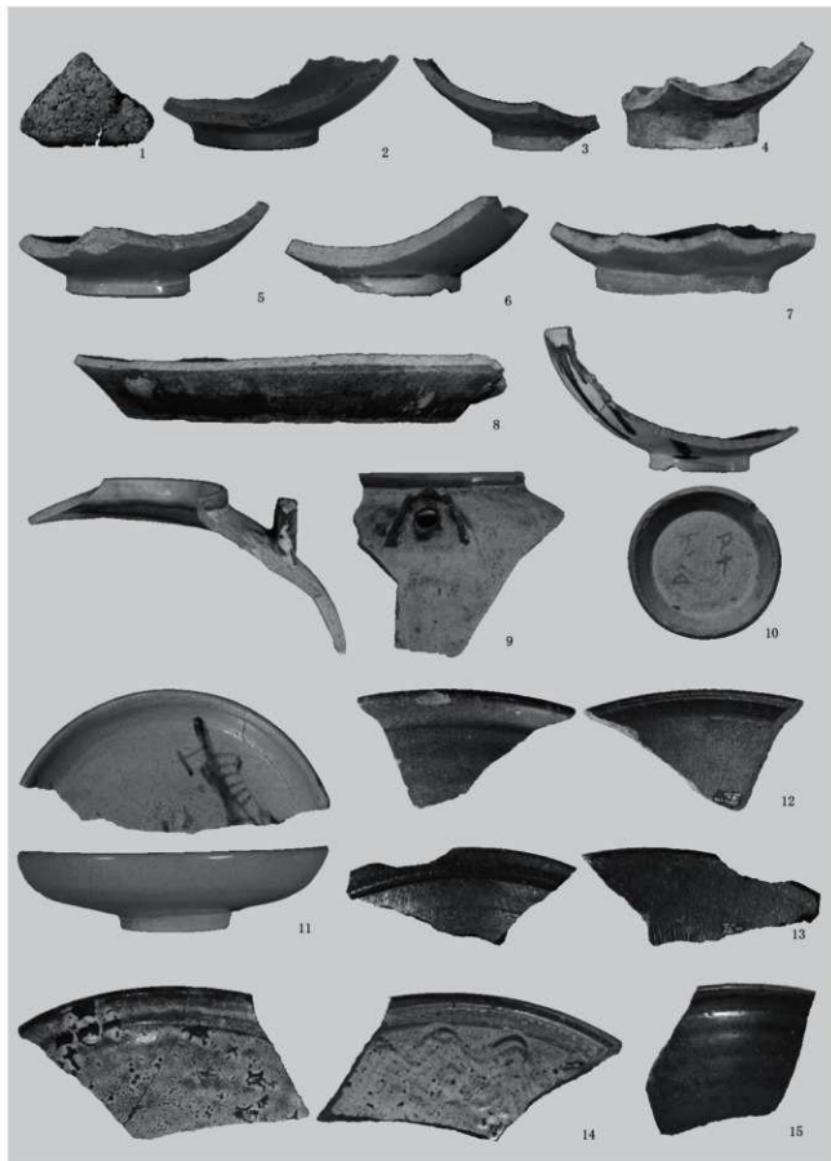


3. SD1溝跡断面（北から）

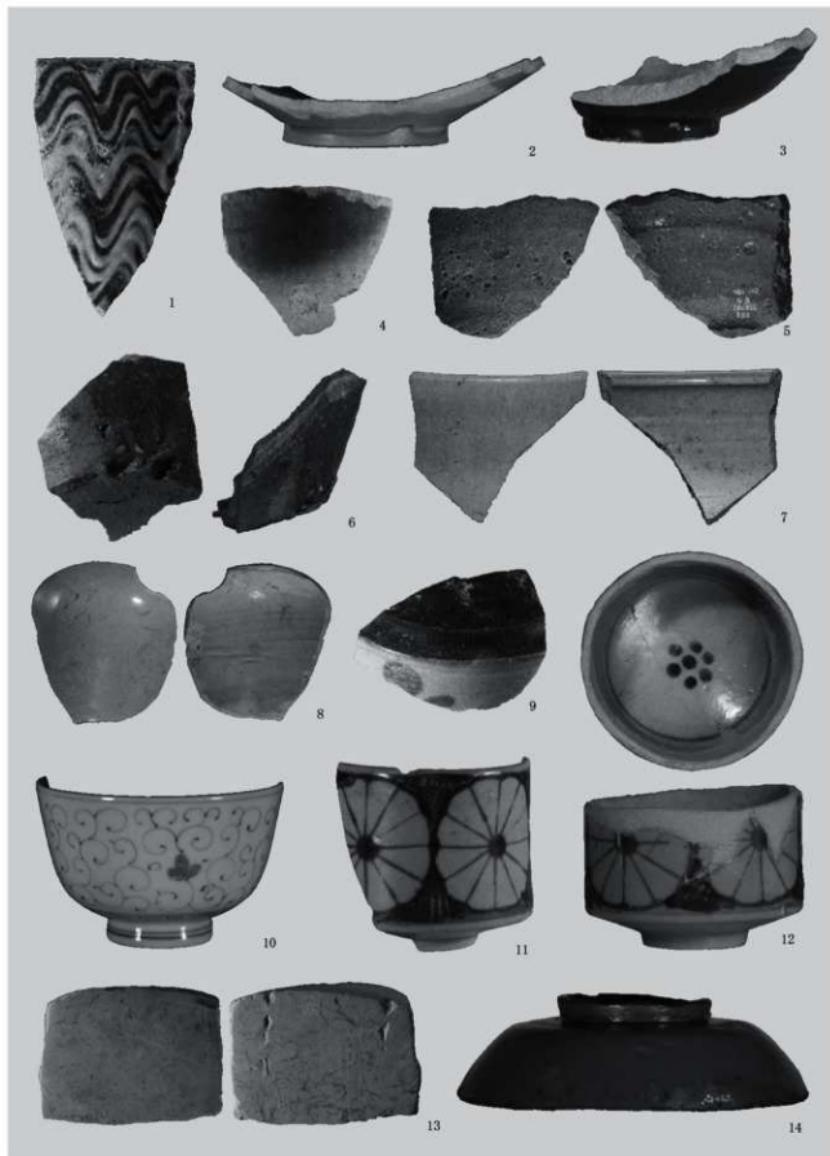


4. SD2～5溝跡断面（北から）

写真図版6 第11次調査



写真図版7 第11次調査出土遺物（1）



写真図版 8 第 11 次調査出土遺物 (2)

第3節 郡山遺跡

I. 遺跡の概要

郡山遺跡はJR仙台駅の南東約5kmに位置し、名取川と広瀬川とに挟まれた郡山低地の自然堤防上に立地している。JR長町駅のすぐ東側一帯で、標高は6~12mである。本遺跡は多賀城造営以前の官衙跡として広く知られているが、これまでの調査で、绳文時代から江戸時代までの複合遺跡であることが判明している。

官衙跡は7世紀中頃~末頃と7世紀初め頃の大きく二時期に分かれ、それぞれ「Ⅰ期官衙」、「Ⅱ期官衙」と呼んでいる。後者には、「郡山廃寺」と名づけられた寺院跡が付属する。官衙跡の性格は、Ⅰ期は城柵で、Ⅱ期は多賀城以前の陸奥国の国府と考えられており、平成18年には国史跡の指定を受けている。

II. 第235次調査

1. 調査要項

遺跡名 郡山遺跡

(宮城県遺跡登録番号 01003)

調査地点 仙台市太白区郡山二丁目51-6の一部、49-29

調査期間 平成24年12月3日(月)

調査対象面積 建築面積 79.5m²

調査面積 18.5m²

調査原因 個人住宅建築工事

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育生涯学習部

文化財課調査調整係

担当職員 主事 小泉 博明

文化財教諭 佐藤 高陽

2. 調査に至る経過と調査方法

調査は、申請者より平成24年9月14日付で提出された届出に基づき、宅地建築に伴う申請地の取り扱いについて協議し、事前の確認調査を実施した。平成24年12月3日に調査を開始し、建物予定地内に調査区を設定した。調査時には、重機により盛土および基本層Ⅰ~Ⅱ層を掘削し、基本層Ⅲ層上面で遺構検出作業を行った。

調査では、必要に応じて平面図・断面図を作成し、デジタルカメラ等を用いて記録写真を撮影した。一日で調査は終了し、重機により調査区の埋め戻しを行った。

3. 基本層序

調査区内では、約1.1mの盛土が堆積し、その下に大別3層、細別4層の基本層を確認した。なお、下層確認のため、調査区の一部で基本層Ⅲ層下を深度1.55mまで掘削した。

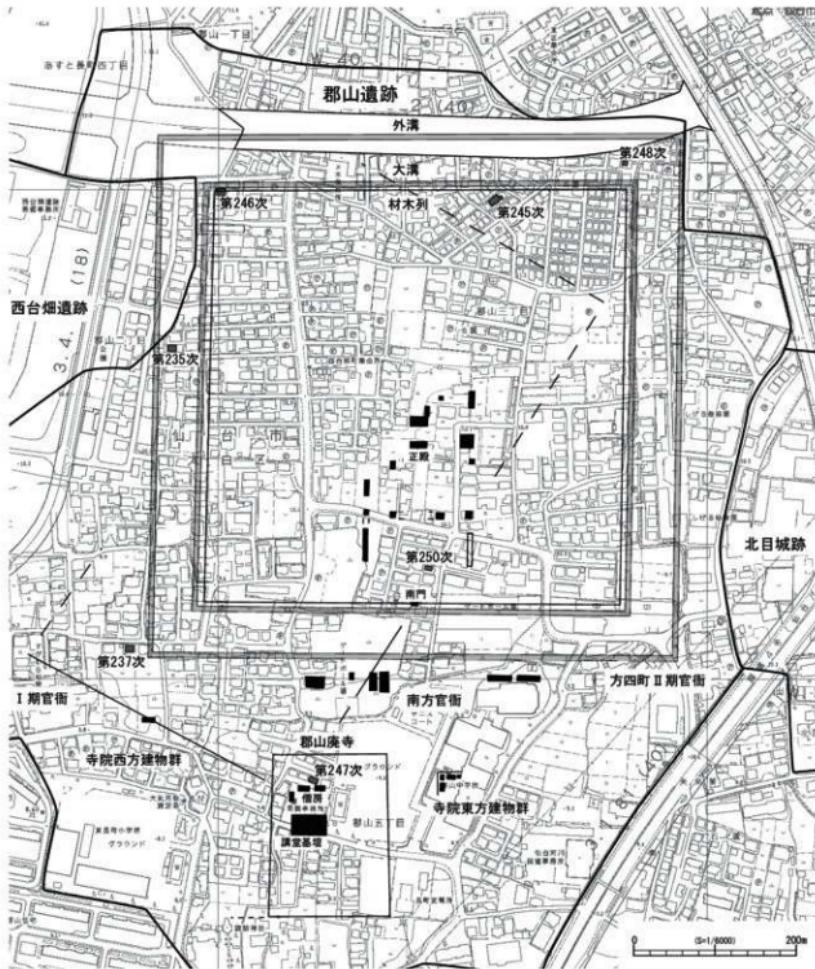
Ⅰ層：5Y3/2オリーブ黒色粘土 層厚0.15m 酸化鉄を斑状に含む。宅地化以前の水田耕作土。

Ⅱa層：2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土 層厚0.1m

Ⅱb層：2.5Y3/1黒褐色粘土 層厚0.1m 黄褐色粘土ブロック、灰白色火山灰(粒状)を含む。



第15図 郡山遺跡の位置と周辺の遺跡



第16図 郡山遺跡 第235・237・245～248・250次調査区位置図

- II a・II b層とも下層を巻き上げ、下面に凹凸が認められることから、水田土壤の可能性がある。
- III層：25Y5/3 黄褐色粘土。層厚0.2m以上。上面はII層の影響を受け、層下部は次第に砂質となる。

4. 発見遺構と出土遺物

検出した遺構は、土坑1基である。遺物は基本層も含め、出土していない。

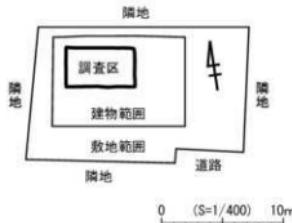
(1) 土坑

SK1 土坑

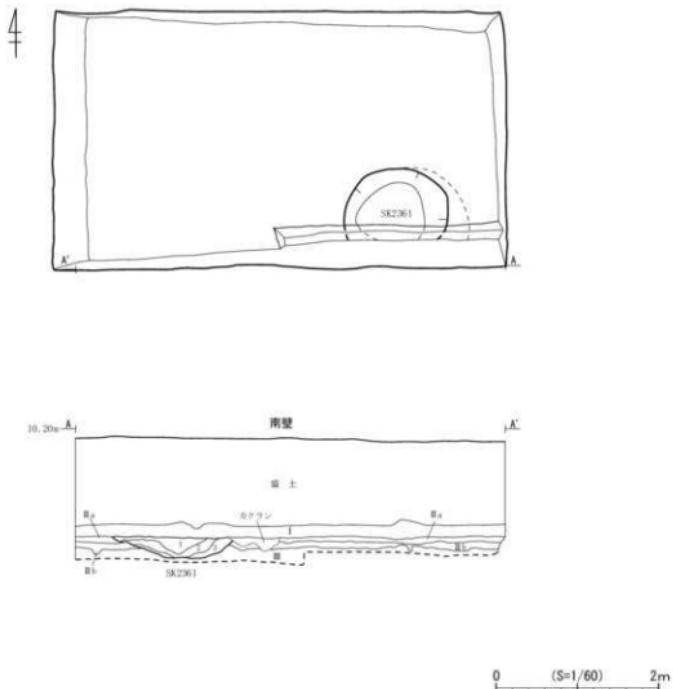
調査区南東部に位置し、II a層上面より掘り込まれている。円形を呈しているものと予想されるが、南半部は調査区外にある。断面は皿状を呈する。規模は東西1.27m、南北0.9m以上、深さ0.26mを測る。堆積土は3層あり、1層は25Y5/3 黄褐色砂質シルト、2層は25Y5/1 黄灰色粘土、3層は10YR3/1 黒褐色粘土である。このうち1層は人為的堆積土である。

5.まとめ

今回の調査区はII期官衙西辺中央部で、大溝と外溝の間に位置している。土坑1基を検出したが、全体の約半分の調査に留まり、遺物も出土しなかった。しかし、この土坑は灰白色火山灰を含むII b層より上層の、II a層上面より掘り込まれていることから、平安時代以降の時期の遺構であり、官衙跡とは直接関わらないことが確認された。



第17図 第235次調査区設定図



基本土層	剖位	色調	土質	備考
	I	5Y3/2オリーブ黒色	粘土	酸化鉄を斑状に含む
	II a	25Y3/3稍オリーブ褐色	粘土	重刷小・ブロックを含む
	II b	25Y3/1黒褐色	粘土	重刷を斑状に灰白色火山灰を粒状に極少量含む
	III	25Y5/3黄褐色	粘土	刷上面に II b 層の影響あり
SD1	1	25Y5/3黄褐色	砂質シルト	人為的堆積
	2	25Y5/1黄灰色	粘土	黄褐色粘土ブロックを含む
	3	10YR3/1黒褐色	粘土	黄褐色粘土との互層

第18図 第235次調査平面図・断面図



1. 調査区全景（北西から）



2. 調査区南壁断面（北東から）



3. SK 1 断面（北から）

II. 第237次調査

1. 調査要項

遺跡名 郡山遺跡（宮城県遺跡登録番号01003）

調査地点 仙台市太白区郡山六丁目201番6

調査期間 平成25年2月4日～2月7日

調査対象面積 建築面積 68.5m²

調査面積 19.6m²

調査原因 個人住宅建築工事

調査主体 仙台市教育委員会

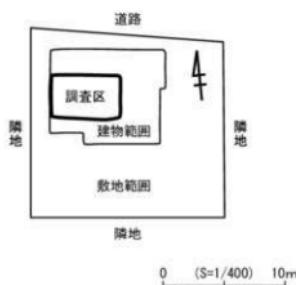
調査担当 仙台市教育局生涯学習部

文化財課調査調整係

担当職員 主事 小泉 博明

文化財教諭 佐藤 高陽

文化財教諭 伊藤 翔太



第19図 第237次調査区設定図

2. 調査に至る経過と調査方法

調査は、平成24年12月26日付で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成25年1月7日付H24教生文第122-360号で回答)に基づき実施した。調査地はⅡ期官衙外溝南西角付近にあり、平成25年2月4日より調査を開始した。建物範囲内に調査区を設定し、重機により盛土及び基本層Ⅰ・Ⅱ層を掘削し、基本層Ⅲ層上面で遺構検出作業を行った。

調査では、必要に応じて平面図・断面図を作成し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。同年2月7日には、重機により埋め戻しを行い、調査を終了した。

3. 基本層序

調査区内の盛土層厚は1.1m前後あり、その下に大別7層、細別8層の基本層を確認した。

I a層：25Y3/3暗オリーブ褐色シルト。畑地耕作土。

I b層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト。畑地耕作土。

II層：25Y4/2明灰黄色粘土。Ⅲ層ブロックを含む。

III層：25Y5/3黄褐色粘土。IV層ブロックを少量含む。

IV層：25Y4/2明灰黄色粘土。V層ブロックを少量含む。

V層：10YR5/3にぶい黄褐色粘土。明黄褐色粘土を少量含む。

VI層：25Y3/2黒褐色粘土。VII層ブロックを含む。

VIII層：10YR5/3にぶい黄褐色粘土。

なお、基本層Ⅱ層以下の層は、北から南に向かって緩く傾斜している

4. 発見遺構と出土遺物

検出した遺構は、溝跡2条、土坑6基、柱穴1基である。

(1) 溝跡

SD2365溝跡

調査区中央部に位置し、Ⅱ層上面より掘り込まれている。調査区外北へ伸びる南北方向の溝跡で、規模は上幅1.16m、長さ0.92m以上、深さ0.28mを測る。断面形は、立ち上がりが緩く、皿状に近い。堆積土は暗褐色粘土質シルト(10YR3/4)の単層である。SK2366土坑より新しい。

遺物はいずれも細片で、土師器甕片14点・坏1点、須恵器坏1点である。

SK2369 溝跡

調査区南東部角に位置し、Ⅱ層上面より掘り込まれている。調査区外南へ伸びる南北方向の溝跡で、規模は上幅0.63m、長さ1.49m以上、深さ0.22mを測る。溝北端は、東へ曲がる可能性がある。断面形は、壁が立つ鍋底状を呈している。堆積土は2層に分層される。SK2364より古い。

遺物はいずれも細片で、土師器甕片22点・坏片2点である。

(2) 土坑

SK2362 土坑

調査区南西部角に位置し、Ⅱ層上面より掘り込まれている。西壁断面の観察により、プランは不定形な形状で、調査区外の西・南に延びる。規模は南壁・西壁の観察で、東西1.01m、南北1.38m、深さ0.36m以上(底面未確認)を測る。断面形は皿状を呈している。堆積土は4層に分層される。他の遺構との重複はない。

遺物は、出土していない。

SK2363 土坑

調査区北西部隅に位置し、Ⅱ層上面より掘り込まれている。土坑の大部分は調査区外の西・北にあり、全体の形状は不明である。規模は調査区壁面の計測で、東西2.2m、南北0.77m、深さ0.42m以上(底面未確認)を測る。断面形は東西が皿状を呈するが、南北は比較的急角度で壁が立ち上がる。堆積土は3層に分層される。SK2366土坑より新しい。

遺物はいずれも細片で、土師器甕片17点・坏片3点、須恵器甕片2点である。

SK2364 土坑

調査区北東部角に位置し、Ⅱ層より掘り込まれている。形状は楕円形と推定されるが、大部分は調査区外の北・東にあり不確定である。規模は東西0.85m以上、南北1.67m以上、深さ0.25mを測る。断面形は皿状で、底面は平坦である。堆積土は暗オリーブ褐色粘土質シルト(2.5Y3/3)の単層である。SD2369溝跡より新しい。

遺物はいずれも細片で、土師器甕片12点・坏7点、須恵器甕片2点・坏片2点、鉄滓1点(写真図版11-10)である。

SK2366 土坑

調査区北西部に位置し、Ⅱ層上面より掘り込まれている。形状は円形あるいは楕円形と予想されるが、半分以上が調査区外にある。規模は東西0.95m以上、南北0.54m以上、深さ0.23mを測る。他の遺構に切られ、断面形は不明だが、底面は平坦で西側へ下がる。堆積土は2層に分層される。SD2365溝跡、SK2363土坑より古い。

遺物は細片が多く、土師器甕片4点・坏3点である。坏2点を掲載した(第21図1、写真図版11-5)。

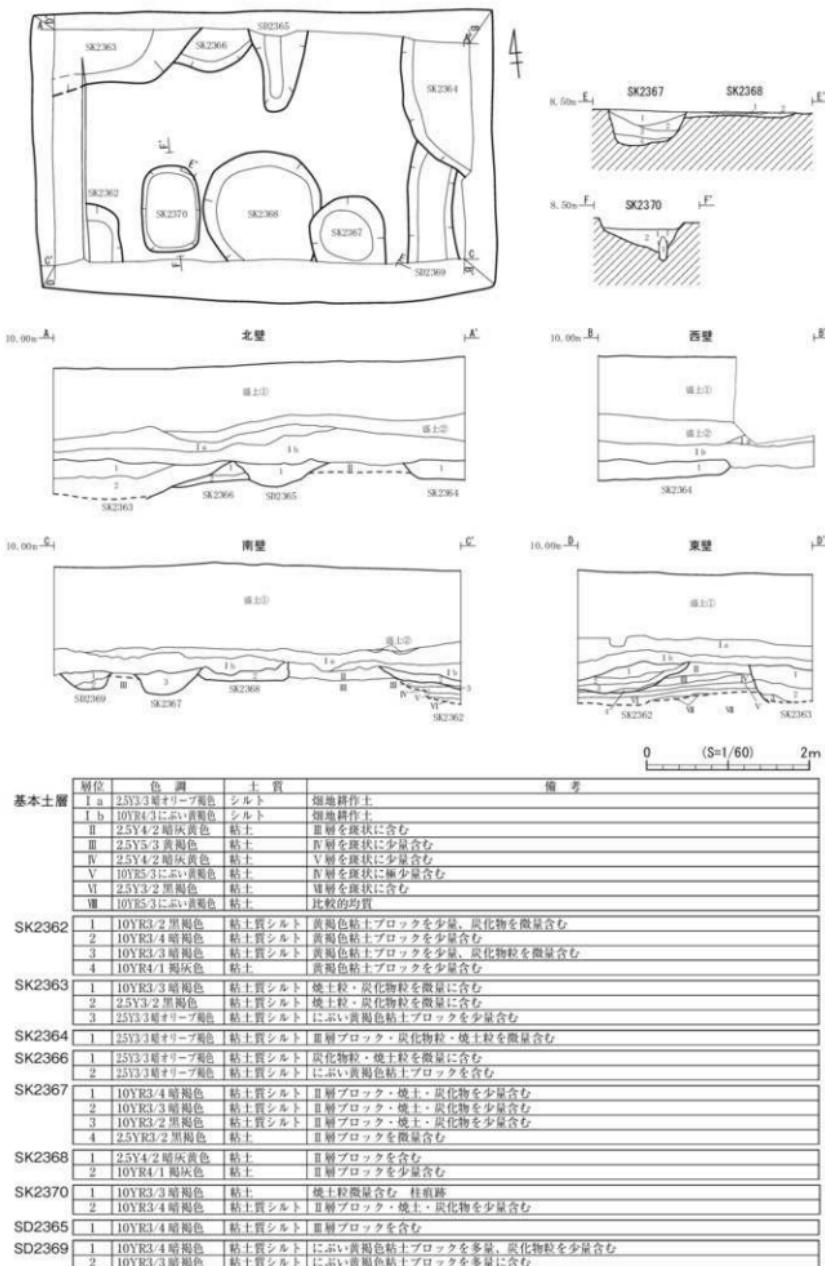
SK2367 土坑

調査区南東部に位置し、Ⅱ層上面より掘り込まれている。形状は円形を呈しているが、僅かに調査区外へ延びる。規模は、東西0.95m、南北0.82m、深さ0.43mを測る。断面形は椀形を呈する。堆積土は、4層に分層される。SK2368土坑より新しい。

遺物はいずれも細片で、土師器甕片4点・坏2点、炉壁片1点(写真図版11-11)である。

SK2368 土坑

調査区中央部に位置し、Ⅱ層上面より掘り込まれている。形状はほぼ円形を呈しているが、南端部は調査区外へ延びる。規模は東西1.46m、南北1.32m、深さ0.22mを測る。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。堆積



第20図 第237次調査平面図・断面図 (S = 1/160)

Figure 21 consists of five photographs of artifacts labeled 1 through 5.
 1: A fragment of a vessel with a thick base and a small rim.
 2: A large fragment of a vessel showing internal structure and a scale bar from 0 to 10cm (1/3).
 3: A long, thin vessel fragment with a flared end.
 4: Two fragments of a vessel, one showing a thick base and the other a rim.
 5: A fragment of a vessel with a thick base.

掲載番号	写真登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調整・文様		備考
							器高	口径	底径	外面	内面	
1 11-1 C-5 SK5				高ロクナ土器	環	口~底部破片	(3.3)	(14.5)	—	ヨコナデ? ハラミガキ?	ハラミガキ 黑色剥離	
2 11-2 C-4		I層		高ロクナ土器	小型甕	口縁部破片	(7.0)	(18.0)	—	ヨコナデ ハラケツリ	ミガキ?	瓢?
— 11-3 C-1		I層		高ロクナ土器	環	口縁部破片	—	—	—	—	—	被熱赤変
— 11-4 C-2		I層		高ロクナ土器	環	口~底部破片	—	—	—	—	—	内里
— 11-5 C-6 SK5		I層		高ロクナ土器	環	口~底部破片	—	—	—	—	—	内里
— 11-6 C-3		I層		高ロクナ土器	環	口~底部破片	—	—	—	—	—	—
3 11-7 E-1		I層	須恵器	高台付环?	底部破片	(1.8)	—	(15.4)	ヨコナデ 高台付环? ロクロナデ	—	伏せて被成?	
4 11-8 E-2		I層	須恵器	高环?	脚部破片	(5.4)	(21.5)	—	ヘルナデ ロクロナデ	ヘルナデ ロクロナデ	スカシあり	剥離・備考
5 11-9 K-1		I層	石製品	砾石	—	長さ 6.8	幅 4.7	厚さ 3.6	電鉄か? 5画使用 砂岩か?	—	—	
— 11-10 N-1 SK3			金属性製品	か壺	破片	—	—	—	—	—	—	
— 11-11 N-2 SK6			金属性製品	鍛錆	—	—	—	—	—	—	—	

第21図 第237次調査出土遺物

土は2層に分層される。SK2367土坑より古い。

遺物はいずれも細片で、土師器甕片4点・环1点である。

(3) 柱穴

SK2370柱穴

調査区南西部に位置し、II層上面より掘り込まれている。形状は隅丸長方形を呈し、南北方向に長軸をもつ。規模は東西0.72m、南北1.05m、深さ0.38mを測る。断面形は南側が深く下がる逆三角形に近い形状である。堆積土は柱痕を含めて2層に分層される。柱痕跡は直径約10cmの円形を呈している。他の遺構との重複はない。

(4) 遺構外出土遺物

基本層1層から遺物が出土している。畑の耕作のせいか、いずれも細片となっている。内訳は土師器甕片39点・环片17点・瓶1点、須恵器甕片9点・环1点・高台付环1点・瓶類1点・円面鏡1点、瓦(布目)2点、土製品2点(輪の羽口1点)、砾石1点である。このうち、土師器小型甕(第21図2)・环2点(写真図版11-3・4)、須恵器高台付环(第21図3)・円面鏡(第21図4)、砾石(第21図5)を掲載した。

5.まとめ

今回の調査地点は、郡山遺跡II期官衙外溝南西角付近に位置するが、外溝を確認することはできなかった。出土した土師器はすべて非ロクロ土師器であり、検出構造は断定できないが官衙に関わる可能性がある。僅かだが、鍛冶関係遺物が出土しており、近隣に小鍛冶工房の存在が想定される。SK2370柱穴は、掘立柱建物跡の角の柱穴になるものと考えられるが、遺物が出土しておらず、建物跡の時期や規模は不明である。溝跡や土坑の遺跡における位置付けや性格の解明が、今後必要である。



1. 調査区全景（北西から）



2. 調査区全景（東から）



3. 調査区西壁（南東から）



4. SD2365 断面（南から）



5. SK2363・2366 完掘（南から）



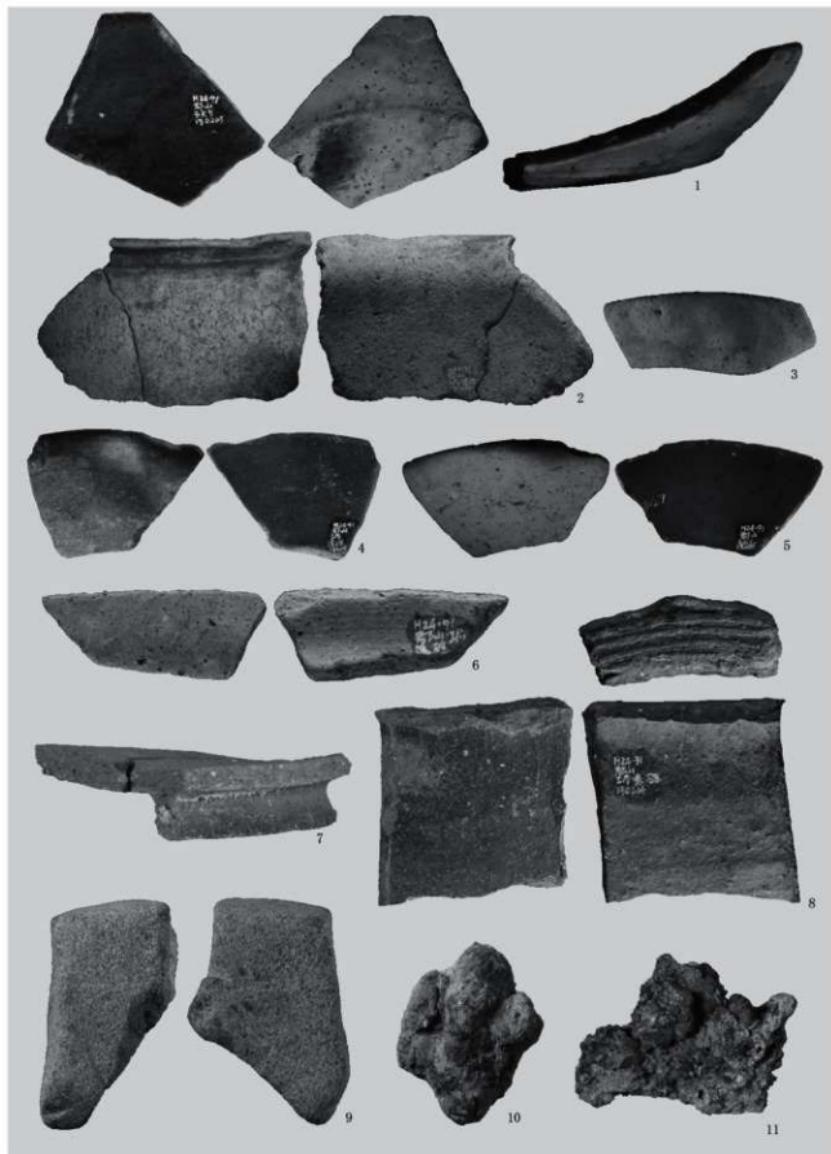
6. SK2367・2368 完掘（北西から）



7. SK2370 断面（東から）



8. SK2370 完堀（南から）



写真図版 11 第237次調査出土遺物

第4節 元袋遺跡

I. 遺跡の概要

元袋遺跡は仙台市南部、太白区大野田に所在する。JR 仙台駅の南約 5.2km に位置し、名取川の支流である笊川右岸の標高 9 ~ 10 m の自然堤防上に立地する。隣接して、南側に大野田官衙遺跡、南東側に縄文時代後期の土偶や中世の屋敷跡、墓地で注目された王ノ壇遺跡などがある。昭和 61 年以来継続的に調査が行われ、縄文時代後期の遺物包含層、弥生時代の水田跡、古墳時代前期・奈良時代・平安時代の各集落跡、中世の屋敷地・墓地、近世の屋敷跡（4 時期の変遷があり、仙台藩との関連も指摘されている）が発見されている。

II. 第9次調査

1. 調査要項

遺跡名 元袋遺跡（宮城県遺跡登録番号 01179）

調査地点 仙台市太白区大野田字元袋 13-1

他筆

調査期間 平成 25 年 3 月 7 日～3 月 25 日

調査対象面積 建築面積 83.96m²

調査面積 40.0m²

調査原因 個人住宅建築工事

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課

調査調整係

担当職員 主査 佐藤 淳

主査 平間 亮輔

主事 水野 一夫

文化財教諭 佐藤 高陽

文化財教諭 千葉 悟

文化財教諭 伊藤 翔太

文化財教諭 佐藤 洋平

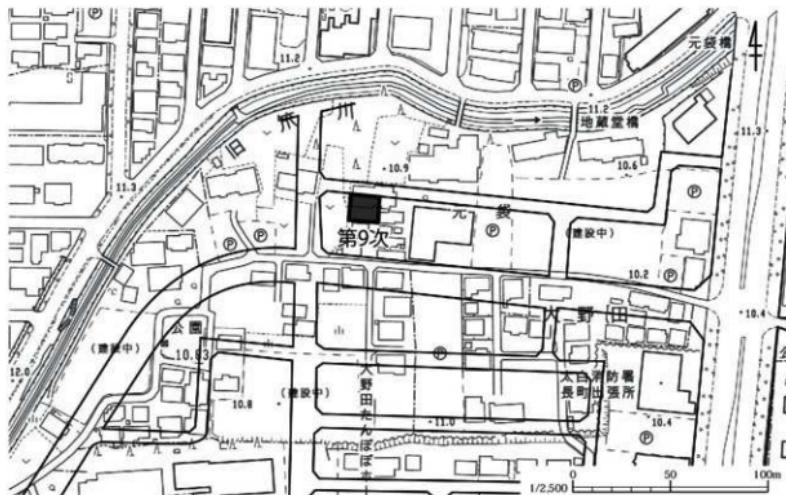


第 22 図 元袋遺跡の位置と周辺の遺跡

2. 調査に至る経過と調査方法

調査は申請者より平成 24 年 12 月 28 日付で提出された届けに基づき、宅地建築に伴う申請地の取り扱いについて協議し、事前の確認調査を実施することになった。調査地点は笊川に近い遺跡北部で、平成 25 年 3 月 7 日より開始した。調査は東西 3.0 m、南北 8.7 m の調査区を設定し、重機により盛土を除去し、V 層の遺構検出面まで手掘りとした。遺構確認作業で堅穴住居跡が検出されたことから、東側を約 1.6 m 拡張し、調査区は東西 4.6 m × 南北 8.7 m の大きさとなった。基本層 V 層で遺構確認作業を行い、堅穴住居跡 2 軒、土坑 1 基、小溝状遺構群 2 群を検出した。

調査では必要に応じて、平面図・断面図を作成し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。調査は 3 月 25 日に終了し、重機による締め固めを行いながら埋め戻しを行った。



第23図 第9次調査区位置図

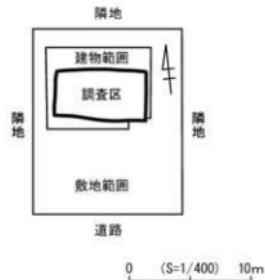
3. 基本層序

調査区内では、盛土が約90cmで、I・II層が失われ、盛土下はIII層であった。基本層はこれまでの本遺跡の基本層と共通しており(2013:第4次調査報告書参照)、V層上面まで確認した。

III層: 10YR4/6 褐色シルト 層厚約10cm 調査区北半の分布。灰白色火山灰は含まず。

IV層: 黒褐色～暗褐色粘土質シルト 層厚5～30cm 厚さが一定でないのは、耕作(小溝)の影響か。

V層: にぶい黄褐色～灰黄色粘土質シルト 層厚未確認。



第24図 第9次調査区設定図

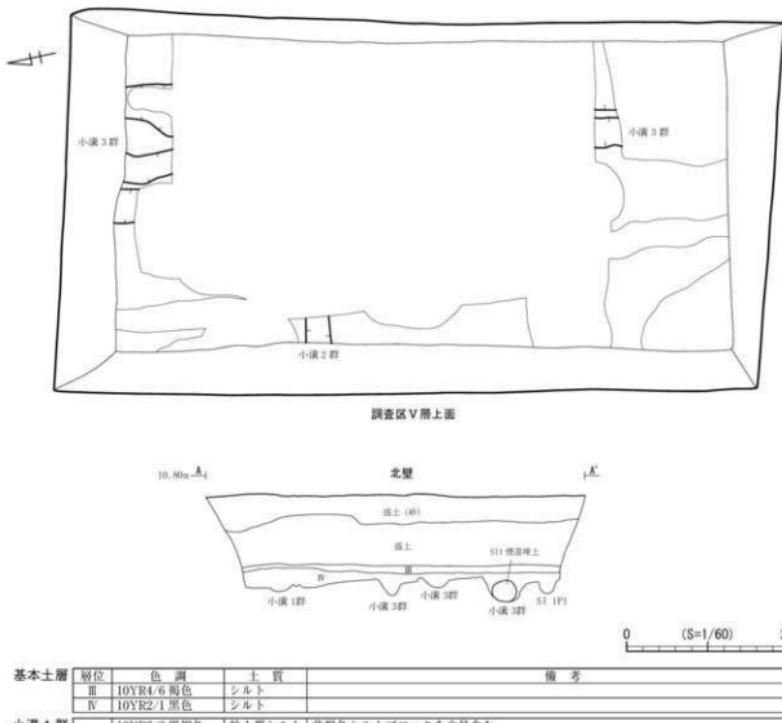
4. 発見遺構と出土遺物

調査では、V層上面で遺構を検出したが、調査区断面の観察の結果、IV層上面から掘り込まれている遺構も確認できた。検出した遺構は、竪穴住居跡2軒、土坑1基、小溝状遺構群3群(5条)、ピットである。遺物は、土師器、須恵器、鉄釘、石製品、縄文土器が出土した。

(1) 竪穴住居跡

SI1 竪穴住居跡

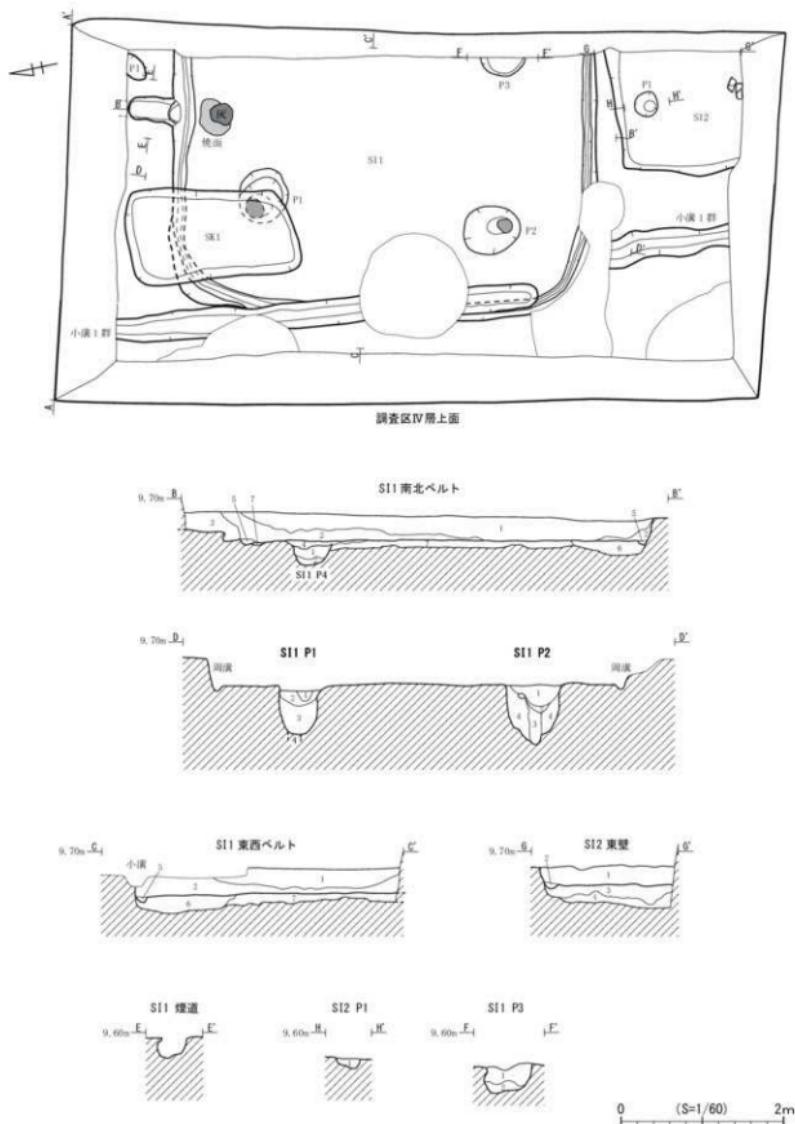
調査区北寄りに位置し、IV層上面より掘り込まれている。SI1 土坑、小溝状遺構1群より古く、小溝状遺構2群・3群より新しい。平面形は隅丸方形で、全体の約2/3を検出した。規模は東西3.3m以上、南北5.2m、深さ0.24～0.38mを測る。堆積土はブロック土を含む層もあるが、自然堆積層と考えられ、7層に分層された。カマドは、北壁に付設され、両袖がなく、煙道の一部と焚口の灰を伴う焼土層(焼面)を検出した。これは、古いカマド跡で、おそらく調査区外にある東壁に新しいカマドが存在しているものと推測される。煙道は幅30～40cmで、北側の調査



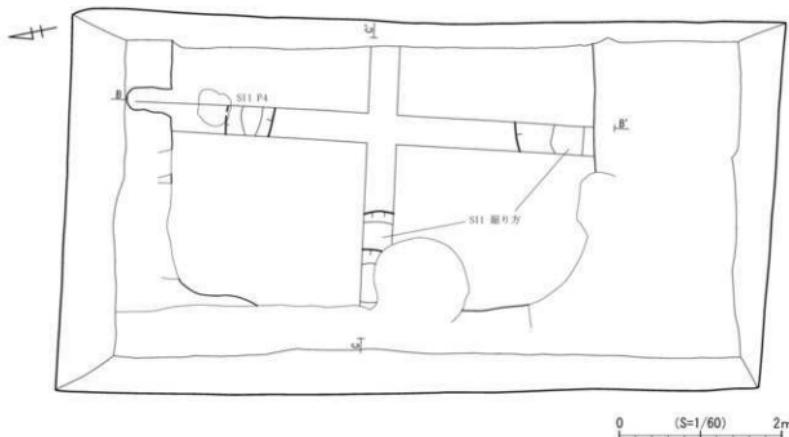
第25図 第9次調査区平面図・断面図(1)

区外に延びており長さは不明であるが、天井が残存しており、内壁面は被熱変色している。煙出しへは、調査区外の煙道先端部にあると考えられる。床面は平坦で、柱穴3基および壁際の周溝を検出した。柱穴には柱痕跡が確認でき、古いカマド跡があった北壁側床面では焼土粒、炭化物粒の分布が幅約1mの範囲で認められた。床下の掘り方は、幅1.2m、深さ0.1mで壁際を溝状にめぐる。

遺物は、土師器内黒坏・非クロロ窯、須恵器坏・鉢・壺、鐵製品（釘・刀子？）、石製品、繩文土器、石器（剥片）が出土している。床面出土遺物がほとんどなく、図示できる遺物は少ない。第28図1は外面に段は見られず、ヨコナデ、ヘラケズリ調整の内黒坏である。この他に、外面もミガキ調整した内黒坏破片が少量出土している。須恵器では、第28図2が底部回転糸切り、第28図3は底部回転ヘラキリ、ナデ調整（不規則）である。第28図4は広口の鉢で、底部付近にヘラケズリ調整を施す。第28図5は鉄釘とみられ、先端部を欠損している。第28図6は有孔石製品だが、欠損品で、全体の形状や用途は不明である。遺構の年代は、床面出土遺物がないため明確でないが、堆積土中より底部回転糸切りの須恵器坏（第28図2）が出土していることから、9世紀前葉頃である可能性が考えられる。



第26図 第9次調査区平面図・断面図(2)



SI位	色調	土質	備考	
			1	2
SI1 P1	1 IOYR3-2 暗黄褐色 2 IOYR3-3 暗褐色 3 5YR3-2 剛赤褐色 4 IOYR3-3 暗褐色 5 IOYR3-3 暗褐色 6 IOYR3-2 黑褐色 7 IOYR3-3 暗褐色	粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト	黄褐色土・焼上ブロックを含む 黄褐色土粒を多量含む 北部下面に焼土 焼上ブロックを多量含む 燐道部 焼上ブロック、炭化物を多量含む 焔口部 周溝 ぶい黄褐色土粒を多量含む 床下掘り方 ぶい黄褐色土・焼上ブロックを多量含む 掘り方	
SI1 P2	1 IOYR3-4 暗黄褐色 2 IOYR3-4 暗褐色 3 IOYR3-3 暗褐色 4 IOYR4-2 暗黄褐色	粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト	黄褐色土ブロックを少量、焼土粒微量含む 黄褐色土ブロックを少量含む 黄褐色土ブロックを多量含む 杜痕 底面極出の杜痕 図になし	
SI1 P3	1 2.5Y5/2 剛赤黄色 2 IOYR3-3 暗褐色	シルト 粘土質シルト	色々の土ブロックを多量含む 人為的か 黒褐色シルトブロックを微量含む	
SI2	1 IOYR3-3 暗褐色 2 IOYR3-2 黑褐色 3 IOYR3-3 暗褐色 4 IOYR4-2 暗黄褐色	粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト	黒褐色土ブロックを微量含む 焼土粒を少量含む 周溝 ぶい黄褐色土ブロックを多量含む 掘り方 ぶい黄褐色 土ブロックを少量含む 掘り方	
SI2 P1	1 IOYR3-3 暗褐色	粘土質シルト		

第27図 第9次調査区平面図・断面図（3）

SI2 穫穴住居跡

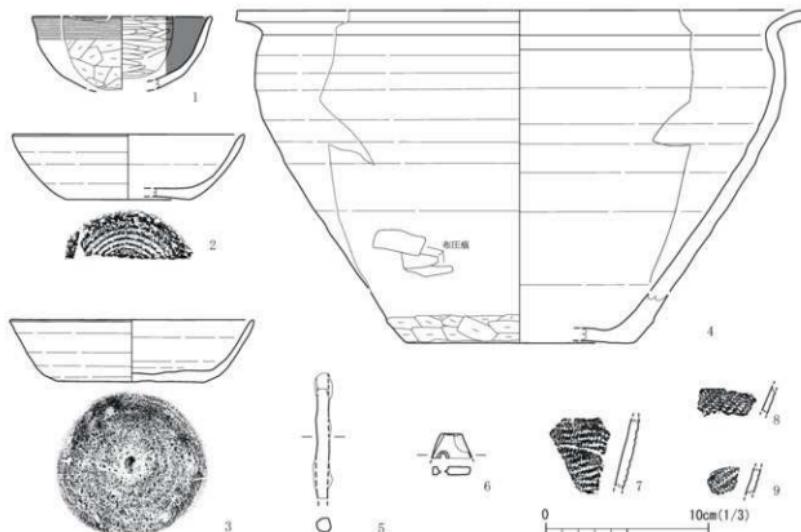
調査区南東部に位置し、IV層上面より掘り込まれている。小溝状造構3群を切る。住居全体の約1/4弱の検出に留まったとみられ、大部分は東と南の調査区外にある。平面形は、角部を確認できたことから、方形プランを呈するものと考えられる。規模は東西1.55m以上、南北1.60m以上、深さ約0.2mを測る。堆積土は、調査区壁面の観察で2層に分層され、自然堆積層とみられる。床下の掘り方も、2層に細分され、深さ最大0.28mを測る。

遺物は、土師器壺・甕の細片が少量出土しているが、国示できるものはない。甕の破片の中に、ロクロ調整の長削甕の破片が含まれている。土器の特徴から、住居跡の時期は平安時代の可能性がある。

(2) 土坑

SK1 土坑

調査区北部に位置し、V層上面で検出した。SI1 穫穴住居跡・小溝状造構3群を切ることから、掘り込み面は



調査番号	写真 図版	登録番号	出土 層位	種別	器種	残存	法量(cm)		調整・文様		備考
							器高	(口径)	底径	外面	
1 15-1	C-1	SII b	2層 土器	手造輪削器	環	口~底1/5	4.4 (11.1)	—	ヨコナデヘラケズリ	ハラミガキ凹面	
2 15-2	E-3	SII a	堆積土 須恵器	环	环	1/3	4.0	14.2	7.6	ロクロナデ	底部回転糸切り
3 15-3	E-1	SII a	1層 須恵器	环	完形	3.8	14.9	9.1	ロクロナデ	ロクロナデ	底部回転ヘラケズリ?
4 15-4	E-2	SII a	1層 須恵器	鉢	口~底1/3	20.4 (34.8)	—	13.9	ロクロナデ	ロクロナデ	底部付近ヘラケズリ? 作部に布目瓶
7 15-7	A-1	—	1層 陶文土器	深鉢	体部破片	—	—	—	織文	付着物有り	
8 15-8	A-2	—	1層 陶文土器	深鉢	体部破片	—	—	—	織文		
9 15-9	A-3	—	1層 陶文土器	深鉢	体部破片	—	—	—	織文		
5 15-6	N-1	SII b	1層 鉄製品	釘	—	—	—	—	—	特徴・備考	
6 15-5	K-1	SII	1層 石製品	不明	—	—	(7.7)	(0.8)	(0.8)	先端部欠損	
						長さ	幅	厚さ			

第28図 第9次調査出土遺物

IV層上面かさらに上層にあると考えられる。形状は隅丸長方形で、規模は東西1.2m、南北2.1m、深さ約0.1mを測る。

遺物は、土師器内黒環・壺の細片がわずかに出土した。

(3) 小溝状造構群

小溝状造構群1群

調査区西壁寄りに位置し、V層上面で検出した。SII・小溝状造構2群より新しい。この重複関係から、掘り込み面はIV層上面だったと考えられる。南北方向の溝跡1条を検出したが、北側隣接の元袋4区、南側隣接の六反田遺跡7A-1区（両者は、現在報告書作成中）でも、同じ方向の溝跡群が検出されており、1群とした小溝もそれらの一部とみられる。規模は一部搅乱を受け不明な部分があるが、長さ7.6m、幅最大0.36mを測る。堆積土は、黒褐色粘土質シルトの単層である。

遺物は、土師器壺細片が3点出土したが、詳細は不明である。

小溝状造構群2群

調査区西壁北寄りで、東西方向の1条を検出した。1群と同様に、周囲の状況などから群構成の一部と考えられる。

SI 1・小溝状遺構群1群より古い。検出範囲は限られ、長さ0.3m、幅0.27mである。堆積土は単層で、黄褐色プロック土の混じる暗褐色シルトである。

遺物は、出土していない。

小溝状遺構3群

調査区北側で3条、南側で2条を、V層上面で検出した。直線的でなく不規則だが、南北方向の小溝3条分とみられる。SII・2堅穴住居跡より古い。いずれも幅0.3m程だが、南側東端小溝は約0.8m以上と広くなっている。堆積土は、いずれも黒褐色粘土質シルトである。

遺物は、出土していない。

5.まとめ

調査区内で2軒の住居跡を検出した。出土した遺物から、SII堅穴住居跡は奈良時代、SII堅穴住居跡は平安時代と考えられる。小溝状遺構は、住居跡との重複関係・方向などから、3群で3時期の変遷が考えられる。調査地付近は、耕作地、集落（居住地）という土地利用が奈良・平安時代を通じて行われたことを示している。また、縄文土器が僅かに出土している（第28図7～9）。下層に縄文時代の層あるいは遺構の存在する可能性がある。



1. 調査区全景（南から）



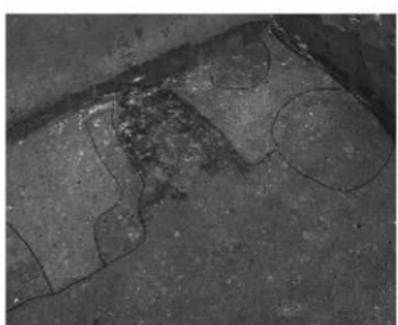
2. 調査区北壁断面（南から）



3. SI1 完掘全景（南から）



4. SI1 東西ベルト断面（南から）



5. SI1 旧煙道検出（南西から）



6. SI1 旧煙道検出（南西から）

写真図版 12 第9次調査（1）



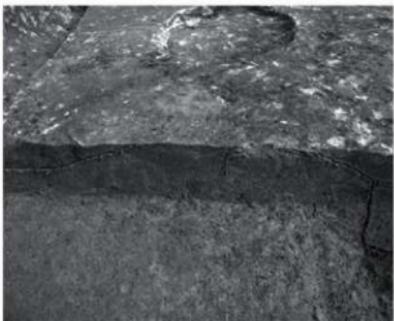
1. SI1 旧カマド周辺焼面・炭水化物分布状況（南から）



2. SI1 旧煙道完掘（南から）



3. SI1 旧カマド内焼面検出（南から）



4. SI1 旧カマド内焼面検出（西から）



5. SI1 旧煙道部天井残存状況（南から）



6. SI1 旧カマド周辺掘り方断面（西から）

写真図版 13 第9次調査（2）



1. SI1 P1 完掘 (西から)



2. SI1 P2 断面 (西から)



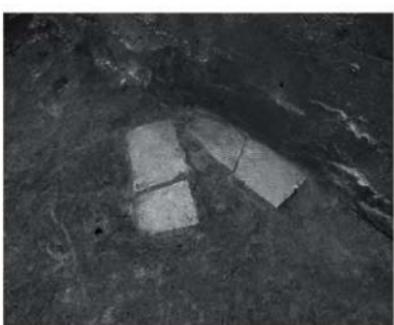
3. SI1 P3 断面 (西から)



4. SI2 完掘 (西から)



5. SI2 断面 (西から)



6. SI2 床面遺物出土状況 (北西から)



写真図版 15 第9次調査出土遺物

第5節 大野田官衙遺跡

I. 遺跡の概要

大野田官衙遺跡は、仙台市太白区大野田に所在する。JR仙台駅の南約5.2kmに位置し、名取川と荒川に挟まれた自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は、東西約0.19km、南北約0.26kmで、標高は約10~12mである。

周辺には元袋遺跡、袋前遺跡、六反田遺跡、大野田古墳群、王ノ塙遺跡、下ノ内遺跡、伊古田遺跡、伊古田B遺跡などが隣接して分布し、平成6年度以降、土地区画整理事業に伴い、継続して発掘調査が行われている。これまでの調査では、縄文時代、古墳時代、古代の集落跡が確認され、さらに古墳時代の石棺墓や木棺墓、円墳、平安時代の水田跡も調査されている。

大野田官衙遺跡は、地下鉄宮沢駅周辺の土地区画整理事業に伴う発掘調査の中で発見された官衙遺跡である。平成21年度には、官衙関連遺構が確認されている範囲が「大野田官衙遺跡」として登録されている。これまでの調査で、6棟の大型掘立柱建物跡とそれを方形に開む溝跡が確認されている。発見された6棟の掘立柱建物跡は、概ね真北を基準とする南北棟で、規則的に配置されている。東西列の建物は、構造や規模を同じくする掘立柱建物跡が向かい合って配置される。その最も北側の建物の間に東西中軸線上に、さらに建物が配置されている。

これら大野田官衙関連遺構の遺物出土量は比較的少ないが、遺跡の位置関係や建物の基準が真北で共通することから、7~8世紀初頭の陸奥国府と推定される郡山遺跡Ⅱ期官衙との関連性が指摘されている。また、その廃絶時期については、出土遺物の検討から8世紀初頭あるいは8世紀中葉と考えられている。

II. 第19次調査

1. 調査要項

遺跡名 大野田官衙遺跡

(宮城県遺跡登録番号 01566)

調査地点 仙台市太白区大野田字袋前21・22・
23・1・24の各一部、57(6-
2BBL)

調査期間 平成24年12月10日~13日

調査対象面積 建築面積 85.3nf

調査面積 8.4nf

調査原因 個人住宅建築工事

調査主体 仙台市教育委員会

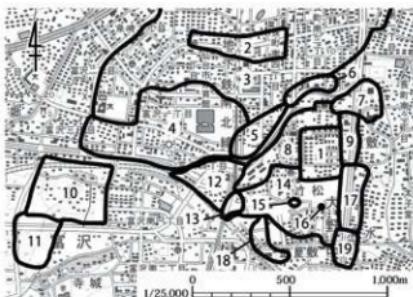
調査担当 仙台市教育生涯学習部

文化財課調査調整係

担当職員 主査 平間 亮輔
文化財教諭 橋本 勇人
文化財教諭 伊藤 翔太

2. 調査に至る経過と調査方法

調査は、申請者より平成24年11月12日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届け出について」(平成24



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	大野田官衙遺跡	集落跡・官衙跡	自然堤防	縄文~中世
2	富崎遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文~平安・近世
3	下ノ内遺跡	盆地地・水田跡	自然堤防	後期田石器~近世
4	山口遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	縄文~中世
5	下ノ内遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	縄文~中世
6	袋東遺跡	盆地地	自然堤防	古墳~平安
7	元佐遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	弥生~古代~近世
8	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文~古代~近世
9	大野田遺跡	祭祀・集落跡	自然堤防	縄文~古代
10	富沢遺跡	城址跡	自然堤防	中世
11	鍛冶屋敷前遺跡	集落跡	自然堤防	平安
12	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文~中世
13	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文~古墳
14	大野田古墳群	円墳	自然堤防	古墳
15	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳
16	鳥居塚古墳	円墳	自然堤防	古墳
17	王ノ塙遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	縄文~中世
18	伊古田B遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	古墳~古代
19	里屋敷遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	古代~中世

第29図 大野田官衙遺跡の位置と周辺の遺跡

年11月16日付H24教生文第122・289号で回答)に基づき、平成24年12月10日～13日に実施した。建築範囲内に東西8m、南北4mの調査区を設定し、重機により盛土層を除去する予定であったが、掘削した結果盛土層の厚さが170cmあったため調査区の東西長を縮小し、5.7mとした。なお、安全対策から調査区内に段差を設けたため、実際の調査区は東西3.1m、南北2.7mである。

道構確認作業は基本層V層上面(GL-190cm)で実施し、溝跡2条(SD1・2)を確認した。掘削深度の制限から平面的な精査はGL-220cmまでとしたが、溝跡の底面までの掘削深度は当初予定の最深深度GL-250cmを超えることが予想されたため、施工業者の了承を得て、東西1m、南北2.5mの範囲については最深でGL-300cmまで掘り下げた。

精査終了後、写真撮影と平面図(1/20)

および調査区西壁断面図(1/20)を作成し、基準点の座標測量も行なった。埋め戻しは13日に重機で締め固めを行いながら実施した。

3. 基本層序

調査区内の盛土層は170cmで、その直下に基本層を2層確認した。なお、当該調査区の周辺では富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う調査が広範囲に行われているので、今回はそれらの基本層序を使用している。当調査区ではそのⅡ～Ⅳ層が欠落している。

I層：10YR4/1褐灰色粘土。調査区全域に分布し、層厚15～20cm。現代水田の耕作土である。

V層：10YR4/4褐色粘土。調査区全域に分布し、上面が道構確認面である。

4. 発見遺構と出土遺物

道構は、V層上面で溝跡2条を確認した。遺物は、土師器、陶器、鉄滓が出土した。

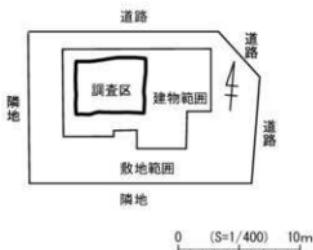
(1) 溝跡

SD1 溝跡

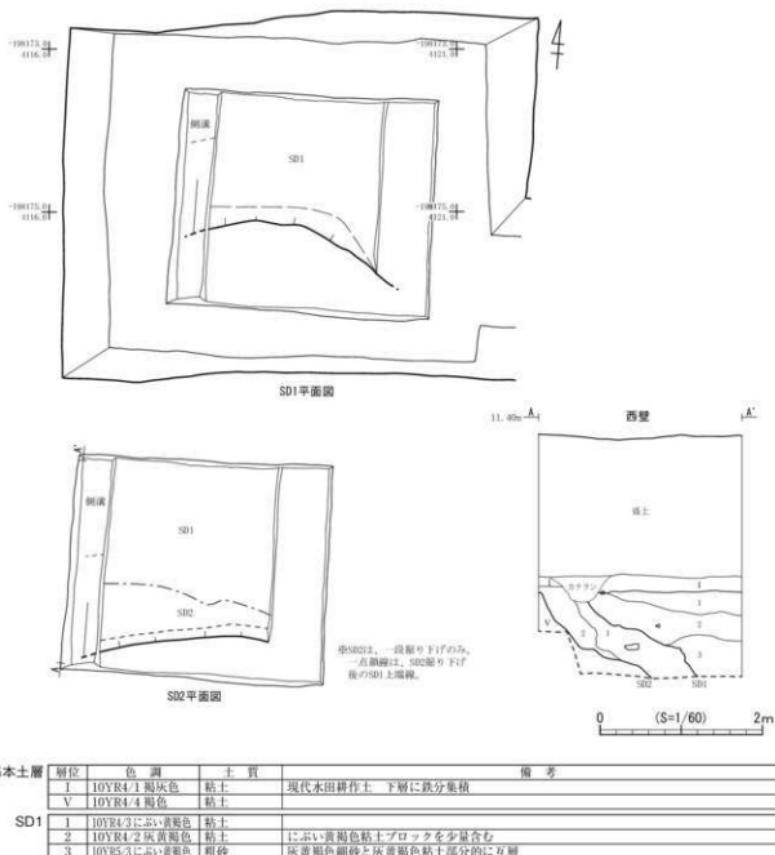
南側の肩を検出したのみであるので規模は不明であるが、やや蛇行する東西方向の溝跡と推定される。幅は2.5m以上で、V層上面から100cm(GL-300cm)まで掘り下げたが底面は検出できなかった。堆積土は3層に分層され、



第30図 第19次調査区位置図



第31図 第19次調査区設定図



第32図 第19次調査平面図・断面図

1～2層は粘土層であるが3層は砂層である。SD2溝跡より新しい。遺物は土師器片、陶器片（瀬戸美濃・碗、18世紀代）、鉄滓などが出土した。この内、土師器坏（第33図1）、陶器片（写真図版17-4）を掲載した。

SD2溝跡

大部分をSD1溝跡に削平されているため、南側の肩と堆積土が部分的に遺存するのみである。東西方向の溝跡と推定される。幅は2m以上で、V層上面から100cm(GL-300cm)まで掘り下げたが底面は検出できなかった。堆積土は黒褐色～暗褐色の粘土層で、2層に分層される。遺物は土師器片が約20点出土した。この内、内面黒色処理のある土師器坏（第33図2）、須恵器蓋（第33図3）を図示した。

The figure consists of three parts. Part 1 shows a cross-section of a vessel with a scale bar of 10cm (1/3). Part 2 shows another vessel's cross-section. Part 3 shows a photograph of a fragment. A table below provides detailed information about the artifacts.

掲載番号	写真登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調査・文様		備考
							高さ	口径	底径	外面	内面	
1	17-1	C-1	SD1	素口上部	環	破片1/6	(4.2)	(14.7)	—	ヨコナデハウケズリ	ハラミガキ	
2	17-2	C-2	SD2	素口上部	環	破片1/4	(3.0)	(16.3)	—	マメツヨコナデ ハラ ケズリ	ハラミガキ 黒色処理	
3	17-3	E-1	SD2	須磨器	蓋	1/4	(1.8)	(18.0)	—	ロクロナデ	ロクロナデ ハラナデ	扁平 削微・備考
—	17-4	I-1	SD1	施釉陶器	碗	口～底深	—	—	—	素口 施釉碗 底輪 跡輪	18C	

第33図 第19次調査出土遺物

5.まとめ

今回の調査で検出した溝跡は溝跡2条である。SD1溝跡はI層直下にあることと、堆積土中ではあるが18世紀代の瀬戸美濃・碗が出土していることから近世の溝跡と推定される。堆積土下層が砂層であることから水路であったと考えられる。SD2溝跡は部分的な調査であるため全体像は不明である。しかし、確認できた南辺が比較的直線的であることと、堆積土の状況、位置関係から大野田官衙の北辺の溝跡である可能性がある。



1. SD1・2 検出（西から）

2. SD1・2断面（東から）



写真図版17 第19次調査出土遺物

第6節 山口遺跡

I. 遺跡の概要

山口遺跡は、太白区富沢一丁目ほかに所在する。仙台市南東部、JR長町駅から南西方向約1.8kmのところに位置する。名取川とその北側を東へ流れる笊川によって形成された自然堤防から北に広がる後背湿地にかけて立地する。標高は約11～14mで、遺跡の広がりは東西約850m、南北約450mほどである。

土地区画整理事業に伴う昭和51年(1976)の水路工事で発見された遺跡であり、昭和53年(1978)、同事業に関連して仙台市教育委員会による発掘調査が実施された。その後、共同住宅等の建設工事に伴う18回の調査が行われた。縄文時代早期から前期の遺物包含層は、昭和56年(1981)・57年(1982)の仙台市体育館建設に伴う調査で地表下約3mから発見されている。縄文時代中期から後期の遺構、遺物包含層は地表下約2mから発見され、中期末の埋設土器1基、後期の土坑13基等の遺構が確認されている。

弥生時代の遺構としては、自然堤防から後背湿地への変換点付近で後期の水田跡が発見されている。昭和63年(1988)・平成元年(1989)の共同住宅建設に伴う調査では推定24区画以上の水田跡が検出された。古墳時代では中期の溝跡と遺物が発見されている。奈良時代の遺構には堅穴住居跡12軒と烟跡がある。平安時代では堅穴住居跡6軒と烟跡、水田跡が確認されている。中世の遺構としては溝跡、掘立柱建物跡、井戸跡からなる屋敷跡がある。

II. 第19次調査

1. 調査要項

遺跡名 山口遺跡

(宮城県遺跡登録番号 01178)

調査地点 仙台市太白区泉崎一丁目34番4
の一部

調査期間 平成25年1月15日～2月18日

調査対象面積 建築面積 289.0m²

調査面積 51.0m²

調査原因 共同住宅建築工事

調査主体 仙台市教育委員会

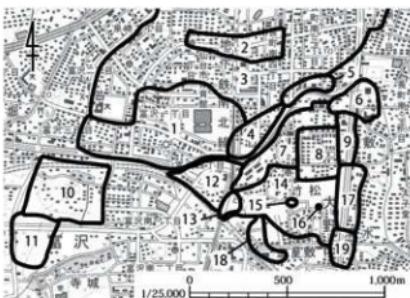
調査担当 仙台市教育局生涯学習部
文化財課調査調整係

担当職員 主査 平間 亮輔
文化財教諭 佐藤 洋平

2. 調査に至る経過と調査方法

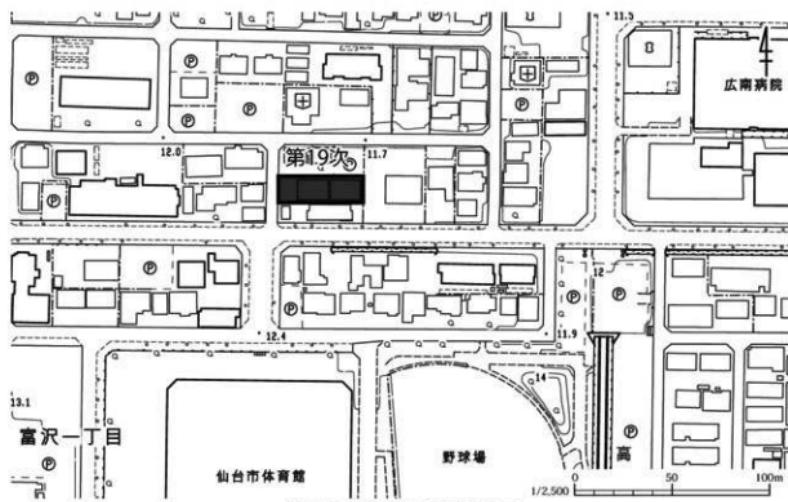
調査は、申請者より平成24年11月22日付で提出された「埋蔵文化財の取り扱いについて」(協議)(平成24年12月6日付H24教生文第129・46号で回答)に基づき実施した。

確認調査は平成25年1月15日～2月18日に実施した。建築範囲内に東西8m、南北7mの調査区を



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	山口遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防・後背湿地	縄文～中世
2	泉崎浦遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防・後背湿地	縄文～平安・近世
3	宮沢遺跡	盆地地・水田跡	後背湿地	後期前石器～近世
4	下ノ内浦遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	縄文～中世
5	安東遺跡	散在地	自然堤防	古墳～平安
6	元袋遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	弥生～古代～近世
7	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～古代～近世
8	大野田官塙遺跡	集落跡・官衙跡	自然堤防	縄文～中世
9	大野田遺跡	祭祀・集落跡	自然堤防	縄文～古代
10	富沢熊跡	城垣跡	自然堤防	中世
11	嚴治屋敷前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・平安
12	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～中世
13	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・古墳～古代
14	大野田古墙群	古墳	自然堤防	古墳
15	春日古墳	古墳	自然堤防	古墳
16	鳥居塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
17	王ノ墳遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	縄文～中世
18	伊古田B遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	古墳～古代
19	重屋敷遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	古代～中世

第34図 山口遺跡の位置と周辺の遺跡



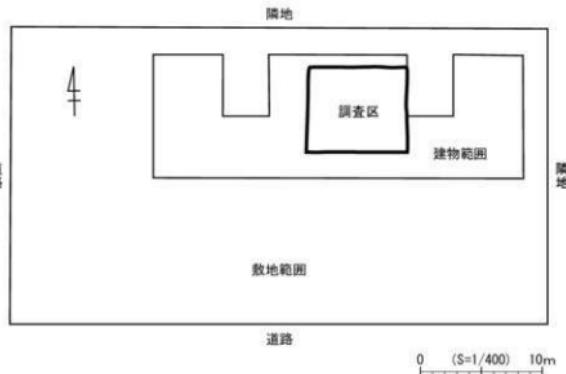
第35図 第19次調査区位置図

設定し、重機で盛土及び基本層1層を除去した（GL - 1.3 ~ 1.4m）。なお、盛土除去後の調査区の大きさは、東西7.3 ~ 7.8 m、南北6.6 ~ 6.9 mである。

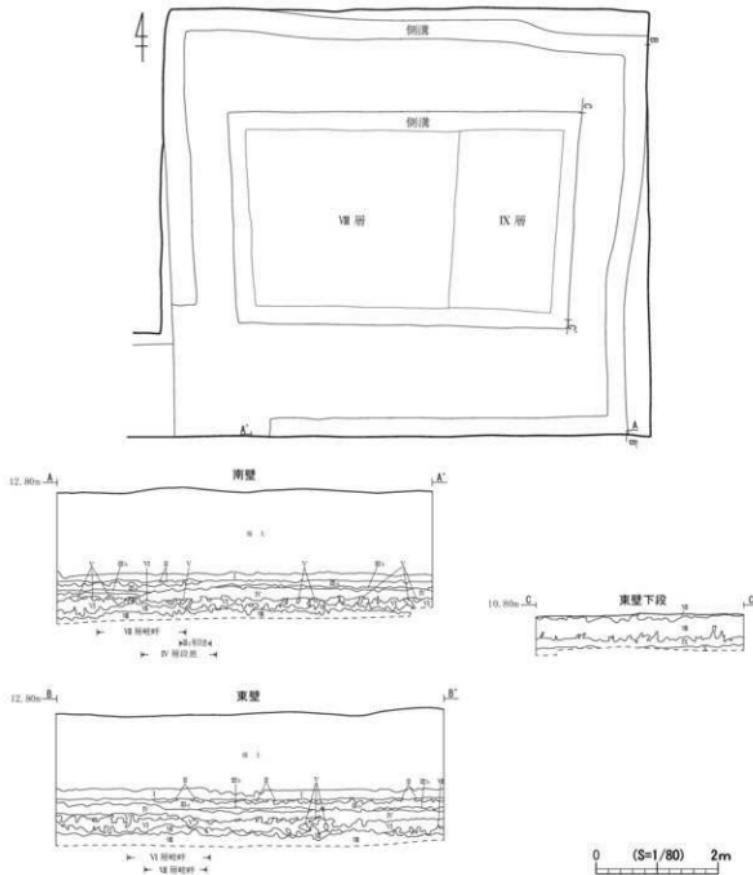
造構確認作業は基本層4層上面～7層上面で実施し、水田跡3面を確認した。7層の精査終了後、下層調査区を東西5.4 ~ 5.8 m、南北3.5 mに設定して8層中まで掘り下げ、その中の東西1.7 m、南北2.9 mの範囲は9層中（GL - 250cm）まで掘り下げた。

検出した水田跡の平面図は簡易造り方によって1/40で作成し、断面図は調査区南壁と東壁において1/20で作成した。写真は35mmモノクロとリバーサル及びデジタルカメラで撮影した。

調査は2月13日に終了したが、埋め戻しは2月18日に重機（BH0.4）で締め固めを行いながら実施した。



第36図 第19次調査区設定図



基本土層	剖位	色調	土質	備考
I	10YR3/2 黒褐色	粘土	鉢分を塊状・砂粒を少量含む 現代水田	
II	10YR2/2 黒褐色	粘土	暗灰黄色粘土ブロック・砂粒を少量含む	
III a	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土	砂粒を多量含む 水田耕作土	
III b	7.5Y5/1 灰色	砂	灰色粘土が細かな互層 水成堆積 Ⅲ a層の母材削	
IV	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	砂粒を多量、木炭粒を少量含む 水田耕作土	
V	2.5Y5/3 黒褐色	砂	水成堆積削	
VI	2.5Y2/1 黒色	粘土	部分的に埴刷土を多量に塊状に巻き上げる 水田耕作土	
VII	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土	埴刷土を少量、塊状に巻き上げる	
VIII	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	泥炭質 黄灰色細砂と灰黄色粗砂の混れた互層	
IX	10YR2/1 黒色	粘土	泥炭質	
X	10YR4/2 暗黄褐色	粘土	植物遺体を少量含む	

第37図 第19次調査区平面図・断面図

3. 基本層序

盛土下に基本層10層を確認した。

I層：10YR 3/2 黒褐色粘土。現代水田耕作土である。酸化鉄を斑文状に少量、砂粒を少量含む。

II層：10YR 2/2 黒褐色粘土。層厚約5cmで部分的に分布する。25Y4/2 暗灰黄色粘土ブロック（O10～20mm）を少量、砂粒を少量含む。

IIIa層：25Y4/2 暗灰黄色粘土。層厚5～15cmで全域に分布する。水田耕作土と推定される。砂粒を多量に含む。

IIIb層：7.5Y5/1 灰色細砂。層厚5～10cmで部分的に分布する。5Y4/1 灰色粘土を含む水成堆積層で、3a水田耕作土の母材層と推定される。

IV層：25Y3/1 黑褐色粘土。層厚10～30cmで全域に分布する。水田耕作土と推定され、砂粒を多量、木炭粒を少量含む。

V層：25Y5/3 黄褐色粗砂。層厚10～20cmで部分的に分布する。水成堆積層と推定される。

VI層：25Y2/1 黒色粘土。層厚10～30cmで全域に分布する。水田耕作土と推定される。7層ブロック（斑文状）を多量に巻き上げている。

VII層：25Y4/2 暗灰黄色粘土。層厚5～15cmでほぼ全域に分布する。水田耕作土と推定される。8層ブロック（斑文状）を小量巻き上げている。

VIII層：25Y3/1 黑褐色泥炭質粘土。25Y4/1 黄灰色粘土と10YR4/2 灰黃褐色粗砂の乱れた互層。

IX層：10YR2/1 黒色泥炭質粘土。

X層：10YR4/2 灰黃褐色粘土。植物遺体を少量含む。

4. 発見遺構と出土遺物

発見した遺構は水田跡3面である。重機で基本層1層を除去した際、直下の基本層2層は部分的に遺存するのみであったので、実際に重機で検出した面は基本層3層上面である。

精査に当たっては、最初に調査区周囲に側溝を掘って基本層序を確認し、調査区壁面の観察によって耕作土の可能性のある層を確認した。その結果、IIIa・IV・VI・VII層については下面の凹凸が激しく、層中に直下層を巻き上げている状況が明確であったため、耕作土の可能性が高いと考えられた。IIIa層については重機で上面を検出済であったので精査はIV層から開始することとした。IV・VI・VII層のそれぞれの直上層を除去する際に掘り下げ深度を加減し、畦畔の確認作業を行なながら各層を除去した。その結果、IV層では水田面の段差、VI・VII層では畦畔を確認できた。

(1) 水田跡

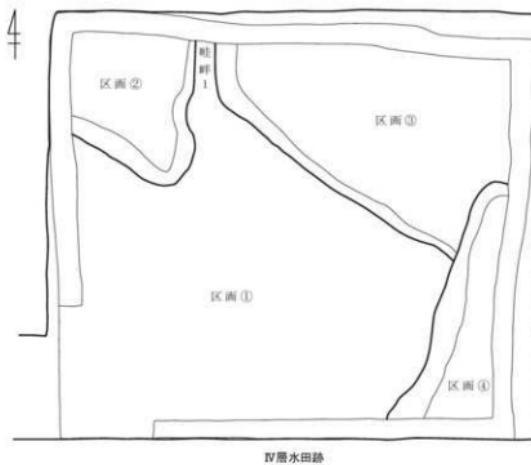
IV層水田跡

IIIa～IIIb層中において段差と畦畔1条を確認した。調査区壁面では直上の自然堆積層IIIb層に覆われている箇所もあるが、平面ではIIIb層の分布は部分的であり、ほとんどがIIIa層水田跡の耕作によって攪拌されていて、遺存状況は良くない。

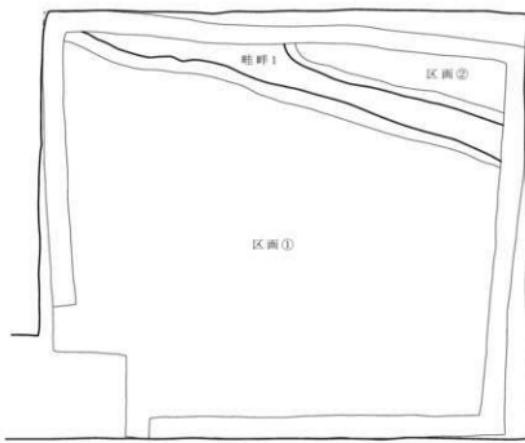
耕作土は基本層IV層である。層厚は10～30cmで下面は起伏があり、直下層の粗砂（基本層V層）を層中に多量に含んでいる。

畦畔は耕作土を盛り上げて造られており、南北方向のものを1条（畦畔1）検出した。検出長は約1mで、上端幅約30cm、下端幅約80cm、高さ約3cmである。段差は北西～南東方向のものと、それには直交する北東～南西方向の2ヶ所確認した。段差の比高差は1～10cmである。

段差と畦畔によって水田区画①～④が認められるが、部分的な検出のため各区画の規模は不明である。水田面の



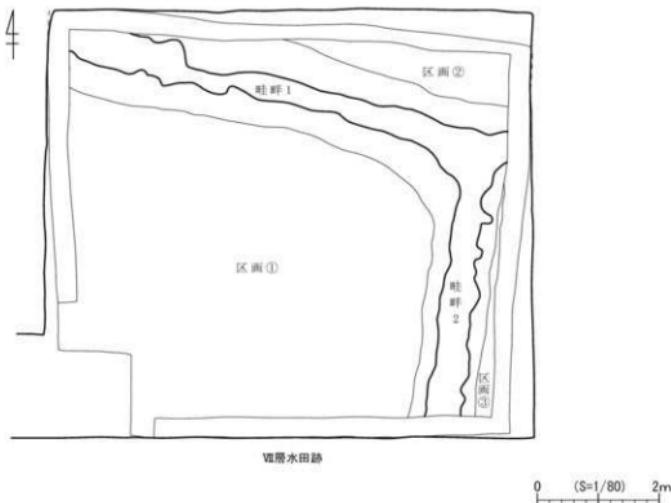
IV層水田跡



V層水田跡

0 (S=1/80) 2m

第38図 第19次調査平面図(1)



第39図 第19次調査平面図（2）

標高は検出した区画が部分的であるが、南西側の区画①が最も高く約11.00mで、北西側の区画②、北東側の区画③、東側の区画④の順に低くなっていると推定される。最も低い区画④の標高は概ね10.9m程度である。

VI層水田跡

IV層下部において畦畔1条を確認した。水田面はIV層水田跡耕作土とV層（粗砂）が入り込んだ凹凸が激しいが、遺存状況は比較的良好である。

耕作土は基本層VI層である。層厚は10~30cmで下面は起伏があり、直下層の基本層VII層を層中にブロック状に多量に巻き上げている。

畦畔は耕作土を盛り上げて造られており、北西~南東方向のものを1条（畦畔1）検出した。検出長は約7mで、上端幅約30cm、下端幅約80cm、高さは5~10cmである。この畦畔は直下のVII層水田跡の畦畔1とほぼ同じ場所で踏襲されていることから、位置があまり変わらない基軸となる畦畔である可能性がある。

区画①・②が認められるが、部分的な検出のため規模は不明である。水田面の標高は、区画②については部分的な検出なので不明であるが、区画①は10.78~10.82m程度で、南西から北東方向に向かって低くなっている。

耕作土中から土師器片1点、須恵器片1点（写真図版20-1）が出土した。

VII層水田跡

VI層下部において畦畔2条を確認した。水田面はVI層水田跡に伴う耕作によって搅拌されているが、遺存状況は比較的良好である。

耕作土は基本層VII層である。層厚は5~15cmで下面は起伏があり、直下層の基本層VIII層をブロック状に小量巻き上げている。

畦畔は耕作土を盛り上げて造られており、北西~南東方向の畦畔1とそれにはば直交する畦畔2の2条を確認し

た。畦畔1はVI層水田跡の畦畔1の直下にある。検出長は約7mで、上端幅15～50cm、下端幅約140cm、高さは約10cmである。畦畔2は検出長約4m、上端幅30～50cm、下端幅約100cm、高さは約5cmである。

畦畔によって水田区画①・②・③が認められるが、部分的な検出のため規模は不明である。水田面の標高は、区画②・③については部分的な検出なので不明であるが、区画①は10.65～10.73m程度で、南西から北東方向に向かって低くなっている。

遺物は出土しなかった。

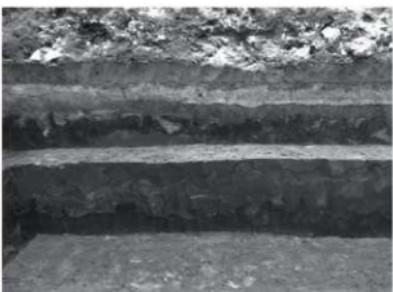
5.まとめ

今回の調査で検出した遺構は水田跡4面である。このなかで調査区断面で確認した水田跡（Ⅲa層水田跡）は、記述からは除外した。

IV層・VI層・Ⅶ層水田跡の時期については、遺物がほとんど出土しなかったため明確ではない。VI層水田跡耕作土中から土師器片1点、須恵器片1点が出土していることからIV層・VI層水田跡は古墳時代以降、Ⅶ層水田跡はVI層水田跡と構造が似ていることからこれも同様の時期と考えられる。今後、周辺の調査結果と照合して時期を確定していく必要がある。



1. 調査区全景（西から）



2. 東壁断面（西から）

写真図版 18 第19次調査（1）



1. 4層水田跡確認状況（西から）



2. 4層水田跡検出状況（西から）



3. 6層水田跡確認状況（西から）



4. 6層水田跡検出状況（西から）



5. 7層水田跡確認状況（西から）



6. 7層水田跡検出状況（西から）

写真図版19 第19次調査(2)



掲載番号	写真番号	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存
—	20-1	E-1	IV層	四邊形	(長角)瓶		
測量(cm)			特徴・備考				
—	—	—	大戸窓?	自然釉			

写真図版20 第19次調査出土遺物

第3章 平成25年度の調査

第1節 洞ノ口遺跡

I. 遺跡の概要

洞ノ口遺跡は仙台市北東部、宮城野区岩切に所在する。JR 仙台駅の北東約8kmに位置し、七北田川左岸（JR 岩切駅の北側隣接地）の自然堤防上から後背湿地に立地している。標高は7～8mで、微高地には13～15世紀前半頃の屋敷跡、15世紀後半～16世紀後半の土塁を伴う城館跡そして近世墓地が、北側低地では平安から江戸時代の水田跡がそれぞれ変遷したことが、これまでの調査で確認されている。また遺物は、中世陶磁器・木製品（木簡など）が多数出土している。

遺跡の北西側丘陵上には、留守氏の居城である史跡岩切城跡がある。後半の城館跡は、この留守氏と直接的に関連する構造とみられている。また、遺跡南部（城館跡南側）の川沿いに市・町があったという中世（15世紀）の記録が残されている（『余目文書』）。

II. 第22次調査

1. 調査要項

遺跡名 洞ノ口遺跡

（宮城県道跡登録番号 01372）

調査地点 仙台市宮城野区岩切字洞ノ口164-1

調査期間 平成25年5月21日～6月4日

調査対象面積 建築面積 9771m²

調査面積 48.2m²

調査原因 個人住宅建築工事

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育生涯学習部文化財課

調査調整係

担当職員 主査 平間 亮輔

文化財教諭 佐藤 高陽

文化財教諭 千葉 悟

文化財教諭 千葉 靖彦



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	洞ノ口遺跡	集落跡・城館跡・屋敷跡・水田跡	自然堤防	古墳～近世
2	岩切城跡	城跡	丘陵	中世
3	羽黒前遺跡	城館跡・宗教遺跡	丘陵	中世～近世
4	化粧坂城跡	城館跡	丘陵	中世
5	東光寺横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
6	東光寺遺跡	城館跡・石窟仏群・寺院跡・集落跡・板碑群	丘陵斜面	中世
7	若宮前遺跡	城館跡・信仰遺跡	丘陵斜面	縄文～近世
8	今市遺跡	集落跡・盆地	自然堤防	平安～中世
9	鴻ノ巣遺跡	集落跡・屋敷跡・水田跡	自然堤防	弥生～中世
10	新田遺跡	集落跡・屋敷跡・水田跡	自然堤防	縄文～古墳～近世

第40図 洞ノ口遺跡の位置と周辺の遺跡

2. 調査に至る経過と調査方法

調査は、申請者より平成25年5月13日付で提出された、「埋蔵文化財発掘の届出について」（平成25年5月20日付 H24教生文第123-74号で回答）に基づき実施した。調査地点は、主要地方道泉・塩釜線に近い遺跡南部で、平成25年5月21日より開始した。調査は住宅建築予定地内に東西9m、南北5mの調査区を設定し、重機により盛土・I層を掘削、それ以下の層を手掘りとした。V層上面で遺構検出作業を行い、溝跡5条、土坑8基、ピット19基を検出した。調査区断面の観察で、IV層からの掘り込みを確認できた構造もある。

調査では、必要に応じて平面図・断面図を作成し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。調査は6月4日に終了し、重機による締め固めを行いながら埋め戻しを行った。



第41図 第22次調査区位置図

3. 基本層序

調査区内では、約0.5mの盛土下層に、基本層を5層確認した。

I層：2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルト 層厚約10cm 現代の畑耕作土。

III層：10YR3/3暗褐色粘土質シルト 層厚約10cm 細かな砾を少量含む。

IV a層：10YR3/1黒褐色粘土質シルト 層厚約10～17cm III層土ブロックを含む。

IV b層：10YR2/2黒褐色粘土 層厚20～32cm 褐色土ブロック・炭化物を含む。

V層：10YR4/4褐色シルト 遺構検出面 層厚未確認 時期は古代。



第42図 第22次調査区設定図

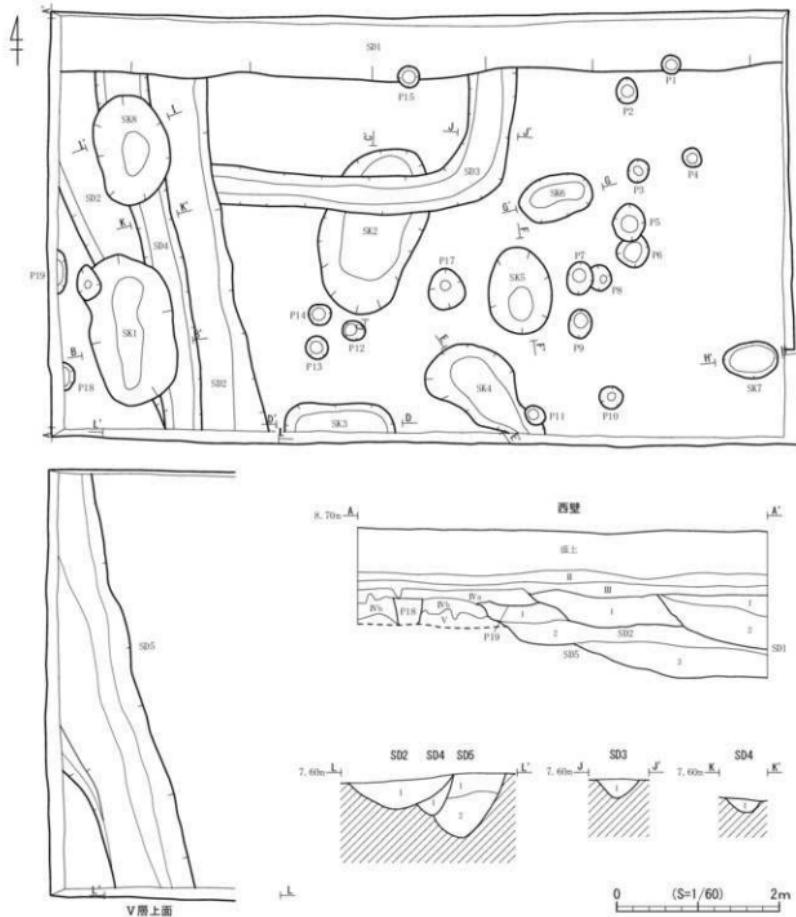
4. 発見遺構と出土遺物

検出した遺構は、溝跡5条、土坑8基、ビット19基である。

(1) 溝跡

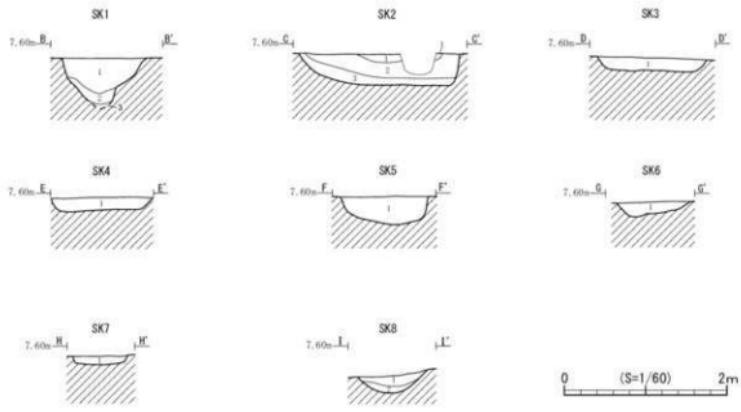
SD1 溝跡

調査区北壁寄りに位置し、V層上面で検出したが、調査区断面の観察ではIII層下（IV a層上面相当か）より掘り込まれている。東西方向の溝跡で、規模は調査区内で上端幅0.7m以上、長さ8.86m以上、深さ0.66mを測る。堆積土は2層に分層される。南側の肩部付近のみが調査区内で検出され、北側の調査区外に遺構の大部分が広がつ



基本土層	剖位	色調	土質	備考	
	I	2.5Y10R4/6 黄褐色	砂	現代の盛土	
	II	25Y3/3 黄オーレー色	砂質シルト	現代の耕作土	
	III	10YR3/3 嫩褐色	粘土質シルト	細繊を少量含む	
	IV a	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	Ⅲ層を斑状に含む	
	IV b	10YR2/2 黒褐色	粘土	褐色シルトブロック、炭化物粒を含む	
	V	10YR4/4 黄褐色	シルト	鉄分粒を斑状に含む	
SD1	1	10YR3/1 黑褐色	粘土質シルト	炭化物粒を含む	
	2	10YR3/1 黑褐色	シルト	V層ブロックを含む	
SD2	1	10YR3/1 黑褐色	シルト	炭化物粒を含む	
SD3	1	10YR3/1 黑褐色	粘土質シルト	暗灰黄色粘土ブロックを少量含む	
SD4	1	10YR2/1 黑褐色	粘土質シルト	暗灰黄色粘土ブロックを含む	
SD5	1	10YR3/1 黑褐色	粘土	炭化物粒を含む	
	2	10YR3/1 黑褐色	粘土	黄褐色砂質シルトを斑状に含む	

第43図 第22次調査区平面図・断面図(1)



剖面	色調	土質	備考	
SK1	1 10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	炭化物を含む	
	2 10YR4/2 深黄褐色	シルト	黒褐色粘土質シルトブロックを含む	
	3 10YR5/6 黄褐色	砂質シルト		
SK2	1 10YR4/6 黑褐色	砂質シルト	黒褐色シルトブロックを含む	
	2 10YR3/1 黑褐色	シルト	炭化物粒を少量含む	
	3 2.5Y4/2 暗灰褐色	粘土	黒褐色シルトを塊状に含む	
SK3	1 10YR3/1 黒褐色	粘土	炭化物粒を少量含む	
SK4	1 10YR3/3 暗褐色	シルト	褐色シルトブロックを含む	
SK5	1 2.5Y3/1 黑褐色	粘土	暗灰褐色粘土ブロックを少量含む	
SK6	1 10YR3/1 黑褐色	シルト	鐵分粒を極少量含む	
SK7	1 7.5YR2/1 黑色	シルト		
SK8	1 10YR2/1 黑色	粘土	炭化物粒を多量含む	
	2 10YR2/1 黑色	粘土	V層ブロックを含む	

第44図 第22次調査区平面図・断面図(2)

ているものと考えられることから、本来の規模は不明であり、溝底を確認することはできなかった。SD2・3・4・5溝跡と重複し、遺構が最も新しい。また、大規模な溝跡である可能性がある。

遺物はいずれも破片で、常滑産壺6点、山茶碗窯系片口鉢1点、在地産陶器（白石窯）壺4点（第45図4）、他に、土師器長胴壺1点が出土している。溝跡の一部の精査に留まつたことから、出土遺物が遺構の年代決定資料となるか、判断が難しい。しかし、在地陶器が一定量含まれていることから、少なくとも13C後半～14C前半（鎌倉時代後半）頃かそれ以降と考えられる。

SD2 溝跡

調査区西部に位置し、調査区西壁断面で、IV a層上面より掘り込まれているのを確認した。南北方向の溝跡で、規模は上幅1.95m以上、長さ約5.5m以上、深さ38cmを測る。上幅は北へ向かって広くなる。断面形は上部が緩やかに広がるU字状である。堆積土は黒褐色（10YR3/1）シルトの單層である。SD1溝跡、SK1土坑より古く、SD3・4・5溝跡、SK8土坑より新しい。

遺物はいずれも破片で、源美産壺1点、常滑産壺13点（第45図5・6、写真図版24-6）、薄手小型の壺（あるいは壺）3点、山茶碗窯系片口鉢2点（写真図版24-5）、小舞庄痕のある壁土片（スサ？）1点、馬齒1点、他に、土師器長

胴壺片8点（第45図1）、内黒环1点が出土している。常滑産壺のうち、第45図5は発達がまだ充分でないN字口縁の壺で、およそ13世紀後半頃のものと考えられる。小型壺はSD4溝跡の破片と接合し、SK1土坑より同一個体と考えられる破片が出土した。また、渥美壺などがあり、在地産陶器が出土していないことなど古い様相を示すが、IVa層上面から掘り込まれており、本遺構は掘り直している可能性が考えられる。

SD3溝跡

調査区北西部に位置し、V層上面で検出した。掘り込み層位は、確認できなかった。東西方向の溝が東端で北へほぼ直角に曲がる溝跡である。規模は上幅約60cm、深さ18~24cmを測り、断面形はU字形に近い。堆積土は、IV層に類似する黒褐色（10YR3/1）粘土の単層である。SD1・2溝跡より古く、SK2土坑より新しい。SD4・5溝跡との関係は不明である。

遺物はいずれも破片で、常滑産壺4点（第45図7）、山茶碗窯系片口鉢2点（写真図版24-10）。他に、土師器小型壺1点が出土している。在地産陶器は出土していないことや重複関係から、遺構の年代は、13世紀前半頃と考えられる。

SD4溝跡

調査区西部に位置し、V層上面で検出した。調査区南壁断面では、IVb層上面より掘り込まれている。南北方向の溝跡で、規模は上幅65cm、深さ約50cmを測る。断面形は開き気味のU字形を呈している。堆積土は、黒色（10YR3/1）粘土の単層である。SD1・2溝跡、SK1・8土坑より古く、SD5溝跡より新しい。

遺物はいずれも破片で、常滑産壺4点、薄手小型の壺（あるいは甕）1点、須恵器系陶器壺1点（写真図版24-4）、他に、土師器長胴壺1点が出土している。小型の壺は、SD2溝跡の出土破片と接合した。在地産陶器は、出土していない。

SD5溝跡

調査区西部に位置し、V層上面で検出した。調査区断面の観察で、IVb層上面より掘り込まれているのを確認した。SD2・4溝跡とはほぼ同じ南北方向の溝跡で、規模は上幅約1m、深さ約0.8mを測る。断面形は上部が開くU字形だが、西壁北側にテラス状の段差が見られることから、溝跡を作り変えている可能性が考えられる。堆積土は粘土で、3層に分層される。SD1・2・4溝跡、SK1・8土坑より古い。

遺物はいずれも破片で、山茶碗窯系片口鉢2点（写真図版24-11）、在地産陶器（白石窯？）1点（写真図版24-14）、刀子1点、他に、須恵器長頸瓶（第45図3）、土師器壺5点、赤焼土器壺1点出土している。片口鉢（写真図版24-11）は口唇部が丸頭状を呈していることから、12世紀後半から13世紀前半頃の年代が考えられる。在地産陶器が出土していることから、遺構は13世紀後半以降のものと考えられる。

(2) 土坑

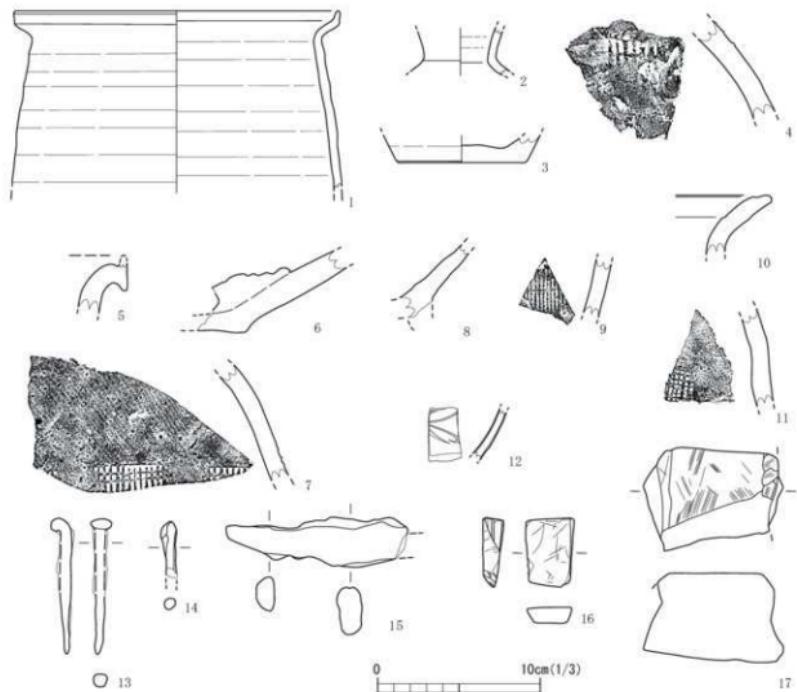
SK1土坑

調査区南西部に位置し、V層上面及び溝跡上で検出した。掘り込み層位は、確認できない。南北方向に長軸を持ち、楕円形を呈する。断面形は、不定形である。規模は南北約1.86m、東西約1.04m、深さ最深0.6mを測る。堆積土は2層に分層できる。P16より古く、SD2・4・5溝跡より新しい。

遺物はいずれも破片で、古瀬戸灰釉折縁深皿1点（写真図版24-15）、常滑産壺3点（写真図版24-18）、薄手小型の壺（あるいは甕）1点、鉄釘1点、他に、須恵器瓶類1点、土師器壺3点・内黒环1点、赤焼土器壺1点が出土した。折縁深皿は14世紀後半～15世紀前半頃のものと考えられる。常滑小型壺は、SD4溝跡出土の壺と同一個体とみられる。遺構の時期は、古瀬戸の深皿と同じ頃と考えられ、時期の分かる遺構としては、最も新しい。

SK2土坑

調査区中央に位置し、V層上面で検出した。掘り込み層位は確認できない。南北方向に長軸を持ち、楕円形を呈



掲載番号	写真番号	登録番号	出土場所	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)	測定・文様	備考
1	24-1	D-1	SD2		ロクロ土器	壺	上半部 (11.5) (10.0)	—	ロクロナデ	胎土紗粒多し 長胴
2	24-2	E-1			須恵器	長頸瓶	頸部破片 (2.9)	—	ロクロ	割れ片(4mm)外周開口(自然縫)黒皮(やや光沢あり)
3	24-3	E-3	SD5		須恵器	長頸瓶?	底部破片 (1.7)	—	ロクロ	底径調整不明 紋様ナナメ 小さな刻画多し
—	24-4	E-2	SD4		須恵器	壺	—	—	手打明き	あて貝取
—	24-5	I-2	SD2		中世陶器	片口鉢	高台破片	—	—	特徴・備考
—	24-6	I-3	SD2		中世陶器	壺	底部破片	—	—	常滑
4	24-7	I-1	SD1		中世陶器	体部破片	(6.1)	—	片口窓 振印あり 長石粒含む 13C 後半～14C 前半	
5	24-8	I-4	SD2		中世陶器	小型壺	口縁破片 (3.0)	—	常滑 N口13C 後半?	
6	24-9	I-5	SD2		中世陶器	壺?	底～肩部破片 (5.0)	—	常滑 内側粘土塊付着	
7	24-12	I-6	SD3		中世陶器	壺	体部破片 (7.1)	—	常滑 格子状押印あり 13C	
—	24-10	I-7	SD3		中世陶器	片口鉢	底部破片	—	—	山茶窓系(東海)
—	24-11	I-8	SD5		中世陶器	片口鉢	口縁破片	—	—	山茶窓系 13～14C ?
—	24-14	I-9	SD5		中世陶器	壺	体部破片	—	—	白口窓 13C 後半～14C 前半
8	24-15	I-11	SK1		中世陶器	鋤深溝?	体部破片 (4.5)	—	白口窓 地紋(内外)腰付(剥落) 14C 後半～15C 前半	
9	24-13	I-10	SK1		中世陶器	壺?	体部破片 (3.7)	—	常滑 押印あり 常滑 振印あり	
—	24-16	I-13	SK1		中世陶器	壺?	—	—	常滑 13C 後半～14C 前半	
10	24-17	I-14	SK2		中世陶器	壺?	口縁 (3.7)	—	常滑 12C 後半	
—	24-18	I-12	SK1		中世陶器	壺?	—	—	常滑	
—	24-19	I-15	SK2		中世陶器	片口鉢	—	—	山茶窓系 底部脇回転ヘラケスリ 13C ?	
—	24-20	I-18			須恵器	鉢	—	—	山茶窓系 高台脇回転ヘラケスリあり 13C～14C	
—	24-21	I-17			須恵器	壺?	—	—	常滑	
—	24-22	I-19			須恵器	壺?	—	—	白口窓 13C 後半～14C 前半	
11	24-23	I-16	SK2		中世陶器	壺?	(6.1)	—	常滑 格子状押印あり	
12	24-24	I-1			西周 鎔	碗	体部破片 (3.2)	—	—	中国龍泉窑系 葵瓣 花文(片切削り蓮花文) 外面は無文か 13C
13	24-28	N-1			西周 鎔	鉢	はざ完形 8.3	0.8	0.8	
14	24-27	N-3	SK1		鉄製品	針	頭部残存 (3.5)	0.7	0.7	
15	24-29	N-2	SD5		鉄製品	刀子?	刃先崩損 (11.1)	3.0	1.4	刀身の一部と茎部分か?
16	24-25	K-1			石製品	砥石	4.2	3.0	1.0	折れて小さくなつたものを再利用
17	24-26	K-2			石製品	砥石	破片 (6.5)	0.95	0.6	欠損品

第45図 第22次調査出土遺物

しているが、軸線はSK1・8土坑よりやや東へ傾いている。断面形は南側が浅い船底形を呈している。規模は、東西0.7m、南北2.16m、深さ0.42mを測る。堆積土は、3層に分層される。SD3溝跡より古い。

遺物はいずれも破片で、渥美産壺1点、常滑産壺4点、山茶碗窯系片口鉢3点、鐵滓4点、棒状鉄製品4点(同一固体)、壁土片1点(木舞庄痕、スサ入り?)が出土している。渥美産壺は内側に段差のある口縁部(第45図10)で、12世紀後半とみられる。山茶碗窯系片口鉢(写真24-19)は、底部脇に回転ヘラケズリを施し、高台は細く高い特徴があり、13世紀前半頃のものとみられる。常滑は黒ずんだ胎土のもので、格子状押印がみられるもの(第24図11)がある。壁土としたものは、溝状の産みがあり、木舞庄痕の一部と判断した。遺構は、遺構の重複関係で最も古く、在地産中世陶器は出土していない。その年代は、出土遺物の特徴から、13世紀前半代と考えられる。

SK3 土坑

調査区中央部南壁に位置し、V層上面で検出した。掘り込み層位は確認できない。遺構の南半部は、調査区外に延びる。平面形は、隅丸方形を呈するものと想定される。規模は東西1.45m南北0.36m以上、深さ0.13mを測る。断面形は、浅いU字形を呈する。堆積土は、黒褐色粘土の单層である。遺物は出土していない。

SK4 土坑

調査区中央部南壁に位置し、V層上面で検出した。遺構の一部は調査区外に延びる。掘り込み層位は確認できない。平面形は、北西から南東に長軸を持つ不正規円形を呈する。規模は北西・南東1.57m以上、北東・南西0.85m、深さ0.15mを測る。断面形は、浅いU字形を呈する。堆積土は、暗褐色シルトの单層である。

遺物はいずれも破片で、常滑産壺2点、須恵器系陶器壺?1点が出土している。図示できるものはない。

SK5 土坑

調査区中央部や東側に位置し、V層上面で検出した。掘り込み層位は確認できない。平面形は、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈する。規模は、東西0.77m、南北1.06m、深さ0.37mを測る。断面形は、U字形を呈する。堆積土は、黒褐色粘土の单層である。

遺物はいずれも破片で、常滑産壺1点、山茶碗窯系片口鉢2点、土師質土器大鉢(火鉢か)1点が出土している。図示できる遺物はない。

SK6 土坑

調査区東部中央寄りに位置し、V層上面で検出した。掘り込み層位は確認できない。平面形は、東西方向に長軸を持つ楕円形を呈する。規模は東西1.0m、南北0.55m、深さ0.16mを測る。断面形は、壁の立ち上がりが緩やかなU字形であり、底面は平坦ではない。堆積土は、黒褐色シルトの单層である。遺物は出土していない。

SK7 土坑

調査区東壁際に位置し、V層上面で検出した。掘り込み層位は確認できない。平面形は、東西方向に長軸を持つ楕円形を呈する。規模は東西0.67m、南北0.45m、深さ0.11mを測る。断面はU字形を呈している。堆積土は、黒色シルトの单層である。遺物は出土していない。

SK8 土坑

調査区北西部に位置し、SD2溝跡の底面で検出した。平面形は、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈する。長軸の方向は、重複するSD2・4・5溝跡の方向やSK1土坑の長軸とはほぼ同じである。規模は東西0.93m、南北1.23m、深さ0.41mを測る。断面は壁と底の境が不明瞭なU字形を呈している。堆積土は黒色の粘土で、2層に分層される。SD2溝跡より古く、SD4・5溝跡より新しい。SD3溝跡との重複関係は、不明である。

遺物は土師器壺片1点、鐵滓1点が出土している。中世陶器等は出土していないが、SD2溝跡とSD4・5溝跡の間にある遺構であることから、その年代は13世紀後半から14世紀前半の間と考えられる。

(3) ピット

調査区内で19基確認し、多くはV層上面で検出した。各ピットの掘り込み層位は確認できなかった。形状は円形もしくは楕円形を呈している。規模は直径25~40cm、深さ16~32cmのものが多い。中には、P-17が直径50cm、P-16が深さ58cmとやや特異なものがある。堆積土は黒褐色系、あるいは暗褐色系のシルトが多い。

建物跡として組む柱穴ではなく、柱痕跡も確認できなかった。

遺物は、P-7・13からそれぞれ古代の須恵器壺片が1点ずつ出土している。

(4) 道構・外出土遺物

基本層IV層より遺物が出土しており、いずれも破片である。その内訳は、中国龍泉窯系青磁碗1点（第45図12）、渥美産壺1点、常滑産壺11点（写真図版24-21）、山茶碗窯系片口鉢1点（写真図版24-20）、在地（白石窯）産壺1点（写真図版24-22）、土師質土器皿1点、古代の須恵器壺3点・壺2点、赤焼土器壺1点、土師器壺4点・内墨壺1点、この他に、鉄釘1点、砥石2点が出土している。中国青磁碗は、外面無文、内面に片切彫りの蓮華文を施す碗で、およそ13世紀頃のものと考えられる。渥美産壺は12世紀代、常滑産の壺類はいずれも肩部あるいは肩部付近のもので、胎土の色調が灰白色~灰色、黒灰色~黒褐色のおよそ二種類に分けられ前者が多い。中世でも比較的古い様相を示す。片口鉢は底部付近に回転ヘラケズリを施し、高台は低い。胎土に砂を多く含む。13世紀頃の常滑産と考えられる。在地産壺（13C後半~14C前半）が僅か1点と少ないのも特徴的である。まだ、あまり流通していなかった可能性がある。

基本層IV層は中世の遺物包含層であり、その時期は出土遺物から、およそ14世紀以前と考えられる。

5.まとめ

遺物については、道構・基本層について報告したが、常滑産壺及び山茶碗窯系片口鉢（多くは砂粒が目立ち、常滑産か）の組み合わせが目立つ。在地産陶器は、SD1溝跡を除くと極めて少ない。調査区の道構は、総じて、中世でも比較的古いものと考えられる。

道構は、大きくIVa層上面の道構とIVb層上面の道構に分けられる。前者の道構には、SD1溝跡、SK1土坑、後者にはSD4・5溝跡が検出された。調査区内で最も新しい道構はSK1土坑で14世紀後半~15世紀前半である。一方、最も古いと考えられるSK2土坑は13世紀前半である。V層上面で検出した道構は本来の掘り込み面が不明だが、先の出土遺物の時期的傾向から、この13世紀前半から15世紀前半の間で変遷した道構群であろう。SD1溝跡は部分的に検出されたのみだが、今後、規模・性格・時期を明らかにし、城館跡との関連の有無を検討する必要がある。

また、SD2・4・5溝跡は、SK8土坑の存在から連続的ではないが、ほぼ同じ位置で開削された溝跡であることから、区画溝の可能性がある。東側に隣接する第12次調査区でも、南北方向の溝跡が4条検出されている。区画しているものについては、今後の調査・検討が必要である。

参考文献

- 仙台市教育委員会 2005 「洞ノ口遺跡 第1次・2次・4次・5次・7次・10次発掘調査報告書」
- 仙台市教育委員会 2006 「洞ノ口遺跡第12次発掘調査報告書」「前田館跡発掘調査報告書」
- 入間田宣夫・大石直正編 1992 「よみがえる中世」7 平凡社
- 中野晴久 1992 「常滑窯」「東日本における古代・中世窯業の諸問題」 大戸古窯跡群検討会
- 藤澤良祐 1997 「中・近世漸戸焼の編年」「東北地方の在地土器・陶磁器Ⅰ」 第3回研究大会資料 東北中世考古学会



1. 調査区全景（東から）



5. 西壁断面（東から）



6. SD2、SD4、SD5 南壁断面（北から）

写真図版 21 第 22 次調査 (1)



1. SD3 完掘（西から）



2. SD4 完掘（西から）



3. SD2 完掘（東から）



4. SK1 完掘（東から）



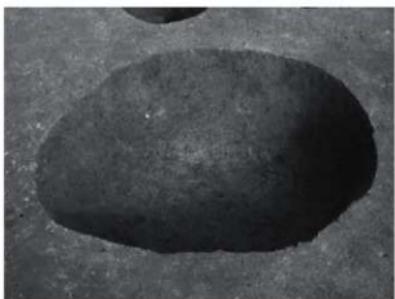
5. SK2 完掘（東から）



6. SK3 完掘（北から）



1. SK4 完掘（北東から）



2. SK5 完掘（西から）



3. P7・8 完掘（南西から）



4. P10 完掘（北から）

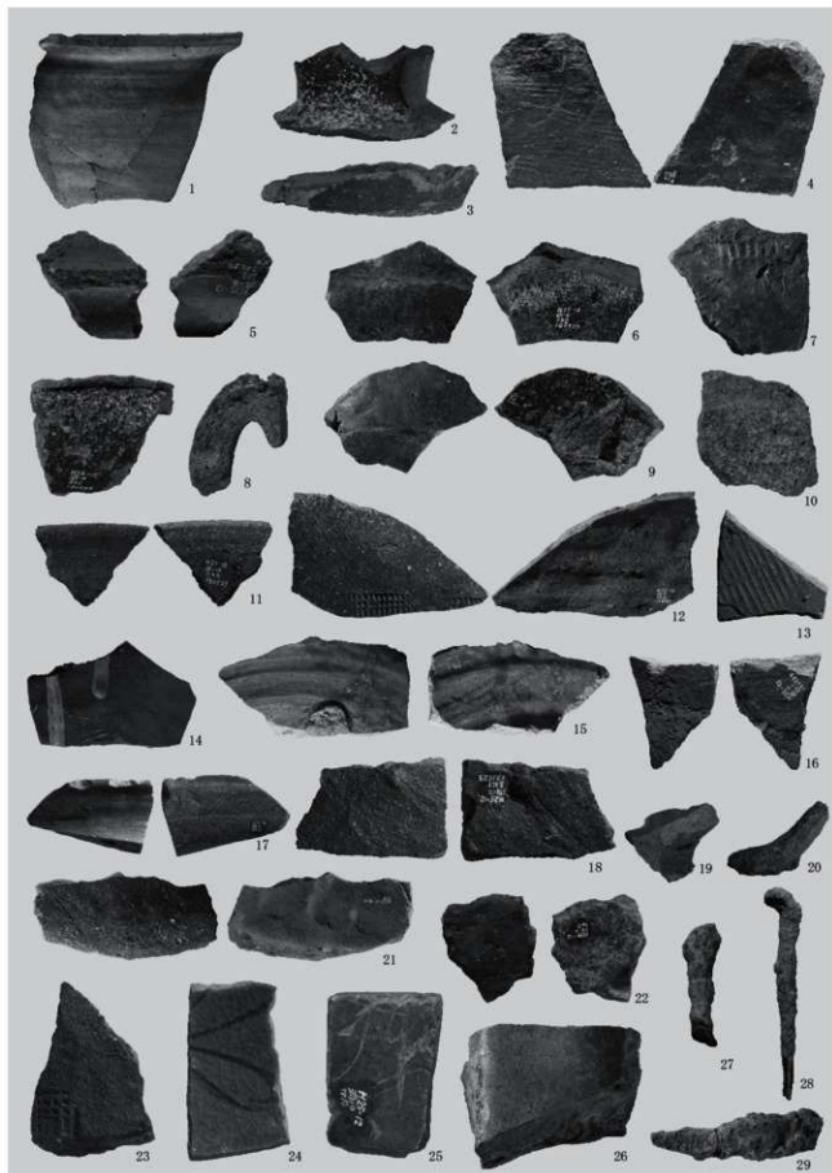


5. 遺構検出（東から）



6. 遺構検出（南から）

写真図版 22 第 22 次調査 (3)



写真図版24 第22次調査出土遺物

第2節 中在家南遺跡

I. 遺跡の概要

中在家南遺跡はJR仙台駅の南東約5kmに位置し、標高約5mの自然堤防上に立地する縄文時代から近世の複合遺跡である。遺跡南西部は、東郊条里跡と広く接している。中在家南遺跡では、河川跡から弥生時代から古墳時代にかけての木製農耕具等が多量に出土し、全国的に注目された。この河川跡では、さらに中世・近世の水田跡が発見されている。また、遺跡中央部では、弥生時代中期の土坑墓・土器棺墓、古墳時代や平安時代の堅穴住居跡が調査されている。

平成26年3月の中在家南遺跡と東郊条里跡の遺跡範囲の変更に伴い、今回の調査地点は、調査時には、東郊条里跡として扱っていたが、その後中在家南遺跡とすることになった。

II. 第7次調査

1. 調査要項

遺跡名	中在家南遺跡 (宮城県遺跡登録番号 01427)
調査地点	仙台市若林区蒲町字南14番
調査期間	平成26年3月12日～3月26日
調査対象面積	建築面積 109.3m ²
調査面積	40.2m ² (A区: 21.6m ² , B区: 18.6m ²)
調査原因	個人住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課
担当職員	主事 小泉 博明 文化財教諭 早坂 純一



第46図 中在家南遺跡の位置と周辺の遺跡

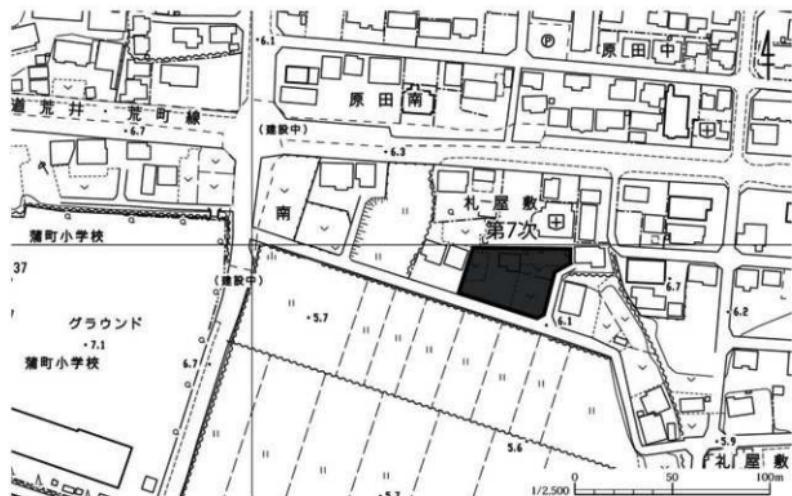
2. 調査に至る経過と調査方法

調査は、平成26年1月15日付で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成26年1月28日付H25教生文第123・393号で回答)に基づき実施した。調査地点は、県道荒井・荒町線の南側で遺跡北東角にある。平成26年3月12日より調査を開始した。調査は建物建築予定地に、A区(東側)約5.5m×4m、B区(西側)約6m×3mの二ヶ所の調査区を設定し、重機により盛土およびI層(盛土以前の現代水田耕作土)を掘削した。II層以下の層を手掘りとし、VI層上面で遺構検出作業を行った。

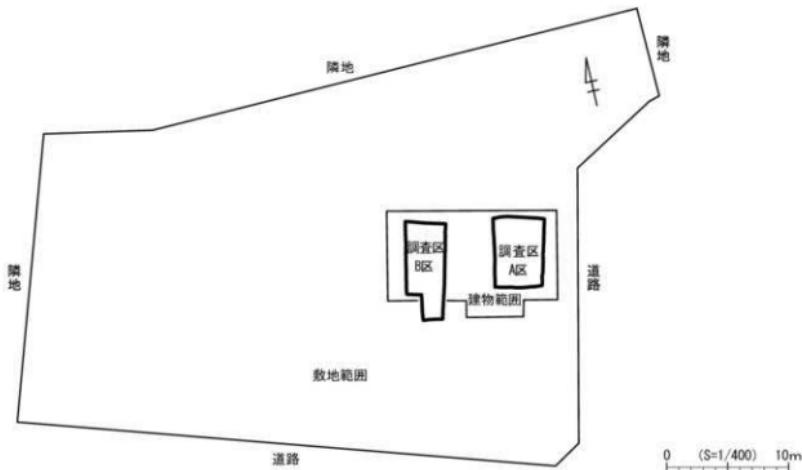
調査では、必要に応じて平面図・断面図を作成し、デジタルカメラ等を用いて記録写真を撮影した。3月26日に重機による埋め戻しを行い、調査を終了した。

3. 基本層序

調査区内では、最近の宅地化に伴う盛土が1.2m前後と厚く堆積していた。盛土下に、大別6層(細別8層)の



第47図 第7次調査区位置図



第48図 第7次調査区設定図

基本層を確認した。基本層は、二ヶ所の調査区とも層相は共通しているが、確認できない層もある。

I a 層：5Y4/1 灰色粘土 層厚約 10cm 盛土前の現水田耕作土。下面に酸化鉄の集積が一部で認められる。

- I b 層 : 7.5Y4/1 灰色粘土。層厚 2 ~ 8cm 各区とも部分的な分布。I a 層の床土あるいは古い水田耕作土の可能性がある。
- II 層 : 2.5Y3/2 黒褐色粘土。層厚 5 ~ 10cm 炭化物粒を含む。層下面が乱れており、水田耕作土であった可能性がある。
- III a 層 : 2.5Y3/1 黒褐色粘土。層厚 4 ~ 12cm IV 層・VI 層のブロックを少量含む。
- III b 層 : 2.5Y2/2 黒褐色粘土。層厚 4 ~ 8cm A 区南部に分布 (SD1 溝跡を覆う)。VI 層ブロックを含む。
- IV 層 : 2.5Y3/2 黒褐色粘土。層厚 5 ~ 14cm A 区 (SD1 の北側) に分布し、B 区では見られない。VI 層ブロックと炭化物粒を少量含む。
- V 層 : 10YR3/1 黑褐色粘土。層厚 2 ~ 8cm VI 層の小ブロックを多く含む。B 区南部では、VI 層が緩く下がり、そこに V 層が比較的厚く堆積している。
- VI 層 : 2.5Y5/3 黄褐色粘土。層厚 20cm 以上 地山か。
- II 層から V 層まで、弥生時代の遺物を含んでおり、包含層として捉えることができる。

4. 発見遺構と出土遺物

検出した遺構は、溝跡 1 条、ピット 1 基である。遺物は、弥生土器、石器が出土した。

(1) 溝跡

SD1 溝跡

調査区 (A 区・B 区とも) 南部に位置し、VI 層上面で検出した。この溝跡を IIIa・IIIb 層が直接覆うが、IV 層との関係は不明である。断面観察では、V 層上面より掘り込まれている。A 区・B 区にまたがる東西方向の溝跡で、規模は A 区で長さ 3.3m、幅 0.82m、深さ 0.16m、B 区で長さ 2.6m、幅 0.96m、深さ 0.12m を測る。全長は A 区から B 区までの約 10.5m で、さらに東へ延びる。B 区内の溝跡西端部は、北へやや屈曲する。断面形は皿状を呈するが、中央部 (A 区西壁付近) では底面は平坦である。堆積土は、黒褐色粘土の単層である。

遺物は、弥生土器 30 点 (A 区 18 点、B 区 12 点)・石器 1 点 (A 区) が出土している。土器はすべて磨耗した細片である。壺の破片が多い。文様は地文のみで繩文 (LR) が多く、植物茎回転文が僅かにみられる。石器は石匙 1 点 (第 53 図 8) が出土した。他に、採取した土壤を水洗選別 (A 区 13 袋分) した結果、土器片・チップが僅かに出土した (15 点)。また、時期の特定はできないが、炭化種子・昆虫 (羽) も出土した。

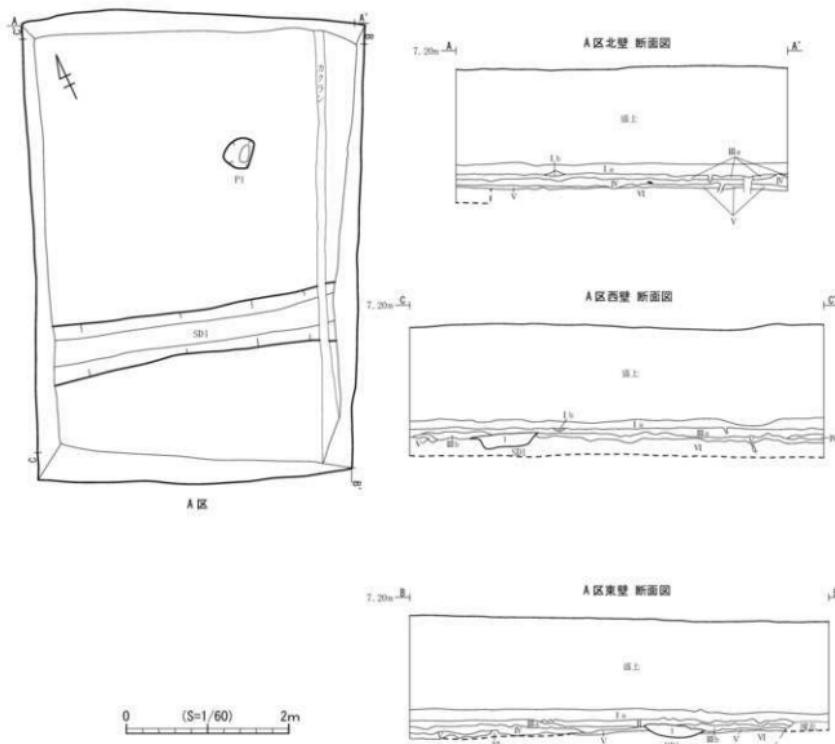
(2) ピット

P1 は、A 区東北部に位置し、VI 層上面で検出した。平面形は不整橿円形で、規模は長軸 40cm、短軸 34cm、深さ 11cm を測る。堆積土は基本層 V 層と共通する黄灰色粘土の単層である。柱痕跡は確認できなかった。調査時には、堆積土は V 層と考えられていたことから、検出面と掘り込み面は同じ VI 層上面と考えられる。

出土遺物は弥生土器 6 点、石器 1 点である。土器は磨耗が著しいが、図示できたのは列点文のある壺 (第 51 図 1) や平行沈線文の見られる鉢片 (第 51 図 2) である。石器は磨石 (第 53 図 9) とみられ、僅かに磨っている。

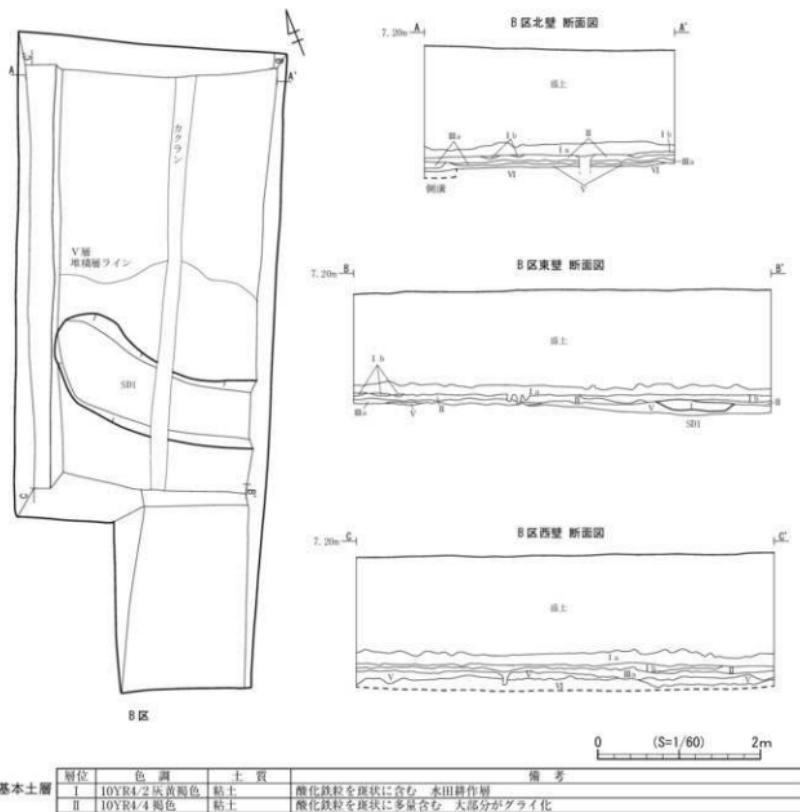
(3) 遺構外出土遺物

基本層 1 層からは、B 区で肥前磁器の染付山水文皿片 (蛇ノ目凹高台か、19C 前葉頃) 1 点のみが出土した。基本層 II 層から V 層は、両区とも弥生時代の遺物が出土する遺物包含層である。まとまった量の遺物が出土したが、調査では、分層して遺物を取り上げることができなかった。出土遺物には、弥生土器 (破片数) 1491 点 (A 区 1300 点、B 区 191 点)、石器 84 点 (A 区 73 点、B 区 11 点) がある。(水洗選別遺物を除く) 土器、石器とも東側の A 区に多く (第 51 図 3 ~ 21、第 52 図 1 ~ 21、第 53 図 1 ~ 7)、B 区は少ない (第 54 図)。さらに、A 区では調査区北東部や北壁付近で多く出土し、偏在傾向を示している。土器は、表面が磨耗・剥落して細片となったものが多いが、



層位	色調	土質	備考
I a	5Y4/1灰褐色	粘土	現水田耕作土
I b	7.5Y4/1灰褐色	粘土	
II	2.5Y3/2黒褐色	粘土	炭化物塊少量含む 遺物包含層
III a	2.5Y3/1黒褐色	粘土	瓦砾と地山を斑状に塊少量含む 遺物包含層
III b	2.5Y3/2黒褐色	粘土	地山粒ブロックを少量含む
IV	2.5Y3/2黒褐色	粘土	地山と炭化物を粒状に塊少量含む 遺物包含層
V	10YR3/1黒褐色	粘土	地山小ブロックを斑状に多量含む 遺物包含層
VI	2.5Y5.3黄褐色	粘土	層上面に漸移的変化あり
SD1	1 10YR2/2黒褐色	[粘土]	[地山大ブロックを含む]

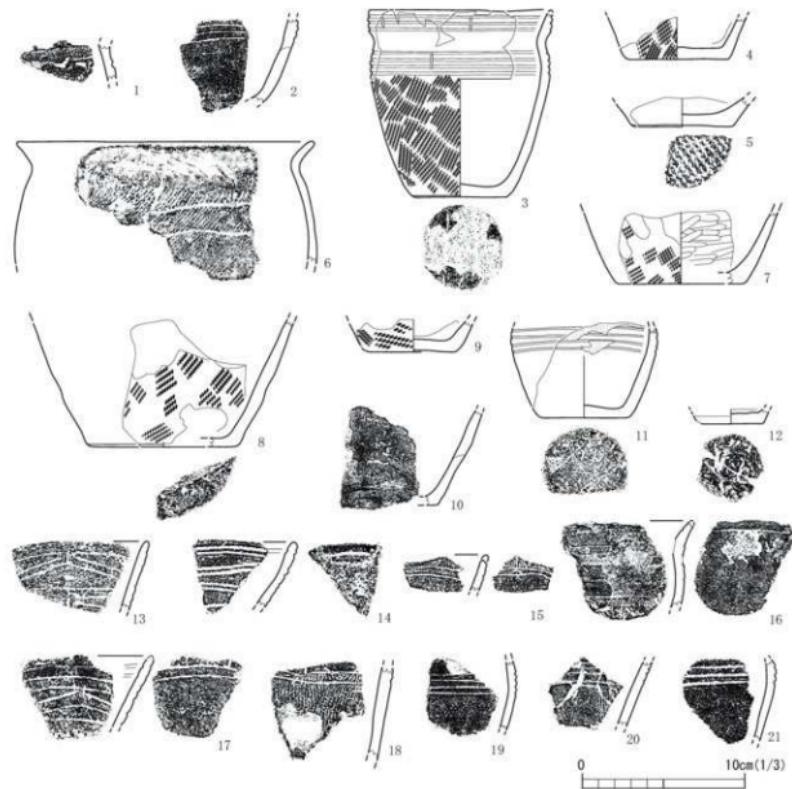
第49図 第7次調査区平面図・断面図(1)



第50図 第7次調査区平面図・断面図(2)

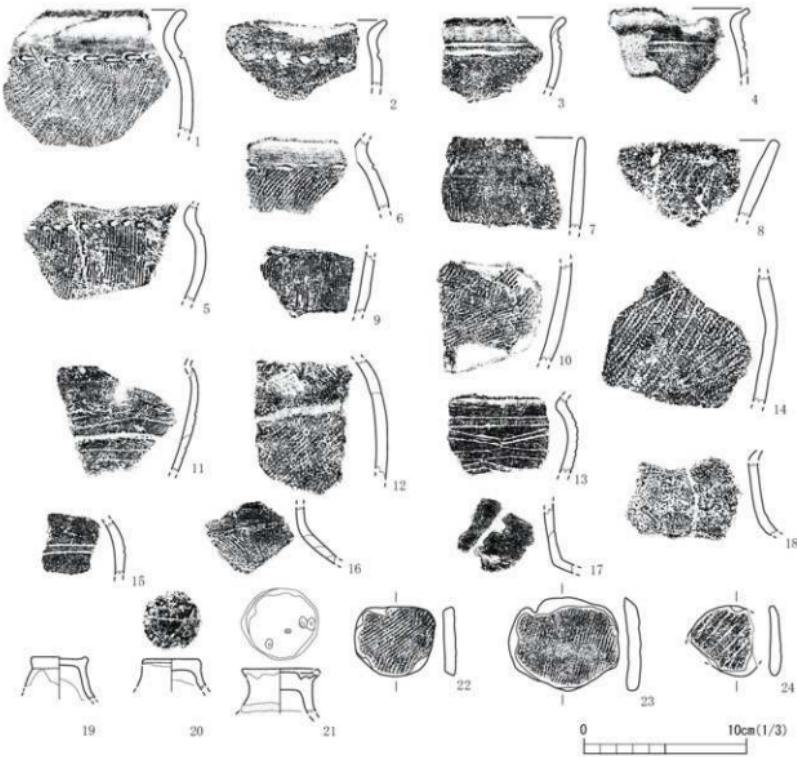
甕・壺・鉢・蓋がある。甕は口縁部下に列点文(刺突)(第52図1~6)をもつものや口縁部が内湾するもの(第52図12)などがある。地文は縦文が多く(LR)、植物茎回転文や燃糸文が僅かにみられる。壺は、口縁から頸部にかけて無文でミガキ調整を施したものが散見される。鉢と蓋は細片のため区別しにくいものが殆どである。文様は、沈線文・平行沈線文(第51図11・19・21、第52図15)・変形工字文(第51図13~15、17・18・20、第52図13)などがみられる。なお、赤彩土器は、遺構出土土器も含めて出土していない。また、土製円盤が3点出土している(第52図22~24)。

石器も土器と同じ偏在傾向を示し、A区のとりわけ北東部や北壁付近に多い。石器の内訳は、石庵丁1点(A区)(第53図6)、磨製石斧2点(未完成1点、いずれもA区、第53図7)、無茎石鏃5点(A区、第53図2~4)、有茎石鏃2点(A区1点・第53図1、B区1点)、ドリル1点(第53図5)、叩き石+磨石1点(B区、第54図11)、サイドスクレイパー1点(B区、第54図10)、石核2点(A区)、二次加工のある剥片13点(A区12点、B区1点)、剥片50点(A区44点・写真図版30-11、B区6点)、チップ(長さ5mm以下)6点(A区5点、B区1点)で、



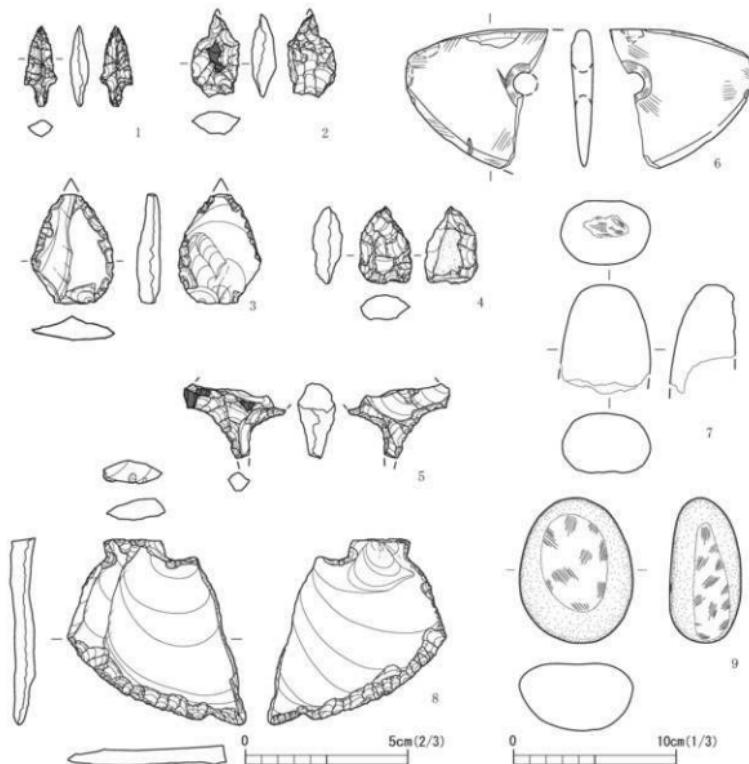
番号	写真	登録番号	出土場所	出土位置	種別	器種	残存	法量(cm)			調整・文様		備考
								高さ	口径	底径	外面	内面	
1	28-1	B-42	底面	埋土	弥生土器	甕	口縁部破片	(2.0)	—	—	別点文 地文網文?	ミガキ?	
2	28-2	B-41	A底面	埋土	弥生土器	小型鉢	体部破片	(5.1)	—	—	平行縞文 地文網文?	ミガキ	
3	28-3	B-2	A区	赤土土器	甕	甕	1/3	11.5	11.4	5.8	平行縞文 地文網文	ヘラミガキ	底部:木葉模 脱落あり
4	28-4	B-6	A区	赤土土器	甕or甕?	甕部破片1/2	(2.6)	—	—	6.2	平行縞文 マツメあり	ミガキ	底部:木葉模
5	28-5	B-8	A区	赤土土器	甕	甕部1/4	(1.4)	—	—	(6.0)	ミガキ	ミガキ(磨损)	底部:網代瓶
6	28-7	B-3	A区	赤土土器	甕	上半部	(7.5)	(18.2)	—	マツメヨコナギ地文	ヘリナリマツメヨコナギ	底部:網代瓶	
7	28-10	B-5	A区	赤土土器	甕or甕?	底部破片	(4.4)	—	—	7.8	地文網文 剥落 マツメ	ヘラミガキ	
8	28-6	B-4	A区	赤土土器	甕	体部下端	底部	(7.5)	—	(8.8)	地文下端:縦文	外内面剥離 底部:木葉模 外内面剥離 底部:木葉模	
9	28-8	B-7	A区	赤土土器	甕	底部破片	(2.0)	—	—	5.4	地文網文	ミガキ	
10	28-9	B-40	A区	赤土土器	甕or小型甕?	底部破片	(5.8)	—	—	—	地文植物文 同向文	ミガキ 剥落	
11	28-13	B-1	A区	赤土土器	甕	1/2	(5.9)	—	—	5.2	平行縞文 ヘリナリ	ヘラミガキ	底部:木葉模
12	28-12	B-38	A区	赤土土器	甕? 甕?	底部破片	(0.9)	—	4.0	マツメ	底部:ミガキ		
13	28-15	B-12	A区	赤土土器	甕	口縁部1/4	(4.2)	—	—	変形工字文	ミガキ マツメ	底部:木葉模	
14	28-11	B-13	A区	赤土土器	甕	口縁部破片	(4.0)	—	—	変形工字文 マツメ	沈綴文		
15	28-14	B-16	A区b	赤土土器	甕	口縁部破片	(2.2)	—	—	平行縞文? (網目)地文	地文網文 剥落あり		
16	28-16	B-28	A区	赤土土器	甕	口縁部破片	(5.1)	—	—	—	地文植物文 同向文	沈綴文	
17	28-20	B-14	A区	赤土土器	甕	口縁部破片	(4.3)	—	—	地文植物文 同向文	地文植物文 同向文	沈綴文	
18	28-19	B-18	A区	赤土土器	甕?	体部破片	(5.7)	—	—	平行縞文? (網目)地文	ミガキ		
19	28-17	B-19	A区	赤土土器	甕or甕?	体部破片	(4.1)	—	—	平行縞文 (網目)地文	ミガキ		
20	28-21	B-17	A区	赤土土器	甕?	体部破片	(3.8)	—	—	平行縞文 地文網文	ミガキ		
21	28-18	B-21	A区	赤土土器	甕	体部破片	(5.0)	—	—	平行縞文 地文網文	ミガキ? マツメ		

第51図 第7次調査出土遺物(1)



掲載番号	写真	登録番号	出土場所	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)	調整・文様			備考
									器高	口径	底径	
1	29-1	B-22	A区		弥生土器	甕	口縁部破片	(7.6)	—	ヨコナギ削葉文	ミガキ削落着しい	
2	29-2	B-24	A区		弥生土器	甕	口縁部破片	(4.0)	—	ヨコナギ削葉文	マメツ削落	
3	29-3	B-26	A区		弥生土器	小型甕	口縁部破片	(4.4)	—	平行直線文	地文織文	ミガキ
4	29-4	B-27	A区d		弥生土器	甕	口縁部破片	(4.3)	—	平行直線文	地文織文	ミガキ?
5	29-5	B-25	A区		弥生土器	甕	口縁部破片	(6.0)	—	地文植物文	地文織文	マメツ
6	29-6	B-23	A区		弥生土器	甕	口縁部破片	(4.2)	—	ヨコナギ削葉文	ミガキ	
7	29-7	B-33	A区		弥生土器	甕	口縁部破片	(5.6)	—	地文植物文	地文織文	マメツ削落
8	29-8	B-29	A区		弥生土器	甕	口縁部破片	(4.7)	—	地文植物文	地文織文	ミガキ
9	29-9	B-34	A区		弥生土器	甕	体部破片	(3.8)	—	地文植物文	地文織文	ミガキ
10	29-10	B-31	A区d		弥生土器	甕	体部破片	(6.0)	—	地文織文	ミガキ	マメツ
11	29-12	B-37	A区		弥生土器	小型甕	体部破片	(6.3)	—	平行直線文	ミガキ	
12	29-13	B-32	A区g		弥生土器	甕 or 釜	体部破片	(7.4)	—	地文織文	ミガキ	
13	29-14	B-15	A区		弥生土器	小型甕 or 釜	体部破片	(7.7)	—	平行直線文	ミガキ	
14	29-11	B-39	A区		鍍鉄器	甕 or 釜	体部破片	(7.9)	—	地文直線文	マメツ削落	
15	29-15	B-20	A区		弥生土器	甕?	体部破片	(5.2)	—	平行直線文	ミガキ	ミガキ
16	29-16	B-30	A区		弥生土器	甕	口縁部破片	(3.5)	—	地文植物文	地文織文	油押え 傷跡み痕
17	29-17	B-35	A区a		弥生土器	甕	口縁部破片	(4.3)	—	地文織文	ミガキ	ミガキ
18	29-18	B-36	A区b		弥生土器	甕	口縁部破片	(4.2)	—	地文植物文	ミガキ	マメツ
19	29-19	B-9	A区		弥生土器	甕	つまみ跡のみ	(2.6)	甲付 3.4	横目(ハサモ)削付?	ナデ?	
20	29-21	B-11	A区		弥生土器	甕	つまみ跡のみ	(1.5)	甲付 3.4	ミガキ?	マメツ	胎土砂多し 木葉痕
21	29-20	B-10	A区		弥生土器	甕	つまみ跡のみ	(2.0)	甲付 3.0	ナデ削付あり	ナデ?	削落あり
22	29-22	P-1	(1/3)		土製品	円盤	完形	4.9	—	地文織文	ミガキ?	縦体部利用
23	29-23	P-2	(1/3)		土製品	円盤	完形	6.7	—	植物多回文	ミガキ	縦体部利用
24	29-24	P-3	(1/3)		土製品	円盤	2/3	4.3	—	地文織文	マメツ欠損	縦体部利用

第52図 第7次調査出土遺物(2)



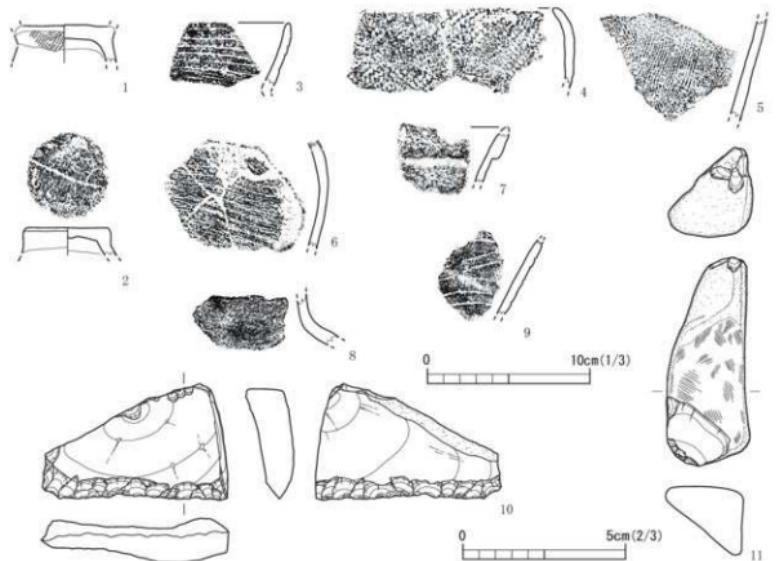
掲載番号	写真	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			特徴・備考
								器高	1辺	底径	
1	30-1	K-1	A区		剥片石器	石鏃	完形	2.4	1.0	0.5	共化凝灰岩 0.7g
2	30-2	K-2	A区1トド		剥片石器	石鏃	先端欠損	2.5	1.5	0.7	長鈍 未成品 二重バテオあり(加热処理痕) 23g
3	30-3	K-5	A区.c		剥片石器	石鏃	先端欠損	3.4	2.5	0.7	直岩 未成品 5.4g
4	30-4	K-4	A区1トド		剥片石器	石鏃	完形	2.4	1.6	—	黒曜石 未成品 30g
5	30-5	K-3	A区		剥片石器	石鏃	先端欠損	(2.3)	(3.1)	(1.1)	丸鈍 二重バテオあり 42g
6	30-7	K-6	A区		剥片石器	石鏃	—	1.3	(4.4)	(4.3)	欠損 13.0g
7	30-8	K-7	A区		剥片石器	石斧	基部残存	(6.7)	5.5	—	安山岩 表面敲打痕(一部研磨あり) 1号部欠損 未成品 17.2g
8	30-6	K-8	A区SD1		剥片石器	石鏃	完形	5.7	5.5	0.6	珪質頁岩 20.8g
9	30-9	K-9	A区P1		剥片石器	磨石	完形	8.9	7.0	4.4	磨面 2面 420g
—	30-10	K-11	A区		剥片石器	板状石器	刀部欠損	—	—	—	安山岩
—	30-11	K-10	A区		剥片石器	剥片	—	—	—	—	流紋岩 同一石材 12点(一括扱い)

第53図 第7次調査出土遺物(3)

合計84点である。剥片石器の利用石材は、剥片類を中心に流紋岩が多数を占めるが、二次加工されたトゥール類では、珪質頁岩、玉髓、黒曜石なども見られる。なお、土壤の水洗選別を行った結果(A区、土のう袋6袋分)、チップ21点や炭化種子などが検出された。

5.まとめ

今回の調査地点は、仙台東郊条里跡の範囲であったが、中在家南遺跡の過去に調査されていた埋没河川跡の続



掲載番号	写真 図版	登録番号	出土 遺構	出土 層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調整・文様		備考
								器高	口径	底径	外面	内面	
1	31-1	B-43	B区	V層	弥生土器	蓋	つまみ部破片	(2.1)	甲56.2	—	植物茎回転文	ナデテミガキ?	
2	31-2	B-46	B区	含合層	弥生土器	蓋	つまみ部破片	(1.7)	甲55.4	—	マメツ甲部:本葉脈	ナダテ?	
3	31-3	B-47	B区	含合層	弥生土器	蓋?	口縁部破片	(3.9)	—	平行直線文	マメツ?		
4	31-4	B-49	B区	含合層	弥生土器	蓋	口縁部破片	(3.0)	—	地文網文	マメツ 刻溝		
5	31-6	B-51	B区	含合層	弥生土器	蓋	体部破片	(6.2)	—	地文植物茎回転文	マメツ?		
6	31-7	B-45	B区	V層	弥生土器	蓋 or 頭	体部破片	(6.7)	—	地文網文	ミガキ 刻溝		
7	31-7	B-50	B区	含合層	弥生土器	蓋	口縁部破片	(3.0)	—	マメツ?	ミガキ? マメツ		
8	31-8	B-44	B区	V層	弥生土器	蓋	頭部破片	(3.1)	—	無文	ミガキ		
9	31-9	B-48	B区	含合層	弥生土器	鉢	体部破片	(5.6)	—	無文(文字なし)植物茎回転文	マメツ?		
10	31-10	K-12	B区	含合層	打製石器	スケレバー	長さ	幅	厚さ	—	特徴・備考		
11	31-11	K-13	B区	含合層	磨石器	磨石・敲石	(5.7)	3.5	1.3	流紋岩 242g			
							129	5.3	5.2	碧玉1面 蔵き面か?	370g		

第54図 第7次調査出土遺物(4)

が予想されていた。河川跡は検出されなかつたが、弥生時代の遺構及び遺物包含層が確認された。

II層からV層までが、弥生時代中期の遺物包含層であり、調査時の所見では、II層は水田跡の可能性がある。さらに、その下層でも層下面に凹凸があり、水田跡の可能性を検討する必要がある。出土土器には甕・壺・鉢・蓋などの器種があり、弥生時代中期に属するものと考えられる。石器は石斧丁など弥生時代に特徴的なもの、石鎌・磨石など縄文時代以来のものがあるほか、主に流紋岩製の石核・剥片・チップが多数出土した。叩き石も出土しており、近隣で石器製作が行われていた可能性がある。

参考文献

仙台市教育委員会 1994 「仙台東郊条里跡発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第183集

仙台市教育委員会 1996 「第6部 中在家南遺跡発掘調査報告」「中在家南遺跡」 仙台市文化財調査報告書第213集



1. A区VI層上面完掘全景（南から）



2. A区西壁断面（南東から）



3. A区北壁断面（南から）



4. A区II層上面検出（南から）



5. A区SD1検出（南から）



6. A区SD1完掘（南から）

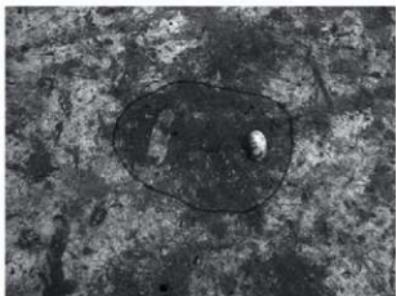
写真図版25 第7次調査（1）



1. A区 SD1 西壁断面（東から）



2. A区 SD1 東壁断面（東から）



3. A区 P1 検出（西から）



4. A区 P1 断面（西から）



5. A区土器出土状況（西から）



6. B区調査区全景（南から）



1. B区西壁断面（北東から）



2. B区北壁断面（南から）



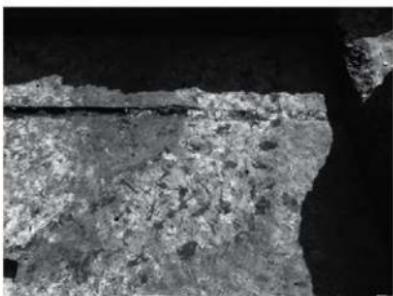
3. B区遺物包含層検出（南から）



4. B区SD1検出（西から）



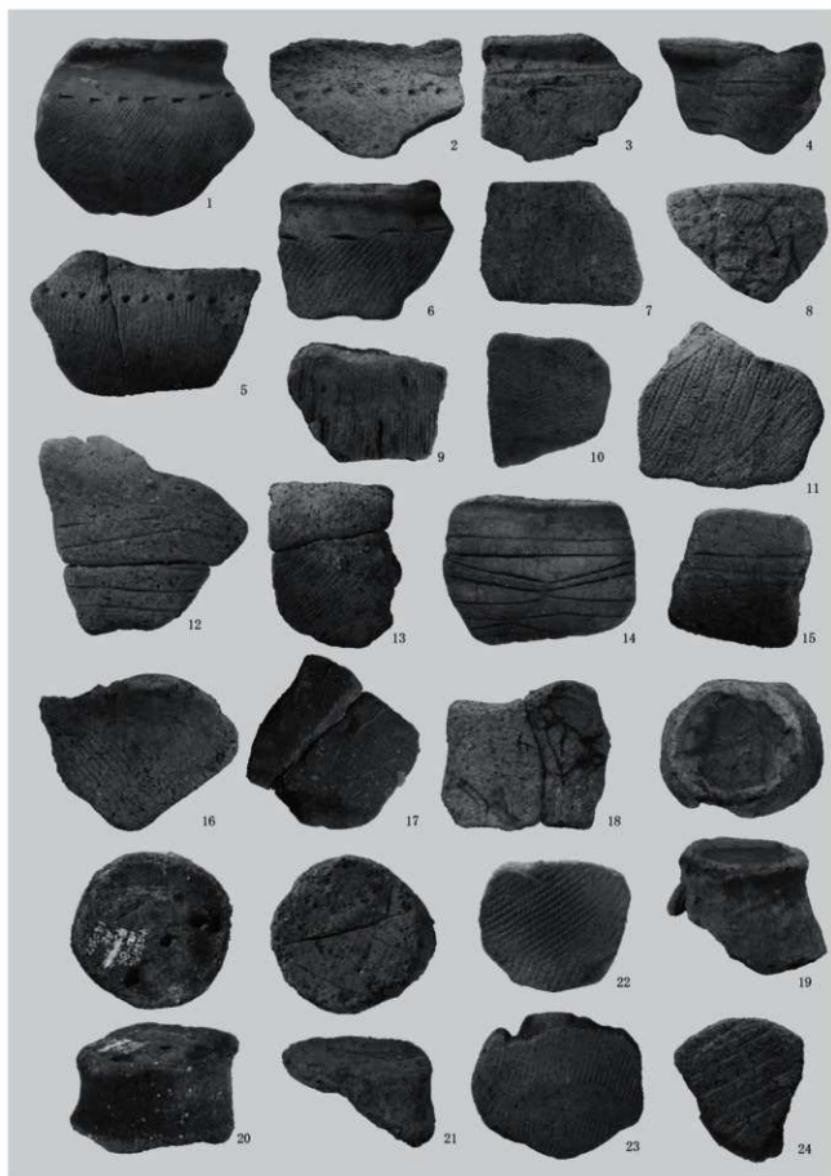
5. B区SD1断面（西から）



6. B区SD1完掘（西から）



写真図版 28 第7次調査出土遺物（1）



写真図版 29 第7次調査出土遺物 (2)



写真図版 30 第7次調査出土遺物 (3)



写真図版 31 第7次調査出土遺物 (4)

第3節 郡山遺跡

I. 第245次調査

1. 調査要項

遺跡名 郡山遺跡

(宮城県遺跡登録番号 01003)

調査地点 仙台市太白区郡山三丁目 35-18,

35-19, 35-20

調査期間 平成25年11月13日～11月28日

調査対象面積 建築面積 79.5m²

調査面積 38.9m²

調査原因 個人住宅建築工事

調査主体 仙台市教育委員会

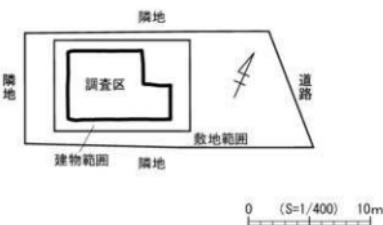
調査担当 仙台市教育生涯学習部文化財課

整備活用係

担当職員 主事 及川謙作

文化財教諭 伊藤翔太

文化財教諭 石山智之



第55図 第245次調査区設定図

2. 調査に至る経過と調査方法

調査は、平成25年7月22日付けで申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成25年7月29日付けH25教生文第123-161号で回答)に基づき実施した。

調査地点はⅡ期官衙北辺の大溝や材木塀に近く、建物建築予定地内に東西6.5m、南北6mの調査区を設定し、平成25年11月13日より調査を開始した。調査時には、重機により盛土及び基本層Ⅰ層を掘削し、基本層Ⅱ層上面で遺構検出作業を行った。

調査では、必要に応じて平面図・断面図を作成し、デジタルカメラ・フィルムカメラを併用し記録写真を撮影した。11月28日に重機による埋め戻しを行い、調査を終了した。

3. 基本層序

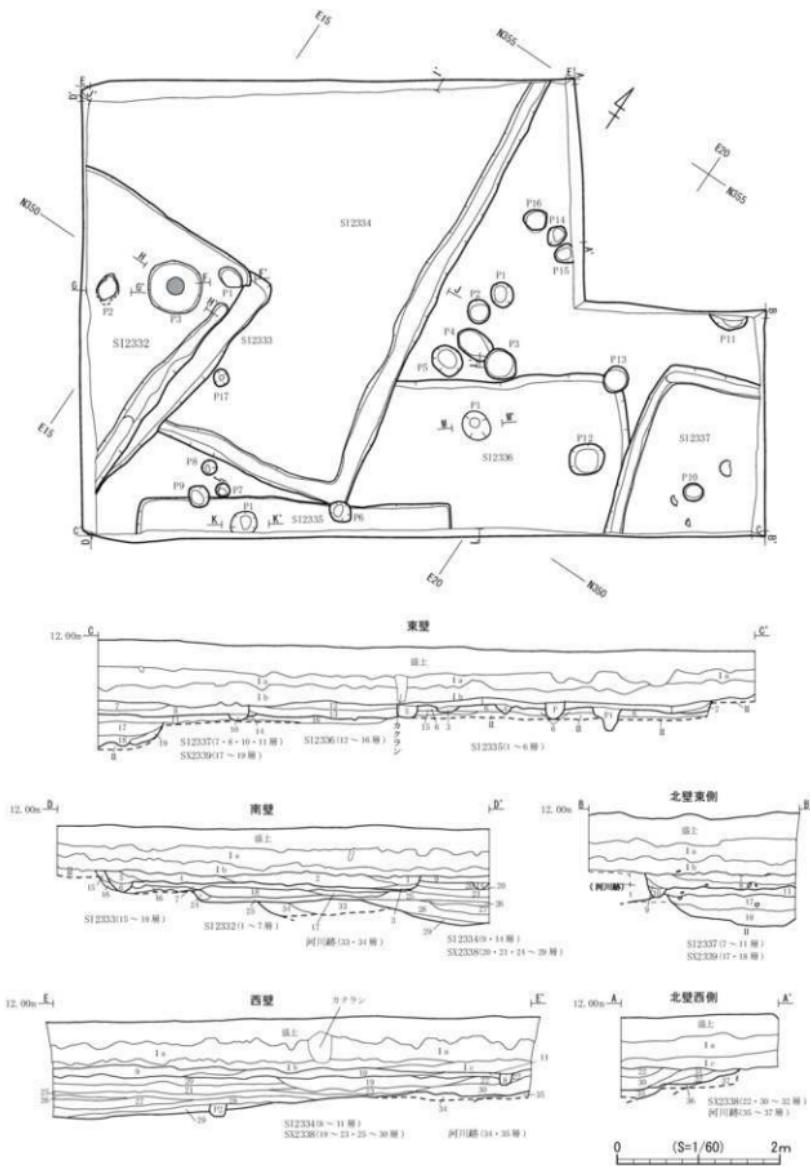
調査区には、宅地化に伴うとみられる盛土が約20～40cmあり、その下層に耕作土である層厚30～40cmのⅠ層がある。遺構検出面であるⅡ層上面までの深度は、約60cmである。

Ⅰa層：10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。層厚約10～20cm 耕作土で、炭化物粒・酸化鉄粒を含む。

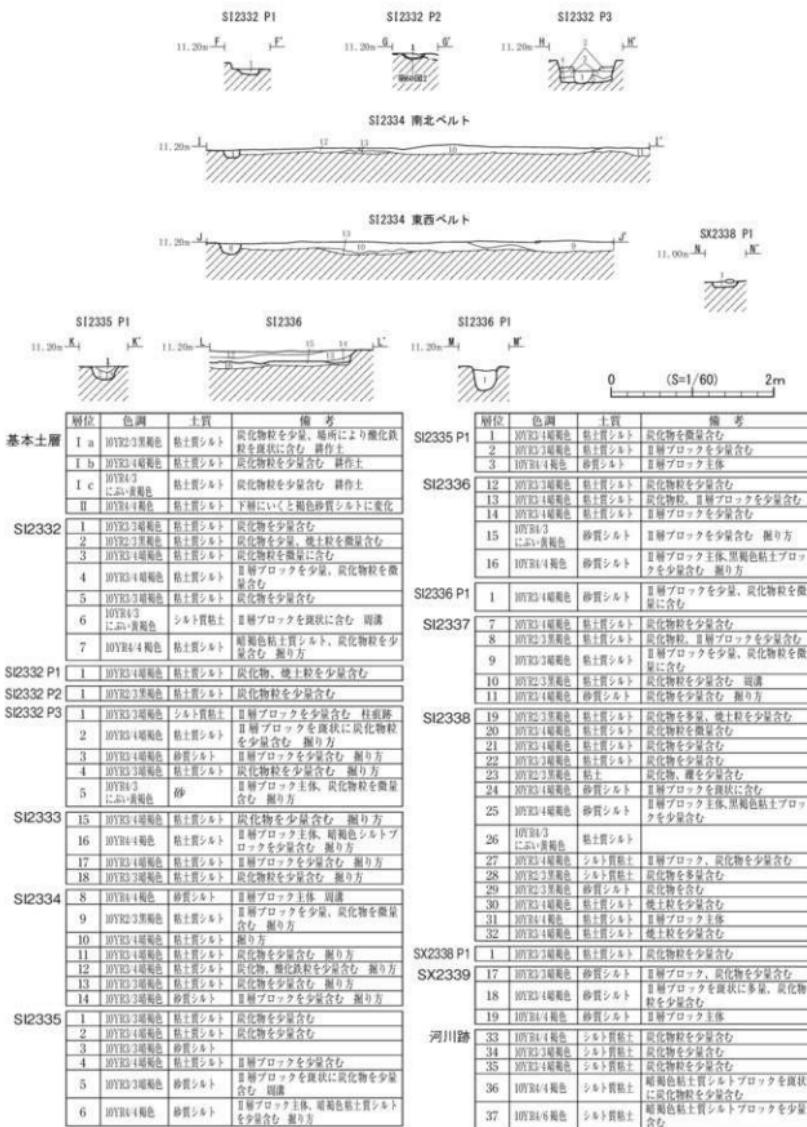
Ⅰb層：10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。層厚約4～25cm 耕作土で、炭化物粒を含む。

Ⅰc層：10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。層厚最大約15cmで、SI3の北部付近に分布している。比較的大粒で約1cm炭化物粒を含む。

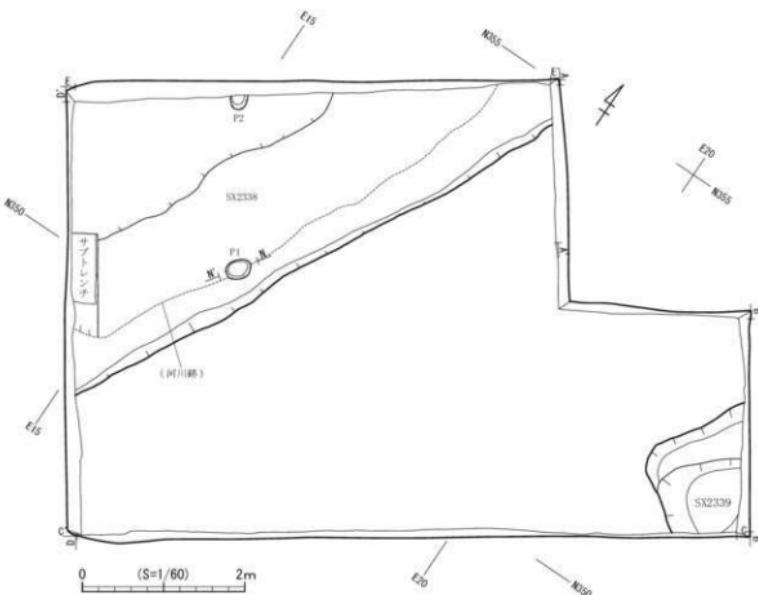
Ⅱ層：10YR4/4 暗褐色粘土質シルト。遺構検出面（層厚未確認） 下層では漸次、砂質シルト（10YR4/6）へ変化していく。



第56図 第245次調査区平面図(1)・断面図(1)



第245次調査区断面図(1)



第58図 第245次調査区平面図(2)

4. 発見遺構と出土遺物

II層上面で検出した遺構は、竪穴住居跡6軒、性格不明遺構2基、ピット17基である。遺物は、各遺構及び基本層I層、II層上面から土師器、須恵器、土製品、石製品等が出土している。

(1) 竪穴住居跡

SI2332 竪穴住居跡

調査区南端に位置し、II層上面で検出した。規模は東西2.4m以上、南北3.3m以上、深さ約10~26cmである。住居方位は、東壁でN2°-Wである。堆積土は6層確認でき、6層上面が床面である。床面では、カマドや貯蔵穴は検出できないが、ピット3基と周溝を検出した。P2では須恵器双口盤が正位置で安置された状況で出土した。P3は直徑65cm、深さ約30cmで円形を呈し、直徑22cmの柱痕跡が見つかっている。壁面に近いが、住居の主柱穴と考えられる。周溝は東壁沿いのみで検出され、深さ約12~18cmを測る。SI2333・SI2334・SX2338と重複し、これらより新しい。

遺物は、土師器の坏類や甕の細片が少量、須恵器の坏4点・蓋2点・甕1点・双口盤1点、土製品（輪の羽口片）2点などが出土した。蓋はカエリのあるもの、カエリがなく扁平なもの各1点である。このうち、図示できたのは内外面にミガキ調整のある土師器坏（第60図1）、須恵器双口盤（第60図2）である。盤は、本道跡でこれまで出土例のない、本体部分に二ヶ所注ぎ口を取り付けたもので、盤本体部分には歪みが認められる。口とした部分は管見では類例を確認できなかったが、形状から耳ではなく注ぎ口と判断した。他に、鉄津6点（131g、写真42-2）、碁石状の半透明の白い石1点（写真43-8）がある。

SI2333 竪穴住居跡

調査区南端に位置し、Ⅱ層上面で検出した。大部分はSI2332と重複しており、SI2332同様、調査区外に延びていると考えられる。規模は東西50cm以上、南北3.3m以上、深さ約20~30cmである。住居方位は、東壁でN-8°Eである。堆積土はSI2332の下層にも残存し、合わせて4層確認できた。調査区内ではカマドや柱穴などの遺構は検出できなかった。SI2332より古く、SI2334・SX2338より新しい。

遺物は、土師器の壺や甕の細片が少量、須恵器壺・蓋・甕の細片各1点ずつで、図示できるものはない。また、碗形滓を含む鉄滓2点(29.5g、写真42-3)が出土した。

SI2334 積穴住居跡

調査区西半部を占め、Ⅱ層上面で検出した。調査区外に延びている。規模は東西4.9m以上、南北5.9m以上、深さ12~28cmである。方位は、東壁で約N-12°-Wである。堆積土は6層確認でき、検出面が床面で、I層は周構堆積土である。調査区内ではカマドや貯藏穴は検出できなかったが、東壁と南壁に沿って周溝を検出した。その深さは10~15cmである。SI2332・2333より古く、SI2336・SX2338より新しい。SI2335との重複関係は不明である。

遺物は、土師器の壺・高壺・甕の細片が少量、須恵器はいずれも破片で壺4点・蓋5点(カエリのあるもの4点)・瓶類10点・甕2点・硯1点の出土である。図示できたのは、手づくねのミニチュア土器(第61図1)、口唇部内側に沈線を巡らす畿内系の土師器壺片(写真37-11)、須恵器円面硯(第61図2)、須恵器盤(第61図3)である。盤は、脚が付くか不明である。他に、輪の羽口片2点、被熱した粘土塊数点が出土した。

SI2335 積穴住居跡

調査区南東部に位置し、Ⅱ層上面で検出した。調査区外に延びている。規模は調査区壁面と平行する北西壁約3.9m、南西壁0.4m以上、深さ4~10cm(掘り方を含めると約16cm)で、形状は方形を呈すると考えられる。方位は北西壁で約N-52°-Eである。堆積土は7層確認でき、6層上面が床面である。調査区内では、カマドなどは検出できず、ピット3基を検出した。重複関係は、SI2336より新しく、SI2334より古い。遺物は、出土していない。

SI2336 積穴住居跡

調査区東部に位置し、Ⅱ層上面で検出した。調査区外に延びている。規模は北西壁で約2.6m以上、北東壁0.9m以上、深さ16~28cmを測る。調査区内では他の住居跡と重複し、残存状況が悪い。方位は北西壁で約N-48°-E、SI2335の方位に近い。堆積土は4層確認できた。調査区内でピット1基が検出されたが、カマドなどの施設は検出できなかった。重複関係は、SI2334・SI2335・SI2337より古い。

遺物は、土師器甕の破片が少量出土した。図示できたのは、甕1点(第61図4)である。

SI2337 積穴住居跡

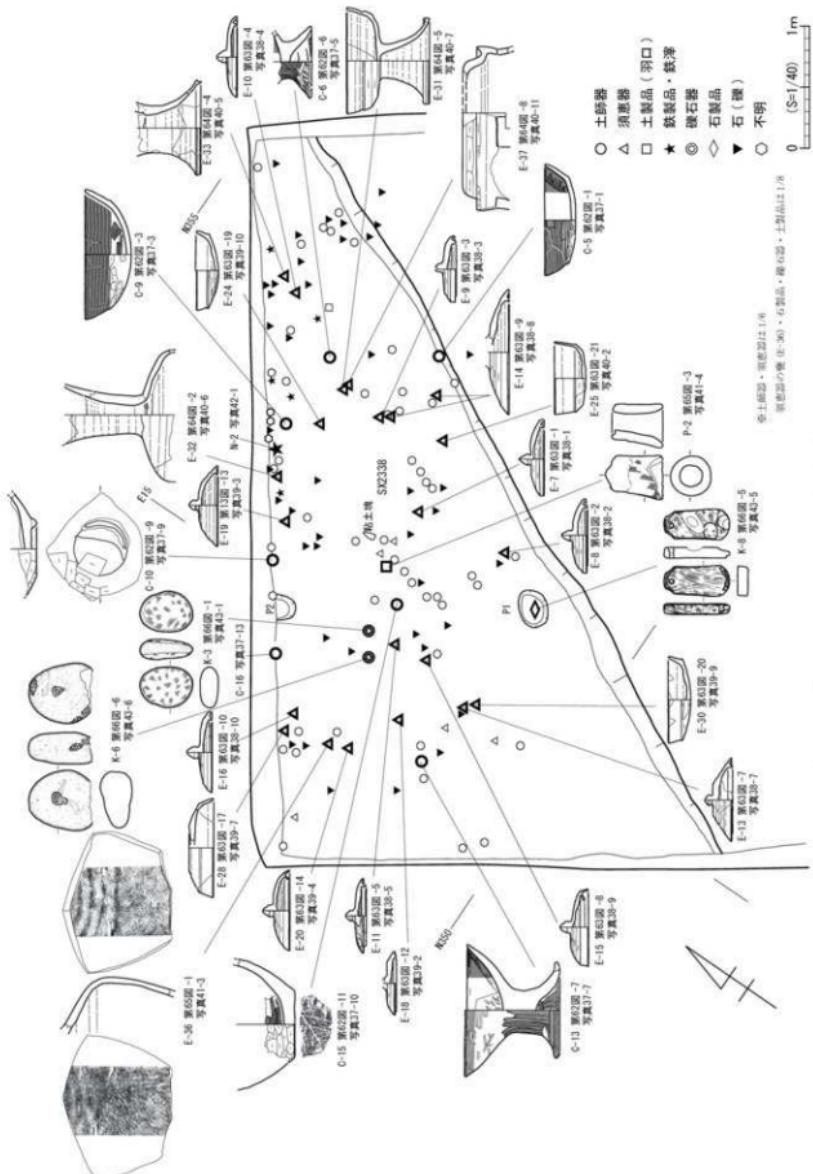
調査区東端部に位置し、Ⅱ層上面で検出した。北西角付近を検出したのみで、調査区外に延びている。規模は東西約1.2m以上、南北約2.3m以上、深さ16~24cmを測る。方位は西壁で約N-19°-Wである。堆積土は5層分確認でき、このうち5層上面が床面である。各壁に沿って周溝が検出され、深さは約10cmである。重複関係は、SI2336・SX2339より新しい。

遺物は、土師器は蓋のほか壺・甕の破片が少量、須恵器も破片で、壺1点・蓋2点(扁平でカエリなし1点・宝珠ツマミのあるもの1点)・甕4点が出土した。他に、鉄滓2点(5.0g)が出土した(写真42-4)。図示できたのは、宝珠ツマミのある内外面黒色処理した土師器蓋(第61図5)がある。これは、鉢か盤の蓋と考えられる。須恵器は甕(第61図6)がある。

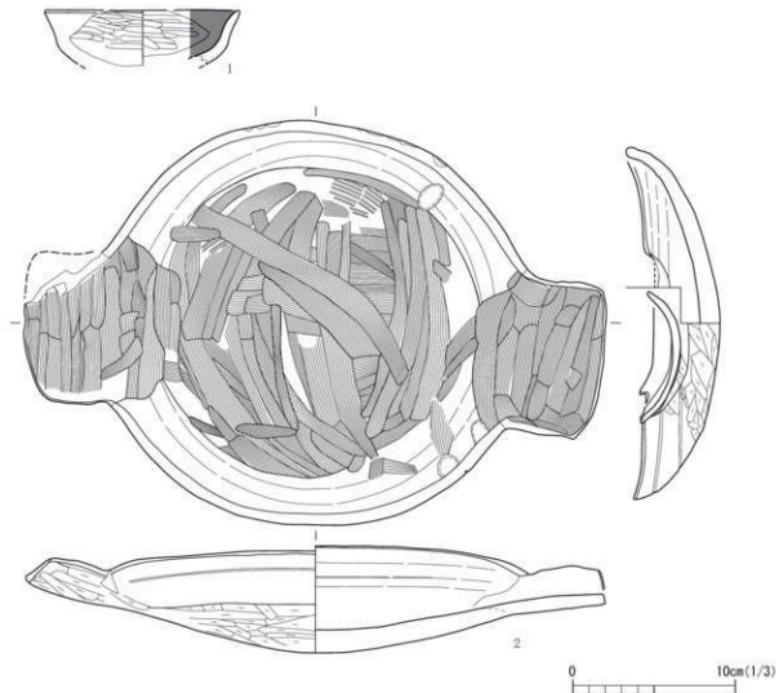
(2) 性格不明遺構

SX2338 性格不明遺構

調査区西部に位置し、Ⅱ層上面で検出した。西側の調査区外に延びている。規模は東壁で約6.8m以上、これに直交する最大幅は3.2m以上、深さは5~34cmを測る。河川跡の疊みに形成された包含層の可能性もあるが、ブ



第59図 第245次調査 SX2338遺物出土状況

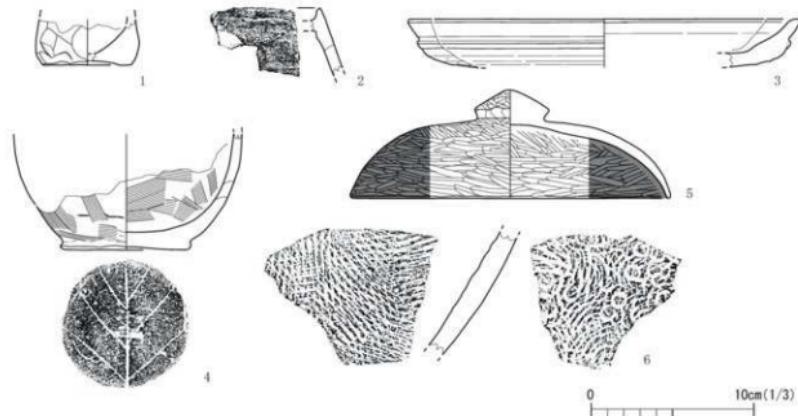


掲載番号	写真番号	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調査・文様		備考
								高さ	口径	底径	外面	内面	
1	36-2	C-1	SI2332		漆器	漆器	口~底5 (3.4)	11.5 (12.0)	—	—	ハラミガキナナ	ハラミガキ黒色施用	
2	36-1	E-3	SI2332 P2	1層	須恵器	双口盤	ほぼ完形	6.6	35.8	24.8	ロクロナナヘラナナ	ロクロナナヘラナナ一部に 施用・明き目あり	ピットに埋設
—	42-2	N-4	SI2332		鉄製品	鉄滓	—	—	—	—	—	—	
—	43-8	K-2	SI2332		石製品	玉?	完形	—	—	—	—	—	1cm位の平均粒 白色

第60図 第245次調査出土遺物(1)

ランが直線的で、底面が比較的平坦であることから、性格不明遺構とした。下層の河川跡堆積土とは不整合である。東壁の方位は約 N-21°-E である。堆積土は 11 層確認でき、遺物は 26 ~ 29 の各層より出土したが(第62 ~ 66図)、特に 28 層に多い。重複関係は、SI2332・2333・2334 より古く、河川跡より新しい。遺構の東辺側で P1 を、調査区西壁で P2 を検出した。P1 からは、内黒毫片・有孔砥石が 1 点ずつ出土した。

遺物は、26 ~ 29 層で土師器の壺や甕などが出土したが、器種の特定できない破片が多い。図示できたのは、壺 4 点(第62図1~4)、高壺 3 点(第62図5~7)、甕 5 点(第62図8~11・写真37-13)である。壺は第62図2を除き、内面黒色処理を施している。高壺はいずれも内面黒色処理を施すが、第62図5は脚部内側も黒色を呈している。しかも壺部と脚部で特徴の異なる粘土(壺部は砂の目立たない白色系、脚部は砂の目立つ褐色系)を使用し接合した特異な例である。甕では第62図9が底部の約 1/3 に高台状に粘土紐を貼付している。上部の歪みなどを補正する目的と考えられる。写真37-13は図示できないが、かなり大型の甕の破片とみられる。

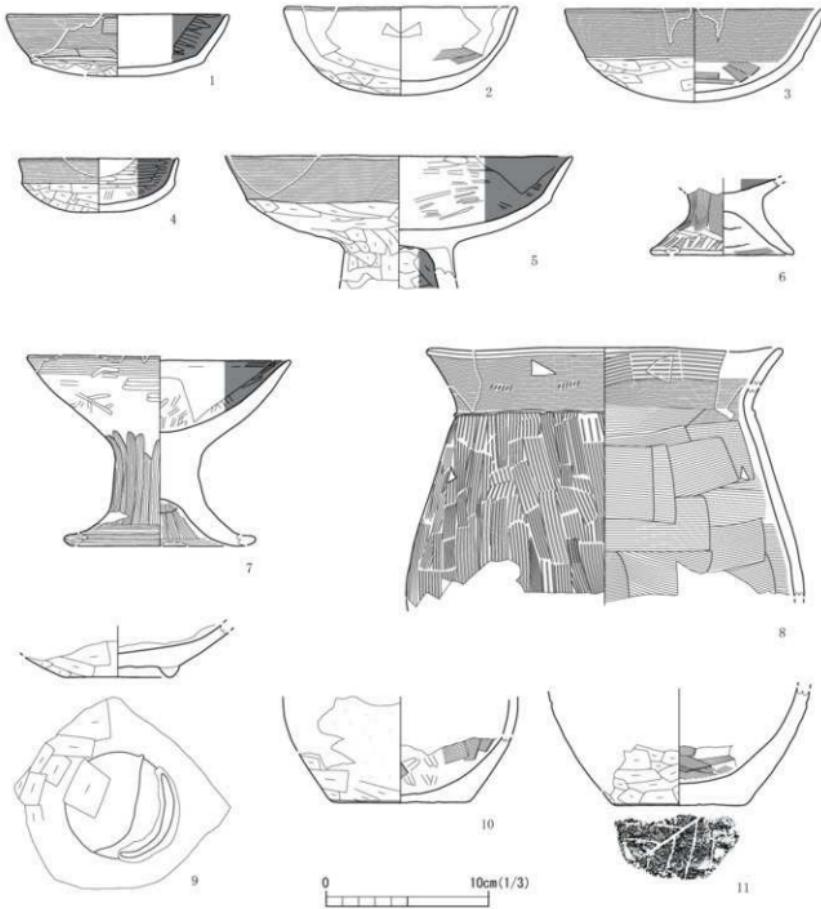


掲載番号	写真番号	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調整・文様		備考
								器高	口径	底径	外面	内面	
1 36-3	C-2	SI2334	堆積層	モロコシ土器層(ニケアト層)	須恵器	底部1/4	(2.8)	—	5.4	ナデ	ナデ?	手捏ね成形	
2 36-6	E-4	SI2334	1層	須恵器	円面鏡	脚部破片	(4.2)	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ		
3 36-7	E-5	SI2334	須恵器	脚部盤?			(3.0)	(24.1)	—	ロクロナデ 回転ヘラタスリ 壁帶粘合か?	ロクロナデ		
4 36-4	C-3	SI2336	モロコシ土器層	蓋	底部破片	(7.1)	—	7.6	ヘラケズリ→ヘラナデ	ヘラナデ	底部木葉紋		
5 36-5	C-4	SI2337	堆積層(モロコシ土器層)	蓋(塊 or 路)	1/2	6.7	(19.8)	—	—	ヘラミガキ 黒色處理	ヘラミガキ 黑色處理		
6 36-8	E-6	SI2337	須恵器	蓋	底部盤(7.1)	(7.6)	—	—	平行叩き目	青海波文			
— 37-11	C-17	SI2334	モロコシ土器層	環(小型)	口縁部破片	—	—	—	—	—	内系口周辺に花織文		
— 41-6	P-4	SI2334	土製品	輪羽口	破片	—	—	—	—	—	4個分?		
— 42-3	N-5	SI2333	鉄製品	鉄津	—	—	—	—	—	—	輪形津		
— 42-4	N-6	SI2337	鉄製品	鉄津	—	—	—	—	—	—	—		

第61図 第245次調査出土遺物(2)

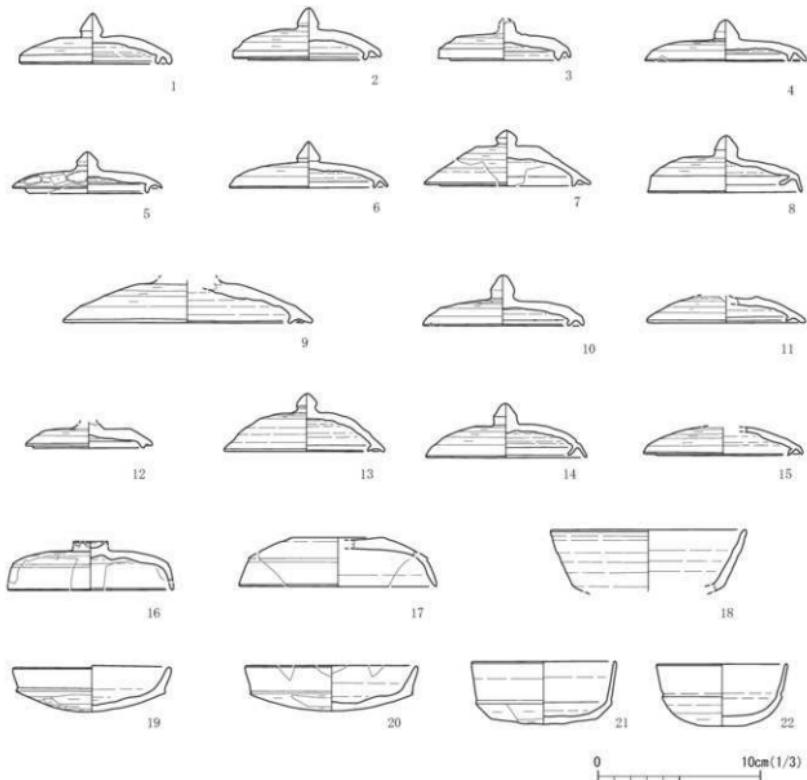
須恵器も破片が多いが、蓋は完形品があり復元率も高かった。土師器同様26~29層で出土し、28層で特に多い。SI2332やSI2334の出土遺物と接合するものがある。接合後の総点数は106点で、内訳は坏28点、高台坏1点、高坏8点、蓋(カエリ有)25点、蓋(カエリ無)2点、蓋(カエリ有無不明)8点、瓶類7点、小型壺1点、甕18点、円面鏡2点、器種不明6点である。坏や甕は少なく、宝珠形ツマミが付きカエリのある蓋が多い。蓋には胎土の特徴に違いがあり、第63図1・2は搬入品とみられる。第63図16は唯一ボタン状のツマミが付く例である。また、第63図17は段のある蓋としたが、他の器種の可能性もある。第64図1は小型壺、第64図2は長頸瓶である。第64図3は高坏としたが、盤など他の器種の可能性もある。高坏には透かしの有無の違いがある。第64図8・9は円面鏡、第64図10・11、第65図1は甕である。土製品には支脚と羽口がある。第65図2は上端部に溝状のくぼみのある支脚片である。第65図3・4は輪の羽口であるが、圓化できなかった破片も数点ある。第65図5は板状鉄製品である。破片のため、器種・用途は不明である。写真42-1は断面U字形を呈し、長さ約9cm、幅約12cm、厚さ1mm以下の薄板で、さらにその表面を厚さ1mm以下の銅の薄板で被覆している(銅は緑青がふいていて確認できる)。錫びが取れず、文様の有無が確認できない。金具の一部とみられるが、芯となる木質部分は消失している。第66図1~4・6は鏽石器である。このうち、1~4は大きさの異なる磨石、6は敲石である。第66図5は小型で携帯用とみられる有孔砥石である(ビット1)。

この他、鉄津関係として26~29層で取上げた遺物は、鉄津94点、碗形津15点、炉壁片10点、羽口片1点(計3,360g)がある。また、白色粘土、被熱粘土塊、骨片(動物・焼骨)が出土している。須恵器蓋と小鍛冶関係遺物の多



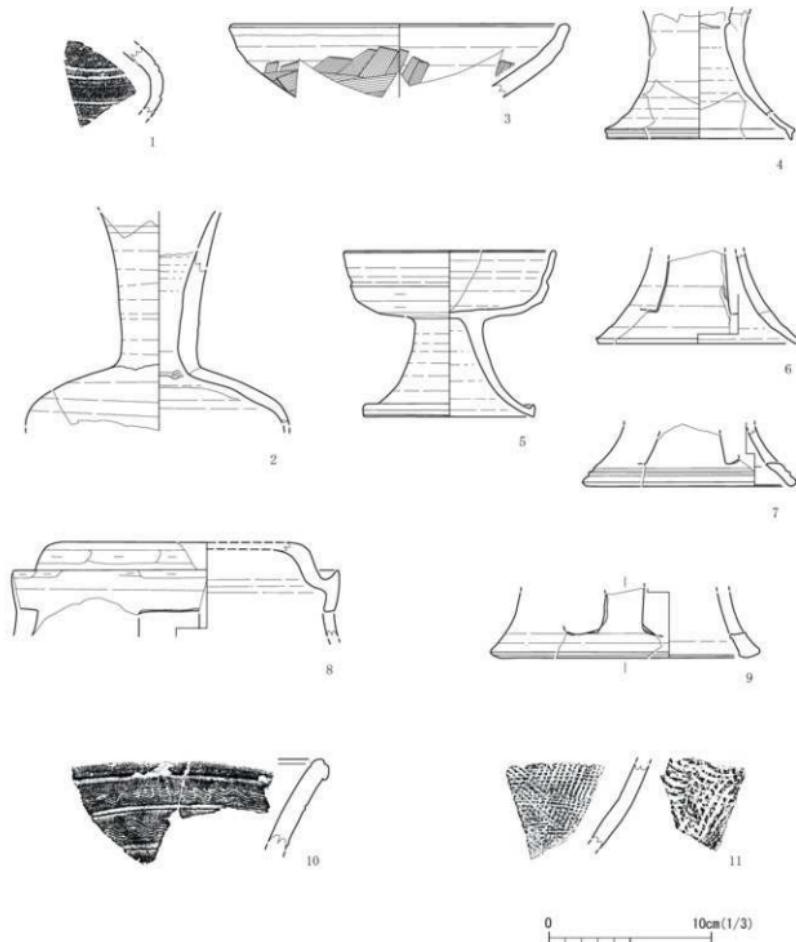
掲載番号	写真 図版	登録番号	出土 遺構	出土 層位	種別	器種	残存	法量 (cm) 高さ 口径 底径	調整・文様		備考	
									外面	内面		
1	37-1	C-5	SX2338	埠塚土塗壁	環	環	1/2	3.8 0.360	—	ヨコナデ ヘラナデ ヘラ タグリ→ヘラタグリ	ヘラミガキ 黒色透理	SI2334と接合
2	37-2	C-8	SX2338	10層	埠塚土塗壁	環	1/4	5.4 0.425	—	ハサツ→彫刻ひめタグリ	ナデ マメツ	
3	37-3	C-9	SX2338	10層	埠塚土塗壁	環	1/2	5.7 (15.8)	—	ヨコナデ ヘタケズリ	ヨコナデ ヘタナデ 黑色透理	
4	37-4	C-12	SX2338	10-11層	埠塚土塗壁	環	1/4	3.3 (9.8)	—	ヨコナデ ヘタケズリ	ヘラミガキ 黑色透理	
5	37-6	C-7	SX2338	8~10層	埠塚土塗壁	高环	1/3	8.2 (21.2)	—	外面:ヨコナデ ヘタケズリ 内面:ハラミガキ 黑色透理	埠塚:ヘラミガキ 黑色透理 脚部:ヘラナデ	
6	37-5	C-6	SX2338	埠塚土塗壁	高环	高環のみ	(4.7)	—	8.6 ナデヨコナデ→ヘラタグリ	ヨコナデ ヘラタグリ	ヨコナデ 黑色透理 部落番号?	
7	37-7	C-13	SX2338	10層	埠塚土塗壁	高环	2/3	11.7 16.3	11.8	ヨコナデ ヘタケズリ ナタケルテ→ヘラタグリ	ヨコナデ ヘタナデ 黑色透理	
8	37-8	C-11	SX2338	10層~	埠塚土塗壁	夷	上半部1/2	(15.8) (21.5)	—	ハマメヨコナデ ハラミ ナタケルテ→ヨコナデ	ハマメヨコナデ ハラミ ナタケルテ→ヨコナデ	
9	37-9	C-10	SX2338	10層	埠塚土塗壁	夷	底部	3.2	—	6.5 ヘラケズリ	ヘラナデ	底部:全周の1/3に高台黏付 (水平を張つむき)
10	37-12	C-14	SX2338	10~11層	埠塚土塗壁	夷	底部付近	6.5 0.55	—	8.6 ヘラケズリ	ヘラナデ→ヘラミガキ 面の朱色	
11	37-10	C-15	SX2338	10~11層	埠塚土塗壁	夷	底部付近	7.2	—	8.0 ヘラケズリ	ヘラナデ 全面黒色 泥花、木葉模	

第62図 第245次調査出土遺物(3)



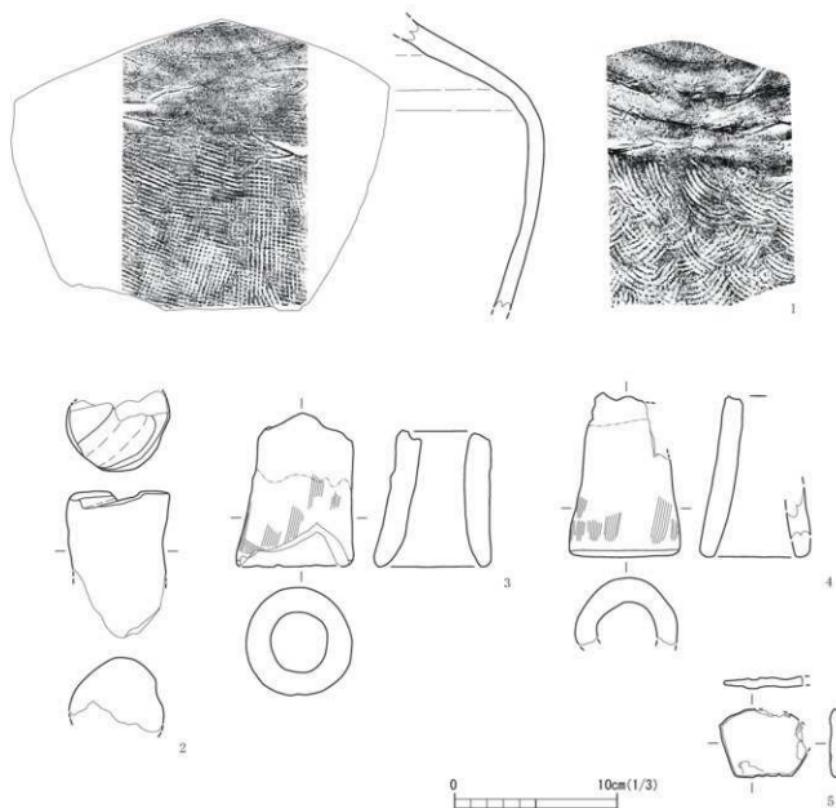
掲載番号	写真 図版	登録番号	出土 遺構	出土 層位	種別	器種	残存	法量 (cm)	調整・文様			備考
									外面	内面		
1	38-1	E-7	SX2338		須恵器	蓋	完形	31 (94)	ロクロナデ	ロクロナデ	東海系? カエリあり	
2	38-2	E-8	SX2338		須恵器	蓋	完形	32 (92)	ロクロナデ	ロクロナデ	東海系? カエリあり	
3	38-3	E-9	SX2338		須恵器	蓋	(ほぼ)完形 (2.4)	8.1	ロクロナデ	ロクロナデ	カエリあり つまみ部一部欠損	
4	38-4	E-10	SX2338		須恵器	蓋	(ほぼ)完形	25 (106)	ロクロナデ	ロクロナデ	カエリあり	
5	38-5	E-11	SX2338		須恵器	蓋	1/2	25 (92)	ロクロナデ	ロクロナデ	カエリあり	
6	38-6	E-12	SX2338		須恵器	蓋	1/4	28 (98)	ロクロナデ	ロクロナデ	カエリあり SI2334と接合	
7	38-7	E-13	SX2338		須恵器	蓋	1/3	34 (102)	ロクロナデ	ロクロナデ	カエリあり	
8	38-8	E-15	SX2338	9層	須恵器	蓋	(ほぼ)完形	35 (95)	ロクロナデ	ロクロナデ	カエリあり 突起品か?	
9	38-9	E-14	SX2338		須恵器	蓋	1/6	(2.6) (15.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	カエリあり つまみ部欠損	
10	38-10	E-16	SX2338	9層	須恵器	蓋	(ほぼ)完形	3.1 (99)	ロクロナデ	ロクロナデ	カエリあり	
11	39-1	E-17	SX2338	8~10層	須恵器	蓋	1/2 (1.7)	(98)	ロクロナデ	ロクロナデ	カエリあり つまみ部欠損	
12	39-2	E-18	SX2338	10層	須恵器	蓋	(ほぼ)完形	(1.6) (78)	ロクロナデ	ロクロナデ	カエリあり つまみ部欠損	
13	39-3	E-19	SX2338	10層	須恵器	蓋	完形	3.6 (99)	ロクロナデ	ロクロナデ	カエリあり	
14	39-4	E-20	SX2338	10層	須恵器	蓋	(ほぼ)完形	33 (99)	ロクロナデ	ロクロナデ	カエリあり	凹面-丸
15	39-5	E-21	SX2338	10層	須恵器	蓋	1/3 (2.7)	9.9	ロクロナデ	ロクロナデ	カエリあり つまみ部欠損	
16	39-6	E-22	SX2338	8~10層	須恵器	蓋	1/2	30 (100)	ロクロナデ	ロクロナデ	入出孔?	
17	39-7	E-28	SX2338	10層	須恵器	蓋	1/3	3.0 (57)	ロクロナデ	ロクロナデ		
18	39-8	E-23	SX2338		須恵器	环	1/4	3.8 (12.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	SI2334と接合	
19	39-9	E-24	SX2338		須恵器	环	(ほぼ)完形	2.9 (97)	ロクロナデ	ロクロナデ	U縁一部欠損	
20	39-9	E-30	SX2338	10~11層	須恵器	环	1/3	28 (106)	ロクロナデ	ロクロナデ		
21	40-2	E-25	SX2338		須恵器	环	1/2	39 (89)	ロクロナデ	ロクロナデ		
22	40-1	E-27	SX2338	10層	須恵器	环	1/4	38 (81)	ロクロナデ	ロクロナデ		

第63図 第245次調査出土遺物(4)



第64図 第245次調査出土遺物(5)

掲載 番号	写真 図版	登録 番号	出土 遺構	出士 位別	種別	器種	残存	法量(cm)			調整・文様		備考
								器高	口径	底径	外側	内面	
1	40.3	E-26	SX2338		須恵器	壺?	体部破片	(4.3)	—	—	ロクロナデ 沈漫文	ロクロナデ	
2	40.4	E-32	SX2338	10層	須恵器	長颈瓶	頸~肩部	(13.4)	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	降灰あり
3	40.4	E-29	SX2338	10層	須恵器	高环?	—	1.5	(4.5)	(21.0)	ロクロナデ ヘラナデ	ロクロナデ ヘラナデ	
4	40.5	E-33	SX2338	10層	須恵器	高环	脚部	1.2	(7.8)	—	ロクロナデ	ロクロナデ	
5	40.7	E-31	SX2338		須恵器	高环	环径2/3	10.2	13.0	10.5	ロクロナデ 沈漫文	ロクロナデ	
6	40.8	E-39	SX2338		須恵器	高环	脚部	1.4	(5.7)	—	(12.4)	ロクロナデ 自然施	ロクロナデ
7	40.9	E-40	SX2338	10・11層	須恵器	高环	脚部破片	(3.7)	—	(12.6)	ロクロナデ 沈漫文	ロクロナデ	窓2ヶ所あり
8	40.11	E-37	SX2338		須恵器	円面瓶	腹部1/4	(5.8)	(20.1)	—	ロクロナデ ヘラナデ	ロクロナデ	窓4ヶ所か?
9	40.10	E-38	SX2338		須恵器	円面瓶	腹部1/8	(4.2)	—	(15.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	窓あり
10	41.1	E-34	SX2338		須恵器	壺	口縁墨書き	(5.5)	—	—	波状口縁	ヨコナデ	SI2334と接合
11	41.2	E-35	SX2338		須恵器	壺	体部破片	(5.2)	—	—	平行引き目 カキ目	青海波文	



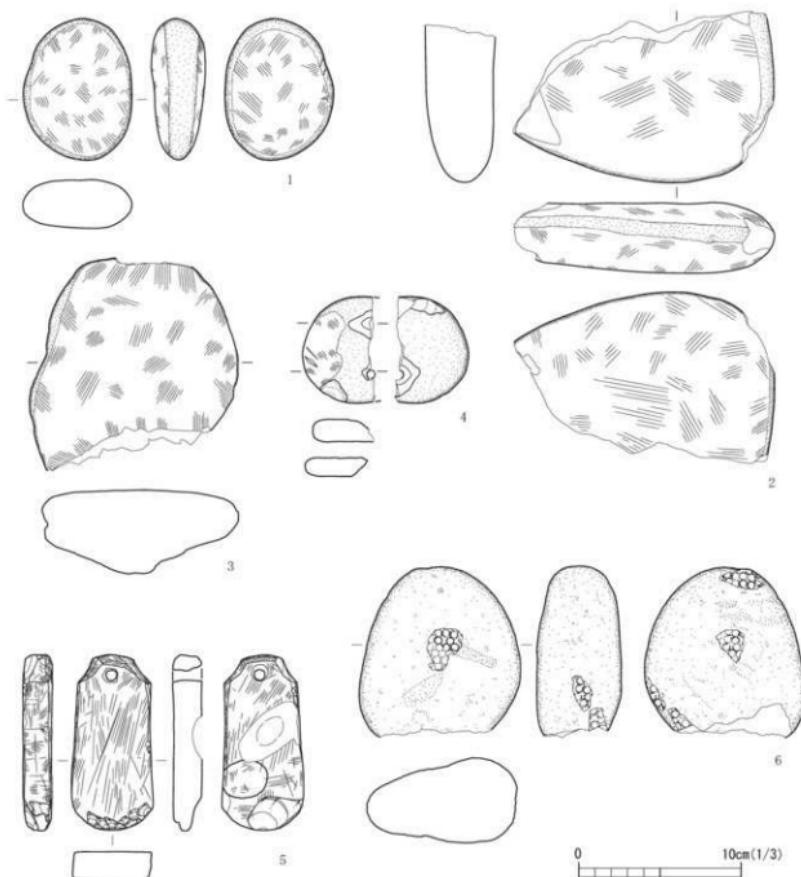
第65図 第245次調査出土遺物(6)

が注目される。

これらの遺物の年代は、出土した土師器、須恵器の特徴から、7世紀後半のものと考えられる。

SX2339 性格不明遺構

調査区北東角に位置し、SI2337の下層で検出した。規模は西壁で約1.3m、南壁で約1.0m、深さ約30cmを測る。形状は方形プランのように思われるが、その多くは調査区外にあり詳細は不明である。当初住居跡と考えられたが、底面は平坦ではなく、土坑になる可能性もある。堆積土は3層確認された。重複関係は、SI2337より古い。



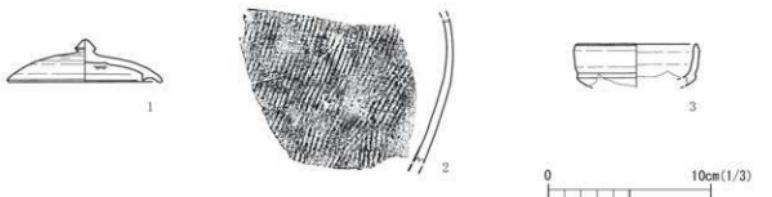
掲載番号	写真	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			特徴・備考
								長さ	幅	厚さ	
1	43-1	K-3	SX2338		礫石器	磨石	完形	8.7	6.7	3.3	磨面2面 272g
2	43-2	K-4	SX2338		礫石器	磨石	1/2?	(16.0)	10.5	4.3	磨面2面 1110g
3	43-3	K-5	SX2338		礫石器	磨石	3/4	(13.0)	12.8	5.1	磨面1面 1010g
4	43-4	K-7	SX2338	10層	礫石器	磨石	1/2	6.6	(4.5)	1.4	穿孔2ヶ所 穿孔途中で欠損か 磨面1面 35.0g
5	43-5	K-8	SX2338	11層	石製品	有孔砾石	一部欠損	10.7	5.0	1.7	穿孔1ヶ所 試削4面 74.5g
6	43-6	K-6	SX2338	10層	礫石器	円・鏡石	一部欠損	(10.5)	10.0	5.2	円面2ヶ所 鏡面3ヶ所 520g
—	37-13	C-16	SX2338	11層	石器	甕	—	—	—	—	外面:ハケメ 内面:ヘラナデ 灰化物付着 SX2334 と接合

第66図 第245次調査出土遺物(7)

遺物は、土師器高坏・甕の破片が少量出土したが、図示できるものはない。

(3) ビット

単独のビットを17基検出した。形状は円形もしくは楕円形を呈し、規模は20~45cm、深さ15~45cmを測る。



第67図 第245次調査出土遺物（8）

建物として組むものではなく、柱痕跡も確認できなかった。

遺物は、土師器壺片がP1・P2・P5・P6・P10～13で1点ずつ、須恵器はP6で壺1点、P15で蓋1点が出土した。また、P3で鉄滓1点が出土した。図示できたのは、P15の蓋（第67図1）である。

(4) 遺構外出土遺物

I層、II層上面で土師器・須恵器の破片が少量と、鉄滓・石器が出土した。図示できたのは、須恵器壺（第67図2）、須恵器壺（第67図3）である。写真43-7は黒曜石製の二次加工のある剥片である。打面に残る縦面の特徴から、原石の形状は転疊であったとみられる。

5.まとめ

今回の調査地点は、調査区北側でII期官衙の北辺外郭施設が想定されていたが、調査区内では外郭関連する遺構は検出されなかった。また、I期官衙北部の鍛冶工房群や雑舍群に比較的近い位置にある。調査では堅穴住跡6軒、性格不明遺構2基、ピット17基を検出した。主な遺構の重複関係は下記の通りである。なお、並列して表記した遺構は、必ずしも同時期を示すものではない。

住居跡は、調査区内では、カマド・主柱穴など住居としての要件が確認できていない。今後確認する機会を待たい。2基の性格不明遺構についても、全体プランが不明だが、堅穴遺構などの可能性がある。特に、SX2338は数多くの土師器・須恵器が出土し、須恵器蓋の偏在性や小鍛冶関係の遺物の多さなど、本遺跡ではこれまでにない特異な例である。鍛冶工房跡といえるかは、未調査部分の調査が今後必要である。遺物についても、SI2332の須恵器双口盤やSI2334の畿内系土器（飛鳥Ⅲ併行か）など特徴的で希少な例があり、他の土器類とともに今後詳細な検討が必要である。さらに、遺構の方位なども考慮して、遺構・遺物の帰属時期や性格づけなど解明すべき課題がある。





1. 調査区完掘全景（南から）



2. 調査区完掘全景（北東から）



3. 調査区完掘全景（南東から）



4. 調査区東壁断面（西から）



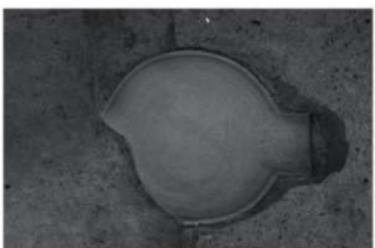
5. SI2332 床面検出（北東から）



6. SI2332 完掘（北東から）



7. SI2332 P3 断面（東から）



8. SI2332 P2 須恵器出土状況（北東から）



1. SI2332・2333 南壁断面（北東から）



2. SI2334 堀り方断面（北から）



3. SI2335 東壁断面（西から）



4. SI2335 P1 断面（北西から）



5. SI2336 北東側完掘（北東から）



6. SI2336 断面（北東から）



7. SI2336 P1 断面（北西から）



8. SI2336 土師器出土状況（北から）



1. SI2337 床面完掘（北西から）



2. SI2337 断面（南西から）



3. SI2337 完掘、SX2339 検出（北西から）



4. SX2339 完掘（西から）



5. SX2339 断面（南東から）



6. SX2338 検出（北東から）



7. SX2338 検出（南東から）



8. SX2338 遺物出土状況（東から）



1. SX2338 遺物出土状況（南東から）



2. SX2338 遺物出土状況（東から）



3. SX2338 遺物出土状況（北西から）



4. SX2338 遺物出土状況（北西から）



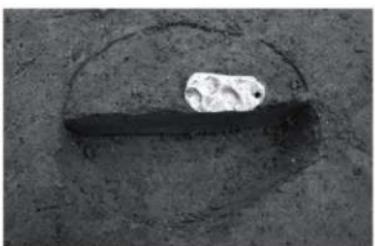
5. SX2338 観（E-37）（南西から）



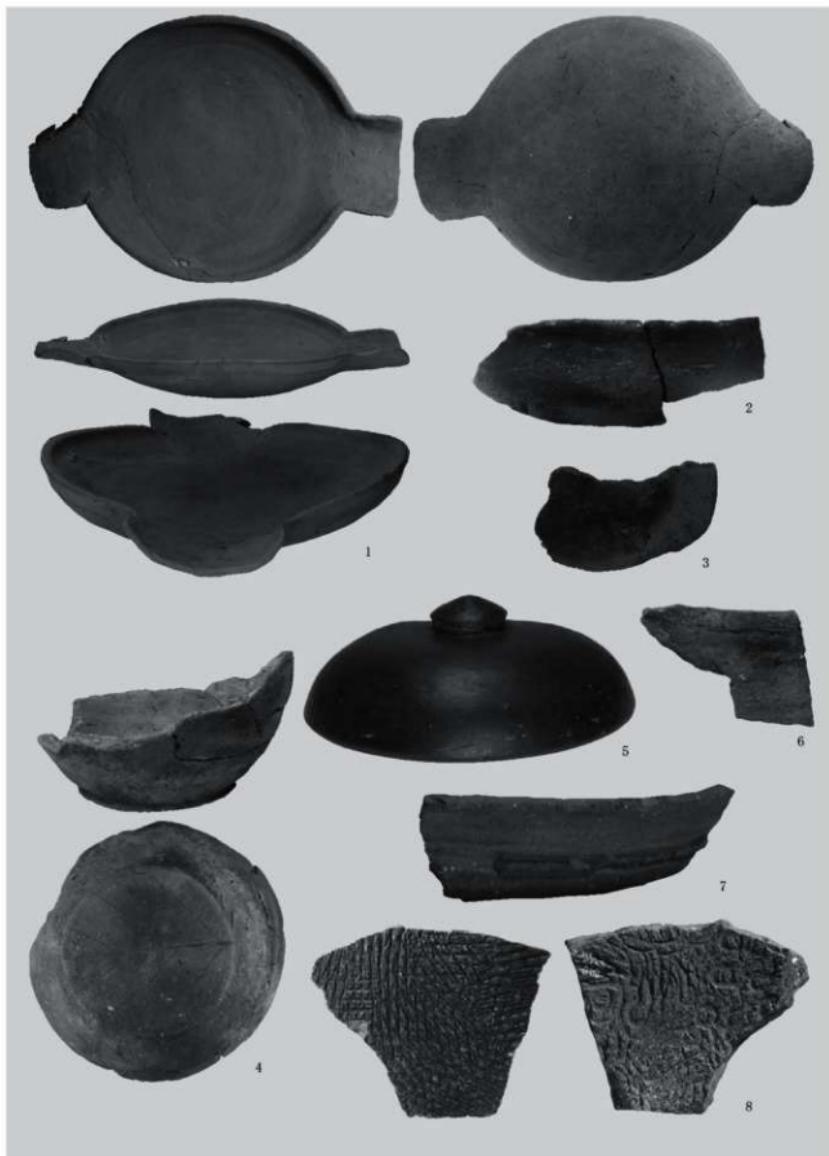
6. SX2338 須恵器出土状況（東から）



7. SX2338 羽口（P-2）出土状況（東から）



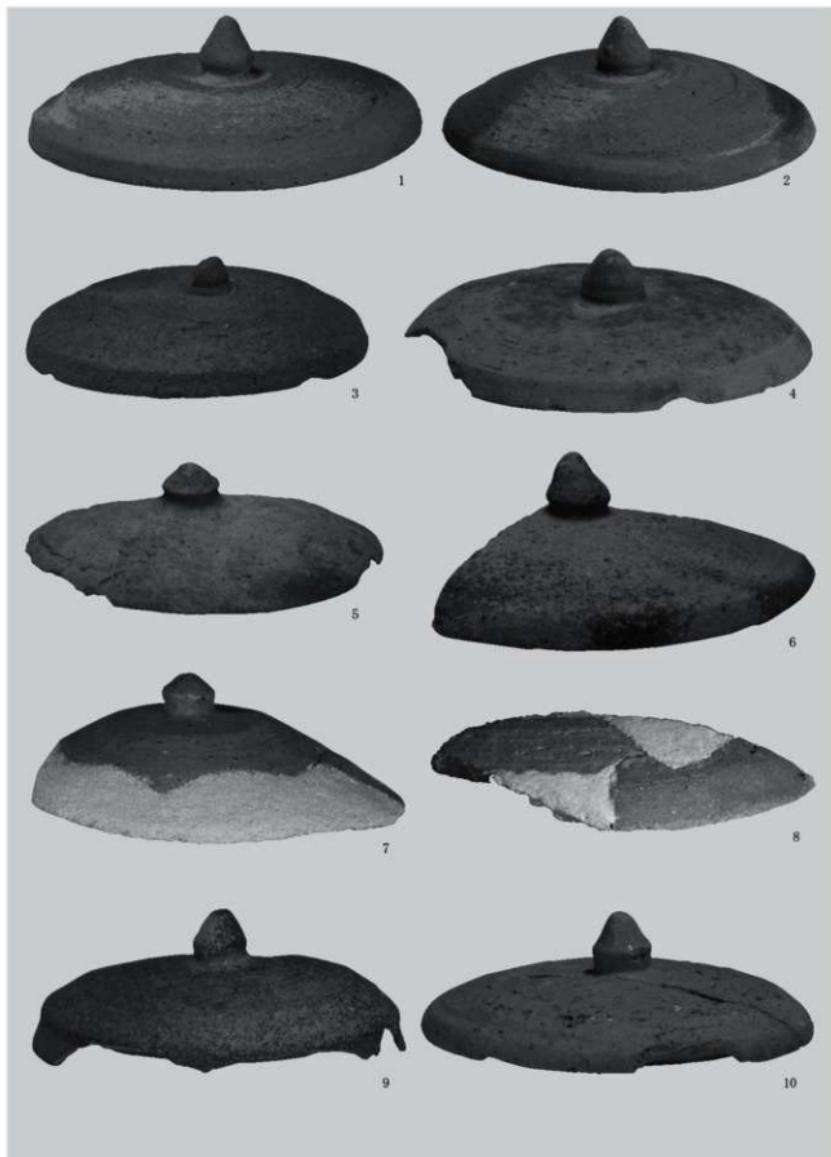
8. SX2338 石製品（K-8）出土状況（北西から）



写真図版 36 第 245 次調査出土遺物 (1)



写真図版 37 第245次調査出土遺物 (2)



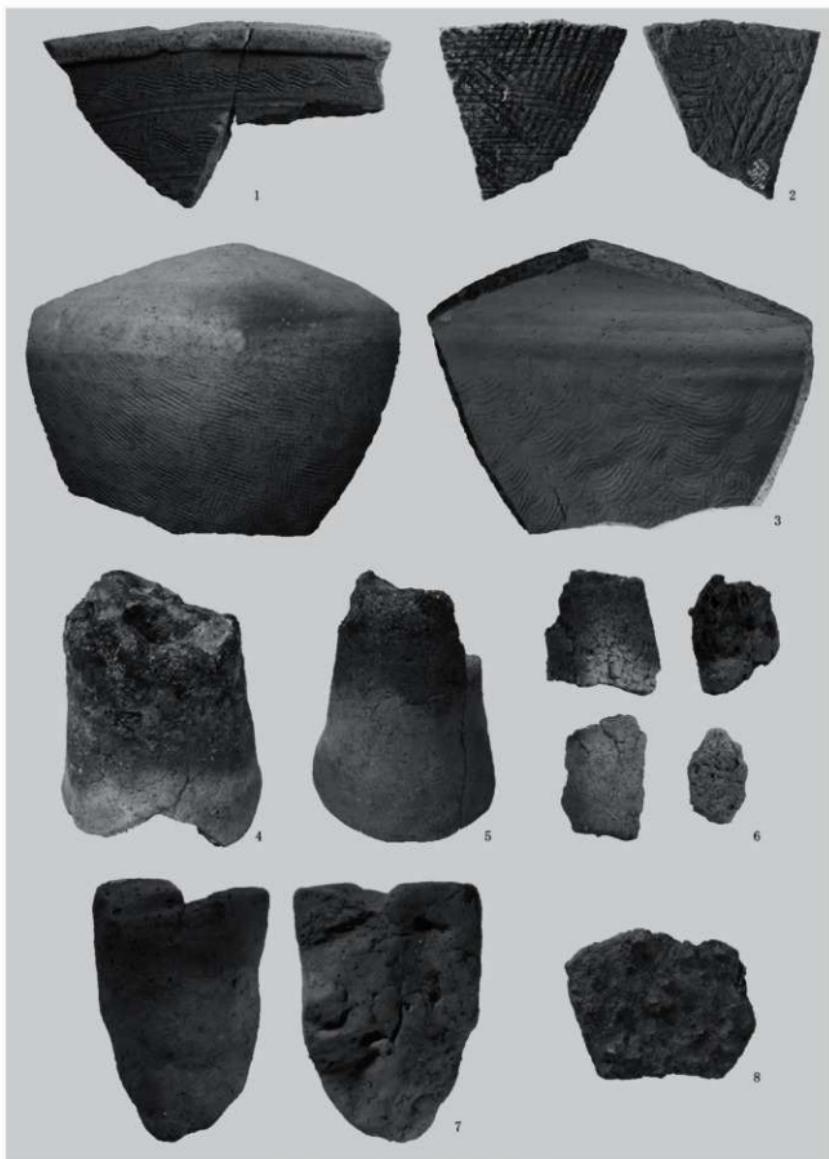
写真図版 38 第 245 次調査出土遺物 (3)



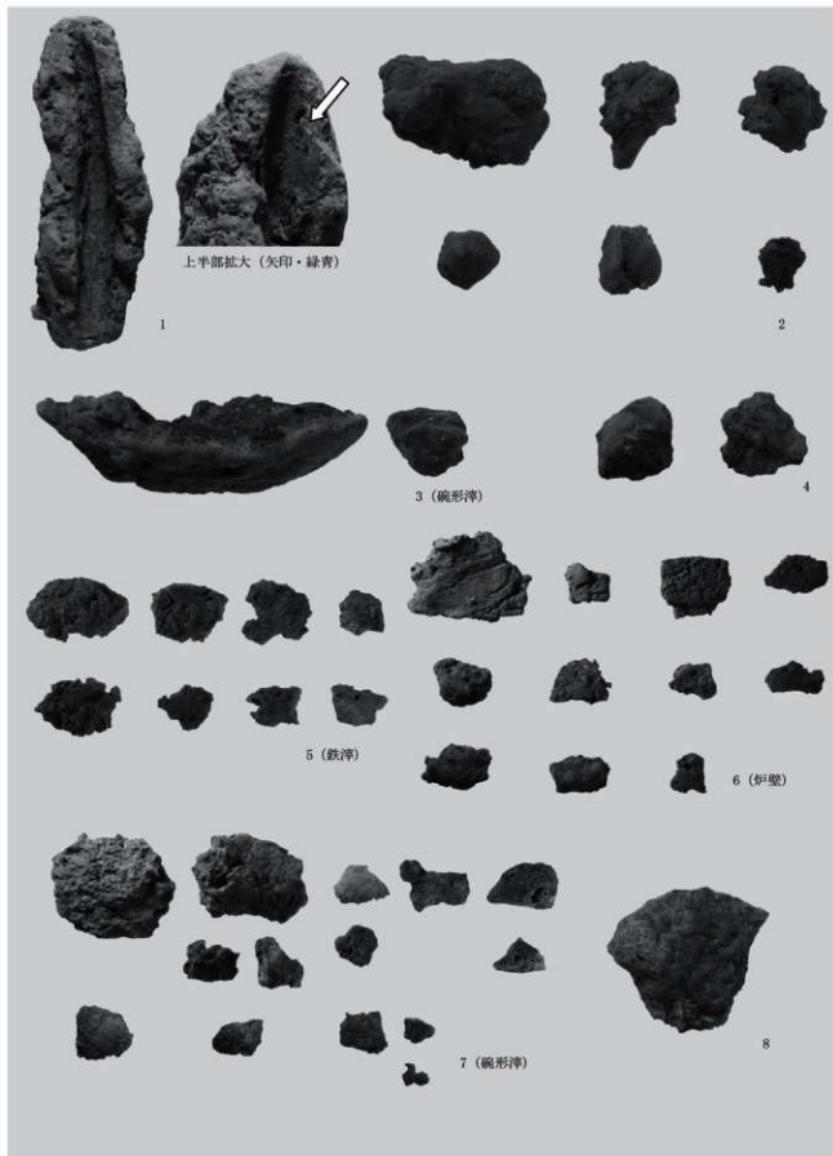
写真図版 39 第245次調査出土遺物 (4)



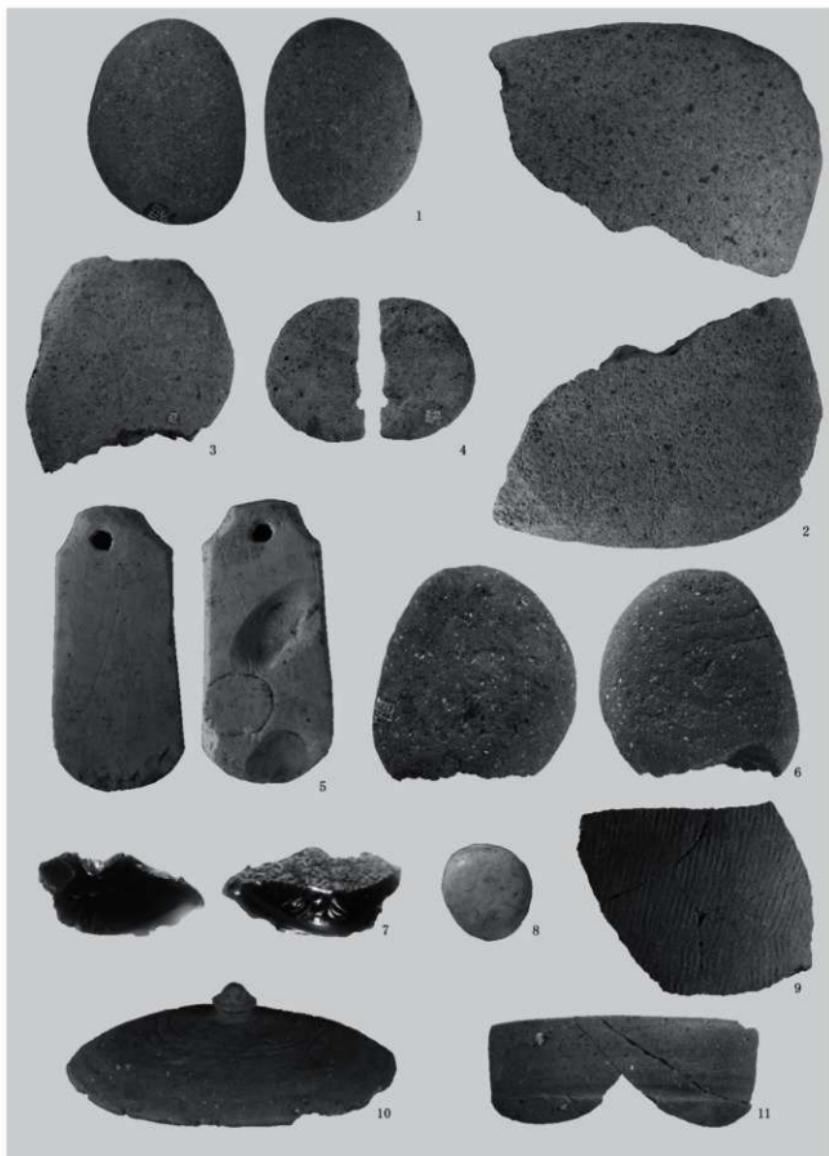
写真図版 40 第 245 次調査出土遺物 (5)



写真図版 41 第245次調査出土遺物(6)



写真図版 42 第 245 次調査出土遺物 (7)



写真図版 43 第245次調査出土遺物（8）

III. 第246次調査

1. 調査要項

遺跡名	郡山遺跡（宮城県遺跡登録番号01003）
調査地點	仙台市太白区郡山2丁目14-9
調査期間	平成25年11月28日～12月13日
調査対象面積	建築面積 63.26m ²
調査面積	62.5m ²
調査原因	個人住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部 文化財課整備活用係
担当職員	係長 長島 栄一 主事 及川 謙作 文化財教諭 伊藤 翔太



第68図 第246次調査区設定図

2. 調査に至る経過と調査方法

調査は、平成25年10月28日付けで申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（平成25年11月12日付けH25教生文第123-320号で回答）に基づき実施した。

調査は平成25年11月28日に着手した。今回の調査地点は、郡山遺跡II期官衙材木列の北西隅に位置し、平成4年度に調査が行われた第95次調査区の西側に、平成18年度に調査が行われた第180次調査区の南側にある。

今回の調査地点では、南北7.4m、東西3.0mの調査区と、東西5.6m、南北3.0mの調査区をつなげた「L字」型の調査区を設定し、重機により盛土及び整地土と耕作土であると考えられるI層（a・b層に細分）を掘り下げ、遺構検出作業は基本層II層上面で行った。

遺構の精査により、調査区の北辺から方四町II期官衙の北辺材木列跡が検出されたため、調査範囲を拡張し、結果的に、建築予定範囲のほぼ全面の調査を行った。発見された材木列跡の重要性を鑑み、12月9日と10日に代理人ならびに、柱状改良の施工業者と、現地にて遺構の保存協議を行った。その結果、検出された材木列跡の西側の約3mに関しては、遺構回避して柱状改良工事を施工し、遺構を保存することの承諾が得られたため、その部分に関しては完掘せず、遺構の一部を検出することにとした。

調査に伴い調査区配置図（S=1/50）、遺構平面図（S=1/20）と調査区断面図（S=1/20）を作製し、一部の遺構に関しては写真実測にて計測を行った。記録写真はフィルムカメラとデジタルカメラを用いて撮影した。また調査に先立ち郡山遺跡の座標（No.4）から、トランシットを用いて基準点の移設を行った。12月13日に埋め戻しを行い、調査を終了した。

材木列跡が検出された地点に関しては、埋め戻しの際にピンボールを埋設し、ロープで結びその位置を示した。また12月20日と21日に柱状改良工事の立会いを行い、保存範囲を避けて工事が行われていることを確認した。

3. 基本層序

調査区には盛土が約30～55cmあり、その下に現代の整地土、畑耕作土であるI層（2層に細分）が約70～90cmの厚さで存在する。その下層のII層上面が古代の遺構検出面である。約70～90cmである。II層の厚さは約135cmで、その下層には粘土層であるIII層とIV層が存在する。

4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、材木列跡1条とそれに関連するピット1基、掘立柱建物跡1棟、土坑4基、溝跡2条と、ピットが52基検出された。遺物は、各遺構及び基本層Ⅰ層中と遺構検出面から、土師器、須恵器、円面鏡、瓦等が出土している。

(1) 材木列跡

SA2373 (SA616) 材木列跡・P 54

調査区の北辺で検出された東西方向の材木列跡である。SA2373 材木列跡は、発見された位置と方向、非常に深い掘り方を持つなどの特徴から、平成14年度の第148次調査で発見された官衙の北辺の SA616 材木列跡と同一の遺構であると考えられる。

方位は真東に対してやや北に振れ、E・1°・Nを測る。SK2348 土坑、SK2345 土坑、P20・54 等と重複し、SK2348 土坑より新しく、その他の遺構よりも古い。検出長は約8.6mで東西の調査区外へ延びる。幅は約1.3m、遺構検出面からの深さは約145cmを測る。22基以上の柱痕跡が隣接して確認されている。柱痕跡の直径は約15~20cmである。また一部の柱痕跡の下部に直径約10~15cmの円環を添えられているのが確認された。遺物は、掘り方理土を中心に、土師器片の他須恵器高杯? (第72図1)、同甕 (第72図2)、埴輪 (第72図3)、丸瓦 (第72図4)、土鍤? (第72図5)、蝶石器 (第72図8・9)、鉄滓 (写真図版48-8・9・11)などが出土した。

前述したように調査区内の西側約3.0mに関しては保存対象範囲となつたため、掘削は遺構検出面から約80cmまでにとどめ、完掘は行っていない。

P54は、調査区の北西隅でSA2373 材木列跡に重複して検出されたが、SA2373 材木列跡よりも新しい遺構である。しかし、P54からも柱痕跡が2基確認されていることから、P54はSA2373 材木列跡と一連の遺構であり、SA2373 材木列跡を部分的に掘り直して、再度材木を据えた遺構と考えられる。なお、P54についても保存対象範囲内であるため、遺構の完掘は行っていない。検出長は東西約0.9m、南北約1.7mで、遺構検出面からの掘削深度は約90cmまでにとどめた。掘り込みは約30~40cmごとの段となっている。特に北側は階段状に、やや斜めに掘り込まれており、掘り込みの一部は材木列跡の掘り方の南壁をえぐっている。遺物は土師器片などが出土した。

(2) 掘立柱建物跡

SB2346 掘立柱建物跡 (P55)

調査区の北西隅で検出された掘立柱建物跡である。他の遺構との重複関係はない。検出された柱跡 (P55) の平面形状は隅丸方形を呈する。掘り方の検出長は南北約1.9m、東西約1.6mを測る。掘り方理土は5層に分層され、いずれの層も基本層位Ⅱ層ブロックが混入している。柱痕跡は、直径45cmを測る。

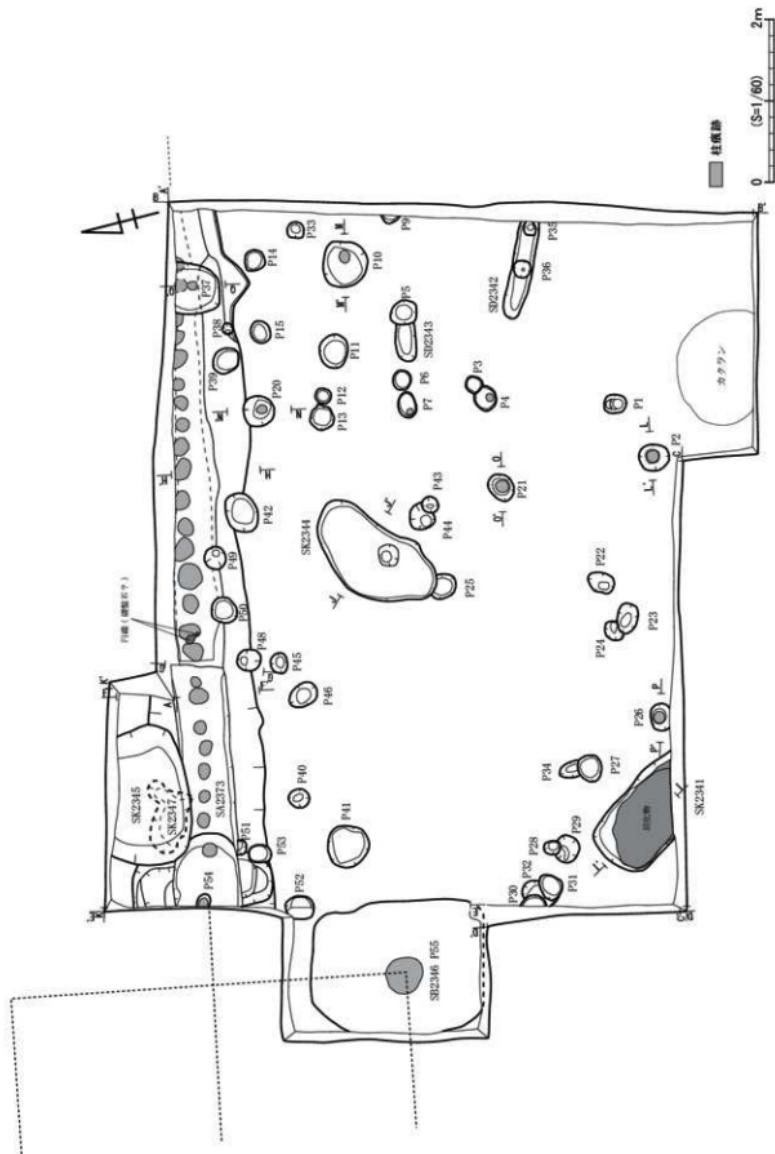
検出された柱穴は1基のみである。検出された位置から、材木列跡と一連の建物を構成する可能性が高い。この掘立柱建物跡は昭和55年の第7次調査で発見された、SB51 掘立柱建物跡 (樋状建物跡) と同様の遺構である可能性が考えられる。今回見つかった柱跡 (P55) は、樋状建物となる掘立柱建物の南側柱列の東端にあたるものと推定される。遺物は土師器片などが少量出土した。

(3) 溝跡

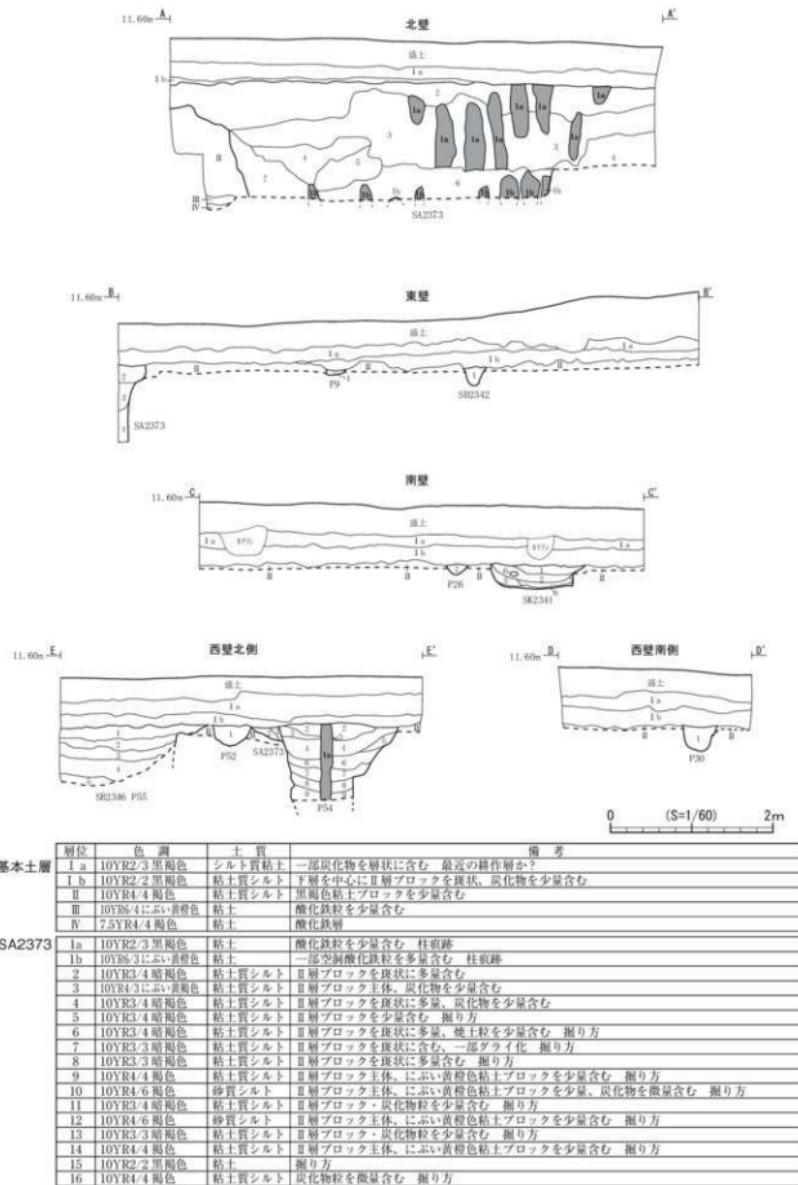
SD2342・2343 溝跡

調査区の東側で検出された溝跡である。ピットと重複し、いずれのピットよりも古い。検出長は約1.2mと約0.5mを測り、幅は約0.25mで、検出面からの深さは約20cmである。堆積土の下部に基本層位Ⅱ層ブロックが斑状に堆積している。遺物は堆積土中から土師器片が少量出土した。近隣の調査区の類例から、中世以降の小溝状遺構群と考えられる。

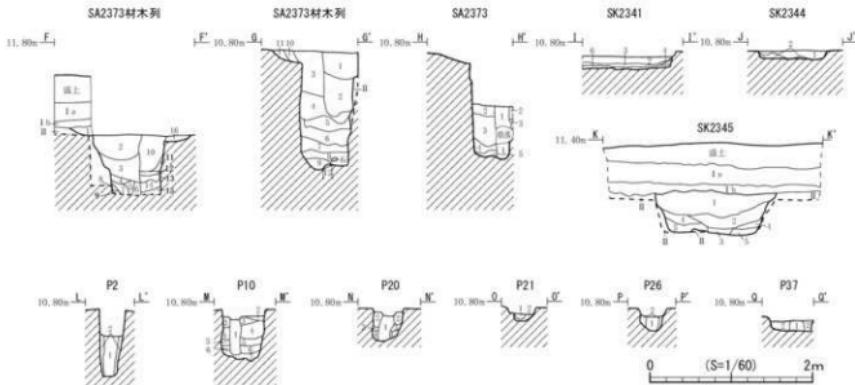
(4) 土坑



第69図 第246次調査区平面図

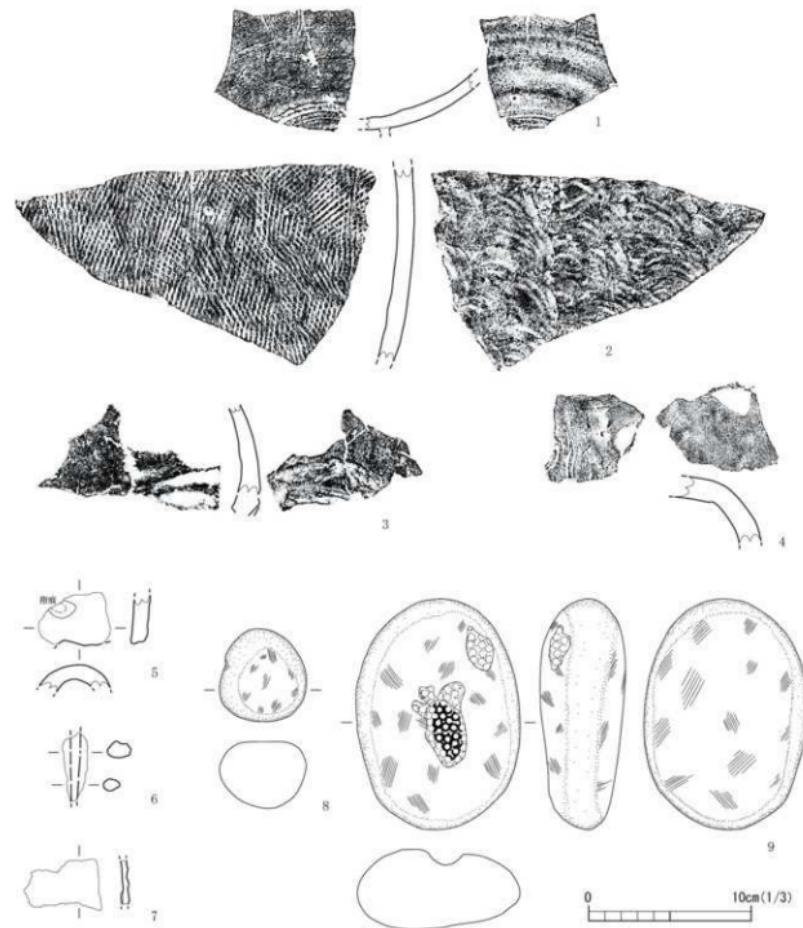


第70図 第246次調査区断面図(1)



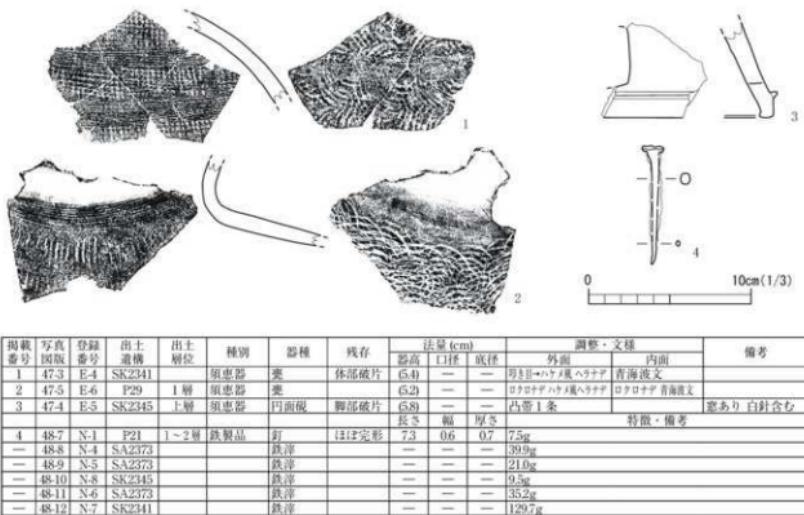
剖位	色調	土質	備考
SB2346	1 10YR3/4暗褐色 2 10YR3/3暗褐色 3 10YR4/4褐色 4 10YR4/4褐色 5 10YR3/3暗褐色	粘土質シルト 粘土質シルト 砂質シルト 粘土質シルト 粘土	Ⅱ層ブロックを塊状、炭化物粒を少量含む 振り方 Ⅱ層ブロックを塊状、にぶい黄褐色粘土ブロックを少量含む 振り方 Ⅱ層ブロック主体、炭化物粒を少量含む 振り方 Ⅱ層ブロック主体、黒褐色粘土ブロックを少量含む 振り方 Ⅱ層ブロック、炭化物粒を少量含む 振り方
SK2341	1 10YR3/4暗褐色 2 10YR3/3暗褐色 3 10YR2/3黒褐色 4 10YR3/3暗褐色 5 10YR3/3暗褐色	粘土質シルト 粘土質シルト シルト質粘土 シルト質粘土 粘土質シルト	炭化物粒、塊土粒を少量含む 炭化物粒、塊土粒を少量含む 炭化物・Ⅱ層ブロックを塊状に含む 炭化物、塊土粒を塊状に含む 炭化物を多量、Ⅱ層ブロックを塊状に含む
SK2344	1 10YR3/3暗褐色 2 10YR4/4褐色	シルト質粘土 粘土質シルト	Ⅱ層ブロックを塊状に含む Ⅱ層ブロック主体、炭化物粒を微量含む
SK2345	1 10YR3/4暗褐色 2 10YR3/4暗褐色 3 10YR3/3暗褐色 4 10YR4/6褐色 5 10YR4/4褐色	粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト	Ⅱ層ブロックを塊状に多量、炭化物粒を少量含む Ⅱ層ブロックを塊状、炭化物粒を少量含む Ⅱ層ブロック・黒褐色粘土ブロックを少量含む 炭化物粒を微量含む 炭化物粒を微量含む
SK2342	1 10YR3/4暗褐色	粘土質シルト	下層にⅡ層ブロックを塊状に含む
P2	1 10YR3/3暗褐色 2 10YR3/4暗褐色	粘土粘土 粘土質シルト	炭化物を少量含む 柱状跡 Ⅱ層ブロックを塊状に含む 振り方
P10	1 10YR2/2黒褐色 2 10YR4/4褐色 3 10YR2/3暗褐色 4 10YR4/4褐色 5 10YR2/3黒褐色 6 10YR4/4褐色 7 10YR2/3黒褐色	粘土粘土 粘土質シルト 粘土質シルト 砂質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト	Ⅱ層ブロックを塊状、炭化物粒を微量含む 柱状跡 Ⅱ層ブロック主体、暗褐色粘土ブロックを少量含む 振り方 Ⅱ層ブロックを塊状、炭化物粒を少量含む 振り方 Ⅱ層ブロック主体、黒褐色粘土ブロックを少量含む 振り方 Ⅱ層ブロック主体、暗褐色粘土ブロックを少量含む 振り方 Ⅱ層ブロック主体、暗褐色粘土ブロックを少量含む 振り方 Ⅱ層ブロックを少量含む 振り方
P20	1 10YR2/3黒褐色 2 10YR3/3暗褐色 3 10YR2/3黒褐色 4 10YR4/4褐色	粘土粘土 粘土質シルト 粘土質シルト 砂質シルト	柱状跡 Ⅱ層ブロックを少量含む 振り方 炭化物粒を少量含む 振り方 炭化物粒を少量含む 振り方
P21	1 10YR3/3暗褐色 2 10YR4/4褐色	粘土 粘土質シルト	柱状跡 Ⅱ層ブロックを少量含む 振り方
P26	1 10YR3/4暗褐色 2 10YR3/4暗褐色	粘土質シルト 粘土質シルト	炭化物粒を少量含む 振り方 炭化物粒を少量含む 振り方
P37	1 10YR3/4暗褐色 2 10YR3/4暗褐色	粘土質シルト 砂質シルト	炭化物粒を少量含む 振り方 炭化物粒を含む 振り方
P54	1 10YR3/4暗褐色 2 10YR4/4褐色	粘土質シルト 砂質シルト	Ⅱ層ブロックを少量含む 振り方 Ⅱ層ブロック主体 振り方

第71図 第246次調査区断面図（2）



掲載 番号	发掘 年高	登録 番号	出土 遺機	出土 層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調整・文様		備考
								器高	上径	底径	外面	内面	
1	47.1	E-1	SA2373		須恵器	高壺?	底・直部破片	9.0	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	高台剥離痕あり
2	47.2	E-2	SA2373		須恵器	壺	体部破片	(11.9)	—	—	平行等間目巻き縞? 2条	青海波文	
3	48.1	S-1	SA2373		埴輪	不明	体部破片	(6.8)	—	—	ヘラナデ凸筋	ヘラナデ	無定復元径 134cm
4	47.6	F-1	SA2373		瓦	丸瓦	破片	9.0	8.8	2.3	凸面ヘラナデ	凹面ヘラナデ	
5	48.2	P-1	SA2373		土製品	有孔土製品	破片	3.3	4.4	1.0	孔は略方形	外縁: 指圧転寫 ナデ 内面: ナデ 土跡か	
6	48.6	N-2	SA2373		鉄製品	釘	基部欠損	4.2	1.4	1.0	—	72g	
7	48.5	N-3	SA2373		鉄製品	不明	破片	3.1	4.6	0.5	板状	片面剥落か 表面の筋は薄い	113g
8	48.4	K-1	SA2373		礫石器	磨石	完形	5.7	5.4	4.1	摩面1面	184.6g	
9	48.3	K-2	SA2373		礫石器	圓石・磨石	完形	14.2	10.0	5.2	磨面2面	凹部2ヶ所	1040g

第72図 第246次調査出土遺物(1)



第73図 第246次調査出土遺物(2)

SK2341 土坑

調査区の南隅で検出された。調査区の南に延びる。他の遺構との重複関係はない。平面形状は隅丸長方形を呈するものと考えられる。検出長は約1.4m、横幅は約0.9mを計る。検出面からの深さは約30cmである。堆積土は6層に分層され、いずれの層も炭化物や焼土粒を混入している。最下層の6層は特に炭化物が多く、炭化物の面的な広がりが検出された。堆積土中から土師器、須恵器甕(第73図1)、鉄滓(写真図版48-12)、円窓などの遺物が出土しており、古代の遺構であると考えられる。

SK2344 土坑

調査区の中央よりやや北側で検出された土坑である。P25と重複し、これよりも新しい。平面形状はやや不整形な楕円形を呈する。長径は約1.7m、短径は約0.85mで、検出面からの深さは約10cmである。堆積土は2層に分層され、2層とも基本層Ⅱ層が一定量混入する。底面に直径約25cm、遺構底面から深さが約25cmのピット状落ち込みが検出された。堆積土中から土師器片が少量出土しているが、遺構の年代については不明である。

SK2345 土坑

調査区の北西隅で検出された土坑である。SA2373材木列跡、SK2348土坑、P54と重複し、これらより新しい。調査区の北へ延びる。平面形状は不整形な隅丸方形を呈すると考えられる。東西は約1.7m、南北の検出長は約0.9mで、検出面からの深さは約45cmである。堆積土は6層に分層される。各層とも基本層位第Ⅱ層がブロック状に、炭化粒とともに混入するが、下層ほど砂質シルトのⅡ層ブロックが多く混入する。堆積土中から土師器、須恵器、円窓(第73図3)、瓦、鉄滓(写真図版48-10)などの遺物が一定量出土しており、古代の遺構であると考えられる。

SK2348 土坑

調査区の北西隅で、SK2345土坑の下層から検出された土坑である。SA2373材木列跡、P54と重複し、これらより古い。平面形状は不整形で長径は約0.7mで、短径は約0.4mを測る。SA2373材木列跡の保存対象範囲と重複するため遺構の完掘は行っていないが、SK2345土坑底面からの掘削深度は約35cmである。堆積土中から土師器

片などの遺物が出土している。重複から、古代の遺構であると考えられる。

(5) ピット

今回の調査区からは52基のピットが検出され、その内の6基から柱痕跡が確認された。ピットの規模は15～55cmで、柱痕跡が存在するものは規模が大きくなる傾向がうかがえる。検出面からの深さは大部分が20～60cmだが、P2は80cmと非常に深い。柱痕跡の直径は約10～18cmである。遺物は、P21から鉄釘（第73図4）、P29から須恵器甕（第73図2）などの遺物が出土している。しかし大部分のピットの時期は不明であり、建物跡などを構成する柱穴であるのか、現段階では不明である。

5.まとめ

今回の調査地点は、郡山遺跡方四町II期官衙の北西隅に位置し、平成4年度に調査が行われた第95次調査区の西側に、平成18年度に調査が行われた第180次調査区の南側にあたる。今回の調査により、郡山遺跡方四町II期官衙の北辺材木列跡（SA2373）の一部が検出された。今回見つかった材木列跡は、平成14年度の第148次調査で発見されたSA616材木列跡と同等の規模を有することから、同一の遺構であると考えられる。また材木列跡の一部が掘り直されていることが、新たに明らかになった。

またこの材木列跡に近接して大型の柱跡（SB2346 P55）が確認された。検出された位置関係から、この柱跡は、郡山II期官衙北辺材木列の西端に位置する、SB51掘立柱建物跡（権状建物跡）と同様の権状建物跡の一部である可能性が考えられる。



1. 調査区全景・SA2373 材木列跡検出状況（西から）



1. SA2373 材木列跡完掘状況（西から）



2. SA2373 材木列跡断面（東から）



3. SA2373 材木列跡断面（東から）



4. SA2373 材木列跡柱痕跡石検出状況（南から）



5. SA2373 材木列跡検出状況（南西から）



1. SA2373 材木列、P54 検出（西から）



2. P54 断面（東から）



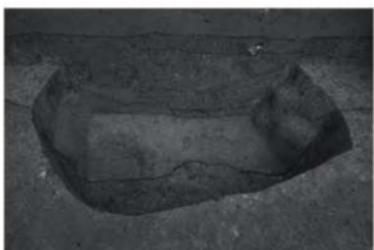
3. SB2346 (P55) 検出（北から）



4. SB2346 検出（北東から）



5. SK2341 完掘（北から）



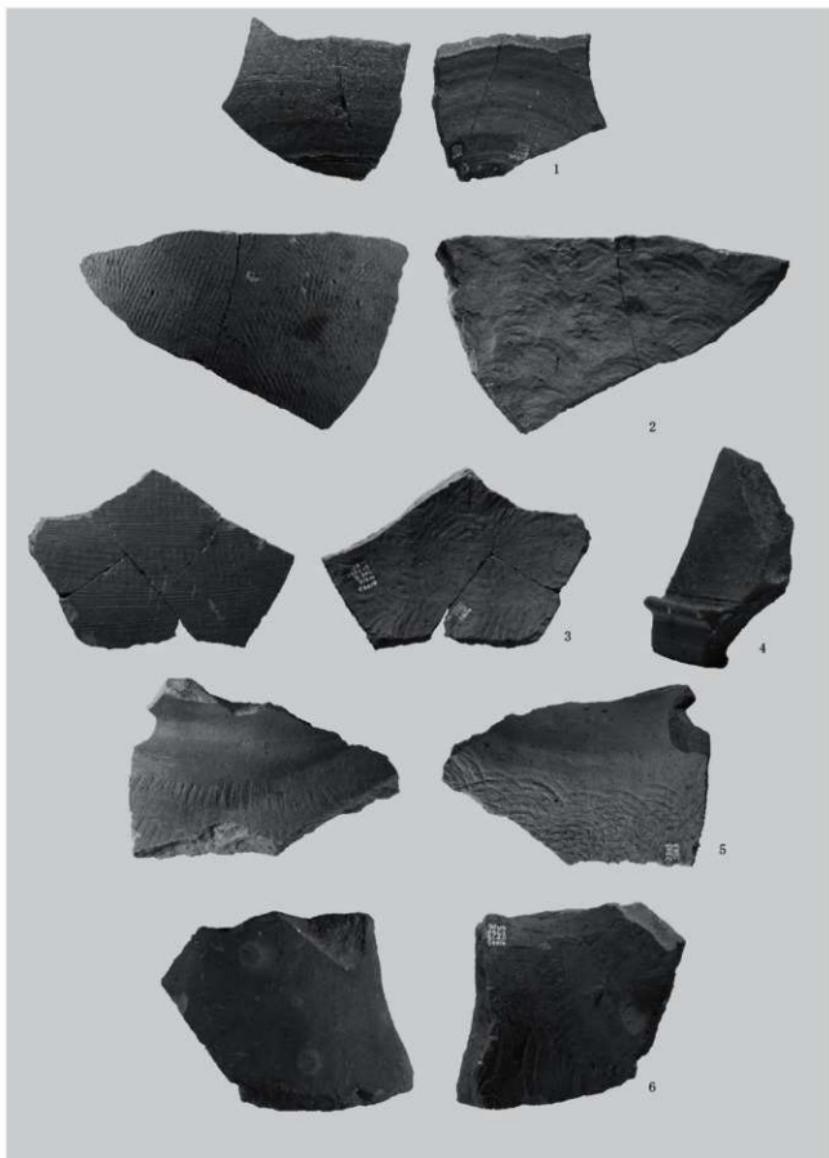
6. SK2345 完掘（南から）



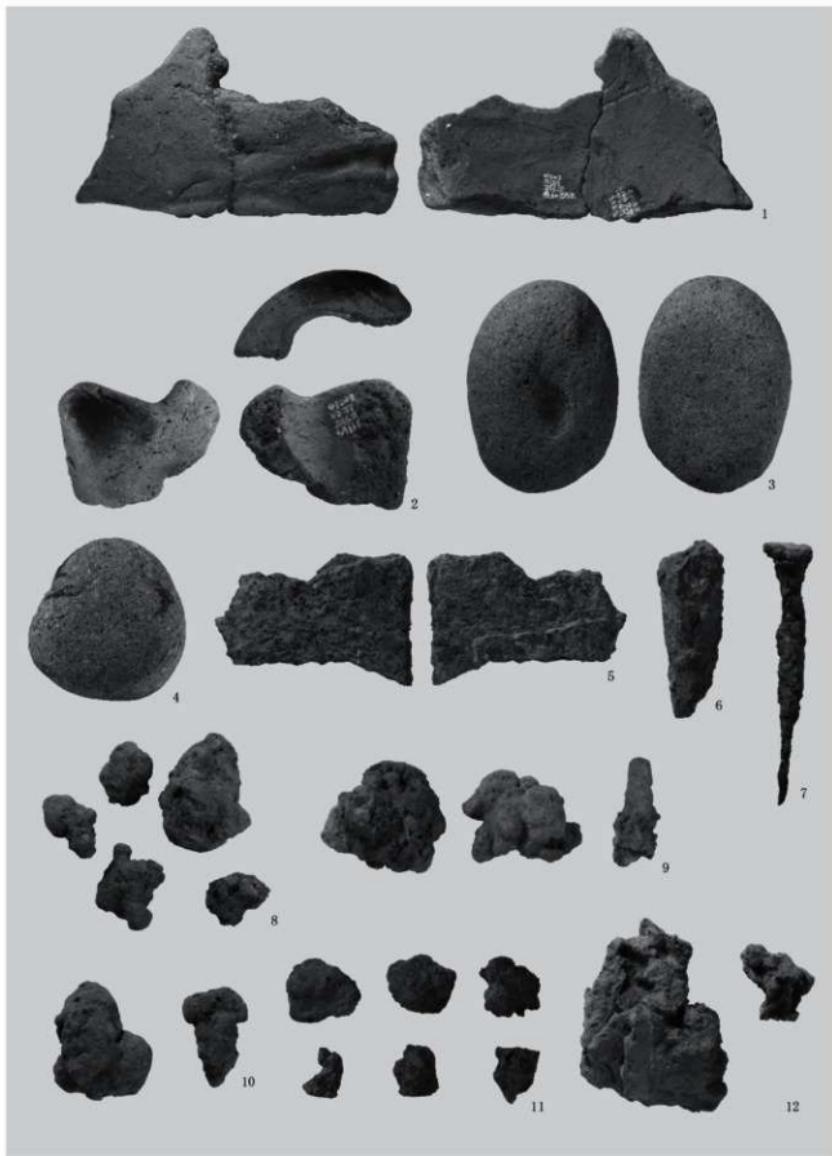
7. P10 断面（北から）



8. P20 断面（東から）



写真図版 47 第 246 次調査出土遺物 (1)

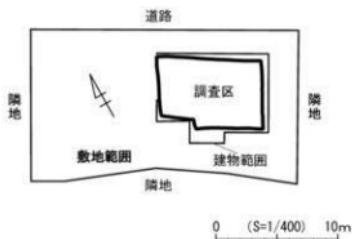


写真図版 48 第246次調査出土遺物（2）

IV. 第247次調査

1. 調査要項

遺 踪 名 郡山遺跡（宮城県遺跡登録番号 01003）
 調 査 地 点 仙台市太白区郡山五丁目 59番、59番1
 の各一部
 調 査 期 間 平成 25年 12月 11日～12月 18日
 調査対象面積 建築面積 57.96m²
 調 査 面 積 46.9m²
 調 査 原 因 個人住宅建築工事
 調 査 主 体 仙台市教育委員会
 調 査 担 当 仙台市教育生涯学習部
 文化財課調査調整係
 担 当 職 員 主事 小泉 博明
 文化財教諭 早坂 純一



第74図 第247次調査区設定図

2. 調査に至る経過と調査方法

調査は、平成 25年 11月 11日付で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（平成 25年 11月 15日付 H24 教生文第123-323号で回答）に基づき実施した。認調査は、平成 25年 12月 11日（水）に着手した。対象地は、郡山廃寺の北部に位置し、関連する遺構が検出される可能性が想定された。調査では、建物範囲内に調査区を設定し、重機を用いて、コンクリート層盛土および基本層Ⅰ層を除去した。基本層Ⅱ層上面で遺構検出作業を行った。Ⅱ層上面までの掘削深度は約 1.10～1.20 mである。

調査では、必要に応じて、平面図（S = 1/20、S = 1/40）、断面図（S = 1/20）を作製し、デジタルカメラおよび35mmモノクロフィルム、リバーサルフィルムを用いて記録写真を撮影した。平成 25年 12月 18日（水）に、調査区を埋め戻し、調査を終了した。

3. 基本層序

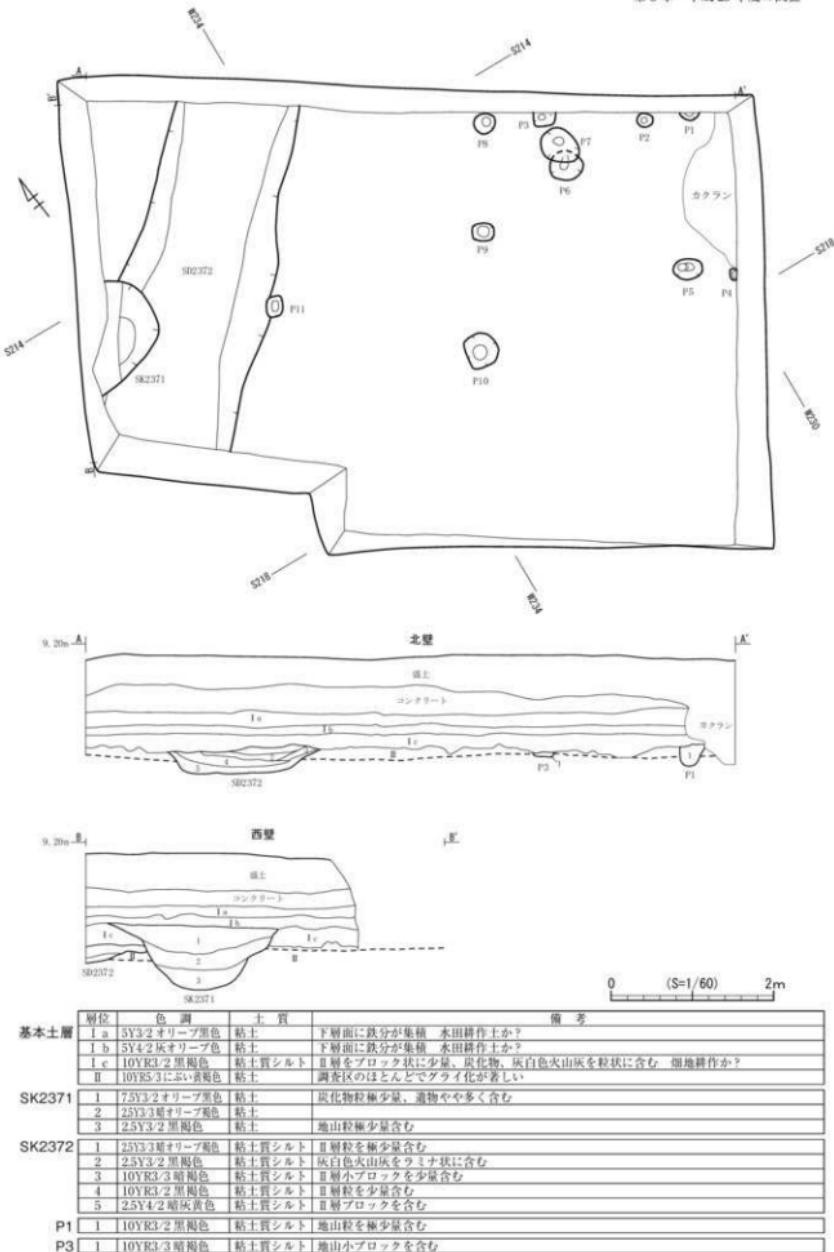
調査区内の盛土は 0.70 m前後である。今回の調査では、盛土下に大別 2層の基本層を確認した。
 I 層：宅地化前の耕作土である。3層に細別され、いずれも調査区全域に分布する。I a 層は、オリーブ黒色を呈する粘土である。比較的均質で、層下面に酸化鉄の集積が認められる。I b 層は、灰オリーブ色を呈する粘土である。I a 層と類似し、比較的均質で、層下面に酸化鉄の集積が認められる。I c 層は、黒褐色を呈する粘土質シルトで、層下面に凹凸が認められる。基本層Ⅱ層起源のにぶい黄褐色粘土を斑状およびブロック状に含み、部分的に灰白色火山灰を粒状に含む。SK2371 土坑は、本層上面で確認した。様相から、a 層と b 層は水田耕作土、c 層は畑耕作土と考えられる。

II 層：調査区全域に分布するにぶい黄褐色を呈する粘土である。調査区のほぼ全域で著しいグライ化が認められる。今回の調査における遺構検出面である。

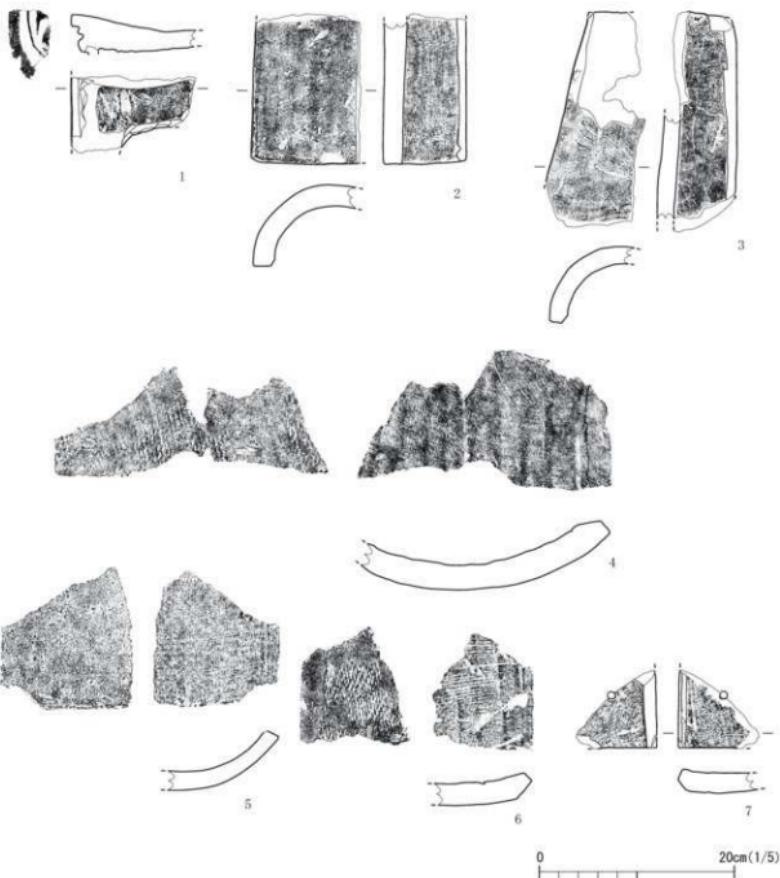
4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、溝跡 1条、土坑 1基、ピット 11基を検出した。遺物は、瓦類と土師器、須恵器が出土した。

(1) 溝跡

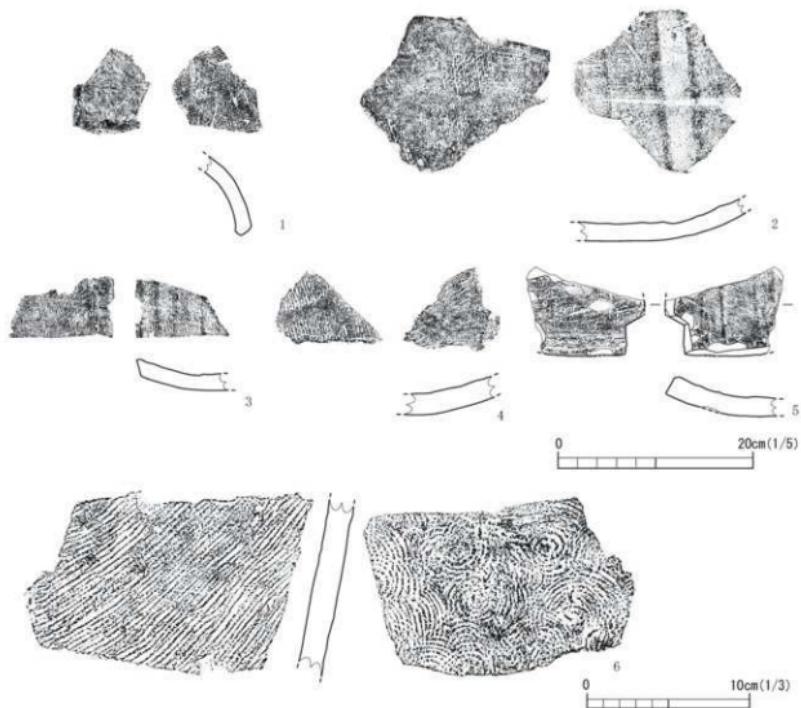


第75図 第247次調査区平面図・断面図 (S=1/60)



掲載番号	写真	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)		特徵・備考
								最大長	最大幅	
1	51-1	F-1	I層	瓦	軒丸瓦	破片		(7.9)	(12.8)	(3.8) 単弁蓮華文 凸面:ヘラナデ 凹面:布目
2	51-3	F-2	I層	瓦	丸瓦	破片		(15.5)	(11.2)	(2.2) 凸面:ヘラナデ 凹面:布目
3	51-2	F-3	I層	瓦	丸瓦	破片		(22.0)	(10.1)	1.9 凸面:ヘラナデ 凹面:布目
4	51-5	G-1	I層	瓦	平丸	破片		(14.4)	(25.5)	2.9 凸面繩目軒→ヘラナデ 凸面:布目
5	51-6	G-2	I層	瓦	平丸	破片		(15.0)	(11.8)	1.9 凸面:ヘラナデ 凸面:布目 横骨痕 植巻き
6	51-4	G-3	I層	瓦	平丸	破片		(12.6)	(10.9)	2.2 凸面繩目軒→ヘラナデ 凸面:布目 横骨痕 植巻き
7	51-7	G-4	I層	瓦	平丸	破片		7.9	8.2	2.1 凸面:マメフ 凸面:布目 マツ孔1ヶ所あり(剥欠)
—	52-6	G-9	I層	瓦	平丸	破片		—	—	凸面:矢羽状叩き 凹面:布目

第76図 第247次調査出土遺物（1）



調査番号	写真 図版	登録 番号	出土 遺構	出土 層位	種別	器種	残存	法量(cm)			特徴・備考
								最大長	最大幅	最大厚	
1 52-1	F-4	SK1	瓦	丸瓦	破片	破片	(8.1)	68.9	1.5	凸面: ヘラナデ 凹面: 布目	
2 52-2	G-6	SK-1	堆積層	瓦	平瓦	破片	(16.9)	(18.9)	1.9	凸面: 縄目→ヘラナデ 凹面: 布目 横骨痕 締巻き	
3 52-3	G-7	SK-1	堆積層	瓦	平瓦	破片	6.3	9.4	1.6	凸面: 縄目→ヘラナデ 凹面: 布目 横骨痕 締巻き	
4 52-4	G-8	SK-1	堆積層	瓦	平瓦	破片	13.8	11.2	2.0	凸面: 縄目→ヘラナデ 凹面: 布目 横骨痕 締巻き 系切引痕	
5 52-5	G-5	SD1	堆積層	瓦	平瓦	破片	9.2	12.1	2.0	凸面(引人): あり 凸面: 縄目→ヘラナデ 凹面: 布目 横骨痕 締巻き 系切引痕	
6 52-7	E-1	P4	須恵器	壺	体部破片	(10.9)	—	—	—	外縁: 手打印き目 内縁: 青海波文	

第77図 第247次調査出土遺物(2)

SD2372溝跡

調査区西部に位置し、II層上面で検出した。南北方向の溝跡で南北の調査区外に延びる。規模は長さ4.35m以上、幅1.5~1.9m、深さ0.32mを測る。断面形は緩やかに広がるU字状を呈する。堆積土は5層に分層され、このうち2層には互層状の堆積を示す灰白色火山灰を含んでいる(二次堆積か)。重複関係は、P11より古い。

遺物はいずれも破片で、土師器壺1点、須恵器壺1点、平瓦7点が出土している。他に混入とみられる焼瓦(平瓦)が1点出土している。国示したのは、平瓦1点(第77図5)である。

(2) 土坑

SK2371土坑

調査区西壁際に位置し、調査区西壁でIc層上面より掘り込まれているのを確認した。西の調査区外に延びる。平面形は梢円形と考えられる。断面は上半部が開くU字状を呈する。規模は東西0.65m以上、南北約1.4mを測る。

堆積土は3層に分層される。1層で遺物が比較的多く出土した。Ic層上での、他の遺構との重複はない。

遺物はいずれも破片で、土師器壺片3点、瓦片24点が出土している。瓦片の内訳は、平瓦18点・丸瓦1点・不明5点である。これらのうち、図示したのは丸瓦1点（第77図1）、平瓦3（第77図2～4）である。

（3）ビット

調査区中央より東側に多く分布し、II層上面で検出した。ビットは円形や方形を基調とするものが11基検出された。規模は小さいもので 0.2×0.2 m、大きいもので 0.4×0.5 m、深さ0.1mである。堆積土はいずれも単層で、II層土を含む黒褐色および暗褐色の粘土質シルトである。柱痕跡が認められたものはない。方形基調のもの（P3・P9・P11）は、時期が下る可能性もある。

遺物はいずれも小破片で、P7・8・11で土師器壺、P4で土師器壺・壺、須恵器壺、P5・6で瓦が出土した。このうち図示したのは、P4出土の須恵器壺（第77図6）である。

（4）遺構外出土遺物

基本層1層より、比較的多くの遺物が出土している。しかし、いずれも破片であり、分層して取上げることができなかった。多く出土した理由は、水田や畑の耕作による下層遺構の搅拌によるためと考えられる。遺物の内訳は、軒丸瓦1点、平瓦31点、丸瓦13点、器種不明瓦20点、焼瓦1点（近代か）、土師器壺15点以上・高台付壺1点・壺12点以上、須恵器壺1点・壺1点、赤焼土器壺2点である。図示したのは、軒丸瓦1点（第76図1）、丸瓦2点（第76図2・3）、平瓦4点（第76図4～7）である。このうち、第76図7には孔が認められる。釘穴と考えられる。また、器種不明の瓦には、矢羽状叩き目とみられる文様の小片がある（写真52-6）。珍しい資料である。

5. まとめ

今回の調査地点は遺跡南部に位置し、郡山廃寺の寺域北部でI期官衙の区画施設の存在が予想される地点である。調査では土坑1基、溝跡1条、ビット11基を検出した。

SK2371は、Ic層上面で検出されたことから、層位的に他の遺構より新しい。Ic層には灰白色火山灰が含まれるが、この層は畑の耕作土と考えられることから、降灰時期より新しく、火山灰を含む遺構を搅拌あるいは巻き上げて形成された層と考えられる。耕作の時期は明らかではないが、火山灰を含むことから、10世紀以降の時期が考えられる。したがって、SK2371はこの時期より新しくなる可能性がある。SD2372はII層上面で検出した溝跡だが、堆積土中に二次堆積とみられる灰白色火山灰が認められる。出土遺物の中には焼瓦があるが、混入の可能性がある。溝の方向はI期官衙の区画溝の方向（第63次調査区）と類似しているが、その延長線上になく、ずれている。これらの特徴から、I期官衙の区画施設とすることはできず、時期も今後の検討が必要であるが、平安時代頃と考えられる。ビットは11基検出されたが、その中には方形プランを呈するものがあり、中世まで下る可能性もある。建物として組むものではなく、柱痕跡も認められない。なお、周辺の調査区でも、時期の不明な小型ビットが多数検出されている（第63次調査）。

以上、検出された遺構の時期や特徴について述べた。今回の調査区では、I期官衙に限らず、官衙に関わる遺構は検出されなかった。

参考文献

仙台市教育委員会 1987 「第63次発掘調査」『仙台市 郡山遺跡Ⅶ』



1. 調査区全景（南西から）



2. 調査区全景（南東から）



3. 調査区北壁断面（南東から）



1. SD2372 溝跡完掘（南から）



2. SD2372 溝跡断面（南から）

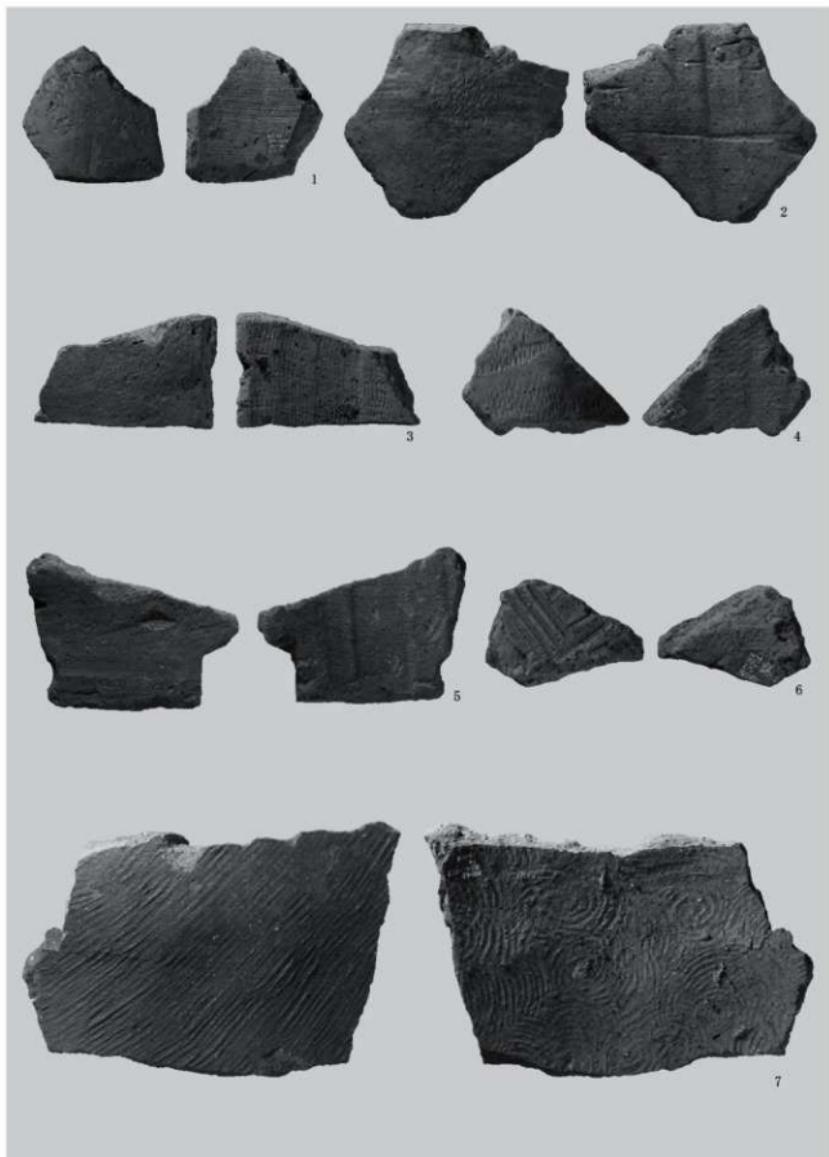


3. SK2371 土坑断面（南から）

写真図版 50 第 247 次調査 (2)



写真図版 51 第247次調査出土遺物 (1)

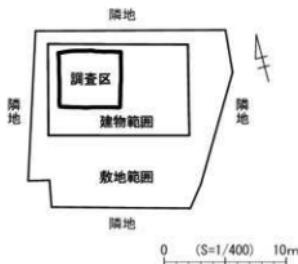


写真図版 52 第 247 次調査出土遺物 (2)

V. 第248次調査

1. 調査要項

遺跡名	郡山遺跡（宮城県遺跡登録番号01003）
調査地点	仙台市太白区郡山三丁目50番4、50番6
調査期間	平成25年12月17日～18日
調査対象面積	建築面積 83.71m ²
調査面積	15.0m ²
調査原因	個人住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育生涯学習部 文化財課整備活用係
担当職員	主事 及川謙作 文化財教諭 伊藤翔太



第78図 第248次調査区設定図

2. 調査に至る経過と調査方法

調査は、平成25年11月13日付けで申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（平成25年11月21日付けH25教生文第123～332号で回答）に基づき実施した。

調査は平成25年12月17日に着手した。今回の調査地点は、郡山遺跡の北東側に位置し、平成21年度に調査が行われた第199次調査区の東側にある。

調査では、東西50m、南北30mの調査区を設定し、重機により盛土および基本層第I層を掘り下げ、基本層第II層を検出したが、II層は堆積状況や土質などから河川堆積と考えられ、また大部分が搅乱によって削平されていることが確認されたことから、調査区の範囲を南北45m、東西40mに変更し、一部を段下げして、基本層の確認に努めた。その後II層上面で遺構検出作業を行い、遺構の精査後、調査区配置図（S=1/50）と調査区断面図（S=1/20）を作製した。記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。また調査に先立ち郡山遺跡の座標（No.9）から、基準点と水準点の移設を行なった。12月18日に埋め戻しを行ない、調査を終了した。

3. 基本層序

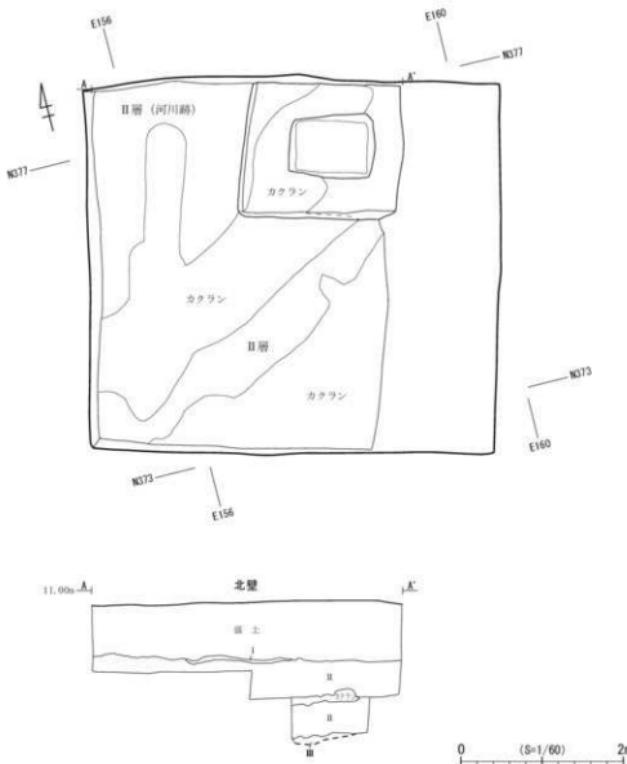
調査区には、盛土と近現代の整地層と考えられる基本層第I層が約60～75cmの厚さで堆積し、その下に河川堆積層と考えられる基本層第II層が堆積し、その下層に河川堆積層と考えられる基本層第III層が確認されている。

4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、遺構は検出されなかった。遺物は各遺構及び基本層第I～II層中から、土師器片が出土している。

5. まとめ

前述したように今回の調査地点は、郡山遺跡の北東側に位置し、平成21年度に調査が行われた第199次調査区の東側にある。第199次調査区からは古代の溝跡などが検出されたが、今回の調査地点では、古代以降と考えられる河川堆積と考えられる層が確認され、またその河川堆積層も大部分が搅乱により削平されており、古代の遺構検出面は削平されていることが判明した。



層位	色調	土質	備考
I	10YR3/3暗褐色	シルト質粘土 酸化鉄粒を斑状に含む	近現代の整地層か?
II	10YR4/4褐色	砂質シルト 炭化物粒を微量含む	河川堆積層か?
III	10YR4/6褐色	シルト質粘土 に赤い黃橙色粘土ブロックを斑状に含む	河川堆積層か?

第79図 第248次調査区平面図・断面図



1. 調査区全景（北から）



2. 調査区全景（西から）

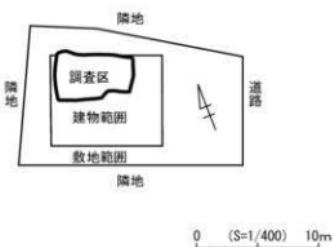


3. 調査区北壁断面（南から）

V. 第250次調査

1. 調査要項

遺跡名	郡山遺跡（宮城県遺跡登録番号01003）
調査地点	仙台市太白区郡山五丁目27番2
調査期間	平成26年2月18日～19日
調査対象面積	建築面積 72.87m ²
調査面積	15.0m ²
調査原因	個人住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部 文化財課整備活用係
担当職員	主事 及川謙作 文化財教諭 石山智之 文化財教諭 橋本隼人



第80図 第250次調査区設定図

2. 調査に至る経過と調査方法

調査は、平成25年12月6日付けで申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（平成25年12月13日付けH25教文第123-358号で回答）に基づき実施した。

調査は平成26年2月18日に着手した。今回の調査地点は、郡山遺跡の方四町Ⅱ期官街の南側に位置し、昭和59年度に調査が行われた第48次調査区の南側にある。

今回の調査地点では、東西65m、南北40mの調査区を設定し、重機により盛土および基本層第1層（近現代の水田耕作層）を掘り下げ、基本層第2層を検出したが、当初の想定よりも盛土が厚く堆積しており、排土置き場の関係から調査範囲を東西6.2m、南北3.0mに縮小して調査を行った。基本層第2層は黄褐色の粘土で、大部分がグラウシ化している。酸化鉄粒が斑状に混入し、粘性も強い。その後Ⅱ層上面で遺構検出作業を行い、遺構の精査後、さらに調査区内を東西約3.0m×南北約1.3mで掘り下げを行い、基本層の確認に努めた。その後、調査区配置図（S=1/50）と、調査区断面図（S=1/20）を作製した。記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。また調査の際に、郡山遺跡の座標（No.25）から、基準点の移設を行った。2月19日に埋め戻しを行い、調査を終了した。

3. 基本層序

調査区には、近現代の整地層と考えられる盛土が約140～150cm、基本層第1層が約10～33cmの厚さで堆積し、その下に基本層第2層が確認されている。

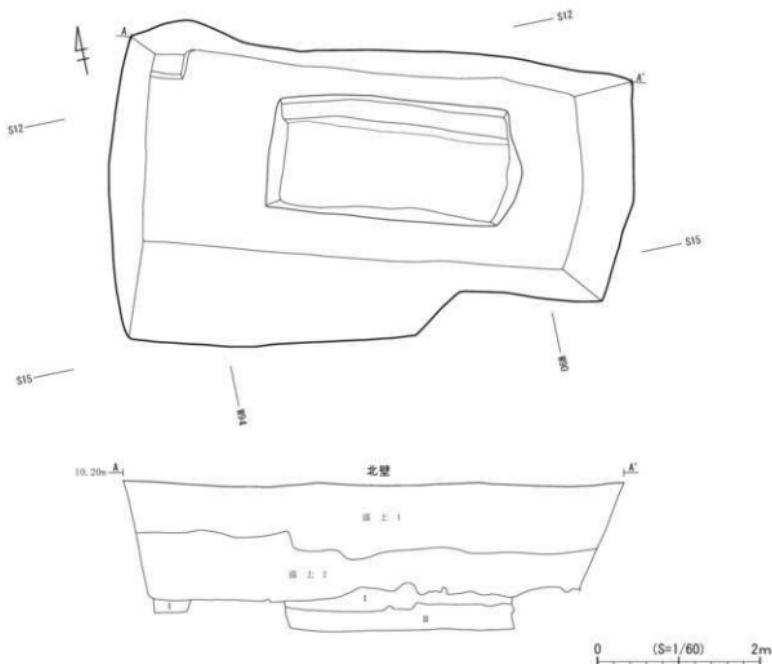
4. 発見遺構と出土遺物

遺構は検出されなかった。遺物は基本層中から土師器片と須恵器片が少量の他、中世陶器（第82図1）1点が出土した。

5. まとめ

前述したように今回の調査地点は、郡山遺跡の方四町Ⅱ期官街の南側に位置し、昭和59年度に調査が行われた第48次調査区の南側にある。第48次調査区からはⅠ期官街の材木列跡や竪穴住居跡などが検出され、特に材木

列跡に関しては今回の調査地点にも延びていることが予想されたが、今回の調査地点は水田耕作等により古代の遺構検出面の上面が約80~90cmにわたって削平されていることが判明し、同様の遺構は検出されなかった。この削平と同様のものと考えられる掘り込みは、第48次調査区の南西隅でも確認されており、第48次調査区から南側に関しては、遺構検出面が削平された状態であるものと考えられる。



層位	色調	土質	備考
I	10YR4.2灰黃褐色	粘土	酸化鉄粒を斑状に含む 水田耕作層
II	10YR4.4褐色	粘土	酸化鉄粒を斑状に多量含む 大部分がグライ化

第81図 第250次調査区平面図・断面図 (S=1/60)

掲載番号	写真	図版	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	計量(cm) 器高(口径)底径	調整・文様			備考
										外面	内面		
1	55-1	1-1		盛土～Ⅱ層	中世陶器	甕	体部破片	G30	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	在地 13~14C

第82図 第250次調査出土遺物



1. 調査区全景（東から）



1. 調査区全景（南から）

写真図版 54 第 250 次調査



1

写真図版 55 第 250 次調査出土遺物

第4章 平成26年度の調査

第1節 鴻ノ巣遺跡

I. 遺跡の概要

鴻ノ巣遺跡は、宮城野区岩切字鴻ノ巣に所在する。仙台市北東部のJR岩切駅の南方約0.5kmに位置し、七北田川右岸の標高約8mの自然堤防上に立地する。現在、遺跡の北側は河川敷、南側は住宅地や畠地となっている。

付近一帯は、古代・中世の街道と、水上交通路としての七北田川の交差地点にある。中世には、このあたりに「市」があったと考えられている。昭和48年(1973)に東北新幹線建設工事に伴い初めての調査が行なわれ、中世の井戸や古墳時代中期の堅穴住居跡が発見された。七北田川に近い遺跡北側では古墳時代前期から中世の遺構が発見されている。古墳時代中期の遺構には、堅穴住居跡や祭祀遺構(さいしいこう)、大溝を作った堀跡、水田跡などがある。古墳時代後期には約60個体の土師器(はじき)が出土した祭祀遺構や溝跡がある。奈良時代には堅穴住居跡があり、平安時代には堅穴住居跡と倉庫と考えられる掘立柱建物跡がある。中世の遺構としては、屋敷を囲む堀跡や掘立柱建物跡や井戸跡がある。

遺物は、古墳時代中期には、多量の土師器のほか、ガラス小玉や祭祀に使われた劍形や円盤状の石製模造品・白玉も多量に出土している。また、黒曜石の石器や続縄文土器と呼ばれる北海道系の遺物も出土している。中世には国産の陶器のほか中国産の青磁も出土している。調査成果から、鴻ノ巣遺跡は、古墳時代中期には東北北部や北海道方面とも関りを持つ仙台平野北部の拠点的集落として、また中世には中世東光寺や市場及び多賀国府と関係するような交通の要衝を占める集落であったと考えられる。

II. 第19次調査

1. 調査要項

遺 跡 名 鴻ノ巣遺跡

(宮城県遺跡登録番号 01034)

調査地 点 仙台市宮城野区岩切字三所北126番

の8

調査期間 平成26年7月7日～7月9日

調査対象面積 建築面積 81.57m²

調査面積 16.0m²

調査原因 個人住宅建築工事

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局生涯学習部

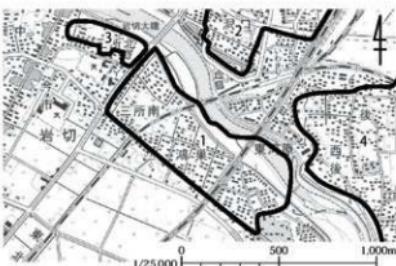
文化財課調査調整係

担当職員 主事 小泉 博明

文化財教諭 小山 純明

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成26年5月13日付で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	鴻ノ巣遺跡	集落跡・屋敷跡・水田跡	自然堤防	弥生～中世
2	調ノ口遺跡	集落跡・城郭跡・堀跡・水田跡	自然堤防	古墳～近世
3	今市遺跡	集落跡・住宅地	自然堤防	平安～中世
4	新田遺跡	集落跡・屋敷跡・水田跡	自然堤防	繩文・古墳～近世

第83図 鴻ノ巣遺跡の位置と周辺の遺跡



第84図 第19次調査区位置図

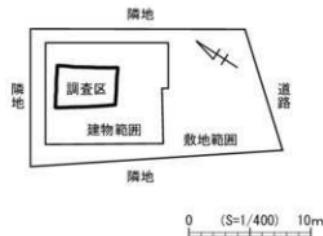
成26年5月19日付H26教生文第106-66号で回答)に基づき実施した。調査は、平成26年7月7日に着手した。対象地は澗ノ果遺跡の北西部にあたる。調査は、建物範囲内に調査区を設定し、重機を用いて、盛土および耕作土である基本層Ⅰ層、旧表土の可能性がある基本層Ⅱ層を掘削し、基本層Ⅲ層上面で遺構確認を行った。その結果、南北方向の溝跡1条が検出され、SDI溝跡と遺構番号を付して、精査を行った。遺構精査は、調査区の湧水が著しいことなどから、安全面を考慮して、溝跡北半部の上部に限定して掘削を行った。したがって、溝跡底面の検出には至っていない。調査では、必要に応じて、平面図および断面図を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。調査区の埋め戻しを7月9日を行い、今回の野外調査を終了した。

3. 基本層序

今回の対象地では、宅地化に伴う盛土が層厚約60cmで全域に認められる。この盛土下に大別3層、細別5層の基本層を確認した。

I層：宅地化前の耕作土で、3層に細別される。いずれも調査区全域に分布する。a層は、黄灰色を呈する均質なシルトである。b層は、褐色を呈するシルトで、均質に細砂を含む。層下面に酸化鉄の集積が顕著に認められることから、水田耕作土の可能性がある。c層は、暗褐色を呈するシルトで、炭化物と黄褐色の砂質シルトを粒状に含む。

II層：旧表土の可能性がある暗灰黄色を呈する粘土質シルトである。基本層Ⅲ層を斑状に含み、土師器の小破片を



第85図 第19次調査区設定図

ごく少量含む。SD1溝跡の年代観から、中世以前に遡る可能性がある。

Ⅲ層：黄褐色を呈する砂質シルトである。しまりがなく、均質である。今回の調査における遺構検出面である。

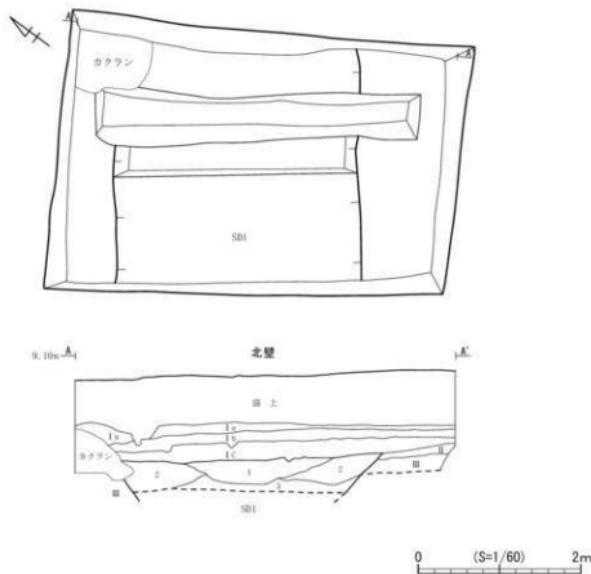
4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、溝跡1条を検出した。遺物は、基本層Ⅰ～Ⅱ層および遺構堆積土から、土師器、須恵器、土師質土器、陶器が出土している。

(1) 溝跡

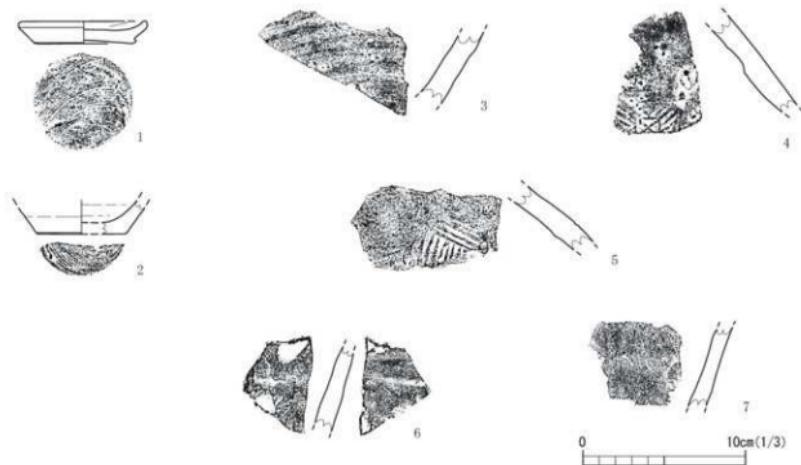
SD1 溝跡

調査区中央部で検出した北東から南西方向に延びる溝跡である。検出長は約3mで、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅約3mであるが、部分的な調査であることから、下端幅は不明である。深さは基本層Ⅱ層上面から0.5m以上である。断面形状を把握することはできなかったが、溝跡上部の壁面は比較的急な傾斜である。確認した堆



	層位	色調	土質	備考
基本土層	I a	25Y5/1 黄灰色	シルト	
	I b	10YR4/1 海灰色	シルト	繊維を均質に含む。層下部に鉄分が集積する
	I c	10YR3/3 褐灰色	シルト	粗粒、炭化物粉を少量含む
	II	25Y4/2 黑褐色	粘土質シルト	粗粒を斑状、土器小片を少量含む
	III	25Y5/3 黄褐色	粘土質シルト	
SD1	1	10YR4/2 黑褐色	粘土質シルト	にい黄褐色粘土ブロックを含む 人為的か?
	2	10YR3/2 黑褐色	粘土質シルト	地山粒、炭化物粉を少量含む
	3	10YR4/1 海灰色	粘土質シルト	地山小ブロック、炭化物粉を極少量含む 人為的か?

第86図 第19次調査区平面図・断面図



編號	写真 番号	登録 番号	出土 層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調整・文様		備考
							器高	口径	底径	外面	内面	
1	57.1	1-1	SD1	上層	土師質土器	皿	3/4	1.4	6.9	6.2		在地 ロクロ成形 亂形直系切削 13C
2	57.4	1-3	SD1	上層	土師質土器	皿?	底部付近 1/3	(2.1)	—	(5.4)		在地 ロクロ成形 底部凹軸条切り直
3	57.3	1-2	SD1	上層	中世陶器	鉢	体部破片	(4.5)	—		ロクロナデ	ロクロナデ
4	57.2	1-6	SD1	上層	中世陶器	甕?	体部破片	(5.5)	—		ロクロナデ	白石巣長石が多い 13C 後半~14C 前半
5	57.5	1-5	SD1	中世陶器	甕?	体部破片	(3.2)	—			押印あり	常滑 自然釉 中世(13~14C)
6	57.6	1-4	SD1	中世陶器	甕?	体部破片	(4.9)	—			押印あり	常滑 自然釉 中世(13~14C)
7	57.7	1-7	SD1	中世陶器	甕?	体部破片	(4.8)	—		ヘラナデ	ヘラナデ	麗美 12C

第87図 第19次調査出土遺物

積土は3層である。黒褐色および灰黄褐色などの粘土質シルトで、1層および3層は黄褐色の砂質シルトをプロック状に含み、人為的埋め土の可能性がある。遺物は、土師器皿、須恵器の他、13世紀?の土師質土器皿（第87図1-2）、在地産中世陶器（白石窯）（第87図3）、12世紀の渥美産陶器壺（？）（第87図6）、常滑産陶器甕（第87図4-5）、13世紀後半～14世紀前半の在地産陶器甕（第87図7）が出土した。

5.まとめ

今回の調査地点は、鴻ノ果遺跡の北西部に位置する。今回の調査で検出した遺構は、溝跡1条である。遺物は、基本層I～II層から、土師器、須恵器、土師質土器、陶器が出土している。

SD1溝跡は、調査区中央部に位置する北東から南西方向に延びる溝跡である。基本層II層上面で確認され、検出面での規模は上端幅約3mである。部分的な調査であることから、詳細は明らかにできなかったが、堆積層上部からの出土遺物には、土師質土器や陶器があるが、近世に下るもののは認められない。したがって、SD1溝跡は中世に属するものと考えられる。

鴻ノ果遺跡では、これまでの調査で、中世の屋敷地が確認されている。屋敷地は、掘立柱建物や戸井戸などによって構成され、溝によって区画されている。区画施設としての溝跡の規模は、上端幅約1～3mで、今回の調査で検出したSD1溝跡は、遺構の延長線上で調査が行われていないことから展開は不明であるが、その規模から区画施

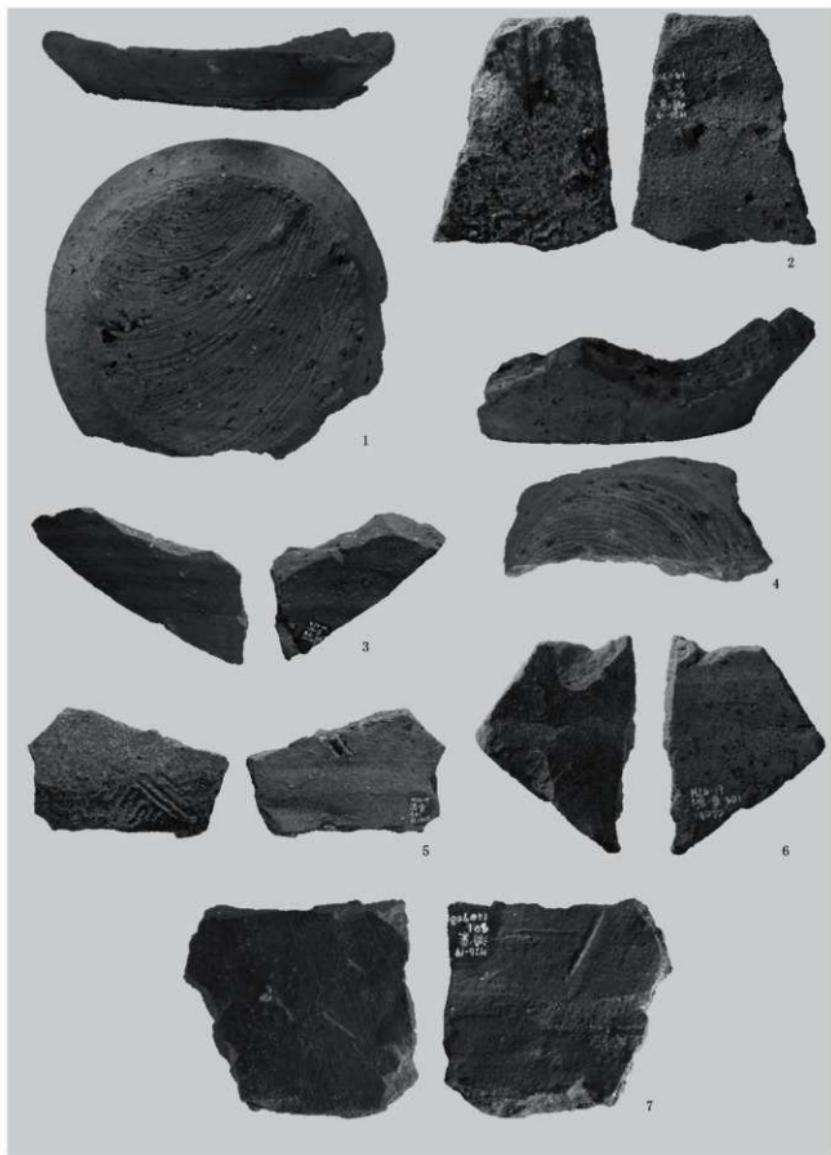
設の可能性が想定される。SDI溝跡からの出土遺物には、土師器、須恵器、土師質土器、中世陶器がある。出土遺物の大半が小破片で、特徴を把握できるものは少ない。土師質土器は皿状の器形を呈したかわらけである。製作にロクロが用いられており、底面の切り離しは回転糸切り無調整で、その特徴から13世紀代に属する可能性がある。中世陶器の産地には在地、常滑、渥美があり、年代は12～14世紀前半である。甕はいずれも胴部破片で、押印が認められるものがあり、常滑産のものが含まれる。これらの出土遺物の年代は、古代から中世の範疇に収まるものと考えられる。



1. 調査区全景（南東から）



2. 調査区北壁断面（南から）



写真図版 57 第19次調査出土遺物

第2節 小鶴城跡

I. 遺跡の概要

小鶴城跡は、JR仙台駅の北東約4.3kmの宮城野区新田三丁目に所在する。七北田丘陵が平野部と接する地点にあたり、遺跡の東側に広がる後背湿地に突き出した舌状丘陵上に位置している。現況における標高は「殿上山」と呼ばれる丘陵頂部で約16mを測り、丘陵周辺の後背湿地との比高差は約11mである。

文献上では、享保13(1728)年の『仙台領古城書立之覚』(以下、古城書立)や『安永風土記御用書出』(以下、風土記)に記載がある。『古城書立』には「小鶴城、東西六十間、南北三十六間、右之城主名一切不相知候」とある。

また、『風土記』では小鶴城を「古館」とし、「堅三十八間、横二十七間、先年、逸見丹波申御方住居之由申伝候候、年号相知不申候、寛永十八年御竿答之節、右館烟ニ付、當時何館申義共ニ知不申候事」とあり、規模や城主、年代について記載されている。城主は、「古城書立」では不明とする一方、「風土記」では「逸見丹波」としている。

本遺跡では、これまで個人住宅建築や宅地造成に伴う発掘調査が行われている。第1次調査では、丘陵西側に確認できる土壘状の高まりと溝状の地表顕在遺構のさらに西側に溝跡2条を確認し、三重に堀が巡る可能性が指摘された。第4次調査では、城館主体部とみられる丘陵西部で整地層や掘立柱建物跡等が確認され、また、丘陵裾部では大規模な溝跡が確認された。丘陵北側や東側で行われた過去の調査でも溝跡が確認されており、その位置や規模から、小鶴城に関連する堀跡と考えられている。

II. 第10次調査

1. 調査要項

遺跡名 小鶴城跡

(宮城県遺跡登録番号01194)

調査地点 仙台市宮城野区新田三丁目53
の一部

調査期間 平成26年11月6日～11月7日

調査対象面積 建築面積 148.66m²

調査面積 27.20m²

調査原因 個人住宅建築工事

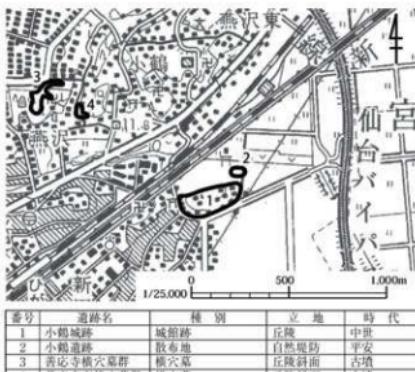
調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育生涯学習部

文化財課調査調整係

担当職員 主事 小泉 博明

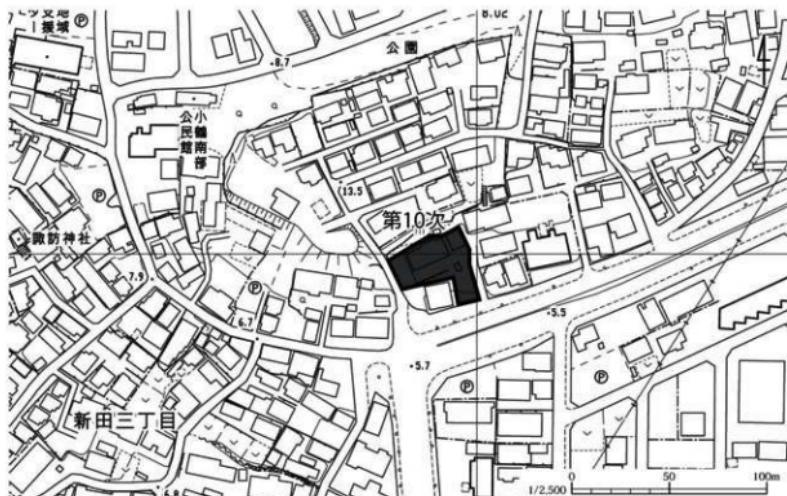
文化財教諭 小山 紘明



第88図 小鶴城跡の位置と周辺の遺跡

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成26年10月29日付H26教生文第106-284号)に基づき実施した。確認調査は平成26年11月6日(木)に着手した。調査区は建設予定範囲内の西部に設定し、重機により表土等の掘削を行った。基本層I層の下面で遺構検出作業を行ったところ、東西方向の溝跡1条、ピット14基を検出した。また、これらの遺構の調査終了後、調査区南部に堆積する基本層II層およびIII層の一部を掘削し、下層調査を実施したが、新たな遺構は検出されなかった。今回の調査では、適宜、平面図および断面図を



第89図 第10次調査区位置図

作製し、デジタルカメラを用いて記録写真の撮影を行った。遺構精査および図面作製後、重機にて数回に分けて転圧をかけながら埋戻しを行い、11月7日（金）に調査を終了した。

3. 基本層序

調査区内の盛土厚は最大で約0.65mであり、その下に大別4層の基本層を確認した。

I層：3層に大別される宅地造成以前の表土および畑耕作土である。

II層：旧表土もしくは丘陵側から流入した再堆積層とみられる自然堆積層で、黒褐色(10YR3/1)を呈する粘土質シルトである。丘陵斜面に沿って、北から南に向かって傾斜して堆積し、層厚は最大で0.3m以上である。小砾、炭化物、土器片を含む。

III層：丘陵側から流入した再堆積層とみられる自然堆積層で、にぶい黄褐色(10YR4/3)を呈する粘土である。丘陵斜面に沿って、北から南に向かって傾斜して堆積し、小砾、砂、ごく微細な土器片を含む。層厚



第90図 第10次調査区設定図

は0.3m以上である。

IV層：基盤層とみられる灰黄色（2.5Y6/2）を呈する均質な粘土で、層厚は1m以上である。

4. 発見遺構と出土遺物

I層下面で溝跡1条、ピット14基を検出した。土師器、須恵器の小破片や中世陶器の他、土錘、剝片が出土した。

(1) 溝跡

SD1 溝跡

調査区北半部で検出した東西方向の溝跡である。P1と重複し、本溝跡堆積土はこれを覆う。一部の検出であるが、検出長は約2.9mで、さらに調査区外東西へ延びる。規模は上端幅2.8m以上で、深さは1.2m以上である。断面形は不明であるが、溝跡南壁は比較的急に立ち上がり、上部は緩やかに開いている。堆積土は9層を確認した。黒褐色の粘土質シルトおよび粘土を主体とし、3層は炭化物主体層、9層は均質な砂層である。いずれも自然堆積土とみられる。遺物は、土師器の小破片がごく少量出土している。

(2) ピット

ピットは基本層Ⅱ～Ⅳ層上面で14基を検出した。平面形は円形もしくは楕円形を呈する。規模は長軸約0.2～0.55m、短軸約0.15～0.5mで、深さ約0.2～0.3mである。堆積土は黒褐色などの粘土質シルトで、基本層Ⅳ層を含むものもある。柱痕跡はP4およびP5で検出し、径20cmほどの円形を呈する。堆積土は黒褐色を呈するしまりのない粘土である。遺物は出土していない。

(3) 遺構外出土遺物

Ⅱ層中より土錘（第92図3）、Ⅳ層上面より13世紀後半～14世紀前半の在地産中世陶器甕（第92図1）、16世紀の在地産瓦質鋤鉢（第92図2）、珪化木製スクレイパー（第92図4）、玉髓製剝片（微細剥離痕あり）（第92図5）が出土した。

5.まとめ

今回の調査地点は、小鶴城跡南部に位置している。今回の調査で確認された遺構は溝跡1条、ピット14基である。対象地は丘陵斜面の直下にあたり、さらに南に向かって比較的緩やかに傾斜している。第4次調査では、丘陵の地形に沿って丘陵裾部に堆積した自然堆積層が確認されている。今回の調査でも、時期は不明であるが、丘陵裾部に丘陵側から流入したとみられる再堆積層が確認された。

SD1溝跡は、丘陵斜面直下で検出した東西方向の溝跡である。上端幅2.8m以上、深さ1.2m以上の大規模なものである。小鶴城跡のこれまでの調査成果から、丘陵斜面直下には、小鶴城跡に伴う溝跡が丘陵を巡るように配置されていると推定されており、今回の調査で検出したSD1溝跡は、位置や規模から、この溝跡と一連の遺構と考えられる。ただし、一部の精査に留まること、出土遺物が限られることから、溝跡の規模や時期を明らかにすることはできなかった。

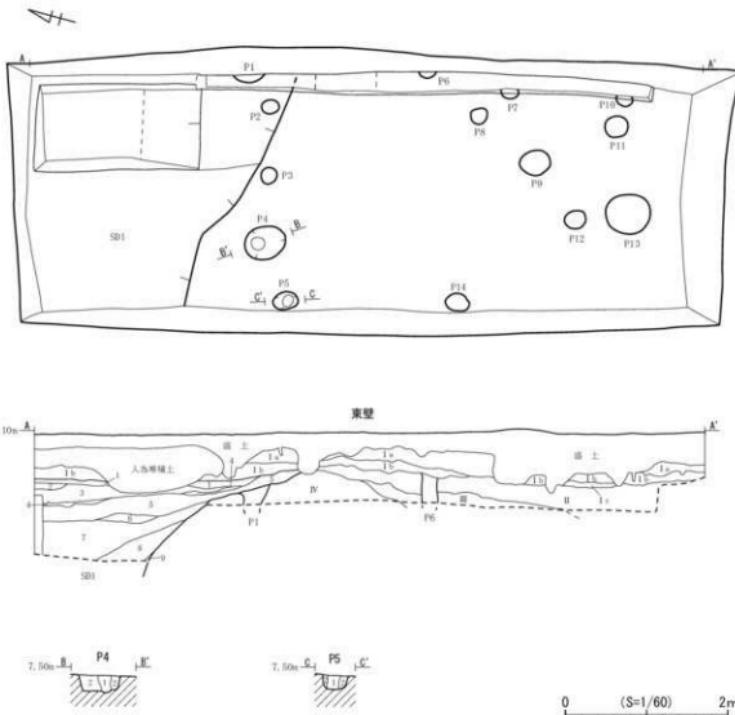
ピットは14基を検出した。調査区の制約から掘立柱建物跡などは確認できなかったが、P1、P4、P13は規模や堆積土が類似し、同一の掘立柱建物跡の柱穴である可能性がある。いずれのピットからも遺物は出土していない。

また、P1はSD1溝跡の上部に堆積した自然堆積層に覆われているが、SD1溝跡の堆積の時期が不明であることから、年代を判断することはできない。したがって、これらのピットが小鶴城跡に伴うものか検討することはできない。

出土遺物には、土師器、須恵器、陶器、土錘、剝片がある。この内剝片については、縄文時代あるいは弥生時代の遺物と考えられるが、第4次調査において、縄文時代の可能性がある「陥とし穴」や弥生土器が出土している。

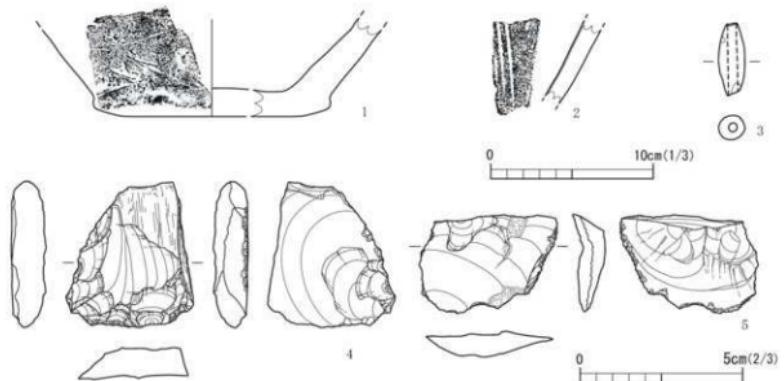
参考文献

仙台市教育委員会 2011 「小鶴城跡第4次発掘調査報告」「法領塚古墳他発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書
第393集



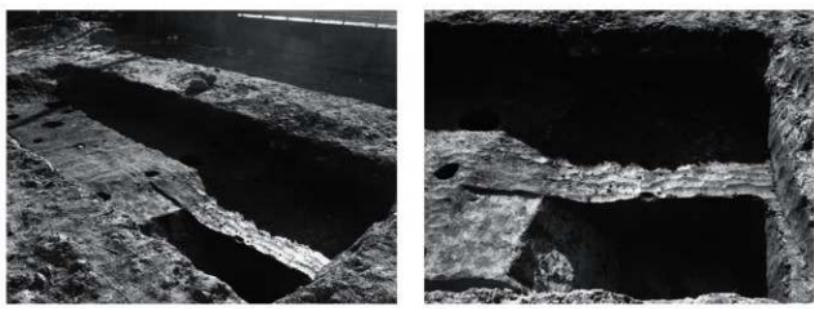
剖位	色調	土質	備考
I a	10YR4/3に近い黄褐色	シルト	小礫を少量含む
I b	10YR3/2黒褐色	粘土質シルト	小礫を少量含む
I c	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	小礫を少量含む
II	10YR3/1黒褐色	粘土質シルト	Ⅲ・Ⅳ層、小礫、砂を均質に含む
III	10YR4/3に近い黄褐色	粘土粘土	砂を均質に土器片を含少量含む
IV	25Y6/2灰黄色	粘土粘土	
P4	1 10YR3/2黒褐色 2 25Y4/1黄褐色 3 25Y3/2黒褐色 4 10YR2/2黒褐色 5 25Y3/2黒褐色 6 25Y3/3暗オーラー褐色 7 25Y3/2黒褐色 8 5Y3/2リーブ黑色 9 25Y4/2暗灰黄色	粘土質シルト 地山、炭化物粒を少量含む 粘土質シルト IV層ブロックを含む 粘土質シルト 炭化物主体層 粘土質シルト 地山を斑状に少量含む 粘土粘土 炭化物粒を極少量含む 粘土粘土 IV層ブロックを斑状に含む 砂	
P5	1 25Y3/2黒褐色 2 10YR4/1褐灰色	粘土 褐土質シルト	IV層を粒状に少量含む 柱痕跡 IV層ブロックを多量含む 掘り方
SD1			

第91図 第10次調査区平面図・断面図



掲載 番号	写真 図版 番号	登録 番号	出土 遺構	出土 削位	種別	器種	残存	法量(cm)			特徴・備考
								器高	口径	底径	
1	60-1	I-1	造拂確認面	中世陶器	奥	瓦器片	L.5 (3.3)	—	(11.0)	白石窯 内外表面化物付着 内面ハラナゲ 13C 後葉～14C 前葉	
2	60-2	I-2	造拂確認面	中世陶器	横鉢	体部破片	(3.3)	—	—	在地 内面剥離あり (3条以上) 薄手で焼成良好 16C ?	
—	60-6	A-1	II層	绳文土器	深鉢?	小片	—	—	—	織羅土器 早期末～前期(集合写真)	
							長さ	幅	厚さ	特徴・備考	
3	60-3	P-1	II層	土器品	上縁		4.5	1.6	1.5	孔径 0.6cm 84g	
4	60-5	K-1	造拂確認面	不定形石器	スレインバー		4.5	3.9	1.1	珪化木 折れ面に微細剥離痕あり 21.7g	
5	60-4	K-2	造拂確認面	不定形石器	表面剥離痕 ある割片		3.0	4.2	1.0	玉難か 二重打点 9.5g	

第92図 第10次調査出土遺物



1. 調査区全景（北東から）

2. SD1溝跡（東から）

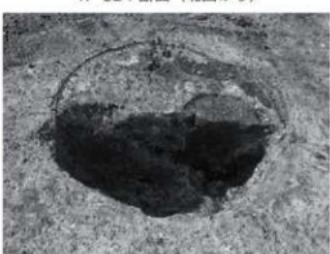
写真図版 58 第10次調査 (1)



1. SD1 断面（北西から）



2. 調査区東壁断面（北西から）



3. P4 断面（東から）



4. P5 断面（東から）

写真図版 59 第 10 次調査（2）



写真図版 60 第 10 次調査出土遺物

第3節 南小泉遺跡

I. 遺跡の概要

南小泉遺跡は、若林区南小泉、遠見塚、古城ほかに所在する。霞ヶ浦飛行場の西側に位置する。広瀬川左岸の自然堤防上に立地し、標高は10m前後である。遺跡範囲は、霞ヶ浦飛行場の西半から宮城刑務所東側までの東西約1.5km、南北約1km、総面積146haである。遺跡範囲のほぼ中央部には、仙台市内最大の古墳時代前期の前方後円墳、史跡遠見塚古墳が位置する。

遺跡は、昭和14年（1939年）の霞ヶ浦飛行場拡張の際、弥生時代と古墳時代の遺構と遺物が多量に発見され、両時代の東北地方を代表する集落跡として知られることとなった。仙台市教育委員会では、昭和52年（1977年）、第1次調査である遺跡範囲確認調査以来、現在まで75回にわたる調査を実施してきた。その結果、当遺跡は、繩文時代晚期から近世まで連続と続く複合遺跡であることが明らかとなった。特に弥生時代から中世にかけては、重要な居住域としての性格を堅持しており、古墳時代中期、平安時代などでは、仙台市内でも屈指の大集落が形成されている。また、近年の調査では、文献上に見られない中世段階の居館跡や屋敷跡も発見されてきている。

II.. 第76次調査

1. 調査要項

遺跡名 南小泉遺跡

（宮城県遺跡登録番号01021）

調査地点 仙台市若林区遠見塚一丁目44番16

調査期間 平成26年4月10日～4月18日

調査対象面積 建築面積 68.1m²

調査面積 21.7m²

調査原因 個人住宅建築工事

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育生涯学習部

文化財課調査調整係

担当職員 主事 小泉 博明

文化財教諭 小山 紘明

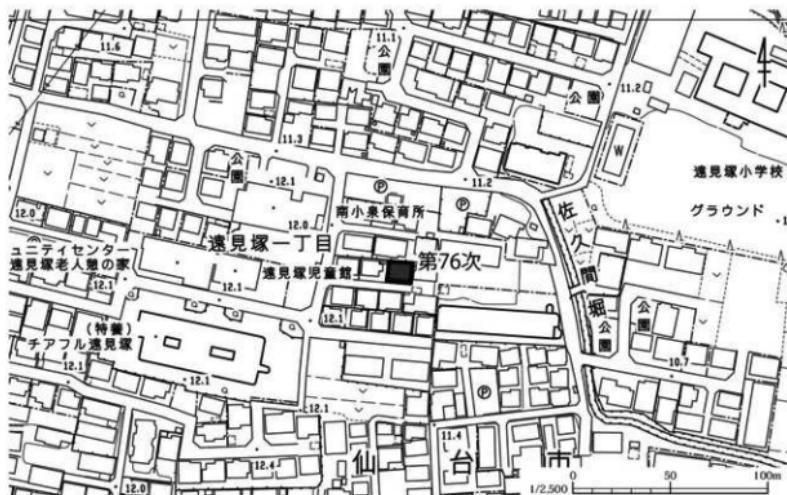


番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	南小泉遺跡	集落跡・居敷跡	自然堤防	古墳～近世
2	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
3	若林城跡	円墳・集落跡 ・城跡跡	自然堤防	古墳～近世
4	糞穂園遺跡	集落跡・屋敷跡 ・包含地	自然堤防	繩文～古墳 ～近世
5	法螺塚古墳	円墳	自然堤防	古墳
6	蛇塚古墳	円墳	自然堤防	古墳

第93図 南小泉遺跡の位置と周辺の遺跡

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は申請者より提出された、「埋蔵文化財発掘の届出について」（平成26年3月6日付H25教生文第123-446号で回答）に基づき実施した。確認調査は平成26年4月10日に着手した。建築範囲東部に調査区を設定して、重機を用いて盛土および基本層Ⅰ層を掘削し、基本層Ⅱ層上面で人力により遺構検出作業を行った。その結果、竪穴住居跡1軒、溝跡1条を検出し、記録保存を目的とした本発掘調査に移行した。竪穴住居跡からは土器類を主体とする多量の土器類が出土したが、当初設定した調査区では、竪穴住居跡の規模を把握することができなかつたため、調査区を建物範囲西部に拡張して、竪穴住居跡西側の検出を行った。調査では、必要に応じて、平面・断面図（S=1/20、S=1/40）を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。調査終了後の4月18日、調査区埋戻しを重機で敷き固めながら行った。



第94図 第76次調査区位置図

3. 基本層序

調査区内には、盛土が層厚約0.30mで分布する。その下に大別4層の基本層を確認した。なお、遺構検出面である基本層Ⅰ層上面までの深度は約0.80mである。

Ⅰ層：宅地化以前の畑耕作土である。調査区全域に分布し、3層に細別される。

Ⅱ層：黄褐色（25Y5/3）を呈する砂質シルトである。今回の調査における遺構検出面である。

Ⅲ層：暗灰黄色（25Y4/2）を呈する細砂である。しまりがなく、均質である。

Ⅳ層：にぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する均質な砂質シルトである。

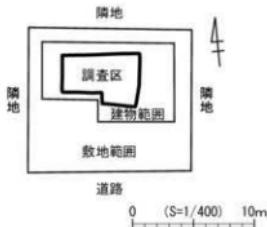
4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡1軒、溝跡1条である。遺物は、基本層Ⅰ層および遺構内から土器器が出土している。特にS11竪穴住居跡からの出土が顕著である。

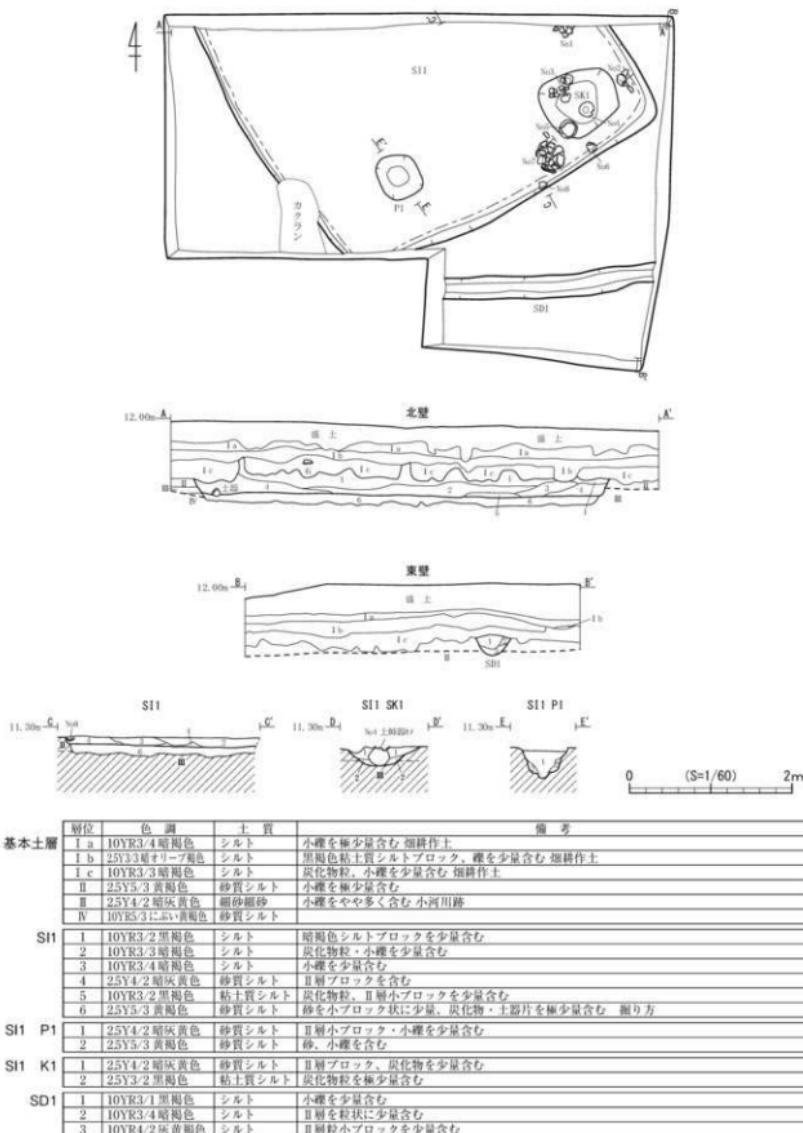
(1) 竪穴住居跡

S11 竪穴住居跡

北半部が調査区外となるが、平面形は隅丸方形を基調とするものと考えられる。規模は東西約4.5m、南北3.3m以上である。床面は掘方埋土を床面とし、ほぼ平坦である。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は最も残りのよい住居南壁で床面から0.1mほどである。住居内堆積土は5層に分層される。1～4層は住居廃絶後の自然流入土である。5層は黄褐色の砂質シルトを含む黒褐色の粘土質シルトで、住居機能時堆積土とみられる。貯蔵穴



第95図 第76次調査区設定図



第96図 第76次調査区平面図・断面図

(SK1) は住居南東隅に位置し、平面形はやや歪んだ隅丸長方形を呈する。規模は長軸約 0.9 m、短軸約 0.8 m で、深さ約 0.2 m である。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は 2 層に分層される。上層は住居内堆積土 4 層に類似し、下層は炭化物を含む黒褐色の粘土質シルトである。住居主柱穴の可能性があるものに P1 がある。住居南西部に位置し、柱抜き取りが認められた。平面形は隅丸長方形を呈する。柱掘方の規模は長軸約 0.55 m、短軸約 0.5 m で、深さ約 0.4 m である。抜き取り穴堆積土は住居内堆積土 4 層に類似し、柱穴掘方埋土は砂や礫を含む黄褐色の砂質シルトである。なお、カマドや炉、周溝などは検出されなかった。

遺物は住居内堆積土や住居床面、住居掘方埋土、貯蔵穴から比較的多くの土師器が出土している（第 97・98 図）。土師器には壺（第 97 図 1～3）、高壺（第 97 図 4・5）、瓶（第 97 図 6）、甕（第 97 図 7～9、第 98 図）などがあり、特に貯蔵穴とその周辺の床面からの出土が顕著である。口縁部がくびれて外反する壺や壺部下端に稜をもつ高壺、おむね球形の体部を基調とする甕などの特徴から、5 世紀代の南小泉式期にあたるものと考えられる。またこの他、円盤状土製品（第 98 図 5）、流紋岩製剥片（写真図版 65-6）も出土した。

（2）溝跡

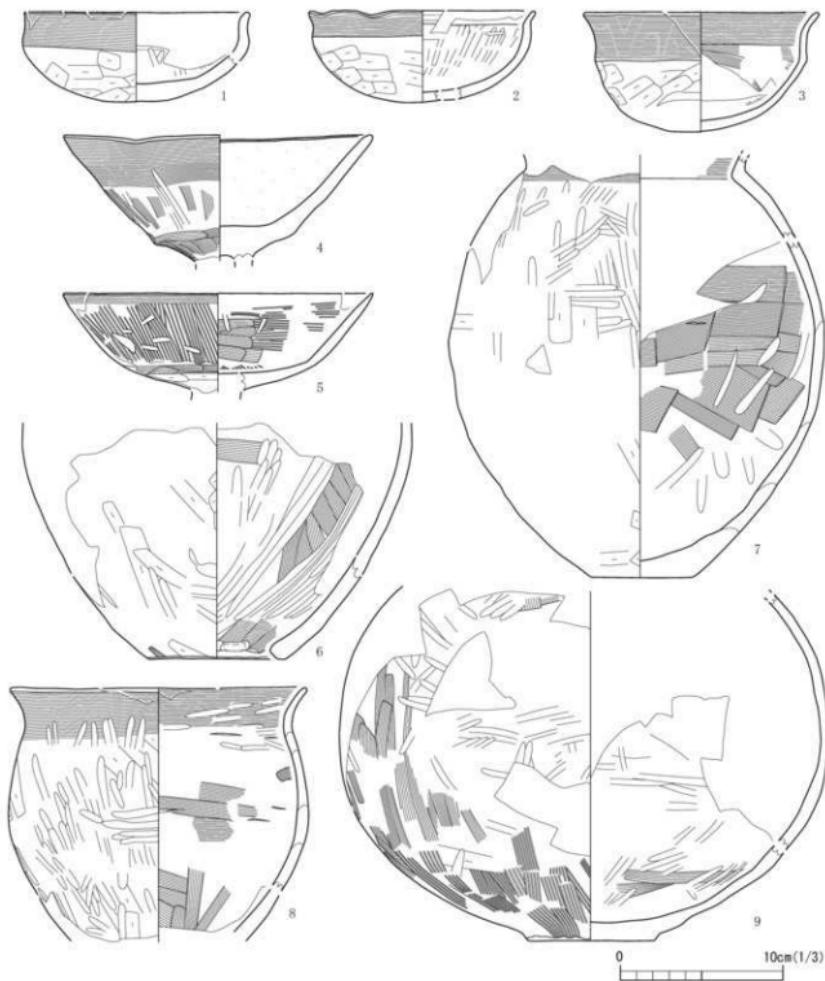
SD1 溝跡

調査区南部で検出した東西方方向の溝跡である。他の遺構との重複はない。検出長は約 2.60 m で、さらに調査区外東西へ延びる。規模は上端幅約 0.20～0.30 m、下端幅約 0.10～0.15 m で、基本層 I c 層下面からの深さは約 0.25 m である。断面形は U 字状を呈する。堆積土は 3 層に細別され、いずれも自然堆積土とみられる。遺物は土師器片が少量出土している。

5. まとめ

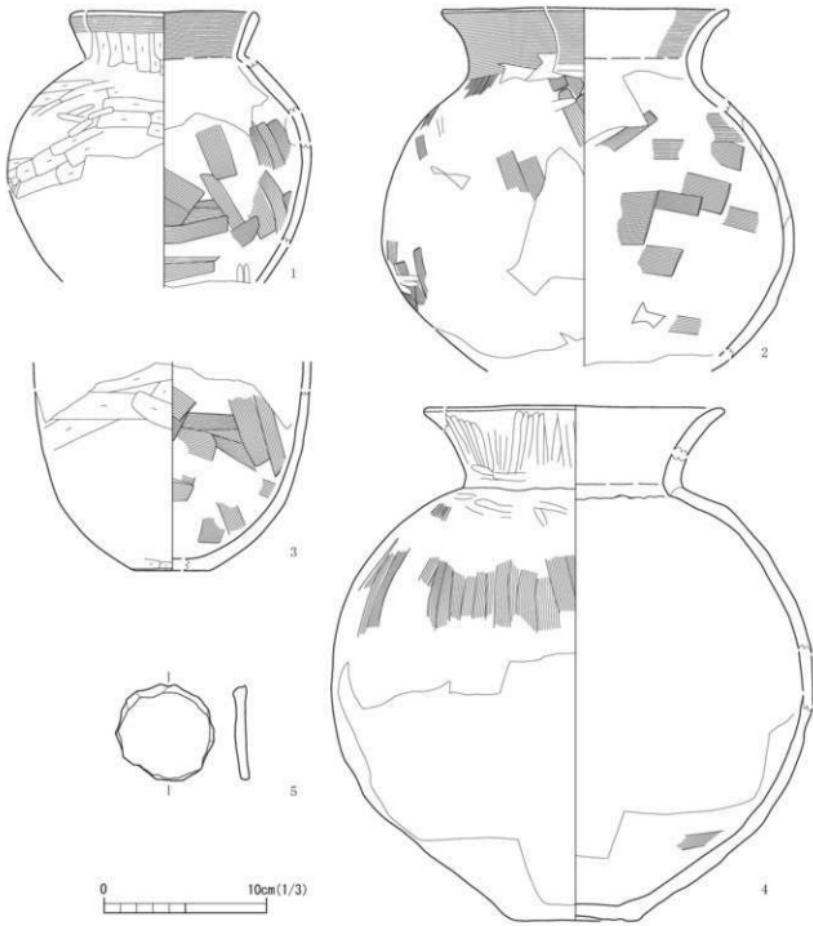
今回の調査地点は、南小泉遺跡の中央部に位置する。今回の調査では、竪穴住居跡 1 軒、溝跡 1 条を検出した。SII 竪穴住居跡は、南半部の検出に留まるが、平面形は隅丸方形を基調とするものと推定され、東西約 4.5 m を測る。住居南東部で貯蔵穴を検出し、この周辺の床面を含めて、残存状況の良い土師器壺・高壺・甕などが出土した。カマドもしくは炉は検出されず、調査区外に位置する可能性がある。また、住居南西部で P1 を検出した。位置や規模から住居主柱穴の可能性があるが、住居南東部に対応する柱穴が検出されず、その位置に貯蔵穴が存在することから、P1 が主柱穴と断定することはできない。貯蔵穴および床面出土土器の特徴から SII 竪穴住居跡の時期は、5 世紀代の南小泉式期にあたると考えられる。

調査区南東部で検出した SD1 溝跡は、出土遺物が土師器小破片で少量であることから、時期を推定する材料に乏しいが、出土土器は特徴から南小泉式にあたると考えられ、5 世紀以降の年代が推定される。



掲載番号	写真	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調整・支様		備考
								器高	口径	底径	外面	内面	
1	64-1	C-1	SE-1	漆塗瓦上部	環	2/3	4.5 (13.8)	—	ヨコナデヘラナギリ	ヨコナデヘラミガキ			
2	64-2	C-3	SE-1	漆塗瓦上部	環	2/3	5.6 (13.9)	—	ヨコナデヘラナギリ	ヘラミガキマツメ	白針含む		
3	64-3	C-2	SE-1	漆塗瓦上部	環	1/2	7.4 (14.5)	—	ヨコナデヘラナギリ	ヨコナデヘラナデ			
4	64-4	C-4	SE-1	漆塗瓦上部	高环	未発見	7.89 (18.8)	—	ヨコナデヘラナギリ	全周マツメ	砂小石多し		
5	64-5	C-5	堆積土・漆塗瓦上部	高环	環部	1/4	6.11 (19.0)	—	ヨコナデヘラミガキ	ハケメヘラミガキ	漆塗瓦ヘラナデヘラケギリ		
6	64-6	C-6	SE-1	堆積土・漆塗瓦上部	瓶	体-底 1/4	(0.40)	—	(8.4)	ヘラナデ→ヨコナデ	ヘラナデ→ヘラミガキ	単孔式	
7	64-7	C-8	SE-1	漆塗瓦上部	口-体 2/3	(26.0)	—	6.2	ヘラナデ→ヨコナデ	ヨコナデヘラナデ	口縁部分損		
8	64-8	C-7	SE-1	漆塗瓦上部	口-体 1/3	(15.6)	(18.2)	—	ヨコナデヘラナデ	ヨコナデヘラミガキ	小型		
9	64-9	C-9	SE-1	漆塗瓦上部	口	体-底 1/4	21.5	—	7.7	ヨコナデヘラナデ	ヘラナデ→ヨコナデ		

第97図 第76次調査出土遺物(1)



掲載番号	写真	登録番号	出土遺構	出土 層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調整・文様		備考
								器高	口径	底径	外画	内面	
1	65-1	C-10	SE-I	SK-1	漆器口上部	漆	口~体1/3	(17.0)	(11.1)	—	六辺形・四辺形・五角形	ヨコナデ ヘラミガキ	
2	65-2	C-13	SE-I	SK-1	漆器口上部	漆	口~体2/3	(22.0)	(17.7)	—	四辺形・五角形	ヘラミガキ マツツ	白針含む
3	65-3	C-11	SE-I	SK-1	漆器口上部	小型漆	体~底1/4	(12.7)	—	(4.8)	ハラケズリ マツツ	ヨコナデ ヘラナダ	
4	65-4	C-12	SE-I	SK-1	漆器口上部	漆	体~底1/2	31.7	(18.5)	7.6	ハラミガキヘラナダマツツ	全面マツツ	神小多し
5	65-5	P-1	SE-I	SK-1	漆器	内盤	—	—	—	厚さ	—	斜軸用 全周打ち欠き 内外にリング状黒斑あり	斜裁・備考
—	65-6	K-1	SE-I	SK-1	漆器	刷片	—	—	—	—	—	流紋岩	

第98図 第76次調査出土遺物(2)



1. 調査区全景（北西から）



2. 調査区北壁断面（南から）



3. 調査区東壁断面（北西から）



1. SI1 遺物出土状況（北から）



2. SI1 遺物出土状況（南から）



3. SI1 床面検出（南西から）



4. SI1 床面完掘（南西から）



5. SK1 断面（南から）



6. SK1 遺物出土状況（南西から）



1. 拡張区遺構完掘全景（北西から）



2. SD1 完掘断面（南西から）



3. SI1 P1 断面（北東から）



4. SI1 P1 完掘（北東から）



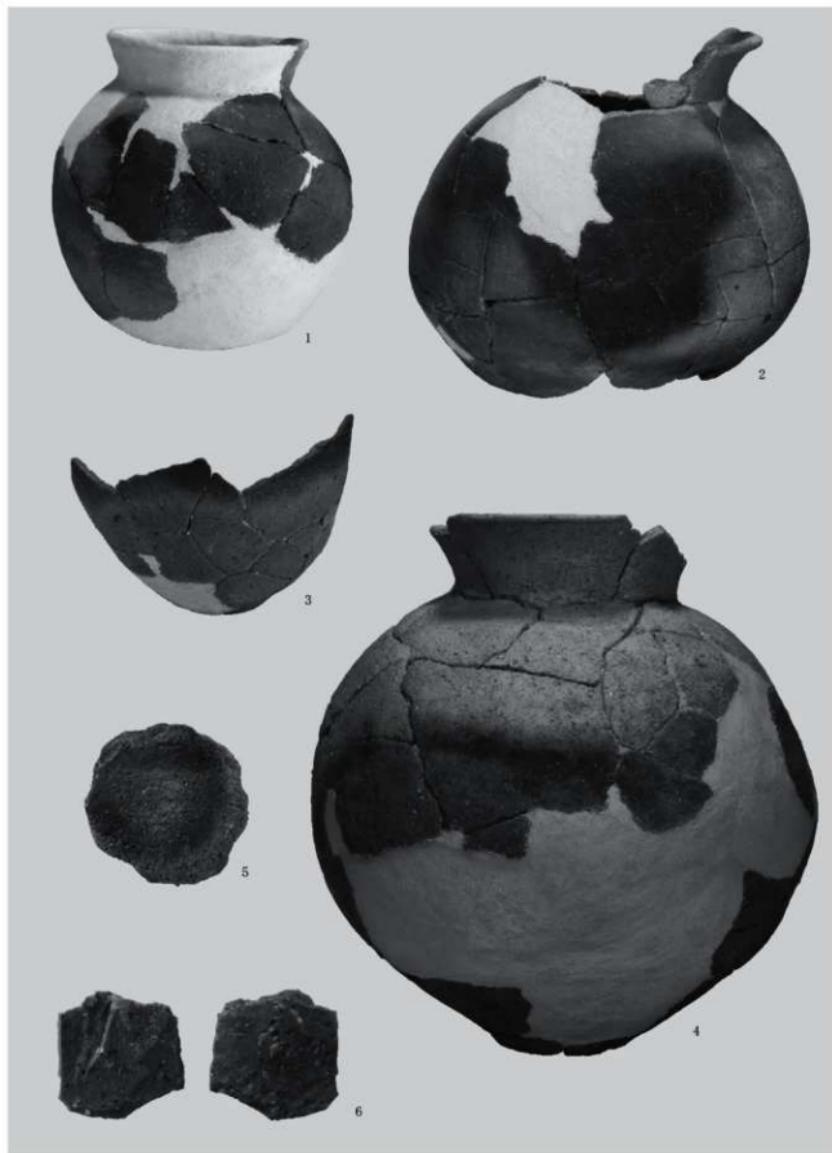
5. 作業風景（東から）



6. 調査地全景（南から）



写真図版 64 第 76 次調査出土遺物 (1)



写真図版 65 第76次調査出土遺物 (2)

第5章 総括

第1節 平成24年度の調査

I. 押口遺跡第4次調査

河川跡を検出した。過去の調査と同様に、火山灰層、ヒシの実を多く含む層も確認できた。平安時代の層（8層）、古墳時代中期の層（9層）で多くの木製品が出土した。また12層からは古墳時代前期の土師器が出土した。

II. 今泉遺跡第10次調査

調査地点は中世城館跡の西辺外堀に近い場所である。今回確認した大溝は城館の外堀の可能性がある。

III. 今泉遺跡第11次調査

溝跡を5条検出した。SD2～5溝跡はほぼ同じ位置と方向で、中世から近世にかけて繰り返し掘削されたことが明らかになった。これまでの調査で検出された溝跡とどう関わるのかは、今後の検討課題である。

IV. 郡山遺跡第235次調査

調査地点はⅡ期官衙西辺中央部で大溝と外溝の間に位置する。土坑1基を検出したが、平安時代以降の時期の遺構であり官衙跡とは直接関わらないことが確認された。

V. 郡山遺跡第237次調査

調査地点は郡山遺跡Ⅱ期官衙外溝南西角付近に位置するが、外溝を確認することはできなかった。しかし、検出遺構は出土遺物から官衙に関わる遺構群の可能性がある。SK2370柱穴は、掘立柱建物跡の角の柱穴になるものと考えられるが、遺物が出土しておらず、建物跡の時期や規模は不明である。

VI. 元袋遺跡第9次調査

豎穴住居跡2軒を検出した。SI1豎穴住居跡は奈良時代、SI2豎穴住居跡は平安時代と考えられる。小溝状遺構は、3群で3時期の変遷が考えられる。調査地付近は、耕作地、集落（居住地）という土地利用が奈良・平安時代を通じて行われたことを示している。また、縄文土器が少量出土した。

VII. 大野田官衙遺跡第19次調査

溝跡2条を検出した。SD1溝跡は掘りこみ面と出土遺物から近世の溝跡と推定される。SD2溝跡は、その南辺が比較的直線的であることと、堆積土の状況、位置関係から大野田官衙北辺の溝跡である可能性がある。

VIII. 山口遺跡第19次調査

水田跡3面を検出した。各水田跡の時期については、古墳時代以降と考えられる。今後、周辺の調査結果と照合して時期を確定していく必要がある。

第2節 平成25年度の調査

I. 洞ノ口遺跡第22次調査

溝跡5条、土坑8基、ピット19基を検出した。遺構の時期は13世紀前半から15世紀前半の範囲に収まる。SD1溝跡については、今後、城館跡との関連の有無を検討する必要がある。SD2・4・5溝跡は、区画溝の可能性があり東側に隣接する第12次調査区でも、南北方向の溝跡が4条検出されている。今後、性格について検討する必要がある。

遺物については、常滑産甕及び山茶碗窯系片口鉢の組み合わせが特徴的である。在地産陶器は、全体的に少ない。調査区内の遺構は、総じて、中世でも比較的古いものと考えられる。

II. 中在家南遺跡第7次調査

今回の調査地点は、仙台東郊条里の範囲内であったが、弥生時代の遺構及び遺物包含層が発見されたため、中在家南遺跡に含まれることとなった。中在家南遺跡で検出されていた埋没河川跡の続きが予想されていたが、今回の調査では確認できなかった。II層からV層までが遺物包含層であるが、II層は水田跡の可能性がある。出土した土器群は、弥生時代中期に属するものである。石器は石庖丁、石礫、磨石の他、主に流紋岩製の石核・剥片類が多数出土した。

III. 郡山遺跡第245次調査

今回の調査地点は、調査区北側でII期官衙の北辺外郭施設の存在が想定される位置であるが、調査区内では外郭関連遺構は検出されなかった。また、I期官衙北部の鍛冶工房群や雑舍群に比較的近い位置にある。調査では竪穴住居跡6軒、性格不明遺構2基、ピット17基を検出した。住居跡は、部分的な調査であり、カマド・主柱穴などは確認できなかった。2基の性格不明遺構についても、全体プランが不明だが、竪穴遺構などの可能性がある。特に、SX2338性格不明遺構は数多くの土器類・須恵器が出土し、須恵器蓋の偏在性や小鍛冶関係の遺物の多さなど、本遺跡ではこれまでにない特異な例である。鍛冶工房跡といえるかは、未調査部分の調査が今後必要である。出土した遺物の年代は7世紀後半と考えられる。また、SI2332竪穴住居跡出土の須恵器双口盤やSI2334竪穴住居跡出土の畿内系土器（飛鳥Ⅲ併行か）などは、特徴的で希少な例であり、他の土器類とともに今後詳細な検討が必要である。さらに、遺構の方位なども考慮して、遺構・遺物の帰属時期や性格づけなど解明すべき課題がある。

IV. 郡山遺跡第246次調査

郡山遺跡方四町II期官衙の北辺材木列跡の一部を検出した。SA2373材木列跡は、SA616材木列跡（第148次調査）と同一の遺構であると考えられる。また材木列跡の一部が掘り直されている（P54）ことが、新たに明らかになった。

またこの材木列跡に近接して大型の柱跡SB2346（P55）が確認された。位置関係から、郡山II期官衙北辺材木列の西端に位置する樋状建物跡の一部である可能性が考えられる。

V. 郡山遺跡第247次調査

今回の調査地点は、郡山廃寺の寺域北部でI期官衙の区画施設の存在が想定される位置である。溝跡1条、土坑1基、ピット11基を検出した。溝跡の時期は平安時代頃と推定され、郡山I期官衙に関わる遺構の可能性は低いと考えられる。今回の調査で郡山廃寺に関連する建物跡や郡山I期官衙に伴うと明確に判断される遺構は検出されなかった。

VI. 郡山遺跡第248次調査

古代以降の河川堆積とみられる層が検出されたが、搅乱により古代の遺構面は削平されていることが判明した。

VII. 郡山遺跡第250次調査

I期官衙における材木列跡の検出が予想されたが、古代の遺構面は削平され、検出されなかった。

第3節 平成26年度の調査

I. 鴻ノ巣遺跡第19次調査

溝跡1条を検出した。溝跡は北東から南西方向に延びる溝跡で中世に属するものとみられる。本遺跡では、これまでの調査で中世の屋敷地が確認されている。屋敷地は、掘立柱建物や井戸などによって構成され、溝によって区画されている。今回の溝跡は、その規模から区画施設の可能性がある。遺物は12～14世紀前半の中世陶器が出土した。中世陶器の産地には在地産、常滑産、渥美産がある。

II. 小鶴城跡第10次調査

溝跡1条、ピット14基を検出した。溝跡は、周辺の調査成果から丘陵を巡るように配置された小鶴城に伴う堀跡と考えられる。ピットの一部は掘立柱建物跡の柱穴である可能性がある。遺物が出土していないため、時期的に小鶴城跡に伴うものか検討することはできない。

出土遺物には、土師器、須恵器、陶器、土鍤、剥片がある。この内剥片については、縄文時代あるいは弥生時代の遺物と考えられるが、第4次調査においては、縄文時代の可能性がある「陥とし穴」や弥生土器が出土している。

III. 南小泉遺跡第76次調査

竪穴住居跡1軒、溝跡1条を検出した。竪穴住居跡は、南半部の検出に留まるが、平面形は隅丸方形を基調としたものと推定され、東西約4.5mを測る。住居南東部で貯蔵穴を検出し、この周辺の床面を含めて、残存状況の良い土師器壺・高壺・甕などが出土した。カマドもしくは炉は検出されず、調査区外に位置する可能性がある。貯蔵穴および床面出土土器の特徴から、竪穴住居跡の年代は5世紀代（南小泉式期）と考えられる。

報告書抄録

ふりがな	せんせいしんせいあつこうかんけいせきはつちゅうさほうこく					
書名	仙台市震災復興関連道路発掘調査報告					
翻訳	平成24~26年震災復興民間文化財発掘調査助成事業に伴う発掘調査報告書					
巻次	第3回					
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第448集					
著者名	平岡亮輔・佐藤洋一・鈴木隆・小林帆					
編集機関	仙台市教育委員会					
所在地	〒980-0011 仙台市青葉区上杉1丁目5-12 仙台市役所 上杉分庁舎 10階 TEL: 022-214-8894					
発行年月日	平成28年3月31日					
所轄道路名	所在地 コード 調査番号 北緯 東経 調査期間 調査面積 調査原因 市町村 道路番号 王な道場 王な道物 特記事項					
要約						
押川道路(第4次)	仙台市若林区荒井字人塙伝 4100 01312 38°14'39" 140°56'26" 2012.10.31 35.0m ² 記録保存 (個人住宅新築) 河川路・水路跡・送合地 弥生~近世 河川路 木製品・陶器・土器					
調査区分全体が河川路の中にあり、堆積土から古墳時代の春の孔柱建基部材、茶碗などは豊臣部材とみられる木製品が多數出土した。						
今泉道路(第10次)	仙台市若林区今泉二丁目 4100 01235 38°12'38" 140°55'35" 2012.10.30 2012.10.31 24.1m ² 記録保存 (個人住宅新築) 通路跡・城壁跡・送合地 國文~近世 滝路 通路・陶器 大規模な溝跡など、それに隣接する溝跡を検出した。大溝は中世城館の外堀の可能性がある。					
今泉道路(第11次)	仙台市若林区今泉二丁目 4100 01235 38°12'39" 140°55'38" 2013.3.25 66.4m ² 記録保存 (個人住宅新築) 通路跡・城壁跡・送合地 國文~近世 滝路 通路・陶器 溝跡1条と、經り直し削除された溝跡4条を検出した。何らかの境界であると考えられる。					
郡山道路(第25次)	仙台市太白区郡山二丁目 4100 01003 38°13'27" 140°53'24" 2012.12.3 79.5m ² 記録保存 (個人住宅新築) 通路跡・芋窓跡・送合地 國文~中世 土塁 土塁を検出した。百晩に間に掛る通路は検出されなかった。					
郡山道路(第237次)	仙台市太白区郡山六丁目 4100 01003 38°13'16" 140°53'22" 2013.2.4 68.5m ² 記録保存 (個人住宅新築) 官衙跡・寺跡跡・送合地 國文~中世 滝路・土塁・穴穴 溝跡2条、土塁6条。柱穴1条を検出した。溝跡は、官衙に終わる時の通路である可能性がある。					
元袋道路(第9次)	仙台市太白区大田字元袋 4100 01179 38°13'17" 140°52'33" 2013.3.7 40.0m ² 記録保存 (個人住宅新築) 集落跡・水路跡 弥生~古代 楽器・住居跡・土器・小皿・灰陶器・植物標本 柱穴1軒跡2軒、土塁1条。小溝状遺構3条を検出した。土師器、瓦器、金屬製品、石製品のはか、樹文土器が少量出土した。					
大野田官衙道路(第19次)	仙台市太白区大田字袋前 4100 01566 38°13'3" 140°52'37" 2012.12.10 2012.12.13 8.4m ² 記録保存 (個人住宅新築) 集落跡・官衙跡 國文~中世 滝路 彌生復元2条の溝を検出した。上層の溝は世帯の溝とも見られる。下層の溝は官衙北側の溝である可能性がある。					
山口道路(第19次)	仙台市太白区泉崎一丁目 4100 01178 38°13'9" 140°52'10" 2013.1.15 2013.2.18 51.0m ² 記録保存 (共同住宅新築) 集落跡・水路跡 國文~中世 水路跡 水路跡を3箇所検出した。出土遺物から3箇所とも古墳時代と想定される。					
洞ノ口道路(第22次)	仙台市宮城野区羽切字洞ノ口 4100 01372 38°18'11" 140°57'39" 2013.5.21 48.23m ² 記録保存 (個人住宅新築) 集落跡・城跡跡・廃宅跡・水田跡 古墳~近世 滝路・土塁 溝跡3条、土塁8条。ビット19条を検出した。出土した土器から、13~15世紀の期に変遷した通路跡とされる。					
中在家南道路(第7次)	仙台市若林区蒲生字南 4100 01427 38°14'35" 140°55'56" 2013.12 40.2m ² 記録保存 (個人住宅新築) 土器複数・土塁跡・地形図調査 河川路・水田跡 古墳~近世 滝路 弥生時代の遺物混合部を検出した。土器、石器のはか、石器製作を示す工具などが出土した。					
郡山道路(第245次)	仙台市太白区郡山二丁目 4100 01003 38°13'31" 140°53'37" 2013.11.13 2013.11.28 38.9m ² 記録保存 (個人住宅新築) 官衙跡・芋窓跡・送合地 國文~中世 彌生穴庭跡・性格不明通路 柱穴跡6軒、性格不明通路2軒を検出した。双耳瓶、内外黒色焼成された土師器皿は多數の遺物が出土した。					
郡山道路(第246次)	仙台市太白区郡山二丁目 4100 01003 38°13'31" 140°53'26" 2013.11.28 2013.12.13 62.5m ² 記録保存 (個人住宅新築) 官衙跡・芋窓跡・送合地 國文~中世 覆面柱状物・材木残置 土塁跡・土師器・金屬製品 Ⅲ期前の北迎式木列跡と、それに隣接する大型の柱穴を検出した。材木跡には部分的な彫り直しの痕跡が確認した。					
郡山道路(第247次)	仙台市太白区郡山五丁目 4100 01003 38°13'12" 140°53'30" 2013.12.11 2013.12.18 46.9m ² 記録保存 (個人住宅新築) 官衙跡・芋窓跡・送合地 國文~中世 滝路・土塁 柱穴跡6軒、性格不明通路2軒を検出し、瓦や土師器が出土した。第1期官衙周辺施設の構造が想定されたが、開拓する可能性は低い。					
郡山道路(第248次)	仙台市太白区郡山三丁目 4100 01003 38°13'32" 140°53'43" 2013.12.17 2013.12.18 15.0m ² 記録保存 (個人住宅新築) 官衙跡・芋窓跡・送合地 國文~中世 通路なし 古代以前と考えられる河岸堆积土を検出した。古代の堆积構造は所見で5つであった。					
郡山道路(第250次)	仙台市太白区郡山五丁目 4100 01003 38°13'19" 140°53'34" 2014.2.18 2014.2.19 15.0m ² 記録保存 (個人住宅新築) 官衙跡・芋窓跡・送合地 國文~中世 通路なし 以前の検査で検出された木列跡の延長が検出されることが想定されたが、出土物は削平されていた。					
洞ノ口道路(第19次)	仙台市宮城野区羽切字洞ノ口 4100 01034 38°18'4" 140°56'55" 2014.7.7 2014.7.9 16.0m ² 記録保存 (個人住宅新築) 集落跡・城跡跡・水田跡 弥生~中世 滝路 南北方向の大溝が検出され、出土遺物から時期は古代~中世に属すると考えられる。					
小船城跡(第10次)	仙台市宮城野区新田三丁目 4100 01194 38°16'46" 140°55'48" 2014.11.6 2014.11.7 27.2m ² 記録保存 (個人住宅新築) 城跡跡 中世 滝路 大規模な溝跡を検出した。城跡に伴う遺物の可能性があるが、規模や時局を明確にするとはできなかった。					
南小泉道路(第76次)	仙台市若林区蓬莱見坂一丁目 4100 01021 38°14'16" 140°54'39" 2014.4.10 2014.4.18 21.7m ² 記録保存 (個人住宅新築) 集落跡・城跡跡 弥生~近世 滝路 新義文化性を有する穴庭跡跡から残在状態の良い土師器・高杯・壺などを出土し、5世紀代に属すると考えられる。					

仙台市文化財調査報告書第448集

仙台市震災復興関係 遺跡発掘調査報告Ⅱ

「平成24～26年度 震災復興民間文化財
発掘調査助成事業に伴う発掘調査報告書一」

2016年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区上杉1丁目5-12

仙台市役所上杉分室10階

文化財課 TEL 022（214）8894

印刷 株式会社 仙台紙工印刷

仙台市宮城野区若三丁目1-14

TEL 022（231）22456